
例えば仮の魔王様

零月零日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

例えば仮の魔王様

【Nコード】

N8607V

【作者名】

零月零日

【あらすじ】

故郷の村を追い出され、大切な者を奪われた少年は帝国に復讐を誓った。これは、魔を極めた、一人の生き残った男の子の復讐の物語ーのはず。とりあえず……この修羅場をどうにかしなさい！英雄色を好むといっても、あなたは『魔王』でしょう？ 9/25、序章プロローグと二章を変更致しました。

プロローグ

「ごめんなさい父さん、母さん。僕はあなたの息子じゃないんです。化け物なんです。前世の記憶がある僕は、二人の息子になれません。」

「あなたは化け物なんかじゃありません。掛け替えのない私の可愛い息子です」

「お前が自分の事をどう思っているかが、お前は俺の自慢の息子だ」
友達のために喧嘩して泣いて、雪だるまが溶けちゃったのに泣いて、家族でご飯を食べていても泣いちゃうお前は、私達の可愛い息子だよ。

二人の言葉に、僕は涙を零した。僕は泣き虫だ。

屋敷に幽閉されていた貴族の娘である母さんと、それを助け出した執事の父さん。二人の愛は前途多難だったが、話を聞かされた僕にすれば、最高の結ばれ方をしたと思う。

そんな二人に愛されて、僕は嬉しかった。そして申し訳なかった。こんなにも愛してくれていたのに、僕はそれを拒否して来た事になるのだから。だからこれからは二人に愛された分、僕も二人を愛そうと思った。

けど、するんじゃなかった。

僕は間違っていた。

何が愛されたから愛すだ。

ソウルサーチャー
魂の探索者と呼ばれる、予言者もどきの魔法使いが言った。

『魔王が復活した』、と。

黒髪の魔法使い、生まれてまだそれほど経っていない。

彼の者を今すぐ殺さなければ、のちに世界は大きな変革を迎える??とそいつは言った。

それにより、未だ魔王が世界征服をしようとしている、という妄言を信じていた帝国は、帝国中の黒髪の子供を虐殺し始めた。

帝国は元々黒髪の人間が少ない国だ。

だから、僕もすぐにその対象となった。

「逃げる。ここは俺達がなんとかするから」

「でも父さんや母さんが??」

「いいから行きなさい!」

駆け出す僕と親友。

執事の前は剣士をやっていた父さんと、魔術師として名を馳せた母さん。

二人なら、なんとかなる。

けれど、立ち止まって振り返った僕が見たのは。

剣。

一本の長剣が、僕を庇った母さんを??その母さんを庇った父さんを??二人そろって突き刺した。

僕が立ち止まって、投げられた剣に刺されそうだったから。

僕は理解した。

僕はなんとも罪深い存在だったのだと。

力ある者が怠惰に過ごす事は許されなかったのだと。

必死に逃げているのに、決して助かりそうな気はしなかった。
どれだけ必死に走っても、森に逃げ込んでも、足音が止まない。
草木が深く生い茂る森の中に少しだけ開けた場所があった。そこ
でふと親友が歩みを止める。
そして……。

「もしもお前が魔王だったら？、世界征服をした魔王だったら、
きつとこんな事にはならなかったよな」

僕の前にいるのは、僕だ。僕が僕の声で僕に語りかけてくる。
目の前にいるのはどこからどう見ても、僕でしかない。頭のとっ
ぺんからつま先まで見ても、やはり僕だ。頭の中身を覗いたとして
も、DNAや指紋を検査した所でも僕だろう。
けれど、僕は知っている。
これは僕じゃなくて、彼だと言う事を。

不意に、身体が鉄になったようにまるで動けなくなった。
魔法。

彼も、魔法を使えたのだ。
そのまま僕は抱えられ、木の影に隠される。
そして、彼は僕の笑顔を浮かべた。

「じゃあな、親友。これは俺が勝手にやった事だ。お前が気に病む
必要なんでない」

巫山戯るなよ。
なんでだよ。どうして僕を庇うんだよ。

なんだって、『勇者』のお前が『魔王』の僕に化けて、代わりに死ななきゃ駄目なんだよ。

彼は人当たりが良く、誰にでも優しく、だが怒るときは怒る、出来た奴だった。前世の記憶の有る、転生者である僕にも優しくしてくれた、同じ村に住む僕の親友。

それは、僕が異能の力を持ち、魔王と呼ばれても、差し出さなければ村を焼くと言われても、変わらなかった。結果、村は帝国に攻められた。

村は焼かれ、なんとか逃げ出した僕ら家族と親友は、けれど追っ手に追われ続けていた。

三日前に両親は足止めをするため、僕らと別れた。その次の日、追っ手は変わらず追って来た。

鉄のように身体が動かぬ僕には、手も足も知恵も出せない。

でも、目から涙は出ていた。

いや……それは、ただ降り始めた雨が、僕の額に当たって滴り落ちただけだった。

「いつかで良い。お前が本当に魔王で、王国なんて作ったらさ、俺をそこに住ませてくれよ。お前が作る国だからあんまり期待してないけど、でも……」

そう言っつて、僕である彼は涙??ではなく笑顔を見せた。僕ならば、泣いていたのに、彼は泣かなかった。

「お前の国は、愛に溢れてるだろうな。出来たらそれを、少しでも俺にわけてくれよ」

それが、孤児である彼が、僕に向けた最後の言葉だった。

「黒髪……、貴様魔王だな！」

「やってくれたな人間ども！ 皆殺しにしてくれる！」

僕は身体を動かせない。

だけど、意識はある。目は見えるし、耳も聞こえるのだ。

僕は、僕の声で魔王らしく語る、勇者の彼の声を聞いた。

「大人しく死ね！ 魔王！」

「人間風情が調子に乗るな！」

それから、幾度と無く剣が混じり合う音を聞いた。

呻き声、断末魔が何度も聞こえる。

その度に、帝国の騎士を煽る僕の声が聞こえた。

けれど、その言葉も次第に小さく、苦しそうになっていき……。遂に。

「やったぞ！ 魔王を殺したぞ！」

聞こえなくなった。

――――

夜の闇程に暗い雲が雨を降らせていた。土砂降りだ。歩きたびにぐじゅぐじゅと音を立てる森で、僕は立ち尽くしていた。

身体が動けるようになったのは、あれから半日後の事だった。

そこに転がっているのは、まぎれもなく僕の身体だ。

首から上が無くなった、僕の死体。

「……やはり、彼も駄目でしたか」

僕に掛かっていた魔法を解いたおっさんがそう呟いた。
銀縁眼鏡が光っているのは、月の光が原因だろう。断じて、おっさんの涙であるはずがない。

僕が泣いていないのに、こんなおっさんが泣いているはずはないのだ。

「『魔法使い』は皆、死ぬ運命にあるのやも知れませんか」

魔法使いと魔術師。

似ているようでまるで違う、二つの異能力者。

「巫山戯るな！ 何が魔王だ！ 何が化け物だ！」

魔王の僕が死んだ事は、国中に知れ渡った。

当時六歳、まだ純粋な子供だった僕の首を曝すと、国民から反感を買ったと判断したのか、僕の顔は魔王として曝される事はなかった。
記録上、僕は死んだ。

だが、僕は生きている。その顔を隠す事も無く生きられた。

僕の身代わりがいたから。

もういいや、もういいよ、もう止めだ。二度目の人生、達観して悟って偽善者ぶって生きようかと思っていたが、それに何の意味がある？

僕の幸せを奪うなよ。やっと掴みかけた幸せを？？、家族を、友達を奪うなよ。

オーケー、理解した。僕がこの世界に生まれたのは、このためなんだな？

こんな腐った世界、滅ぼしてやるよ。

――――

これは、魔法、『魔の法則』を極めた転生者、魔王の物語。僕こと、生き残った男の子の復讐の??、

「好きです、一緒にいさせてください」
寄り添われた。

復讐??

「好きになっちゃったんだからしょうがないじゃない、この馬鹿！」
後ろから抱きつかれた。

ふ、ふくしゅ??

「私はあなたに愛されたいのです」
抱きしめられて、見つめられた。

復讐の物語??、かもしれない。

Gランクの天才 1

おじさんでした。

「初めまして、レイと申します。ランクはGですので、この度は雑用として護衛に同行させていただきます。不束者ですが、よろしく願います」

こういう言い方は失礼でしょうが、おじさんです。やけに物腰が柔らかい、無駄に丁寧な言葉を喋る男の人でした。

無精髭に優しい顔立ちの、銀縁眼鏡をかけた中年の方です。毛嫌いするようなタイプの人ではないのですが、どこことなく胡散臭いのは何故でしょう。

だからおじさんと言うよりは、おっさんと呼ぶ方が正しいような……、そんな人でした。

「おいおっさん、来る場所間違えてんじゃねーか？」

「おっさんとは酷いですね。僕はまだ……三十代ですよ」

「十分おっさんじゃねーかよ。つーか、僕ってなんだよ、良い年したおっさんがきもいぞ！」

「一人称ですが？」

「そういうんじゃないよ！……くそ！ おっさん本当に役に立つのか？」

あまり言いたくありませんが、実は私も心配です。

まあ、こうして少しでも人が集まってくれたのはありがたいのですが……。

――
高額の報酬が得られる依頼を探していた僕に、顔なじみの受付嬢、二ナが教えてくれたのが事の発端だ。

「首無し磔貴族の護衛任務ですか？」

「しーっ！ そんな大きな声で言わないでください！」

おいおい二ナ、今の君の声の方が大きかったぞ。僕は目立ちたくないんだ、なるべく静かに頼むよ。

二ナは短めの茶髪で、お転婆気質の女の子だ。

ギルドの受付にて、僕は二ナに顔を近づけ、女子高生が噂話でもするような小声で話す。

「あれですよ？ 雇っていた護衛が全員、街の広場に首を切り落とされて見せ物にされた事件。その雇い主である貴族様の護衛任務、ですか？」

「そうですが、……あまり顔を近づけないでください」

うーっと思そうに顔を背ける二ナ。あっそう、ごめんなさい。

と心の中で謝罪し、心の中で二ヤニヤと笑みを浮かべながら、表面上は無表情で淡々とそのまま話を続ける。

「護衛対象の腕が立つので護衛はそれほど要らず、人望があって護衛の人材は集まったけれど、見せしめの効果で御者がいない。それに腕利きの護衛がやられた以上、護衛に専念したいので雑務処理をする人が必要、という感じですかね。それでGランクの雑務として僕に話が来た」

「はい。どうせ金さえ払えば、どんな依頼でもこなしてくれますよね？ ギルド側としては、あなたみたいな人材、凄く助かりますよ。『Gランクの天才』さん」

ブルリと身体が震えた。その名で呼ばないでくれ、禁断症状が出る。

僕のそんな様子をニナはどん引きしていた。恐らく、僕がそう呼ばれて武者震いしていると思っっているのだろう。ナルシストだ、きやー変態！ みたいな心境だろう。

逆だ逆、恥ずかしさのあまり体全体が震えてるんだよ。手もプルプルしてるんだよ。怒りと羞恥心で爆発してしまいそうだよ！

と言いつつも、実は満更でもない。

「まあ、任せてください。その通り名は好きじゃないですが、依頼通り、雑務をこなしますよ」

金さえ払えば、何だってやるさ。

今はまだ、下積み期間だ。じつくり、ゆつくり、じわじわと。水から煮るように、僕の復讐はゆつたりと進むんだ。

依頼の主は、アイカシア国の貴族だ。観光のためにこのランベルグ帝国に来ており、そこで事件は起こったようだ。

アイカシア国は民主国家で、僕も一目置いている国だ。多数決とか、実に合理的だと思わないか？ 数が全てを制する国、いいね。

そして依頼主、カイル・フュリアスはアイカシア国の裁判長を司る男だ。

カイルは彼の地の田舎出身で、学業優秀な彼は瞬く間に上流階級の仲間入りを果たした。その裁判は公平かつ道徳的で国民から支持を得ていると言う。

だが、公平と言うのは一般市民から見た意見であり、貴族など頭の固い金の亡者どもには厄介でしかないだろう。カイルは身分の高い者には恨まれていると言って良い。特に、アイカシア国は元々王政であり、有力貴族が未だに多くいるのだ。

観光に出かけたこの気を逃すまいと、暗殺の計画を企てたに違いない。

国際問題に発展しそうだが、それは彼が抑えてくれているようだ。実に優秀な男だ。そして、それ故に狙われているのではないかな？戦争は儲かる。やりたいやつはいくらでもいるのだ。そいつらは戦場に出てきはしないが。ああ、胸くそ悪い。

任務当日、集合時刻である昼過ぎ、僕は十五分程早く集合場所である国境の門へと着いた。

馬車はあちらが用意したみたいで、豪華な四角い馬車が一台止まっていた。僕の仕事は御者と食事の準備、それに不寝番かな。

今現在確認出来るのは、剣士の少年とでかい盾を背負った男、それに依頼主（馬車の中にいるよう）だ。ふむ、この程度の人数か？剣士と盾の男は仲間と言う訳ではないようで、両者腕を組んでじっと待っている。僕はそれを遠くからニヤニヤしながら見ている。こいつらと関わりありませんよ、という距離で。深い意味はない。そして集合時刻、そこには依頼人と僕を含め、七人程集まっていた。

遅れて来たのは、魔術師と槍を持った青年だった。五分前行動を知らないのか？二人は別々の方角から集合時刻ギリギリに来たのでお仲間と言う訳ではなさそうだ。というか、全員が初対面じゃないかな？

と、馬車が開き、依頼人のご登場である。

降り立ったのは、眼鏡がよく似合う金髪の優男だった。

「私がカイル・フュリアスだ。今回は世話になる」

カイルは三十代後半で、いかにも文官という出で立ち、争い事とは無縁のように伺える。僕の目から見れば、優秀オーラが滲み出ている。噂は真実か。

と、彼の影から一人の少女が現れた。

「娘のリースです。私も戦いますので、よろしくおねがいします」

現れたのは、息をのむ程の美少女だった。

腰まである神々しさを感ぜさせる金髪、宝石のような輝きと魅力のある碧眼。異性は愚か同性までも虜にさせる美貌の持ち主で、挨拶と共に見せた微笑は、天使の微笑と言っても過言じゃない。すらりとした身体で、人形のような完成された形をしている。それでいてどこか幼げな雰囲気を持ち主で、思わず愛でたくなる可愛さがあった。

騎士を思わせる薄手であるが確かな鎧、腰に吊るされた細身の剣。……ああそうか。この事件は、彼の愛娘、『戦姫』リース・フュリアスを狙ったのかもしれないのか。

リース嬢は『戦姫』と呼ばれる美少女だ。その可憐さは、ギルドの受付で人気の二ナと比べるのも烏滸がましいほどである。

純白の輝きを放つ剣で戦う彼女に、戦女神を投影する者も少なくないと言う。

だが今回は事件のせい、顔色があまりよろしくないようだ。心優しい事である。護衛はその職務を全うしたただけだろうに。

腰に吊るされた剣が、噂に名高い『聖剣レイリース』だろう。命名は彼女の名前をもじったようだ。純白の刃を持つ魔剣……じゃない。聖剣。何か特殊な力があるに違いない。

彼らの自己紹介に続いて、ギルドメンバーも名乗り始める。

「シュイ、だ。ランクはA、剣士」

シュイは尖った赤毛の持ち主で、覇気を感じない少年だ。だが、背中に普通の長剣より更に一回り大きな剣を吊るしており、存在感がある。

ランクAというのもなかなか珍しい。強さとしては、上級魔獣に引けを取らないレベルと言った感じだろうか。十代後半でその地位に上り詰めているのだ、もう少し優秀かもしれない。ただ僕の間からは、どうにも剣を振るう事に戸惑いがあるように見える。人を殺すのが怖いのだろうか？ 護衛対象に特別な感情を抱いていないようなのは高評価だな。あのような事件の後に付ける護衛だ、ギルドもなかなか解っているじゃないか。

「あたしはフィー。ランクはB、魔術師」

フィーはギルドから集められた中で紅一点、短めの茶髪を持つ少女だ。黒のローブを羽織り杖を持った、いかにも魔術師と言った出で立ち。一メートル半にも及ばない身長、言わずもがな幼児体形である。

しかし、俗に『偏屈魔術師』と呼ばれるフィーが何故だ？ プライドが高く、負けず嫌いの彼女。

研究室に引き籠ってばかりで、碌に依頼を受けないと聞いていたが……。世間に疎く今回の事件を知らないのか？ それとも、別の意味があるのか……。まあ、なんでもいいか。

「ガイラスだ。ランクはB、槍使い、よろしく」

ちゃらい男、というのがガイラスの第一印象。今後それは変わらないだろう。リース嬢に色目使ってるのがバレバレなんだよ。

ただ、ム力つく事にこの男、雰囲気は三流だが装備だけは一流だ。手に持っている槍は、『螺旋槍』と呼ばれる、ロンギヌスの槍の

劣化版みたいな奴だ。色々貫ける槍、といった感じである。魔術構造としては、回転と振動により分子レベルにダメージを与える魔法具だ。いくら金を積んだんだろう。

「ランクだ。ランクはB、盾を扱う」

おお、面白い奴が来たもんだ。

ランクは見た目と年齢が一致しない、老け顔のがたいの良い男である。まだ二十代だと言うのに、老練な冒険者に見えるのだ。まあ、冒険者歴十年のベテランには違いない。特徴は、亀の甲羅のようなサイズの鋼鉄製の盾を背負っている所。

僕の意見としては、そんな重くてでかくて持ち歩きづらい装備使うなよ、と言いたい所だが、彼の武勇を聞く限り、そんなことは関係ないようだ。

あれで殴るんだと、敵を。撲殺者である。

そして、僕も自己紹介をした。

それぞれの簡単な自己紹介が恙無く終わった所で、ガイラスが僕に噛み付いて来た。いや、言葉にこそしないが、ここにいる全員が僕に疑いの眼差しを投げかけて来ている。……おお、リース嬢までもか！

ふむ、やはり僕のこの見た目、とんでもなく胡散臭いようだ。

「おっさん本当に役に立つのか？」

ガイラスの……いや、このメンバー全員の疑いを晴らすべく、僕はこう言った。

「少なくとも、来るかどうか解らない敵のために雇われたあなた達とは違いますから。僕は必要でしょうし、役に立ちますよ？」

暗に、護衛なんか要らなくね？　と言った僕の言葉に、一同は茫然としていた。

あれ？　なんか間違えたか？

僕は慌てて言葉を付け加える。

「すみません、皆さんと同じ報酬を受け取りますから、謙遜しませんでした」

てへっ、と笑ってみせる。

依頼人は呆れた顔で、ギルドメンバーは苛ついた顔を僕に向けた。それはそうだろう。

Gランクのくせに、Bランクの報酬を受け取るのだから。嫉妬かい？　いけない子達だな。僕が力不足に見えるかい？

そういうのは、僕の実力を見てからにしてみらおう。

—————

Gランク。

それは、ギルド初期登録者のランクであり、そのランクの任務はどれほど遂行しようと、ランクを上げるためのギルドポイントが手に入らない、報酬だけの任務。

ネズミ退治、草刈り、ゴミ拾い……路地裏の子供でも出来そうな簡単な仕事をこなす任務、それがGランク任務だ。

ランクが上がる、ということは自身の評価が上がる、ということに等しい。ランクが上がれば、ランクが指定された高額報酬の任務を受けたり、各国で高待遇されることが多くなる。というのも、所詮は評価の基準であり、通り名持ちにはランクは関係ないのだ。よ

くも悪くも。

僕こと『Gランクの天才』も、Gランクでありながら個人としての評価がべらぼうに高いため、こんな横暴が許されるのだ。

Gランクの天才 1（後書き）

感想・評価を頂けると嬉しいです

Gランクの天才 2

本当に変なおじさんです。

どうして、ギルドはこんな人を派遣して来たのでしょうか？

『Gランクの天才』と呼ばれている、この手の仕事では最高の人材と聞かされていましたが、本当なんでしょうか？ これで腕が悪かったら、ただの陰険なおじさんでしかありません。

さすがにそれはないでしょうが……。

隊列は、先頭にガイラスさん、馬車の横に私とフィーが一緒に馬に乗り、ランクさんが反対側にいます。殿はシュイ君という形です。勿論、御者にはレイさんが付いていて、馬車の中にはお父様もいます。

街道はお世辞にも整っておらず、馬車がゴトゴト音をたてています。アイカシア国は街道を石畳で綺麗に舗装していますが、ランベルグ帝国はまだのようです。今の皇帝が悪政なのが原因でしょう。魔物や刺客に襲撃される事も無く、比較的ゆっくりなペースで進み、三分の一程進んだ所で野宿する事に決めました。街道沿いの木陰に馬車を止めます。

「あたしが結界張る」

と、地面に住居一つ分くらいの魔術陣が浮かび上がりました。

この結界は、今魔法陣の中にいる人しか出入り出来ないタイプですね。それを詠唱も無く、この速度でやってのけますか。むむ、優秀な魔術師ですね。国にお持ち帰りしたいです。そうすれば、もっと国も安全に??。

「リース、なんか良からぬ事を企んでるでしょ？」

「い、いえ何も！ 結界、ありがとうございます、フィー」
「……なら良いんだけど」

ジト目でこちらを見るフィー。動物的勘でしょうか？

フィーとはここまで来る馬上で仲良くなりました。

「フィーは何の研究をしているんですか？」

「魔術」

「そうじゃなくて、どういった分野の魔術なんですか？」

「全部」

という感じです。なんとなく、フィーが『偏屈魔術師』などと呼ばれる理由が解りました。子猫みたいで可愛いのに、無愛想な返答をするから。

「ふうっ、意外と疲れるな馬車の旅って……」

お父様が伸びをしながら馬車から出てきました。ずっと座ってるだけですから、そうでしょうね。それに、運動もあまりされないし。

「まあ、話し相手には困らなかったけどね。レイはなかなか面白い男だよ」

「そうなんですか？」

面白いと言うよりは、奇想天外とか、奇天烈とか、変人の方が似合いそうですけど。勿論、口に出しては言いませんが。

「明日もこのペースで行こう。これなら明日にはアイカシア国内に入れるし、どこか村の宿に泊まる事も可能だ」

「そうなる……あれ？ あのおっさん要らなくね？」
「……………」

と、シュイ君とガイラスさんが話していました。ラングさんは横に立って話を聞いているだけのようです。

それにしても、ガイラスさんは昼間の事をまだ根に持っているようです。仲良くしてとは言いませんが、険悪なムードにはならな
いで欲しいです。

「馬鹿な事言うな。……つと、このような予定でよろしいですか？」

シュイ君が私とお父様に確認に来ます。お父様も私も異論は無く
頷きます（レイさんの必要性は確かに薄くなりますが、御者さん
としては必要ですね）。

と。

「夕食が出来ましたよー」

そんな声が辺りに響きました。むなしく。

タイミングが良かったのか、それともその台詞のインパクトが強
かったのか、レイさんを除く全員が口を動かすのを忘れて、呆然と
していました。

いつの間にか焚き火が出来ており、厚手の鍋が火にかけられてい
ました。

え？ いつの間に？

そんな私達一人一人を押して、鍋の元にレイさんが集合させます。
その間、私を含めた皆は、驚きのあまり彼の為すがままです。

そして、鍋の蓋を開けてレイさんは言いました。

「本日の夕食は、七種の野菜と極楽鶏のシチューでございます」
「……はい？」

思わず涎が零れそうな、良い匂いが辺りを満たしました。

私の目の前には、お屋敷で出されるものと比べても全く遜色のない、立派なシチューが。

「ノールランド産の生クリームを贅沢に使用し、最高級品と名高い極楽鶏と野菜七種を煮込みました。味付けは疲労回復のため、少々濃いめです。味が濃いようでしたら黒パンもありますので、それに付けて召し上がっていただければ」

「……」

え？ えーと、いえ、はい？

レイさんは説明しながら、お皿によそってスプーンと一緒に一人に手渡して行きます。あれ？ この銀のスプーン、私の屋敷で使っているのより綺麗だ。

まだ、皆動けません。鍋の隣にはバスケットに入ったたくさんの黒パンがありました。焼きたての状態で、ほかほかと湯気を立てています。

全員に皿が行き渡り、いただきます！ とレイさんが一人ですって、やっと私達は考える事を思い出しました。

いただきますは、たくさんいるのに一人で言うって、何故だか凄く虚しく感じるものでした。

「では、どうぞご賞味ください」

「いや！ 何平然ととんでもない事やってんだおっさん！？」

にこりと笑うおじさんに、ガイラスさんが噛み付きました。銀の

スプーンを突きつけて、怒鳴ります。
私も同じ気持ちです。

「お口に合いませんでしたか？ それなら、すぐにでも別物を作りますか」

「そうじゃねーよ！ 何平然とした顔でこんな料理作ってんの！？ これ、護衛の旅だぞ！？」

「腹が減っては戦が出来ぬ、という言葉があります。食事はどんな時でもちゃんと取らなければいけませんよ？ あつ、戦闘になりましても、私が片付けますから御心配なく」

「そうじゃねーんだよっ！！ わっかんねーかな！？」

頭をがしがしと掻いて、ガイラスさんが怒鳴っていますが、レイさんは顎に手を添え、首を傾げるばかりです。

うわぁ、凄く胡散臭い仕草……。

ガイラスさんが言いたいのは、そんな立派な食材どこから調達して来たのか、旅で作るものじゃない、いつの間に作ったのか？ という感じでしょうか。

「……とりあえず、食べましょう？」

冷めて美味しくなるのも勿体無いので、私がやんわりとたしなめます。ここは素直にいただきましょう。その後で、話を聞けば良いのです。

「……？！？」

私が一口食べた事で、皆が食べ始めました。

「……うまいな」

「ありがとうございます」

シユイがおじさんを褒めています、私はそれどころではありませんでした。

何このシチュー！？

私が今まで食べて来たものの中で、一番美味しい！ 城で出された料理よりも、他のお屋敷で出されたものよりも凄く美味しい！ 生クリームの濃厚な味わいが口の中に広がって、ジャガイモや人参は口の中で溶けていきます。極楽鶏の肉は柔らかく、噛めば肉汁が溢れて、それがシチューと絡み合って絶妙な深みを出します。

「あ、あのっ！」

「どうしました？ お口に合いませんでしたか？」

別段気落ちした方でもなく、平然とレイさんは言いました。

この料理がまずいわけがない！ という自信はなさそうで、美味しければ別の作りますよ、といった感じです。

「いえ。凄く美味しいです。それでその、レイさんはどこかの宮廷で働いた事もあるんですか？」

「いえいえ、厨房に入った事はありませんが、働いた事はありませんよ」

そうなんですか…… って、厨房に入った事があるのなら、働いたも同然じゃないですか！

「この料理はその時厨房にいた人のを真似しまして。別に、僕でなければ出来ない料理ではないですよ。高級食材の力も借りていますし」

「それだ！ おっさん、極楽鶏って言えば一羽金貨一枚だぞ？ そ

れに、ノールランド産の生クリームって、こっからどれだけ離れてる
と思っただけ？　っていうか、どこから出したそんなもん！」

極楽鶏と言えば、宮廷の料理でも扱われる超高級品、美味しさも
折り紙付きです。ですが、それよりも上に行くのがノールランド産生
クリームです。ノールランドは大陸の最北端の国で、そこで作られる
乳製品は至上の味と呼ばれています。ただ、保存が難しく市場には
滅多に出回りません。

そんな高級品、どうして……。

「僕の手荷物です」

そう言っ、皮でできた上等そうな鞆を見せるレイさん。彼の唯
一の持ち物で、御者台に置いてあったのを微かに覚えています。で
も、大きさに鍋が入っていれば膨らんで目立つような……。
いえ、それよりも。

「レイさん、一体いつ調理されたんですか？」

レイさんが声をかけて来たのは、ここに着いてから三十分と経っ
ていません。いえ、そもそもこの鍋とお皿、それにパンはどこから
出したのですか？　パンに至っては焼きたてでしたし……。私は、
馬車しか用意してませんよ？

「それは企業秘密です」

ニコリとレイさんが不敵な笑顔を見せました。……とても板につ
いています。

「……おかわり」

「はい、どうぞ」

フィーがもう一皿食べ終えて、おかわりです。あれ？ この子、そんなに食べるような話はしてなかったけど……。

「俺も頂こうか」

「俺にも頼む」

「私にも頼むよ」

と、シユイ君にラングさん、お父様までもがおかわり。えっ、早く食べないと私の分無くなっちゃう！？ こんなおいしい料理、食べ逃せません！

シチューは綺麗に食べ尽くされ、パンが少しばかりの残る食事となりました。大満足です。お金を払ってでも食べたい料理でした。

「お皿はパンで拭って綺麗にしてください。あっ、別に犬や猫のようにぺろぺろ舐められても構いませんよ？」

……余計な一言付け加えるレイさんは、やはりおっさんです。お父様は何やら笑っていました。どうやら、彼の事を気に入ったようです。旅の最中、何をお話しされたんでしょうか？

Gランクの天才 3

馬車の乗り心地はあまり良くない。街道の整備が悪いのもあるだろうが、サスペンションがないのが大きいだろう。お尻が痛い。

自分の馬車だったら付けているが、借り物の馬車だ。あまり改造はしたくない。前世の記憶で車輪を改良しても良いが、こういう技術はあまり曝したくない。誰にでも出来る力など、後の脅威でしかないのだから。

しかし、少しというか、なんというかー困る、というか。

僕はちらりと斜め後ろを見やり、そしてすぐ前を向き溜息をついた。

そこにいるのは、リース嬢とフィーだ。二人仲良く同じ馬に乗っている、のが問題だ。

明らかに、明らかにリース嬢とフィーの接触率が高すぎる。前に乗るフィーをリース嬢が抱きかかえるようにしているのだが、もはやあれは抱きついていっているだった。フィーもなんやかんや言って可愛い女の子である。対して、リース嬢は美少女だ。

目福を通り越して、目の毒だった。

「レイ君、少しお話の相手になってくれないかい？」

と、護衛対象のカイルが僕に話しかけて来た。恐らくと言うか、ほぼ間違いなく暇だったのだろう。

「ええ、僕で良ければ」

カイルは三十代後半、僕は見た目三十代である。一応。ため口で

話し手も良いのだろうが、微妙な上下関係を作っている。そちらの方が僕としては非常に話しやすい。

「レイ君はGランクだったね。どうしてランクを上げないんだい？」
「僕が求めているのは他人からの評価ではなく、コレですから」

と、僕は親指と人差し指で円を作ってみせる。世の中金だよ、とは言わないが必要なのだからしょうがない。
そんな僕をカイルは苦笑し、

「じゃあ、どうしてお金が必要なんだい？」

と尋ねて来た。いやいや、ちょっと踏み込み過ぎじゃないですか？まさか、帝国に復讐するためです、などと真っ正直に答える訳にも行くまい。どうするかな……。

「実は、病弱な母がー」
「嘘だね」

僕のお涙頂戴の話は、最初の導入で否定されてしまった。
さすがは裁判長、嘘は簡単に見抜きますか。

「……恥ずかしい話、豪遊がしたくて」
「それも嘘だね」
「……………」

いや、あながち間違っちゃいないんだけど。こつも断言するよう
に否定されてしまうと、なんだか僕が本心でそう思っていないよう
じゃないか。僕は僕が解らなくなって来たよ。
と。

「くくく、ごめんごめん。ちょっとからかい過ぎたかな」

カイルは笑いを堪えているようだった。

狼狽する僕がさぞかし面白かったのだろう。いや、基本的に胡散臭い笑顔か、無表情に徹する僕だけだ。

「まあ、無理に答えなくて良いよ。訳あり何だろ？」

「はいそうです。復讐のためなんて、そんなこと言えるわけないじゃないですか」

カイルの笑顔が凍り付いた。逆に、僕は人の悪い胡散臭い笑みを浮かべる。

うん、その裁判長という役職、もはやそれはカイルの天職と言っても過言じゃないのではないかな。

僕のこれが嘘とは見えないようだ。

「……君は、随分と捻くれた性格をしているね」

「見た目と中身の不一致を目指してます」

その後、しばし僕らは見つめ合う。火花が飛び散るように視線が混じり合い、そして。

「君は面白いな。では、ちょっと君の昔話でも聞かせてくれ」

「いいですよ。聞いたら最後、もう元には戻れませんけどね」

僕らはそんな事を言って、しばし談笑した。

ちなみに、その時話した昔話は、八割弱真実だったりする。

だからといって、どうやって復讐するかとか、魔王や勇者の話はしていないので、口封じをしようとは思っていない。

今の所。少しのことで心変わりするかもしれないけど。

「……そんな話があったのか。恥ずかしい話、知らなかったよ」

「知られたらまずいんですよ。特殊な事情が有ったとはいえ、善良な国民を虐殺したのですからね。ただもし、この事が国民にバレたりしたら……、もしかすると、この帝国が滅んだりするかもしれませんよね」

僕の軽口に、カイルは苦笑すらも浮かべられなくなっていた。

「まあ、ちよつとばかり気に留める程度で十分な話です、ええ。今の所は……」

「……………。面白い話だったよ、ありがとう」

そう言ったカイルの顔は、何か色々と考えているようだった。

全行程の三分の一程進み、日が傾いて来たので野宿となった。前が草原と街道、後ろが森と攻められても逃げやすい場所だ。近くに川もあるようで、かなり好条件な場所だろう。おまけにフィーが境界を張ってくれたので、寝ているときの安全性は高そうだ。

皆が何やら話しているが、丁度良い。僕は僕の仕事を始めよう。

魔法と魔術。

この世界には、二通りの異能力が存在する。

魔術は、マナと言う未知の要素を仮定した時、物理化学の法則が成り立つ事象のことを言う。RPGなどの攻撃魔法と考えると良い。

魔法は、物理化学の法則に捕われず、独自の法則にのみ縛られる事象のことを言う。これは説明しづらいが、忍者の変化の術とか変わり身の術なんかがこれに近い。

フィーは魔術師だ。前世で言う所の、エンジニアとか科学者に近い。

僕は魔法使いだ。前世で言う所の、神様とか超能力者だろう。??いや、『魔王』なんだけど。

僕のマジックは種も仕掛けもない。本当の魔法なのだから。けれどそれは異端の能力。あまりおおぴらに見せられる力ではない。だから、ちょっと小道具を用意する。

鞆だ。魔法具だが、使用法を解っていないとただの空っぽの鞆だ。某ネコ型ロボットの道具に、四次元ポケットと言うのがある。

まあ、簡単に言えばこれはそういう魔法具である。

ただし、あの道具と違いこれには条件、法則がある。

魔法具らしく、『魔の法則』があるとでも言おうか。

『一つ、鞆に入れた物でなければ、取り寄せる事は出来ない。』

一つ、取り寄せたい物を明確に思い浮かべなければ、取り寄せる事は出来ない。

一つ、取り寄せられるのは、その物の所有者でなければならない。

一つ、鞆に入れた物は、入れた時点の状態を維持する。

一つ、生命体を入れる事は出来ない』

以上が、この鞆の法則だ。

これにより、一度入れた物は腐敗する事無く、最高の状態を維持して持ち運ぶ事が可能だ。法則に入れてはいないが、鞆に入り切らないサイズの物はどうしようもない。解体して入るようなら大丈夫だが、組み上がって出来たりはしない。

今現在、この鞆の中には一万を超える物を入れている。

それでは、今日の夕食と洒落込みますか。

まずは火元を作る。こればかりは取り出す事は出来ない。

以前に誰かが野宿したのか焚き火の跡があつたので、それを活用させてもらう。

適当に薪を集め、石の円の中心に置く。それと別に、Y字の枝を二本を垂直に立て、鍋を掛けられるようにその上に棒をのせ、魔術で小さな火を起こす。指先にライター程の火を灯す魔術は初歩的な物で、魔術の才能がある者なら大抵出来る事だ。コレくらいで驚かれたりはしないので、この時ばかりは普通に準備する。

耳を澄ませ、更に辺りを伺う。……よし、誰も僕の使用を気に掛けてはいないな？

では、図らずも『Gランクの天才』と呼ばれる僕の使用をお見せしよう。

手始めに、鞆から鍋と皿を取り出す。鍋は厚手のステンレスの物で、皿は軽くて壊れにくいプラスチックに近い材質の物だ。そしてバスケット、続いてパンを取り出して行く。パンは焼きたての物を突っ込んだので、出したそのときからほかほかと湯気を立てている。

この鞆の恐ろしい所。

それは、液体を入れても大丈夫だと言う点。

いやー、作り置きしたシチューを入れてあるんだよね、あははは。と言う訳で、レトルトのような手軽な感覚で、本格的なシチューが旅先でも頂けると言う凄いアイテムだ。勿論、これは以前僕が作ったシチューに変わりはない。

女性陣がシチューを被ると言うようなサービスシーンなど無く、食事は終了。シチューは思った以上に好評で、その分当然のように疑問が来たけれど（いつの間にか作ったのか、食材が高価だが大丈夫か等）、『Gランクの天才』という言葉で片付けた。自分で言っておいてなんだが、なんで納得するのか僕には解らない。

シチューは特にフィーに好評で、ぶつぶつと『生クリーム……牛乳』とか、『胸が……』と呟いていたので、たつぷりとよそつてあげた。男っ気があるように見えはしないが、コンプレックスなのだろう。何がとは、僕の口からは言えない。

シユイやカイル、意外な事にラングにも褒められたが、ガイラスは不機嫌な顔をしていた。それはよく分からない。また、食器を回収していると、何故だかリース嬢からジト目で睨まれたが、それも僕はよく分からない。

食器回収後、皿洗いをする。

本来なら川まで行って洗ったりするのだろうが、僕は『Gランクの天才』だ（うわ、何言ってんだか僕）。そんな面倒な事はしない。僕が『Gランクの天才』などと呼ばれる由縁は、その奇抜な発想に有る。

シチューの効果か、何故だか僕の作業を見にリースとフィーが来たので、僕は『Gランクの天才』たる由縁を披露することにした。今回使用するのは魔法ではなく魔術だ。魔法はきつと、魔術師であるフィーにはどうあがいても許容出来る物ではないはずだ。前世で言う、火の玉をプラズマと言い張るようなタイプの人間だから。

まず自分の前に水のマナを集める。これは感覚的な物で、これが出来るか出来ないかで魔術の才能の有無が決まる。僕は空气中に存在する水素や酸素を意識し、それが集まって来るように念じている。魔術の基本は、各マナを魔力と反応させる事で現象や物質とするものだ。今回のイメージとしては、水のマナが大量の水素と酸素、魔力が熱運動エネルギーと言った感じだろうか。本当、魔術は化学臭い。

水球。まず、直径一メートルの水球を宙にイメージする。そしてそれを具現化すべく、集まっている水のマナに魔力を放つ。水滴が生まれ、それが次第に大きさを増して行く。水滴が集まって大きくなっていく感じた。近くに川がある事で、水のマナが集まりやすいからか、十秒くらいで水球が出来上がった。

ここで集中力を切らしては、水球が球形を維持出来なくなり、バケツの水をひっくり返したような、RPGの激しい水流の攻撃魔法となってしまう。けれどももう慣れた物で、僕は水球を維持しつつ、その中に鍋を入れる。まあ、こうやって川まで行かずに洗う訳だ。さて、ここからが『Gランクの天才』たる由縁だ。

今回のように川が近くにあるのなら、集中力や魔力を消費するようなことはせずに、素直に川へ洗いに行けば良いのだ。特に護衛任務など、いつどのような規模の襲撃があるかも解らない状況であれば尚更である。

ただし、それはただ水で洗う時の話だ。

「……えっ」「……すごい」

二人の驚嘆の声は僕の耳に、二人の視線は僕の前の水球に注がれている。

水球が泡立っていた。ボコボコと泡立ち、中の鍋を回転させ綺麗にしている。水球がその形を変えようとするが、さらに魔力を注ぎ球形に維持、そして汚れを分解する。これは、水球を沸騰させているのだ。ようするに、お湯での洗浄である。

僕が水の魔術を扱う上での魔力のイメージは、熱運動エネルギーだ。これは、それを水球全体に加えた物だ。

これが僕を天才と呼ぶ由縁。実に単純だ。

というのも、この世界に水を沸騰させるような魔術を使う人間がいないからである。そもそも、魔力を熱運動エネルギーなどと考える人がいないだろう。そこまでこの世界の化学は進歩していない。

僕に言わせれば、魔術は化学反応を感覚で行なっているような物だ。

もう少し物理や化学が研究されれば、僕の天才などという称号は消えるだろう。

ちなみに、天才の前に付く『Gランクの』とは、僕が戦闘がからつきしだからと言うシヨボイ理由である。

いやね、魔術はさ、使うのに結構時間がかかるんだよ。それに集中力がね？

僕の場合、とてもじゃないが戦闘には使えない。世の魔術師諸君には頭が上がらないよ。彼らはものの数秒で魔術を攻撃として使えるレベルまで具現化するから。

……まあ、僕だって魔法を使えば、戦えなくはないんだけどさ。

その後、川に沐浴に行く女子二人。二人とも襲われたとしても返り討ちに出来る実力者だ。何かあったら叫ぶようにも言っている。

男達は馬車のところで各自が各自を監視。

カイルの一言、

「私の娘を覗きに行った者は死刑です」

で、男のロマンを実行に移す者は誰もいなかった。戦闘力皆無のカイルの一言であったが、背中がゾワゾワ来るものがあつた。

女子が帰って来た後、男達も交代で川に行つて鴉の行水。護衛の関係上、戦闘力がGランクの僕にはガイラス、カイルにはシュイとランクが付いて行つた。ガイラスとの水浴びなど、語る事などない。リース嬢の濡れた髪は、月夜に照らされ綺麗に輝いていた。姫だとか女神だとか呼ばれるのも頷ける。その前に付く物騒な『戦』の文字は知らない。戦闘は見てないから。

夜中、僕は自分の仕事の一環と割り振った不寝番をしていた。というのも、僕はこのメンバーを信頼していないからだ。

護衛対象のカイルとリースを除くギルドメンバーは、裏切りが発生した場合脅威となる対象ばかりだ。シュイは言わずと知れた優秀な剣士、フィーはその性格から忌避されがちだが優秀な魔術師、ガイルスは武器だけ見れば英雄クラス、ラングはなんか威厳がある。さすがの僕でも、そんな奴らに寝込みを襲われて無事な自信はない。

魔力の回復には睡眠が一番だが、僕は一度寝てしまつと朝まで寝こけてしまふ。余程の事が起これば起きるが、隣で誰かが動いているとかでは気付けない。

と言う訳で睡眠を取らずとも何日でも動ける僕は、不寝番を買つて出た。Gランクという隠れ蓑を使っているため、何か遭つたらすぐ起こしてねと、リース嬢にありがたいお言葉を頂けた。

だが、まだ解つてないようだな。『Gランクの天才』を。

今、僕の他に起きている人は誰もいない。皆ぐっすり、今日の疲れを癒すために睡眠中だ。馬車の中で寝ている女子二人も覗いてみたが、ぐっすりと寝ていた。この様子、朝日が昇るまで起きないんじゃないかな？

あれだよ、美味しいご飯をお腹いっぱい食べると眠くなるもんね。ぐっすり寝ちゃつても仕方ない、うん、人間としての摂理だ。

……いや、僕が睡眠薬を投与したからだけだ。

だが、これに深い意味はない。寝込みを襲おうとか、荷物を漁ろうとか、そんなやましい事は考えていない。ただ皆にぐっすり寝て英気を養つてほしただけだ。

……まあ、女の子の寝顔は眼福だけだね。

……それと、万が一裏切り者がいたとき、その行動を阻止する意味も有る。依頼を遂行出来ずに困ると良いさ！裏切り者はいないにこした事はないけど。

Gランクの天才 4

朝日で私は目覚め……え？ 朝！？

「ッ！？」

慌てて馬車から降りると、焚き火の側で膝を抱えているレイさんが見えました。その横には、既に朝食があります。

「おはようございます、リース嬢」

寝起きに見るレイさんは、何故だか胡散臭くありませんでした。あつ、目に隈ができてる。……もしかして、ずっと起きてたの？

「すみません。……もしかして私、ずっと寝てました？」

「はい、皆さんぐつすりとお休みでしたよ？」

そう言われて辺りを見回すと、未だに皆寝ています。普段あまり寝付けないお父様までも、幸せそうに寝ていました。……あれ？ そう言えば私も、最近は寝付きが悪かったのに……。

「朝食の前に川で顔を洗われてはいかがですか？ ……あ、護衛が必要ですか」

「いえ。フィーが起きてから行きます」

と、私の何がオカシイのか、レイさんは笑いました。あれ？ 私寝癖付いてる？ それは恥ずかしい。

「フィーさん、きつと起こさなければ起きませんよ？ 昨日も寝坊

して来たようですから。魔術師の方は睡眠時間が不規則なんですよ」
「……そうだったんですか」

そう言えば、フィーは集合時刻ギリギリに来たようなーって、
昼過ぎのあの時間まで？

フィーを起こして（どうやら自分で起きるのが苦手なだけの様で、
寝起きは意外とすっきりしてました）、川で顔を洗って戻ると、他
の皆も起きていました。

「悪いな、ずっと不寝番していたんだろ？」

「いえいえ、それが僕の仕事ですから」

「……何か異変はなかったか？」

「大丈夫です。フィーさんの結界が優秀だったおかげか、特にする
こともありませんでしたよ」

「つーか、おっさんの目の隈がやべーよ。ちょっと寝てろよ」

「そうだね。居眠り運転をされても困るし、少し休んだらどうだい
？」

「……では、出発まで寝かせていただきますね」

皆に心配され（ガイラスさんが何故か気持ち悪かった）、レイさ
んは御者台で寝に行きました。朝食も準備されているので、一時間
くらいは寝られるのではないでしょううか。

朝食は紙に包まれたサンドウィッチで、パンはふんわり、具の野
菜はシャキシャキ、微妙な酸味のある調味料が癖になる、やはり美
味しいものでした。

食事後、適度に運動をして、出発の準備にかかります。何故だが、
皆の動きにキレがありますが、本当にぐっすりと寝てしまったよう
です。レイさんに申し訳ありません。

そのレイさん、わずか一時間の睡眠だと言うのに目の隈は取れ、

至って普通に御者をやっています。なんというか、本当に凄い人なんだと思いました。

今、フィーが御者台と一緒に乗っていて、昨日の魔術について何やら話しています。時折、意見の食い違いなのか言い争うような声が聞こえるのは、気のせいでしょうか。これが『偏屈魔術師』と呼ばれている原因？

――――

面倒な事になった。

僕はすっかり忘れていたのだ。フィーが『偏屈魔術師』だと言う事を。

「だから！ 昨日の魔術の説明！」

「企業秘密です」

「いいじゃない、減るものじゃないし！」

おいおい、なんだこの五月蠅い子は。昨日まで借りて来たネコのように静まっていたと言うのに、今日の喚き方と来たら、まるで大熊猫に騒ぐ人のようにじゃないか。いや、昨日までが猫を被っていたのであって、これが彼女の普通か。

フィーはどうやら、水を沸騰させる魔術に興味があるようだ。それもそうだろう。一般的に水を扱う魔術は、ただの水を生み出す魔術だからだ。

もし水を熱湯に変える事が出来れば、熱湯から水蒸気、さらには逆に氷にまで派生する。基本的に水の状態変化は、熱運動エネルギーと粒子間引力の大小関係だ。水蒸気が可能なら、氷も出来ると言っている。そうなると、蒸気機関から保冷技術まで発展する。

僕が善良な一般市民だったら出し惜しみせずに教えるのだが、生憎僕は復讐を考える人間だ。おいそれと技術発展をさせたくはない。昨日の敵は今日の友、昨日の友は今日の敵。

なんと言おうと、教えません。いいじゃない、別に炎を生み出して水を温めれば。結果は同じなんだからさ。

「けち」

「自分で頑張りなさい」

「なんであたしがもう確立した魔術を研究しなきゃいけないのよ。あたしは最先端の魔術を考えるの。一度確立した魔術を詳しくなんて調べてられないわ！」

なるほど。まさにエンジニアだな。

ソフト開発環境があつて、それで色々作るのが君と言う事か。

「年長者の助言をさせていただくと、基本が解っていないければ碌な魔術は出来ませんよ？」

「はあ？ 基本なんてマスターしてるわよ。理論さえ聞けば大体の事は理解出来るもの。……昨日のあの水球、あたし達とまるで考え方が違うみたい。熱湯にするのに、火のManaを使つてないもの。何か特殊な魔力の扱い方をしてる？」

うわやべえ、俗にいう天才だこの子！ 僕のような前世の記憶を流用してる紛い物の天才じゃなくて、本物の天才だよ。熱運動エネルギーとか教えてたら爆発的に魔術が発展しそう。

教えないでおこう。この様子なら、遅かれ早かれ自分で気付きそうだ。あえて間違つた方向に進める手もあるが、知識の浅い僕にはそんな事出来そうもないし。

それに、僕は魔法使いだから。魔術は専門じゃないんだ。

ちなみに、魔法はおいそれと使えないので、魔術としての切り札

も持っている。

マナという要素を突き詰めて考えると、とんでもない代物である事がヒントだ。いやはや、空恐ろしいものを扱うよ、魔術師は。そんな事を考えている僕をフィーはジト目で見つめてくる。そして、しばし俯いて何か考え、

「……………どうしても、だめ？」

大きな瞳を微かな涙で潤わせ、小首を傾げて聞いて来た。可愛らしく上目遣いで言っても、駄目な物はだめです！

と、内心では反論出来ている僕だったが、口からは何も出なかった。

「あうああう」

訂正。よく分からない何かが出ていた。

Gランクの天才 5

「??? 敵襲っ！」

シュイが突如そう叫んだ。フィーの女の武器で陥落気味だったため、僕はある種助かった。一気に全員の気が張る。

場所はアイカシア国の国境まで数十キロという地点。どうやら、他国の仕業に見せかけたいようである。

「……背後に数十の気配ですね」

リース嬢がそう呟いた。気を扱う闘気術は、この世界ではざらである。その代わり、魔力を扱う魔術師はかなり少ない。

シュイ達も異論はないようで、その数からして魔物ではないだろうか。しかし、結構な群れだな。別に血の匂いを放っている訳でもないのに、随分と数が多い。

人為的なものだな、確実に。

「その程度の数なら、あたしが魔術でだいたいやれる」

フィーが御者台から後ろを振り返り、その数を確認しそう断言した。

僕？ 無理無理。僕がGランクに甘んじるのは、戦闘が嫌いだからだよ。

今の僕では高威力高範囲の魔術は使えない。魔法を使えば可能だが、魔法なんて異端扱いなので論外だ。

さあ皆、頑張ってくれ。僕は影でこそこそ皆の事を応援しているよ。頑張れ頑張れ、どんどんぱふぱふ。

…… 陥落気味の理性、気の迷いだと思ってくれ。普段の僕、胡散

臭いおっさんと呼ばれる僕でも、こんな事態にこんなことはしない。
……フィー、やり過ぎだよ。上目遣いはなんとか耐えられたけど、
耳を噛むのは――何でもなし。何にもなかった。

「魔物との距離が五十メートルを切ったら馬車を止めてくれ。フィー、それまで魔術の準備を頼む。他の皆も、戦闘の準備をしていてくれ。魔術で倒せなかった魔物を殲滅する」

シュイがそう言つて、大剣に手をかける。他の面々もそれぞれ己の武器に手をかけ、戦闘のシュミレーションでもするかのようにだった。僕はやる事がないのでその間に、僕はカイルに馬車を急停車させる旨を伝えておいた。あれ、意外と重要じゃないか？

「気をつけて。怪我するなよ？」

と、カイルからありがたいお言葉を頂いた。

ありがとうございます、僕も流れ弾に当たらないよう、馬車の上で高みの見物兼応援をします。

「フィー、魔術の準備はいいか？」

「大丈夫。いつでもいいわ」

「じゃあ、十秒後。……さん、に、いちー止まれ！」

シュイの号令で僕は馬を止め、直後、フィーが馬車を降りた。そして流れる動作で杖を掲げる。

「求めるは人類の偉業。摂理に逆らいし物を滅せよ！」

詠唱だ。

自分のイメージを補助する役割があり、より強力な魔術が可能に

なる。恥ずかしいとか言っちゃ駄目です。

詠唱内容は、『人類の偉業』が火を表し、『摂理』は弱肉強食、『滅せよ』は爆発的威力の現象。仰々しい言葉を並べるのは、それにより威力を高めるのと、どんな魔術かを解析されないためだ。僕はなんとなく解っちゃうけど。

魔物達の手前の地面に、巨大な朱色の魔術陣が浮かび上がった。人間だったら、ここでどんな魔術が来るのかなんとか解るが、魔物は訳も解らず突っ込んで行く。

そして、轟音と共に火柱が上がった。

地面から突き出るように現れたそれは、凄まじい火柱だった。何十メートルと距離があるにも関わらず、その熱気に思わず顔を背ける程の、猛烈に強力な火柱。

火柱が消えた後には、いくつもの消し隅が残っていた。

だが、それで終わりはしなかった。

魔物はどうやら一列になっていたようで、火柱が消えた後から何匹かの魔物が襲って来た。

猪とサイを足して二で割ったような魔物だ。鼻の当たりに鋭い角があり、突かれた一溜まりもない。

それをシュイ、ラング、リース嬢が迎え撃つ。フィーとガイラスは馬車の横で待機である。ガイラスはやや悔しそうな顔をしていた。戦闘狂か？

シュイは大剣で魔物を一刀両断する。大きな剣の重さと、それを感じさせない速度で魔物の硬い皮膚を切り裂く。身体能力を高める何かを持っているそうだ。

ラングは盾を構え、魔物にタツクルをぶちかましていた。豪快だ。そして力負けするどころか魔物を吹っ飛ばし、体勢が崩れた魔物の頭部を盾の側面で叩き割っている。

圧巻だったのはリース嬢だ。

彼女の手握られているのは、細身で純白の剣、『聖剣レイリース』。僕に言わせれば魔剣だが、聖剣である。

魔剣とは、基本的に魔石を使った剣の事をさす。基本的に。あくまで基本的に。魔王の僕には、基本は関係ない。

聖剣レイリース。その効果は、持ち手の身体能力の底上げ、そして――。

「はあっ！」

シユイと同等の速度で魔物を切り裂く彼女の剣は、魔物を綺麗に切り裂いた。

熱と光だ。高密度の光を纏った聖剣は、熱量を持った斬撃を生み出す。綺麗な紙の摩擦熱で手が切れるように、けれど元が剣であるためとんでもない切れ味となっている。

魔力は、エネルギーと考えていい。それを大量に蓄積する魔石で作られた剣、それが魔剣。魔術と魔法の境界線だろうと僕は考えているが、やはり魔術よりだろう。

魔物を切り裂いた彼女の長い金髪が、その剣の放つ光で輝く。微量に彼女の聖剣が魔力の残滓を散らし、彼女が神々しい粒子を放っているように見えた。

……確かに、彼女の戦う姿は戦女神と呼んでもいいかもしれないな。

柄にも無く、そんな事を思ってしまった。

と、不意にそんな僕の不拔けた思考を覚醒させるような、鋭い気配を感じた。

「まずいつ！」

丁寧語を使うというキャラ設定を忘れ切って、僕はフィーのいる

方へ御者台から飛び降りる。

第六感に近い何かが、まずいと告げている。

ズダン！ と、僕がフィーを突き飛ばすのと同時に、耳を打ち鳴らす炸裂音が響いた。

「きゃっ！！」

鮮血。

フィーのローブが切れ、足から血が流れた。くそ、間に合わなかったか。

だが、辺りを見渡しても魔物は見当たらない。丁度リース嬢達が殲滅した所だった。

炸裂音と気配……銃か！？

未だにその技術は存在していないと思ったが、僕の知らない所で既に開発されていたのか。

「どうした！？ 森からか！」

怪我をしたフィーを見て、ガイラスが颯爽と森に飛び込んだ。

「やめろ！ 深追いするな！」

シュイが叫ぶが、ガイラスは話を聞かずに森の奥へと走って行く。恐らく、自分一人魔物と戦えなかったからだろ。戦闘馬鹿だと言う事だ。

「くそ、一人で行かせるか！ ラング、追っぞ！」

シュイがラングに呼びかけ、二人はガイラスが消えた方に走って行く。

おいおい、護衛対象をほったらかしてどこ行くんだよ。

「うう……」

と、フィーの呻き声でそれどころじゃないのを思い出した。
見た所、銃弾は足を擦っただけのようだ。が、その銃弾に毒でも塗ってあったのか、傷口がみるみる紫色へと変色している。

「フィー、大丈夫ですか！」

リース嬢が駆け寄ってくる。うん、今は一カ所に固まっている方が
良い。

「うう……」

「レイさん、フィーは大丈夫でしょうか。というか、先ほどの炸裂
音がこの傷を？」

呻くフィーを心配そうにリース嬢が抱きかかえた。絵になるな……
じゃないか。

やはり銃は表向きには存在していないようだ。

「どうでしょうか？ ただ、毒の効果がある攻撃だったみたいです
ね。即効性の毒、早く解毒しなければまずいかもしれません」

銃はあまり知られていないので言葉を濁し、僕はフィーの傷口に
手を添えた。

あまり見せたくないが、そうも言ってられまい。

魔力を傷口に注ぎ込む。魔力は血液を流れて行き、毒となる物質
を発見後、それを相殺するイメージだ。

「うぐっ!! あっ……」
「フィー!」

と、フィーが痛みかなにかで失神した。この魔術も知られるとま
ずいので、こればかりは好都合。

集中力と魔力を絶やさずに数分して、やっと傷口の色が良くなっ
た。さらに傷口の細胞活性を促すイメージで、魔力を注ぐ。傷口は
ものの数十秒で塞がり、ひとまず安心だろう。

「これで大丈夫なはずです。傷は塞ぎましたし、毒も解毒しました。
後遺症も残らないでしょう」

「凄い……。これも魔術ですか?」

どうやらリース嬢は魔術の素養がないようだ。魔術の素養が有る
人なら、俺が魔力を使ったのを感じ取れるはずだからな。それなら、
魔法を使っても良かったかな? いや、それはフィーにバレるかも
しれないから、これでいいか。

「はい。あまり得意ではありませんが、神聖術という特殊な魔術で
す」

「えっ!?! レイさん、ニルベリア皇国の巫女様に会った事あるん
ですか?」

あ、やばい。そう言えば、神聖術はニルベリアの巫女様の術だっ
た。それをアレンジしたけどベースは変わらないか神聖術とか言っ
ちゃったけど、これはまずい。

「……え、ええ。伊達に『Gランクの天才』などと呼ばれてはおり
ませんよ。こういう仕事ですから、色々な方と出会っくんですよ。こ
れはその時少し齧りまして」

「はあ、レイさんは凄い人なんですね」

困ったときは『Gランクの天才』。うむ……、毛嫌いしていたが、意外と便利だな。

十数分後、カイルに事件の顛末を伝えてみると、シュイが戻って来た。

「……ガイラスは見つからなかった」

シュイが重い口を開けた。

あの後、二人で手分けしてガイラスを探したそうだが、ガイラスの姿は見つからなかったそうだ。

「この魔物の襲撃……、人為的なものですね。そしてフィーを狙った攻撃。レイさんが庇ってくれなければ、フィーは死んでいたかもしれません。確実に、私達は狙われているみたいです」

重い沈黙が辺りを満たしていた。

魔物を操り、遠距離からの謎の攻撃を放つ襲撃者。それが僕以外のメンバーの考えのようだ。

堪え難い空気なので、僕は案を出す。

「フィーの容態は今安定していますが、なるべく安静にしている方がいいでしょう。一日待てば容態は回復するので、僕はここで野宿することを提案します」

「動くなと言うのか？ ……だが、いつ襲撃を受けるかわからないぞ？」

僕の提案に、シュイが反応した。
と、それにラングさんも意見を出す。

「だが、移動してもそれには変わりはあるまい。襲われるときは襲われる。……それと移動した場合、ガイラスと合流出来ん」

「……得体の知れない魔術師を追って行ったんだ。無事とは限らない。命令違反だし、見捨てるべきだ」

暗に、ガイラスはもう諦めようと言うシュイ。僕としても、別にガイラスなんてどうでもいいんだけどな。

「……まあ、僕らがなんと云おうと、最終的な決断は依頼主ですからね。どうしますか？」

僕に話を振られて、カイルは少々驚いたような顔をしてみせたが、真剣な顔で答えた。

「私はこれ以上、護衛を死なせたくはない。フィーさん、ガイラス君。二人の護衛の安全を考えて、ここで休んで行こう。……フィーさんの体調が戻り次第出発でどうか。その時までにはガイラス君が戻らなければ、残念だが彼は諦めよう……」

カイルは出来た人間だった。

依頼主にそう言われてはどうしようもないので、シュイは若干澁々ながら頷いていた。野宿案を出した僕だったが、実のところ、気持ちで言えばシュイと同じであった。何かきな臭い、と。

「……では、僕がガイラスを探してきましょう」

「レイさん!？」

リース嬢が驚いた顔をしたが、このメンツを考えると、一番要らないのは僕だ。例えば僕が欠けた所で、リース嬢が御者をやれば大丈夫だろう。

「僕は護衛の役に立ちませんから、役に立つガイラスを探してきます。シュイとラング、リースさんがいれば大丈夫でしょう」

「……あたしもいる」

と、フィーが目を開け、身体を起こした。が、声が弱々しく、半ば意地で起き上がったようだ。

「では、探してきます」

「……気をつけるよ？ 相手は得体の知れない魔術師だからな？」

シュイが心配そうに声をかけてくれたが、大きなお世話だ。むしろそっちが気をつけるよ？

銃を知らないシュウ達にすれば、先ほどの攻撃は得体の知れない魔術となるようだ。気配の読めるこのメンバーなら多分大丈夫だろう。

僕はガイラスの消えた森に足を踏み入れた。

Gランクの天才 6

……何故先ほどの狙撃手はカイルやリース嬢を狙わなかった？
馬車の中にいたカイルはともかく、リース嬢は狙えたはずだ。

「……いや、あのメンバーで銃撃を避けられないのはフィーくらいか。研究所に引き籠って、戦闘の経験が浅いフィーを除いて皆、気を読める。僕だって出来るんだから、彼らなら完璧に避けるにしろ防ぐだろう。」

狙撃手は何を思っただけでフィーを攻撃した？

魔術師が邪魔だった？ だが、わざわざ存在を知らせてまでやる事か？ いや、本当は別の意味が……。

あつたのか。

「……?!」

そして誰もいなくなった、というお話がある。

一人が消えて、二人が消えて……最終的には誰もいなくなるのだ。その手のタイプの話には、必ずと言っていい程、消えた人物に裏切り者がいる。

死ぬ事によって、自分の存在を容疑者でなくそうとする。

僕は、これもそんな感じだと思っていた。

僕がガイラスを見つけて、適当にぶん殴って縛り付けて、裁判してもらえば良いと考えていた。

だが、そうじゃなかった。

「……ガイラス」

ガイラスが死んでいた。

頭を鈍器で殴られたようで、頭が陥没し血を流して、ガイラスは

死んでいた。辺りに争った形跡も無く、背後からの一撃だった事が伺える。最後まで槍を離さなかったが、ランクBの男の死体としては、どこかむなししいものがあつた。せめてもの救いは、即死であつた事だろう。

ガイラスを殺した犯人の凶器は、重量のある鈍器。一撃で死んでいなければ、何度も何度も殴られる。そして地獄を彷徨つた事だろう。

と、僕の足が何かを踏んだ。
それは???線。

「???ッ!」

一瞬のうちに茂みに飛び込んだ。
次の瞬間、ガイラスの身体が爆発した。
木っ端みじんに吹き飛んだ。

軽薄な男だった。よく僕に噛み付いてくる、あまり好きじゃないタイプの男だった。むしろ嫌いだったよ。
だが、こんな死に方はないだろ。
戦士としての誇りなど微塵も無く、無惨に散つた命。

???ああくそ、何を感じ傷に浸っているんだか。任務はまだ終わってないんだ。

ガイラスをその場に残し、僕はカイル達の元へと駆け出した。
ガイラスが、殺害された。なら、もう答えは出ている。
さらばガイラス、お前の敵は取れないかもしれないが、お前が化けて出ないような結末は用意してやる。
それと。

「裏切り者には報復しなくちゃな」

僕は憎悪と狂気で口元を歪ませた。

僕はさ、裏切りが大嫌いなんだよ。前世の死因もそんな感じだし、この世の表向きの死因もそうだ。

だから復讐??しなくちゃ。

奴が何を思っただけで裏切ったのか僕は知らない。いや、最初から仲間ではなかったのか。最初から、カイルとリースを殺す事を考えて行動していただけだろう。

最初の晩こそが、奴の動ける最高の日だった。焚き木拾いや不寝番、そこで誰かを殺害する予定だったのだろう。ここでガイラスを殺したように。そうだったら僕だろう。自分で言うのもなんだが胡散臭いからな。……もしくは、全員か。

だが、僕が睡眠剤を投与した所為で、実行出来なくなった。そして強攻策として、魔物とあの狙撃手。

協力者がいるのは、出来れば知らせたくはなかっただろう。

この世界の銃は、不意打ちにはびったりだが、それだけで戦うには無理がある。

気、と呼ばれる物が感知されるのだ。銃での攻撃は、殺気を伴うため察知されやすい。

切り札、に近い物がある。

どうやら、奴も相当焦っているようだ。

急がなければ。さっきの爆発で、あちらも動きがあったはずだ。

裏切り者??、ラングに報復を。

Gランクの天才 7

「ラングッ！！ 何故だっ！？」

走って戻ると、シュイがカイルを庇うように、ラングの前に立ちふさがっていた。爆発に気を取られて、不意をつかれたのか、他の二人は倒れふし、リース嬢が二人を守るように立っていた。

シュイの大剣、ラングの盾。

どちらも異様に巨大な武器だ。その戦いも、壮絶なものだ。

シュイは自分よりも大きな剣だと言うのに、軽々と振り回し、巧みな剣術を繰り出す。伊達にランクAではない。だが、彼も何らかの攻撃を受けたのか、どこことなく動きにキレがない。

対してラングは、その大きな盾で自分の視界を狭めていると言うのに、シュイの攻撃を全て防ぎ切る。その戦い方は経験則や長年の勘と言った所だろう。……ガイラスもまさかラングが裏切るとは思わなかっただろう。僕だって、あまり信じられない。

剣と盾がぶつかり合う中、シュイとラングもぶつかり合っていた。

「何故？ 頼まれたからに決まっているだろう」

「ギルドの掟に反するんだぞっ！？」

「ギルドなど、金を稼ぐために属しているのに過ぎんよ」

剣と盾がせめぎ合い、体格的に劣るシュイが吹っ飛ばされる。が、シュイは宙で回転し、難なく着地した。

ラングの言い分は、僕に近い所があるようだ。

「簡単な任務だったぞ。他国の話が聞きたいと護衛達を酒場に呼んで、酒で酔わせた後首を切るだけだったからな！」

それを聞き、リース嬢の顔が青ざめる。そして、リース嬢は怒りに顔を赤く染めた。

ここまで目立って気に病んでいる様子はなかったが、やはり悲しんでいたのだろう。それを馬鹿にしたように話すラングに、少なからず怒りを抱いているようだ。

それを知っていたから、僕らはあえて何も触れなかったのだが。

「金に踊らされたか！　ラングッ！！」

「この世は金と知恵だ！　若造が！」

ああ、これはまずい？？、僕がそう思った時には、もう遅かった。シュイとラングが真っ向からぶつかり合う。

二人の攻防はほぼ互角だった。だがそれは、シュイの速度重視の剣とラングの筋力重視の盾が釣り合っていたからに等しい。

真っ向からぶつかり合えば？？、

「かはっ！」

シュイが力負けして先ほどより強く吹っ飛ばされた。さらに剣を落としてしまっている。致命的だ。

だが、ラングはそれに追い討ちをかけない。

それもそのはずだ。ラングの任務は、カイル達の殺害なのだろうから。

ラングはシュイを吹っ飛ばした勢いを持って、カイルに襲いかかる。鈍器、盾で殴り殺すつもりか。

リース嬢が聖剣レイリースを構えるが、あれは重量系と対するに是不向きだ。例え盾を切り裂けたとしても、その勢いを殺す事は出来ない。それにラングの盾は分厚く、盾が切れてもラング自身には到達しないだろう。そうになると、リース嬢も押し倒される。

まずい。

だが???ここしかない!

僕は右手に持っていたそれに魔力を籠め、ラングに投擲する。

「っ!」

死角からの投擲だと言うのに、ラングは反応してみせた。
タツクルの勢いを止めず、振り返りながらそれを盾の中心で弾くように構えた。

……さすがラングだ。これなら、弾いてすぐにでもリース嬢を押し倒し、カイルを殺せる。見事だよ。
けど、終わりだ。

「ッ!?!」

ラングの声にならない叫びが聞こえた気がした。
ガイラス、お前の武勇は語り継いでやるよ。

ラングの盾が、木っ端みじんに砕け散った。

『螺旋槍』。回転と振動により分子レベルにダメージを与える魔法具。

そして、ガイラスの形見。

それがラングの盾を木っ端みじんに砕いてみせた。
これで、お前の気も晴れたか?

「???うぐっ!」

螺旋槍は盾を碎くに留まらず、ラングの腕をも削る。

その痛みに、ラングの動きが崩れる。だが、一瞬で体勢を立て直しカイルに肉弾戦を挑む。巨漢のラングとひよろいカイルでは話にならない。一瞬で首の骨を折られて、カイルは死んでしまう。

「ぐっ！」

だが、その一瞬で十分だった。

不意に、ラングの動きが止まった。その首には、一本の剣が突きつけられている。

「一步でも動けば、首を落とします。……だから、手を引いてください」

そう、『戦姫』リース・フュリアスには、その一瞬で十分だった。ラング、護衛の殺害犯に突きつけた刃は、微かに震えているようだった。怒りで殺しそうなのを我慢しているように見えた。

最後の言葉は、彼女が優しい事の証明。いや、裁判長の娘だ。罪には罰、人を裁けるのは法だと考えているのかもしれない。

だが、これにて一件落着とはいかなかった。それでも全ては終わらない。

ズダーン！ と炸裂音が響き、鈴を鳴らしたような音が響いた。

「なっ！？」

聖剣レイリスが弾かれた音が鈴のように響いた。また狙撃手か！ 今度は武器を狙ったからか、殺気が無く反応出来なかった。

その一瞬の隙をつき、ラングは僕の向いの森に飛び込んで行く。かなり速い。

だが、逃がすかよ。

「レイさん!？」

僕は茂みから飛び出し、ラングを追う。リース嬢に驚かれたが、そんなもの知らない。奴は僕の手で、どうにかしてやりたかった。

森を疾走するが、ラングとの距離は離されるばかり。

ちっ、この身体じゃ、追いつけないか。

なら……、いつそ追い越してしまおう。

身体の構造、筋肉の一つ一つの動きを変え、バネのある動きで一気に加速。弾丸の如くラングを追い越し、僕はその進路上に躍り出た。

僕の姿を見てラングが驚いた顔をしたが、すぐに不敵な笑みを浮かべる。

渋い男だと思っていたが、何、随分と悪党臭い顔をしてくれる。

「……驚いた。追って来たのは貴様一人か。だが、追って来てどうするつもりだ？ 俺をカイル達に引き渡すのか？ Gランク風情が調子に乗るなよ？」

「調子に乗ってるのはアンタの方だよ、ラング」

「ッ!？」

不意に、ラングが驚いたような顔をした。

ああそっか、おっさんの体じゃアンタに追いつけなかったから、ちよつと内部を変えたんだった。それに伴い声も変わったし、キャラ設定など忘却の果てか。今更この姿にこだわる必要はない、か。

僕は魔法を解き、ラングと対峙した。

「??? なっ!？」

「アンタは色々勘違いしてる。Gランク風情？ あんたはそのGランクにやられたのをもう忘れたのか？」

決定打になったのはリースだが、そのお膳立ては僕がやったんだぞ？

アンタのご自慢の盾を破壊したのは、他でも無い僕なんだぜ？
だいたい、さっきまでの僕と今の僕はまるで別人なんだ。

？？つて、隠れてたから解らないか。

「調子にの？？ごぼっ！？」

リングを水球の中に閉じ込めた。

おお早い早い。やっぱりこの身体だと魔術も高速で使えるな。

今の僕は黒髪に黒い瞳だ。僕の本来の姿。おっさんの姿はいわば飯の姿と言える。あの胡散臭さは、実在のおっさんを忠実に再現したのだけど。

水球の中は踏ん張る事も出来ず、外から助け出されなければ脱出する事は不可能に近い。水球に捕われた驚きで息を吐いちゃったから、けっこう呼吸も苦しいんじゃないかな？ 口に水も入っちゃったし。

「さてと。一つだけ言わせてもらつとさ、別にアンタは間違っちゃいないよ」

戦争で人を殺せる理由は、命令されたから。
殺す理由ではなく、殺せる理由だ。

命令されたから殺しました、それは何も間違っちゃいない。
人間は全ての罪を受け止められる程強くはないし、世の中金だしな。

うん、別にアンタは間違っちゃいない。

だけどさ。

「間違っちゃいない。けどな、僕はそれが嫌いなんだよ！」

家族や友人、村を焼き払った帝国が憎い。復讐したい。

それを命令した奴か？ それもそうだ。

だが、それを実行した奴の方が僕は許せない。

他人に命令されたからやりました？ でも死ねと命令されたら死なないんだろ？ 自分のためにしか生きれないんだろ？

僕はさ、そういう醜い人間が大嫌いなんだよ。

間違っていることに、間違っていると言える人間を僕は知っている。それ故に、それが出来ない奴が僕は嫌いなのだ。

ああ、僕が間違っているのさ。

人間を根本は素晴らしい生き物だと思っている、僕が間違っているのさ。

人間は間違いなく醜い生き物だろう。自分のことでなければ、簡単に責任転嫁する醜い生き物さ。

それに納得出来ない僕が間違ってるんだろ。

いいぜ、僕が間違っているのを認めよう、受け止めよう。

「だから??? な?」

水が沸騰し、水球改め熱湯球の中でリングが暴れる。

だんだんと赤くなって行くリングの体を、僕は冷やかな目で見つめていた。

僕は逃げもしない。その罪から逃れようとはしない。復讐は受け入れよう。

だが、死のうとは思わないな。
それに???。

「……うえ、気持ち悪い」
「???げほっ！」

相手を殺そうとも思わないけど。

僕は熱湯球を解いた。不意に地面に落とされたリングが呻いているが、そんなもの知ったこっちゃない。でももう十分かな、やってるこっちが気持ち悪くなって来た。僕の復讐とリングは特に関係ないし、所詮これは復讐の予行演習だから。

本言つと、別に見逃しても良かった。ただ、命令されたを理由にする奴が僕は嫌いなだけだ。これは父さんと母さん、それに彼の影響だろう。

家の規律を破り、幽閉された母さん。法を犯し、母さんを助け出した父さん。

そして、命令に背き、魔王を助けた勇者。

「……甘いよな、僕」

間違っていると思える事に間違っていると言える、そして行動が出来た彼ら。僕はそんな人達の中で育ったから、それが当たり前だと思っているけれど、実際はそんな綺麗な話はないんだよ。

僕は人間が大好きで、それ故嫌いな奴は大嫌いなんだ。そして嫌いな奴が大半なのだ。

でも、僕が嫌いでも、誰かは好きでいてくれるんじゃないかな。

好きな人を失えば、それは凄く悲しい。

だから、僕は殺さない。

復讐はするさ。

死にたくない奴には殺してくれと泣き叫ぶような地獄を。

まあ、死ななきゃ治らないような腐った奴はちゃんと殺す。その変はちゃんと弁えているつもりだ。

人を裁けるのは人で非ず、法に在りなどというが、そんなもの知

らない。復讐は残された者の正当な権利だろ。

と。

ずどん、と銃声が響き。

「あつ……」

ぱーん、とラングの頭が爆ぜた。

べちゃべちゃと、熱い血液が僕に降り注ぐ。ネバネバとした液体が、僕を汚す。何も言わない目玉がころころ転がり、そして僕を見上げた。

お前の意志なんか関係ないんだ、死ぬべき奴は死ぬとでも言いたげな目玉。

口封じされた。

「……くそっ」

口でだけ残念そうに僕はした。心の中は、酷く冷めていた。

あつそう死んだの、と。

ああ、僕は本当に狂っているな、いい感じに魔王になりきれてるな。

人の命がどうだ講釈しといて、全然悲しくないもの。

「……口封じされました。ガイラスも、死んでいました」

血まみれで戻った僕は、開口一番そう告げた。

リース嬢とシュイが剣を突きつけてのお出迎え、なかなか怖い物があった。

「……そうか。とりあえず、拭きなさい」

カイルがそう言っ僕にタオルくれるが、気持ちだけもらって、魔術で水球を作り、頭から被った。

頭、冷やそう、僕。

水球を大量に作って、どんどん上から降らす。目に水が入るから周りは見ないけど、きつとどん引いてる。別に良さ、どうせこれつきりだ。

よし、頭が冷えた。……寒くなつて来た。

最後に、温水を降らせて??これで血は落ちただろう。

「はい……」

「すみません」

タオルが差し出され、僕は今度は受け取る。

リース嬢だった。

目が赤くなっており、泣いたのだと理解した。どうやら、ガイラスが死んだのはラングが裏切った時に知ったらしい。

旅の最中は気丈に振る舞っていたが、本当に優しい人だったのか。人の死に泣けるなんて、なんていい人なんだ。

決意が固まった。

及ばずながら、僕はあなたの役に立ちましょう。

今夜、全てを終わらせます。

Gランクの天才 8

深夜、私は起きていました。

場所は変わらず、今回は結界も張っていません。

ですが周りの皆はぐっすりと寝ています。薬でも盛られたように。昨日のようにぐっすり。二人の人数を減らして。

私達が狙われた理由は、簡単です。

お父様を妬ましく、邪魔に思った者。私を妬み、欲した者。その二つの思惑が重なり合い、今回の事件が起こりました。

裁判長であるお父様に賄賂が贈られて来た事があります。思えば、それが事件の始まりでしょう。お父様は当然のようにそれを受け取らず、それを贈って来た貴族に忠言をされました。けれど、それが癪に障ったようです。

平民の分際で、お前は言う事を素直に聞いてれば良いのだ！と。アイカシア国は優秀な人材なら平民も貴族も関係なく登用しますが、それはまだ始めて間もないです。丁度軋轢が生まれる時期でしょうか。

私はアイカシア国の兵士です。お父様が法で人を守るなら、私は力で人を守る。魔物や争いから法で人は守れません。それが私が戦いに身を投じる理由です。

現在、国はどことも戦争をしておらず、兵士とはいえ、冒険者とやっていることは変わりありません。依頼があれば魔物や盗賊を斬りに行く、という仕事です。

ですがいつの間にか、私は將軍と呼ばれる立場になっていました。発言権が強くなり、私自身が依頼をこなすことも減りました。そして、どうやらその地位を妬まれたようです。望んで手に入れた訳で

もないのに。

貴族上がりの武官である人達が、私が齒牙にもかけなかったのに苛立ち（というのも、彼らの視線がいつも私の身体を舐め回すようにみていたからですが）、ねちねちと嫌みを言って来る日が続きました。平民出の私が高官職についているのを好ましく思っていないようです。

そんな内情に嫌気が指した私が、今回の観光を提案しました。そして、気のあう仲間達とお父様を連れて観光に来てー！。仲間達は皆殺されました。

……どうして、こうなったのでしょうか？

私は、何も悪い事はしていない。それなのに、私のせいでたくさんの人が死んだ。今日も護衛の人が二人も死にました（一人は刺客でしたが、一人の死に変わりはありません）。

もう、終わらせましょう。これ以上、無関係な人を誰も殺させはしません。

黒幕は国内に戻って、きちんとお父様に裁いてもらいます。

だから私は、この事件の実行犯を捕まえます。

風が金髪を撫でました。頃合い、でしょうか。

私は聖剣に手をかけ、立ち上がって馬車から少し離れます。そして、

「いるんでしょう？ 狙撃手さん。いえ、暗殺者さんですか」

夜の闇で恐怖感を生み出す森を睨みます。それに気圧されたのか、がさがさと茂みが動きました。

「……………」

茂みが蠢き現れたのは、フィーのような黒のローブに身を包み、フードを目深に被った人物でした。性別は顔も体格からも解りません。

黒の大きめなローブで、裾に手が隠れていて獲物も伺えません。聖剣レイリースを抜き構えます。白銀の刃が闇夜を照明のように照らしますが、やはり皆はぐっすりと寝ていて起きません。起きれない、と言った方が良いかもしれません。

「……………」

暗殺者さんは何も言わず、右手を振りました。次の瞬間には、その手にナイフが握られています。サバイバルナイフのような、凶刃が見えます。さすがに、近接戦闘では銃は使わないのでしょうか。いえ、それとも切り札のつもりですか。

「はあっ！」

攻撃は、私から仕掛けました。刺突から始まり、横薙ぎ、斜め上に一閃、そこから袈裟切り。その連撃を暗殺者さんは華麗に避けて行きます。さすがに、この剣相手に受け止めるなどはしませんか。

「っ！」

けれど、このままでは劣勢なのは間違いありませんよね？ あえて大振りの横薙ぎを繰り返します。相手が間合いを取ろうと後ろに飛ぶのもあえて追尾せず、こちらで距離を離します。距離にして二十メートル弱。さあ、これで切り札も使えるんじゃないでしょうか？

思った通り、ナイフを持たない左手が上がります。けれど、これは予想外です。

「拳銃……」

間違いなく、あれは拳銃。連射が可能な、近代的な、あまりにも近代的な武器。つと、思わず思考が傾きました。

引き金に指がかかり、一切の躊躇無く引かれた。

あえて切り札を出させたのは、この戦いがどれほど無意味か悟らせるため。切り札が効かなければ、この勝負に相手方の勝ちはない。優秀な暗殺者ゆえ、単身での襲撃。それとも、単にこの事件の黒幕がこれ以上雇えなかっただけか。

まあいずれにしろ、これでおしまいでしょう。

銃弾は直線的にしか飛ばない。大きなカーブを描いたり、直角に曲がったり、障害物を避けたりはしない。

この聖剣レイリースは、別に切れ味が良い剣ではない。熱量が莫大な剣だ。そう、銃弾にほんの少し擦らせるだけで、銃弾を溶かすくらいの熱量を持った剣。

「っ！？」

じゅわつと、銃弾が赤い光と共に地面に落ちた。

驚きながらも、懲りずに何発も放つ暗殺者さん。何度と無く撃ち落とす私。

おしまい、です。

「????？」

銃弾が尽きたのか、暗殺者さんが背を向けました。ああ、丁度良
い。

「かはっ！」

身体能力を上げて突進し、押し倒します。そして抵抗出来ないように、右手と左手を押さえつける。

倒れても未だに取れないフード、正体不明、しかし脅威でなくなつた暗殺者。その耳に口を近づけ、私はこう話しかけた。

「隷属の首輪なんて、お洒落な物付けてるね」
「ッ!？」

びくりっ、と相手の身体が震えるのが伝わってきた。
ボーイソプラノの声が、そう襲撃者に語りかけたのだ。

おっと、またやってしまったか。どうやらまた声が元に戻ってしまっているようだ。いやはや、身体能力を上げるとどうにも魔法が緩んでしまう。

今更なので私は???いや、僕は魔法を解き、襲撃者のフードを取つた。

魔法。

僕は変化する魔法を使えるのだ。

それも、体格や身体能力のみならず、才能、経験、思考といった部分までも。

「魔法使い……」

どこか忌々しげに呟いたのは、海のような深みの有る蒼い髪の少女だった。その少女の首には、金色の首輪が付けられている。

魔法具、隷属の首輪。

『法則1、付けられた者は付けた者の命令に、意志と関係なく従う。法則2、付けられた者は命令を実行中、その意志を失う事はなく、身体だけが命令に忠実に動く。』

法則3、付けた者の意に介する行動をとる事は出来ない』

という魔法具だ。

なるほど、この隷属の首輪を彼女に付けた奴が魔法使いで、彼女の恨みの対象と言う訳か。いやはや、厄介な魔法具を作った奴だよ、本当。

どこことなく感情を失った少女だ。

恐らく、幼い頃にこの首輪を付けられ、暗殺者となれ、とでも命令されたのだろう。彼女は意志と関係なく、身体が勝手に暗殺者になるべく生きて来たのではないだろうか。

けれど、僕はこの少女がとても優しいように思えた。

その目は充血しており、一睡もしていないような隈がある。そして今にも泣きそうな顔をしていたのだ。きっと、泣いていたんではないだろうか。

意志に関係なく、意識を保ったまま人を殺して来た少女。

彼女の恨みがましい目つきに、僕は笑みを浮かべる。

「助けて上げようか？」

驚いたような、惚けたような顔を少女がした。凄く顔がニヤ付いた。やばい、おっさんの思考が僕に染み付いて来ているぞ。

これ以上無駄な襲撃をされないために、僕は返事も効かずに首輪に手をかけた。

ビリビリと電流に似た物が僕の手を焼き切ろうとするが、それは僕の手には吸い込まれるように消えて行った。僕は手に炎を宿し、その首輪を焼き切る。

どうせこの首輪は、魔法がかかっていなければ唯の首輪だ。外さ

れないように反撃の魔術を仕込んだようだが、魔王の僕にはそんなもの関係ない。

全ての魔力を扱う事象は、今の僕には効かない。レイと言うおっさん状態やリース嬢に化けているときは効くけれど。

「さて、これで君が僕らを襲う理由は無くなった。それでもまだ命令に従うか？ その時は仕方がないね」

「えっ……」

僕は立ち上がり、彼女を自由にしておける。彼女は不思議そうに、先ほどまで首輪の付いてた所を撫で回していた。……その役目、僕がやりたかった。ネコは好きなんだ。

夜明けまではまだあるが、早めにおっさんの姿に変わっておく。

「さあ、お行きなさい。あなたは自由ですよ」

と、胡散臭いおっさんの声で、あまりの出来事に呆然としている彼女にそう言った。普通、この手の魔法具は一度使われると逃げる事は出来ない。何せ、使った本人もどうしようもない魔法だったりするのだから。

そう言えば、彼女が僕の正体をばらしたら、このおっさんは使えなくなるか。まあ、その時はその時だろ。

僕はのんびりと皆がいる馬車の方へと向かって行った。

僕の使っている魔法は、複写魔法。

『法則1、変化出来るのは実際に接触した人物のみである。』

法則2、変化は、肉体を完全に変異させ、その人物の肉体的特徴に全て完璧に変化する。

法則3、変化した人物の人格を、仮想人格βとして構築し蓄積する。使用者の判断時に採用する事が可能である』

これが僕の持つ魔法である。

完璧にコピーする能力だ。つま先から脳みそまで、しわの数から爪の長さ、髪の毛の本数までもを完全にコピーする。完璧なクロールを生み出す能力と言っても過言ではない。何せ、変化した人物の人格すらもコピーするのだから。

仮想人格β、これは人間の内情を全てコピーする。その人の記憶、経験、癖、思考など。

だから僕がリース嬢に変化しているとき、リース嬢の過去の話を読んでも僕はちゃんと受け答えが出来る。癖の一つ一つまで完璧にこなしてみせる。今回、事件の考察をしてくれたのも仮想人格βである。

勘違いしないでほしいのは、全て仮想人格βが思考し、自分ならこうしますという答えを出してくれるからであって、別に僕が変化した人物に乗っ取られると言う訳ではない。

だから、その人物だったら絶対にしない、という行為をする事も可能な訳だ。全ての行動の決定権は僕に有る。仮想人格はあくまで仮想、身体を動かす権利はない。

この魔法の恐ろしい事は、変化した者の才能と呼べる部分をもコピーする事が出来る点だ。身体的能力の全てコピーである。もしもこの状態で僕がリース嬢と戦ったら、それは凄い戦いになるだろう。自分ならどのように立ち回るか思考してくれて、それに身体が付いて行く。まさに、自分との戦いが出来る訳だ。

この魔法を使って、僕は魔王ではなく、おっさんとしてギルドの登録されている。僕を助けてくれたおっさんだ。なかなかに身体能力も高く、魔術の才能もあり、本当に万能な身体だ。僕は好き好んで使っているが、顔と声がどうにも駄目だと最近気付いた。

ギルドでは僕の正体がばれるまで、まだしばらくこの身体を使わせてもらおう。

おっさんであれば、突然消えても不思議がられるまい。

エピローグ

後日談。

あの後、僕たちは特に問題を起こす事無くアイカシア国首都、アカシアに到着した。やはり黒幕連中は、あの少女とラングを雇うのが精一杯だったのだろう。

ちなみに、調べた所、あの少女は現在行方不明となっているようだ。復讐でもしているのか、自由な人生を満喫しているのか定かではないが、暗殺者稼業はあまり好きじゃなかったようだ。僕としては後者であってほしい物である。

カイル達とは首都の彼らの屋敷前で別れた。

カイルには今回の事件の黒幕らしき人物を伝えておいた。一応、少しだけ彼とはつながりを持っておきたかったがある。あと、アイカシア国は少しだけ土台が脆く、優秀な人材をさつさと手放すんじゃないかなと思っているのもあったが。

一応僕、魔王だからね。いずれ作るかもしれない王国に優秀な人材が欲しいのだ。

「レイさん、あの……うちの屋敷で働きませんか？」

というリース嬢のお言葉をを丁重に断り、報酬を受け取りギルドへと向かった。リース嬢と一緒に屋敷で働けるのは嬉しいが、それで迷惑はかけられない。それに、美人って裏がありそうで怖い。いや本当、なんでそんな事言ってくれたんだろう？ 仮想人格βのリース嬢に答えてもらうのは最低だと思うので、未だに僕の中でもそれは疑問だ。

ガイラスの死体は、彼の名譽を考えその場で葬った。仲間裏切られたとはいえ、あまりにも情けない死に方だったからだ。といつても、爆破されてしまったので、結構適当な埋葬になったが。今思つと、あの鉄の塊はもしかして……手榴弾？ 僕以外にも、前世の記憶持ちがいるのかもしれないな。

ラングの死体は、場所が解らないのを好都合と考え、そのまま放置した。結局、彼が何を思つてその依頼を受けたのか、僕らには解らなかった。そのため、同情する事も、深く恨む事も出来ず、なんだかもやもやした物が残った。

「……レイさん、色々助かった。ありがとう」

ギルドで任務完了の旨を伝え、すぐに宿屋に向かおうとする僕に、シュイが話しかけて来た。

「礼は要りませんよ。僕たちは助け合う関係を結んでいた訳ですから。それぞれがベストを尽くしただけでしょう」

僕の台詞にシュイが苦笑し、やっぱりおっさんだな、と謎の台詞を吐いた。

飄々とした態度、これがレイというおっさんのキャラなのだ。

「では、またいつか会える日があれば。僕は敵としては現れませんので」

と格好付けて去ろうとした途端、ぐいっと袖が引つ張られ、危うく転びそうになった。誰だこの野郎！ 僕は全然寝てないんだ！

眠たいんだぞ！　このままここで寝るぞ！　傲慢じゃないが、一度寝たら朝まで起きない事に定評があるんだ！
と、内心で怒ったのだが。

「レイ……、ありがとう」

フィーがぼそりと呟いた言葉で、それはどこかに消え去ってしまった。

呟きの後、フィーは何故か胸を張って言う。

「いつかあんたを仰天させるような魔術を見せてあげるんだから！」

いやいや、今この瞬間、僕はものすごく驚いたよ。

フィー、ツンデレだったんだ。

「やれやれ、今回は妙に疲れたな」

夜中、僕は首都で一番高い宿に泊まった。フィーやシユイは知らないが、どこか別の所に泊まっているはずだ。フィーはリース嬢の屋敷にでも泊まっているのではないだろうか。仲良かったし、あの二人。

看病したがるリース嬢に追い回されて僕の後ろに隠れるフィー。

おっさんに近づけずに困惑するリース嬢、何やら誇らしげなフィー。どさくさに紛れて、王子様気取りでフィーを抱きしめる僕、幾ばくかの沈黙の後殴られる僕……とか色々あったような無かったような微妙に背の高いおっさんの姿から小柄な僕の元の姿に戻り、大きなベッドに寝転がる。窓から差し込む月明かりしかない部屋のため、僕の黒髪は闇夜に紛れる。そのためか、この国では黒髪が嫌われている。

黒髪自体は少なくないのが現状だが、帝国のお偉いさんの誰かが、魔王は黒髪である、などと言ったもんだから、僕としては魔法で変化して出歩いているのだ。迷惑極まり無い。いや、僕が魔王なのは真実だけど。

そのためか、国民の大半が黒髪であるニルベリア皇国と帝国は仲が悪い。魔王の黒髪説は、実のところニルベリア皇国に攻め入る理由にしたかったのではないかと僕は思っている。

今回の任務の報酬は、金貨三十枚、日本円にして三千万円の仕事だった。宿屋は銀貨三枚、三万円での宿泊である。

ちっ、安いな。宿屋の値段じゃなくて、報酬がだ。

依頼内容と見合っていると言えれば見合っているが、これじゃ同志に顔向け出来ない。あいつ等は白金貨で報酬を得ているんだ。

それもこれも、僕のためなのに、その僕の報酬が一番少なくてどうするよ。

といっても、『王が自ら働くな！金を稼ぐのは俺等の役目だ！そして老後は楽させろ！』とか言い出しそうだ。まだ僕は王になっちゃいないと言うのに。

と。

僕以外の気配が、部屋から感じられた。

いやはや、今日は僕に取っては厄日かな？

「……どうしたんだ？僕に何か用？」

それは、あの暗殺者の少女だった。

行方不明と聞いていたが、まさか僕の後をずっと付けていたとか？ ストーカーか、別に嫌いじゃないな。そういう一途な子は好きだよ。

え、違うつて？ そりゃ残念。

「……………」

ベッドで横向けで寝ている僕の方に、無言で近づいてくる少女。何か言ってほしい。僕はどんな態度を取れば良いんだよ。

言葉にしくなくても伝わるのが一番だけどさ、結局言葉にしくちゃ伝わらないんだよ。言葉にする事が大切な。恥ずかしくても。

はい、だから何か喋って！

「……………」

という僕の心の中の叫びでした。

ほらね？ 何も伝わらない。

少女が、僕の前に立ち、僕を見下ろした。ぞくりと、身体が震えた気がした。

今度はしゃがんで、僕と視線を一致させる。どきりと、胸の鼓動が高鳴る。

僕はその少女の目を、真っ直ぐに見つめ返す。良く言うじゃない、目の動きで何を言いたいのか解るって。僕？ 全然解らんよ。精々、嘘をついているかいないかだね。この状況では何の意味もない。

無言で見つめ合う僕ら。

少女の水色の瞳の中に、僕の顔が映っている。なんか男らしくない、見るからに弱っちい顔だ。それに僕は身体も小柄だし。だから背の高いおっさんに化けるんだけど。まさか、背の高さまで変えるとは思わないだろ。

そんな事を言っても、僕は公式記録上では死んだ事になっているんだけど。

この魔法を使って、親友が僕に成り代わって死んだから。

思わず、思い出し涙（？）が零れそうになった。僕は弱虫だよな、僕の姿のままじゃ、すぐに泣いちゃう。涙腺が弱いんだ。

でも、それが僕が父さんと母さんの息子である証明みたいな物だ
と思っっている。前世の僕は、とにかく泣かなかったから。

「……どうしたんですか？」

と、不意に声がかけられた。

それは、酷く優しい音色で、何故だかとても心地よい響きだった。

「ちょっとね、嫌なこと思い出して……」

「……そうですか」

訂正。全然優しくない。むしろ氷河期のように冷たいよ、この子の声。彼女の名誉のために良く言うなら、鈴を鳴らしたような声かな。風鈴みたいな感じ。悪く言うなら、氷のホテルで響くかき氷の皿の音。どうしてかあの皿の音は、酷く冷たく感じる。

興味がわいたので、彼女の容姿を注意深く観察してみる。

……ふむ、あの時は気付かなかったが、この子もかなりの美人だ。可愛さとクールっぱさが入り交じった、どこか大人びた少女。笑えば年相応の可愛さだろうが、無感情なので大人っぽく見えるのだ。

「……………」

再び沈黙。息苦しい夜。別に熱くはないんだけどさ、寝苦しいぞこの状況。いや、寝たら寝たで、永眠になる気もする。

……まあ、いつか。

なるようにしかならないよ、人生は。

僕がここで死ぬようなら、僕って人間はその程度の人間だったってことさ。

生きる努力はするけど、努力の必要性がない場面ではしないよ。

じゃあ、おやすみなさい。

目が覚めたらブルースクリーンだった。

ワット！？ 何が起こった！？ 強制ログアウト！？

否、少女の髪が目の前にあった。

どうやら、一緒のベッドで寝ていたようだ。

なんだ、そんなことか……え？

僕は寝惚けると言うことがない。だからこれは、明らかに混乱。

朝っぱらから状態異常。いや、宿屋で休めば回復するはずーいやいや、落ち着け僕、何の話をしている！？

ちらりと僕は視線を下げると、可愛い寝息を立ててらっしゃるお嬢さんの、これまた可愛い寝顔が。

さらに視線を下げると彼女の腕が僕を抱きしめており、胸のあたりに柔らかな感触が。

さらに下げると、足と足が絡み合っているじゃないか。白い生足がーあ？

よく見れば、彼女の格好は下着に、薄手のシャツと言う格好だった。

ふむー、僕は抱き枕にされていたようだ（一行前についてのコメントはしない）。

「え？ あ、え？」

「うう……」

僕が拳動不審になり、逃げ出そうとした所、彼女の抱きしめーもとい締め付けが強くなった。だ、脱出不可能です大佐！ 気持ちよくて良い匂いがしてなんか柔らかくて、僕の理性が無くなりそうです！

「???ッ!」

どうにかしなくちゃ。

とりあえず、理性があるうちに行動してみた。

少女の頬にキスしてみた。

うんとね、王子様のキスでお姫様が目覚めないかってね？

理性は無くなっていたようだった。

「うつ？」

と頬が濡れたのが気に触ったのか、少女がゆっくりと目を開けた。ぱちりと開かれた時には、僕は燃え尽きていただろう。寝起きが良かっただけだったとしても、見られていたと思って爆死していただろう。

「お、お目覚めかな？」

「……………」

無言で、こくりと頷く少女。

うむ、意思の疎通は可能なようだ。

でも離してくれないのは何でかな？

「えっと、とりあえず、どうしたの？」

「……………」

また無言。言葉にしなくちゃ、伝わらないんだよ。

と、そんな僕の心の声が聞こえたのか、ついに少女が話し出した。

「……あなたが、私を助けてくれた」

いや、それどうしたのは僕じゃないかよ。君がどうしたいのかを聞いているんだ。いや、どうしてこんな事をしているのかも聞きたいけどさ。

胸がドキドキ、この鼓動が君に伝わりませんように。

「……私は、あなたに感謝してます。……でも、恨んでもいます。どうやって生きて行けば良いのか、私には解りません。……責任、取ってください」

甘ったれんじゃないよ！　それがどれほど自分に対して無責任な発現だか解ってるの！？　後悔するよ！

と、心の中で大反対。

「……責任って、君、僕の正体解ってるよね？　僕、魔王だよ？　魔王に責任を預ける君は、凄く無責任だ」

意外と口でも反論出来た。けど、口だけだった。

少女の瞳に映る涙に、僕の心は崩落していた。

「……私は、生き方が解りません。依存しなければ、生きられません。……だから、どう扱っても結構です。あなたと一緒にいても良いですか？」

ああわかった、いいよ。

でも一緒にいたい言っても、終始抱き枕みたいに抱きしめられても困るんだけど。これじゃあ僕動けない。

「……駄目？」

と小首を傾げる少女。

「駄目」

僕は断言してみせた。そして、間髪入れずに次の言葉を紡ぐ。

「君を一人の女の子として扱ってもいいなら、いいよ」

と僕は笑って答えた。

『動けないから離して』、と僕は言わなかった。代わりに、少し強めに僕から抱きしめていた。

後に判明した事だが、どうやら僕の理性は簡単に吹っ飛ぶようである。

「……こういう時、なんて言えば良いのかわかりません。……でも、あなたと一緒にいると、凄く……胸が熱くなります。それが、心地良いんです」

そりゃ抱き合ってるからね、僕の熱が移ってるだけじゃないか？心地良いとかは知らない。僕はちよつと久々の人の温もりに泣きたいだけなんだ。それが愛情と言うのなら、僕の胸のムカムカは、そういうものなのかもしれないけど。

「……なんだよ、生きるのに一番大切な物は、解ってるんじゃない？」

首を傾げる少女に、僕は答えを教えた。

「幸せだよ」

僕に取って、実は復讐なんて二の次だ。

僕を助けてくれた皆が、それを望むとは思えない。

だから僕は死んでしまった彼らの分だけ、人を幸せにしようと思ってる。

それが僕の世界の破壊。不幸な人の世界の破壊。

だが、僕は魔王だ。きつとマトモな人間にはならないと思う。人の気持ちなんてさっぱり解らないし。

だから??。

手始めに、僕が幸せとやらを知らなきゃ駄目かな。

と言う訳で、この目の前の女の子に精一杯甘えさせてみた。

エピローグ（後書き）

ここからはあとがきです。本編とは関係のない話がだらだら続きます。

興味のない方、そういう話は嫌いな方は、どうぞ読み飛ばすなり、ブラウザの戻るボタンをクリックしてください。

これにて、例えば仮の魔王様、序章が終了です。

……予想以上に話数が伸びてしまいました。反省します。その割に文字数が少ないのも、反省ですね。

今回の物語、私としては色々チャレンジ精神で書いた作品です。

例えば、戦闘が短い（私の作品全般そうかもしれませんが……）。

世界観をあまり語っていない（国の名前とその内情程度）。

魔法がチート（他のシリーズでは『能力』と表記していたりもします）。

上記の二つは、単純に私が読んでいても読み飛ばすので、書くスキルも未熟なのだから、いつそのこと短くしようとした試みでした。三つ目が、このシリーズ全般に言える事でしょうか。

私は、電子機器一般がどうやって動いているのかさっぱり解りません。

こういう理屈で動いているんだよ、と言われてもなんとなくでしか理解する事が出来ません。

パソコンなんかが特にです。

そのソフトを構築している言語と理論は結びつけられても、その下、ハードでどのような動きをしているのかがまるで理解出来ません。私のプログラムの理解は、言語を理論通りにすればとりあえずこういう結果を生み出す、という認識です。それをたくさん繋げて、ソフトを作っていると。

この物語で言う魔法とは、そんな感じです。

どういう現象が世界に起こっているのか解らないが、とりあえずこういう結果になる、という現象です。

本当、チートです。でも、それをただのチートでは終わらせないようにしようと思います。

『例えばシリーズを足して二で割った作品』の余剰分だったので、が、頑張って更新して行こうと思います。

次回はいつになるか解りませんが、次章

『純情な生け贄と黒のマモノ』、エピソードでまた何か語ろうかと思えます。

最後になりますが、感想・評価、とても自信になりました。

ありがとうございます。これから、よろしく願います。

プロローグ

僕がニルベリア皇国の巫女、アオイと出会ったのは、一人の呪いに掛かった人を助けるためだった。

ニルベリア皇国は、日本のような国だ。違いはいくつかあれど、その文化は日本にかなり近い。島国であり、天皇がいて、神社がある。米や味噌がある。僕に取っては心のふるさと言ってても良い。違いと言えば、神社にやけに権力があると言う事か。神様の力を借りて怪我や呪いと言ったものを治療する神聖術を使えるからだ。実際の所、あれは魔法に近いと僕は考えている。怪我は魔術で治す事は可能だが、魔法によって付けられた呪いは、魔術では治す事は不可能だからだ。魔法であるが弾圧されない神聖術を見ていると、物は言い様だと思い知ったものだ。

閑話休題。

あれは、僕が癒しを求めてニルベリア皇国のど田舎に行ったときの話だ。

呪い。それは、魔法によって付けられた特殊な傷。

それを治すには神聖術、もしくは希少な存在する薬でしか不可能だ。……表向きには。魔法には魔法で対抗する事ができ、その傷である呪いも消せる事が出来る魔法があるからだ。

田園風景が広がる田舎道を僕は歩いてきた。特に道を選ぶわけもなく、道が続く限り。少しばかり、考え事をしてきたのだ。

ハンバーガーが食べたい、と。

このニルベリア皇国に来てから一ヶ月程立ったが、ずっと和食。しばらくの間は、懐かしいと思って食が進んだが、そろそろ刺激が欲しくなって来ていた。

そろそろ別の国に行くか、じゃあどこの国にするか……などと考えていたのだ。田園風景が広がる田舎道を歩いていた、はずだった。

結果、道に迷った。

辺り一面、森。前と後ろに道こそあれど、どっちから来たのか方向感覚を失っていた。完全に迷子だった。

やべえよ、やべえ。見た目おっさんのくせに道に迷うとか、恥ずかしくて死にそう。はははは、どうにかなるさ、と仮想人格βは言っているが、いやそれどころじゃない。このおっさん見た目からじや、むしろ納得されそうだけど。

「……………」

と、森の奥から人の話し声が聞こえて来た。

助かった！

どうして森の奥からなのかは知らないが、そんな事考えている暇はない。

恥ずかしいのでいつもの胡散臭いおっさんスマイルを浮かべ、僕はさささと近づき声をかける。

「すみません、道に迷ったんです……………」

僕の声はどんどん尻すばみ。タイミングが悪いよ……。

女の子を担いだ山賊さん達だった。

「あ？ テメエ、何者だ！」

白いローブを着て手かせを掛けられた女の子。それを担いだリ―ダーっぽそうな男が文句を言って来た。

迷子です、とは言えなかった。もし言っただとしても、信じてもらえそうにない。おっさんじゃあ、迷子とは言えないし。

……よし、仮想人格βに任せよう。

「ご覧の通りただの旅人だよ」

「んな訳あるか！ テメエみたいな胡散臭い奴の言う事が信じられるか！」

ふっ、と笑みを見せる僕に、ぎゃーぎゃーと騒ぎ立てる山賊達。信じてもらえないので、次の嘘を吐く。真実が一番信じられなさそうな気がするの何故だろう。

「姫、あなたの騎士が助けに来ましたよ！」

「手ぶらの騎士がどこにいるか！」

「よしよし、お前等よくやった。後は任せろ。その女を置いて下がつてな」

「へいお頭？？って、巫山戯てんじゃねーぞ、おっさん！」

遂にノリの良かった山賊さん達も、腰にあったナイフを構える。どうやら何一つ信じてくれなさそうだ。

というか、別に僕があの子を助ける必要はないような。そん

な義務はない。そうだ、わざわざそんな危険を冒す必要なんてないじゃないか。

と言う訳で、

「じゃ、後悔するんだね」

僕は踵を返して、ゆっくりと歩き出した。

後ろで山賊達が呆然としているが、そんなの関係ない。女の子の安否も関係ない。

「て、テメエ！ 待ちやがれ！」

と、一人の山賊が追いかけて来た。

「お見送りですか？ ありがたいですねえ」

「巫山戯てんのかこの野郎！ ……いや、そうだ。お見送りだ」

突っ込んで来た男だったが、不意にニヤリと笑みを浮かべた。そして、ナイフを構える。

「テメエが地獄へ行くお見送りだよ！」

見られて生きて返せるか馬鹿が！ と、男が襲いかかってきた。馬鹿だな、僕相手に一人で来るとか？？手間が省けたよ。

「兄貴、始末してきやしたぜ！」

「良くやつ？？へぶ！？」

「兄貴！？」

僕は追って来た山賊に化け、兄貴に足払い。前にぶっ倒れる兄貴から女の子を奪い取り担ぎ上げた。

「テメエ、裏切ったのか！」

何故だか裏切り疑惑を持たれ、攻撃態勢に入られた。

おやおや、こいつはまだ僕があの子だと思ってるのか。

これで三人の関係が崩れては可哀想なので、僕はおっさんの姿へ戻る。

「いつ！？ て、テメエ、魔法使いだっただのか！？」

ご名答、僕は魔法使いさ。とんでもない化け物クラスだね。

にやにやと笑いながら、僕は女の子をしっかりと抱き抱える。

別に女の子の体柔らかいとか、良い匂いだなんて思っちゃいない。むしろ、ちょっと痩せ過ぎじゃないかと思っっているくらいだ。僕の目から見たら幼女だね。

あれ？ こっちの方がまずい事言っただけか？

「じゃあ、頑張っただけさ」

と僕は颯爽と駆け出した。駆け出してから気がついた。

「道聞きの忘れたよ」

「兄貴、大丈夫ですか？ 攫って来たのを攫われちゃったんじゃないですか」

「……いや、それで俺にどうしろと？ どうしようもないだろ。そ

れに、身代金は要求出来そうになかったからな」

「そうっすね、あんな屋敷に住んでるから金持ちかと思ったのに…」

…」

「何？　ここにそんな屋敷があるの？」

「何言つてんだお前。こつから東に行つた所に？？テメエ！」

道を聞くのを忘れたので戻つて来てみれば、良い話を聞かせてくれた。

身代金、ねえ。良い所のお嬢さんなのかな。

「報告ご苦労、ではでは」

「テメエ？？つて、何すんだ！」

「兄貴、止めてください！　あんな化け物、関わるのはよしましゅうや！　どうせ、碌な娘でもなかったんですし」

逃げる僕を追おうとする兄貴と呼ばれた男を、子分1が足止めしてくれた。うん、それでいい。僕なんかに関わると碌な事にならないぞ。

で、僕の肩で碌な娘と呼ばれた女の子が、泣いているように震えていた。

しばらく逃げて、まだ道に迷っていたので、不本意ながら女の子に道を教えてもらう事にした。道は道でも、獣道だけど。

担いでた女の子を下ろして、その手枷を取ろうと手を伸ばしたら、

「こ、来ないでください！」

ざざつと女の子が後ずさりされました。

……シヨックだった。

いや、まさか助けた女の子に引かれるくらい自分が胡散臭いとは思わなかった。

「私に近寄らないでください」

「いやいや、別にやましい事は何もしないよ？」

そう言っ、僕は女の子が被っていたフードを取る。こういう時は、目と目を合わせて話すに限る。っと、顔が泥かなにかで黒く汚れているじゃないか。可愛い声なのに、勿体無い。

僕はさりげなく、魔法を宿した手で女の子の顔を拭った。

「ほら、顔もつるつるじゃないか。だからほら、君の綺麗なお手てをおじさんに見せてご覧？」

言ってる事につながらない。どんな接続詞『だから』だろう。っていうかコレ、どこからどう見ても変態だぞ、僕。

そんな僕をきよとん、と見つめる女の子。何がオカシイんだい、言っでご覧？ おっさんの顔かい、それとも頭の中かい？
どっちもだね。

「……。こっ、ですか？」

と、差し出される手。じゃらりと音を立てる手枷。純朴そうな瞳。
え？ あ、そう。手、出しちゃうんだ。

「あ……うん、そうそう」

驚きながらも、当初の予定通り手枷に魔力を流して鍵を外す。
じゃらりと音をたてて落ちる手枷を、手みやげ代わりに拝借した。
持っ、ていてもしょうがないだろう。

「じゃあ、道案内してもらおうかな」

「はい？」

「君の家、どこにあるんだい？ 大層な屋敷らしいじゃないか。ちよつくら御呼ばれさせてもらうよ」

髭を撫で付け、最後には眼鏡を押し上げる。

……ううむ。仮想人格βに好き勝手やらせていると、僕の評判を心底落としてしまいそうだ。いや、最初から底辺から動いてないんだけどさ。むしろ悪目立ちしているよ。態度が『Gランクの天才』として。

いい加減、方向転換しないとまずいかな。今度から真面目に依頼を受けてみよう。やるからには本気で。幸い、まだそんなに悪名は轟いていないしね。

と、そんな心を改めようとしている僕に、女の子は言った。

「はい！ ぜひ来てください、私の騎士様♪」

とても可愛らしい（当時十三歳の）笑顔だった。

え？ はい？ 何それ？ さっきのコント、聞いてたの？ いや、あちらさんに見れば真面目にやってたのかもしれないけどさ。僕は何がなんだか解らなくて、仮想人格βに任せた。

「そんな可愛らしい笑顔、騎士を怪盗になさるおつもりですか？ お姫様」

「嘘つきな騎士様にはピッタリですね」

僕は少しびつくりして、それこそ凶星だと言わんばかりに引いてしまった。

そんな僕を見て、女の子はくすくす笑っていた。

くそ、幼女に笑われるとは何たる恥！ 驚かせてやる！
という子供っぽい理由で、僕は魔法を解いたのだった……。――

「……意外です。……カッコいいじゃないですか」

よく考えたら、僕はこの子の前で一度変化してみせていたじゃないか。

あまり驚かない女の子に、僕は自分の愚かしさを感じ取っていたりした。

「さあ、付いて来てください。お持て成し致します」

そう言つて、とことこ先に歩いて行く女の子。

そう言われて、僕はとぼとぼ後を追って行った。

そう言えば、僕をカッコいいって？ そんなお世辞？？聞き慣れてないから嬉しい。

「そう言えば、名前、言つてませんでしたね。私の名前はアオイです」

「僕は名乗らないよ。『Gランクの天才』なんて、俗では呼ばれてるけど」

褒められたのが嬉しくて……僕はアオイの住む屋敷の前に着くまで、おっさんの姿にならなかった。

ちなみに、結局名乗らされるはめにはなった。

――

これが、僕と呪われていた少女、アオイの出会いだった。
一人の呪いに掛かった人、っていうのはアオイのことだ。
呪いにかかって療養していた彼女が誘拐されたのを、偶々助けて、
ついでに呪いも解いちゃったと言う話。

それにしても……、今も昔も、僕は姿を隠す事にこだわりのない。
な。結構簡単に魔王の姿を曝してるよ。碌でもない理由で。

まあ、それもこれも、公式記録上では魔王は死んでいるからなん
だけどさ。

閑話休題。

そんな彼女との出会いから三年、前世では結婚出来る歳になった
アオイ。生意気で（無邪気で）憎たらしい（可愛らしい）餓鬼だっ
た彼女も、大人になったのか。

僕はそんな事を思いながら、新たなる依頼の地、ニルベリア皇国
へと旅立とうとしていた。

ブログ（後書き）

感想・評価を頂けると嬉しいです。

純情な生け贄と黒のマモノ 1

首無し磔貴族の護衛任務から数日後だった。

アイカシア国首都、アカシアのギルドの受付にて、受付嬢から伝言もとい、任務を頼まれた。

「うん？ 僕に依頼かい？」

「はい、そうです」

どうやら、二ナから僕宛に依頼が送られて来たようだった。

受付嬢は手紙を僕に渡すと、さも忙しそうに奥に引っ込んで行ってしまった。これは僕が引かれたんじゃないやなくて、手紙の内容を見ないように気を遣っていなかったんだと思いたい。

ちなみに、僕こと『Gランクの天才』に依頼するのはなかなか難しい。一つは、僕自身が連絡手段に魔宝石（魔石ではなく、一度きりしか使えない魔法を付加した唯の石ころ）を与えた場合。これは僕に直接伝わってくる。今回はもう一つ、ギルドの厳重な審査を通って来た場合のようだ。

が、依頼内容はニルベリア王国首都、シミヤの端にある小屋にてと書かれていた。そこまで来てから話はする、という旨が手紙には書かれていた。

胡散臭い……。

どの口が言うんだと言わないで。

しかし、ニルベリア王国か。あそこには……アオイくらいしか知り合いはいないな。もう三年経ったが、元気だろうか。実は、一度行ったきりでニルベリア王国には行っていなかったりする。そう言えば、アオイには連絡手段である魔宝石を渡してあったよな。と言う事は、これはアオイからの依頼ではないのか。でも、こんな内容の依頼が僕に来るのは……ふむ。

ニルベリア皇国は食事が味気ないという理由で、実はあまり人気がない。島国で行きづらく、田舎でこの世界の観光地には向いていない。

というのも、魔物なんかが闊歩しているからそこまで開拓が進んでおらず、自然なんてわざわざ見る物じゃないと言うのが一般的だ。旅行と言え、進んだ国の町並みを眺め、珍しい物を買うのが普通である。

ニルベリア皇国に行く者の大半は養生に行く者だ。巫女の神聖術に希望を抱いて海を渡る。精進料理（味気ない料理）が主食で、落ち着いた田舎。病人に取ってはこれ以上ない療養地だろう。

健康な物に取っては刺激が足りないと言うか、詰まらない国である。かくいう僕も、しばらくは行かなくていいやと思ったのだ。だからアオイが元氣かとか、薄情にも知らないのだ。

十六歳になったあの子は、一体どうなっただろう。さぞかし美少女になった事だろうな……。

と。

スパーン、と後頭部に衝撃があり、僕はくらりと姿勢を崩した。痛い、結構痛い。誰がぶった、慰謝料請求するぞ！ という怒りではなく、どうしようもない途方に暮れた感じで僕は振り返った。

「レイ、顔がにやけてます。……その顔は気持ち悪いです」
「アイリ……」

僕は殴って来た元暗殺者の少女、アイリに苦い視線を向ける。それを目を閉じて涼しい顔で受け止めるアイリ。人様を殴っておいで、随分態度が大きいじゃないか。反抗期かい？

「……他の方の迷惑です。場所を移動してください」
「……はい、すみません」

あのね、なんかね、態度が冷たいよ。

僕は一体どこで調教？？じゃなくて教育を間違えたのだろうか。
あの日は抱きついて離れなかったのに、今じゃ一定の距離までしか近づかない。付かず離れず、その様は秘書のようだった。僕は嫌われてもいないが、好きでもないと言う事か？ でも、僕から近づいても避けるんだよな。一定の距離を保つんだよ。でも夜にベッドに入って来たりするのは何故だろう。よく解らない。

……あれか。好きな事には好きと言える、嫌いな事には嫌いと言えるように教育した所為か。そして成果なのか。最後は僕、罵倒されてたもんね。

僕の自業自得だった。

回想してみよう。

「……私の名前は……アイリ、です」
「アイリ、ね。良い名前じゃん。よろしく、アイリ」

そう言って頭を撫でてやったら、小さく照れくさそうに笑っていたっけな。あの時のアイリは可愛かったな……。

「マ……れ、レイ。なるべく近寄らないでください。あなたと一緒にいると勘違いされそうで嫌です」

面と向かって嫌と言われて、凄く傷ついた。そして、アイリは僕に近づかなくなった。

回想、終わり。

むなしくなった。

アイリは拳銃を持っていたが、それはどうやら渡された物らしく、手榴弾もそうだったようだ。その使い方も教えられていたが、今は僕が預かっている。近代兵器など、迂闊に見せていい物ではない。誰でも簡単に人を殺せるなど、あまりよろしくない。

恐らく、僕と同じ前世の記憶持ち……いや、魔法使いがいるのだろう。かなり思慮が浅い奴だ。魔法使いと言えど、脳天をぶち抜かれれば死ぬと言っのに。

隷属の首輪により、身体が勝手に暗殺者として生きて来たアイリの身体能力はかなり高い。おっさん状態の僕よりも上だ。

と言う訳で、僕はGランクらしく、大人しくアイリに引っ張られて行った。むしろ引きずられているようだった。

ギルド内にある休憩スペースに運ばれ（もはや自分の意志はない）、四人掛けの机と椅子にうつ伏せになりながら、僕は今後の予定を話した。

「で、ニルベリア皇国に行く事になった。どうする？」

「……どうするも何も、一緒に生きますよ」

気のせいかな？ goじゃなくてliveに聞こえたんだけど。

まあ、一緒に来るのに変わりはないかと。

「レイさん……ですか？」「えっ、本当だ」

聞き覚えのある声が聞こえた。具体的には、戦姫様と偏屈魔術師だった。

「レイさんもニルベリア皇国に行くんですか？」
「ええ、まあ」

いつの間にか同席している二人。
フィーは予想通り、リース嬢の家で厄介になっていたようだ。
も、って事は、彼女達もニルベリア皇国に行くのか。

「お二人は？ 観光か何かですか？」
「いいえ、私が呼ばれたんです。それで、フィーには付き添いで」
「リース嬢が？」

呼ばれた……ねえ。アイカシア国とニルベリア皇国は友好関係にあるが、戦姫を呼び寄せる、ねえ。何だか嫌な予感がするな。

「リース嬢、つい先日襲われたばかりではないですか。大丈夫なのですか？」

「はい。お父様が犯人に目星を付けられていて、すぐに捕まりました」

おいおい、優秀すぎるぞカイル。僕は誰が怪しいとか教えただけなのに。証拠とかはなかったのに。それを数日で、か。恐ろしい。
というか、裁判長の職権乱用じゃないか？

「ところで……彼女は？」
「彼女？ ああ、アイリですか」

先ほどから黙っているアイリを不思議そうに見るリース嬢。この子があなたの命を狙っていたんですよ、とは言えないし、フィーに至っては殺されそうになっているので、どうしたものか。

よし、見た感じで騙そう。

「僕の秘書ですよ」

「いや、Gランクのあんたがどっちかというと秘書とかでしょ」

そうかもしれないな。実際、雑務に関しては僕は天才的とされている。

雇いたいと目の前のリース嬢も言ってくれた訳で、その腕は折り紙付きなのだから尚更だ。

「……アイリです。レイがご迷惑をお掛けします」

おいおい、アイリは僕の保護者かよ！ という突っ込みを二人の時ならしているが、リース嬢達の前では出来ない。レイと言うおっさんは常に自分のペース、流されたりはしないのだ。でも僕は何か言いたい。でもなんて言えば良いのか解らない。

と、僕が悶々としている間に女性陣は自己紹介を終えていた。

「で、あたし達と一緒に行かない？ どうせ同じ場所に行くんですよ」

「そうですね。レイさんなら良いですよ」

「そうですね？ 僕なんかで良ければ、ご一緒させてもらいますが」

って言っても、実はあんまり乗り気じゃない。

僕は信用を落とさないために行くしかないが、二人には出来ればニルベリア皇国には行かないでほしい。何か嫌な予感がしている。

そこで、僕はニコリと笑ってこう言った。

「昔騙した女の子の責任を取りに行く僕でよければ」

リース嬢の顔が笑顔で凍り付いた。フィーは驚いた顔をしている。

アイリは僕をちらりと一瞥し、また視線を外した。

「えっと、その冗談ですよネ？」

三人を代表したように言うリース嬢に、はははっと笑い飛ばした。笑い飛ばして、何も言わなかった。

沈黙は物語る、ごめん真実、と。

アオイからの依頼なら、あながち間違っちゃいないんだよな。というか、僕は基本的に皆最初は騙してる。そういう意味では、リース嬢達も未だ騙され続けていると言っているといい。

「あんた、責任取るとか意外と甲斐性あるのね」

ちよつ、フィーなに言ってるの！？

純情な生け贄と黒のマモノ 2

大陸東部に位置するアイカシア国、その首都であるアカシアは港を有する都市だ。港があるため流通が激しく、著しい発展が見られた。

というのは置いておいて、僕は宵の口、港で仲間に出会っていた。リース嬢達は、『ちょっと考えさせてください』と言って、屋敷に戻って行った。うん、それで良い。で、アイリは付いて来ていた。付かず離れずである。

僕達は黒のローブに身を包みフードを深く被って、港で待ち合わせをしていた。

「アイリ、別に付いてこなくても良かったんだぞ？ 今日のアポを取るだけだったんだから」

「……あぼ？」

知らない単語に首を傾げるアイリ。秘書みtainな冷静な対応ではない、子供みtainな可愛らしい仕草にきゅんと来た。

と、一人の男が歩いて来るのが見えた。巖のような筋肉質の男で、短い金髪と相まっていかにも海の男と言う雰囲気を出している。男は僕に気付くと、手を振りながら駆け寄って来て、肩をばしばし叩いた。

「久し振りだなマ……、ごほん、レイ！」

「久し振りだね、サガリ。一年振りだけど、相変わらずだ。それと、大声じゃなければ僕の名前を呼んでも良いよ」

そう言って、僕はちらりとフードの下から黒髪を覗かせる。というか、身長で解れよ。

「いや、遠慮しておくぜ。俺は声がでかいからな。しかし、お前は変わってるようで変わってないな」

「まあね。売り上げは上々かい？」

「当たり前だ。本当、お前の知識はすげえな。バレないようにするのは結構難しいが、その労力が報われる収益だ」

ニツと笑みを浮かべるサガリ。

彼には、僕が発明した技術の実験台になってもらっている。本人は気付いていないようだが。といっても、安全は確信しているので問題はない。

万が一事故を起こしても、ちょっと船が木っ端みじんになるだけだ。問題ない。

「急な話だけど明日、ニルベリア皇国に行く事になった。船出せる？」

「ニルベリア？　なんだってまたそんな田舎に……隣の彼女と旅行か？」

にやにやと笑みを浮かべるサガリは、レイの知り合いだと思う。類は友を呼ぶんだ。

しかし、特に変な反応はしない所を見ると、ニルベリア皇国で何かが起こると言う訳ではないのか？

「違うよ。そんな事言ったらアイリが怒??」

「そうです、旅行です」

僕は冗談はやめてくれ、と肩を竦めようとしたが台詞は遮られ、とん、と微かな衝撃が伝わって来た。

アイリが、僕の腕に絡み付いて来た。ちよっ、胸が当たってます

よ。

「はははっ、さすがだな。良いぜ？ 快速で飛ばしてやるよ」

「何がさすがなんだよ。……まあ、よろしく頼むよ。っと、明日は僕、レイの格好で来るからよろしく」

「解った。その時はあいつの人格で話してくれよ」

そう言って手を振り、サガリは自分の船へと戻っていた。彼は港に船を泊めていても自分の船の部屋、船長室で寝る。なんでも、大切な物があるとか。

サガリは元々レイの知り合いで、レイと一緒にいた時に知り合った。レイと一緒にいて船旅をするときは、必ずと言っていい程顔を合わせていた仲だ。といっても、レイが死んで以来、顔を合わせる機会は減ってしまったが。

レイの人格で話、ね。

僕の魔法は、故人を愚弄していると言われても仕方がないな。

宿への帰り際、リース嬢の屋敷に寄ってみた。勿論、黒のローブは脱いでレイの姿になっている。ローブを着て行ったら、即不審者扱いで逮捕、そして実刑になりそうだ。

数日で変わるはずもないが、相変わらず豪邸だった（フィーの魔術実験が失敗、なんて事があれば変わるか）。前世の学校くらいの大きさだ。敷地も建物も。

侵入を困難にするための先の尖った柵、敷地内を覗かれないための木々。ライオンのような彫像がある門、その先に広がる石畳と噴水。右手に庭園、左手に芝生。落ち着いた印象を与える白い三階建ての屋敷、テラスが印象的。

僕も将来、こんな屋敷に住みたいな。いや、やっぱり城にしよう

かな。魔王だし、屋敷は別荘と言う事で。いやいや、そこまで贅沢しちゃ悪いか。

などと考えながら、僕はフュリアス家のメイドさんに連れられて屋敷の前に立っていた。そのメイドさんも今は屋敷にリース嬢がカイルを呼びに行っている。

言伝でも良かったのだが、昼間の事を考えると、それはまずいんじゃないかなと思った次第、わざわざ面会を求めた。

二人をニルベリア皇国へ行かせないためにあんな事を言ったのだが、よく考えてみれば、国に呼ばれておいて行かないと言う返答は無理だろう。

とりあえず、明日ニルベリア皇国に向かう旨と、機会があれば誤解を解いておこうかなと思っていた。

のだが、

「やあ。久し振りと言う程でもないが、久し振りだね」

「……そうですね、カイル」

出て来たのはカイルだった。ゆったりとしたバスローブに身を包み、いかにも金持ちといった雰囲気だが、不思議と気に触りはしなかった。

「上がって行って、と言つてもすぐ帰るんだろ？」

「ええ。ちよつとリース嬢達に伝えたい事があるだけですから」

ドアを半分程開いて、手で支えつつドアに身体を預けるカイル。

「昼間の事なら、別に何も言わなくていいよ」

「はい？」

カイルの口からその話が出るとは考えておらず、思わず聞き返し

てしまった。そんな僕の様子が可笑しかったのか、カイルは笑いを堪えていた。

「なんだか、カイルの前では僕も調子が狂うな。お互い様かもしれないが。」

「いやね、夕食の時に聞いたんだよ。やけに機嫌が悪いと思っただけど、まさかそんな話だとは思わなかったよ」

「リース嬢はなんと？」

「僕にその話をした後、『レイさんがそんな人だとは思いませんでした！ もうっ！』って感じだったよ。で、フィー君が『そうかな？ 見たまんまじゃない？』って言うってたかな」

おいカイル、何も言わなくていいよって、まさか……。

「で、私が『それって唯単に、昔世話になった女の子の頼みを聞きに行く、って意味なんじゃないかい？』って言ったんだけど……」
「星みたいだね」

「……感服ですよ。本当、あなたに嘘は付いても意味がない。面白い冗談も詰まらなくなってしまうですね」

僕は肩を竦めるしかなかった。

「いやはや、まさか話を聞いただけのカイルに見破られるとは。まあ、結果オーライだ。僕の冗談は意味を無くしていたんだから。」

「お察しの通り、昔に知り合った女の子の頼みを聞きに行くんですよ。あくまで予想ですがね。騙したと言うのも、僕はこんな性格ですからね、しょっちゅう嘘をついてますから」

むしろ僕は嘘で構成されていると言っても良い。

仮想人格は関係なく、魔法で自分の存在を偽っているのだから。

「では、リース嬢達に伝えてください。明日の朝に僕らはニルベリア皇国に発つので、日の出に港で待っていてくれれば行き違いにはならないのでは、と」

「それって、かなりいい加減じゃないか？」

苦笑するカイルに、僕は微笑む。

そうだよ、これってかなり意地悪い伝言だよ。

「ニルベリア皇国行きの船なら、転覆しても気にならない程度出ていますからね。僕と一緒に行く理由らしい理由もありませんし、今回の件で少なからず不快な想いもされているでしょうから。会えたら一緒に行く、程度で良いでしょう」

「解った。一字一句、間違いなく伝わるよ」

最後の言い回しが少しばかり気になったが、僕はそれではと別れた。

石畳を踏みながら門へと向かう僕に、今まで一緒にいたにも関わらず、忘れるくらい静かにしていたアイリが話しかけて来た。

「……私の事は、はなさないんですか？」

「話さないよ。そんな事をして、一体誰が幸せになれる？」

暗殺者は行方不明、それで良いのだ。

アイリが罪として受け止めるのなら、罪悪感に苛まれると言うのなら、カイルがガイラスの復讐をしたい、いかなる罪人も法によって裁くべきだ、というのなら僕は真実を話そう。

だが、アイリは罪には感じていない。そういう感情が抜け落ちてしまっている。

カイルが何故人気があるのか、それは人の感情をも理解出来るか

らだ。ただ単純に法に乗っ取った裁きをするのではなく、人の心を考えて裁きを下す。彼の目は魔法のように嘘を見破る。犯人に更正の余地がなければつまり切り落とすし、それが見られれば刑を軽くしたりもするのだ。勿論、遺族なんかの気持ちも考えて。

前世であれば、きっと裁判長としては失格だろうが、そのシステム自体が深く浸透していないこの世界では問題ない。いつかは問題になるかもしれないが。

そんなカイルならば、アイリを裁くなどとは言わないだろう。彼女を裁いた所で、何一つ報われる物はいないのだから。

宿に戻り、僕はレイの姿から戻る。相変わらず、部屋には月明かりしかない。

「はぁ……」

魔法は使い続けていても一向に疲れないが、僕は恐ろしいのだ。自分の姿を忘れてしまうのが。父さんと母さんの息子である僕が消え去ってしまうのが、怖いのだ。

「……震えてますよ」

アイリが僕の手を握って、そう言った。

あれ、本当だ。震えてやんの、情けないな。

と、僕はベッドに押し倒された。勿論、アイリによって。ちょっと、胸が当たってーもういいや。確信犯だろ、当ててるんだろ？ 本当、アイリの考えている事はよく分からない。くっついて来たり、一向に近づかなかったり遠ざけたり。

「……私、嬉しかったです」

何が？　なんて野暮な事は聞けない。

聞かない代わりに、沈黙と共に頭を撫でてあげる。

「……私の事、はなさないと言ってくれて、嬉しかったです」

「うん。話さないよ。それでアイリは幸せでいられるか？」

「はい。……だから、はなさないでくださいよ？」

そう言つと、ぎゅつと僕を抱きしめてくるアイリ。

まるで僕の温もりが、どこかに行ってしまうんじゃないかと不安
げで、離さないと言わんばかりに。小さいながらも小刻みな鼓動が
僕に伝わって来る。

「話さないよ。……いや、離せないよ」

一度失つて、再び手に入れた物は、失う恐怖とその心地よさを知
っている分だけ、手放しづらい。

だから、現状維持。一線は越えるつもりはない。

柔らかな感触を強く押し当てられて、僕はふと思った。

……もしかして、アイリは僕に真実を『話さないで』じゃなくて、
私を『離さないで』って言っていたのか？

……………可愛いな。

—————

レイが帰って行くのを見送り、私はドアを閉じた。

本当、いつバレるかヒヤヒヤしていた。それはそれで面白そうだったが、こちらの方がもっと面白そうだ。

「ほらね？ 二人が考える程、彼は不誠実な人間じゃないよ？」

私はドアの裏側に隠れていた、もとい隠していたリースとフィー君に笑みを見せる。ほらね、私に偽りは効かないのだ。

「……レイさん」「レイ……」

と、二人とも言葉を無くしていた。だが、これは答えを聞くまでもないな。

「じゃあ二人とも、早く寝なさい。早起きは三文の得と言うよ」

彼の捻くれた性格からすると……、まあ、私は行けないからどうでもいいか。

しかし、彼は本当に面白い。

いつか、本当の姿で会いに来てもらいたい物だな。

それもそんなに遠い話じゃないだろう。

少々???いや、随分と彼は警戒心が薄い。どうでもいいと思っているのかもしれない。でも、人の家の前でどんなびっくりショーをしてくれているんだ。

同じ魔法使いとして、それには文句を言いたい。

純情な生け贄と黒のマモノ 3

「お二人とも、来たんですか？」

「はぁ……、はぁ……、何を、驚いてるのよ」

「そうですよ！ レイさんが言っただんじゃないですか！ 日の出に港と！」

そう言えばそうだった。しかし、あの言い方なら普通に朝に来ると思っただけだな……。

今、丁度日が昇り始めた。現在の時刻、六時少し前。息を切らしたフィーと、腰に手を当てて怒り気味のリース嬢がいた。

僕の策略としては、胡散臭いおっさんの言う事は真に受けず、リース嬢達は八時くらいに港に来るんじゃないかな、と思っていた。漁に出る訳でもないのに出港が日の出、それは異常である。

朝も過ぎた頃に来て、はははっ、と日の出に港に来ていたリース嬢達の無知を笑う、それが仮想人格βの解答だった。

が、生憎そういう訳にも行かない理由がある。僕らがこれから乗る船は、衆目に曝すには躊躇する所がある。それでも人を小馬鹿にする選択を促すレイの人格は、少々破綻しているように思えた。

だからあのおっさんは……。

「おっ、今回は二人も女増やしたのかよレイ」

と、サガリが船、トレジャーホープ号から降りて来た。お察しの通り、こいつは元海賊だ。海賊は海賊でも、財宝を探して世界各地を回っていたからトレジャーハンターに近い。そして行く先々で食

い逃げをして悪名を轟かせていた。勿論、食い逃げのときの台詞は『宝を見つけた時に払う』だ。

悲しいかな、宝を見つけてしまったサガリは律儀にもそれ売っぱらって、世界各地の飲み食い屋に金を払いに行ったのだ。そしてそれでも足りなかった分を今の船問屋で稼いでいる。僕の入れ知恵のおかげで、借金はなくなったはずだ。

「羨ましいですか？ 分けては上げませんよ？」

「誰があんたの女だ！」

「それはちよつと……」

「……………」

上から僕、フィー、リース嬢、アイリの反応だ。

照れもなければ狼狽もしない、完全に僕は眼中にもなかった。

一頻り冗談を交わして、僕らはトレジャーホープ号に乗り込んだ。

出港からしばらく、僕は船長室でサガリと今までの事を話していた。

甲板を見下ろせる位置にある船長室は、この船の中で一番豪華な部屋だ。ニルベリア皇国で購入したと言う漆塗りの机、帝国の貴族御用達しの家具屋のふかふかの椅子、戸棚には歴史を感じさせる古書が大量に揃えられている。壁には胡散臭い宝の地図らしき物があり、燭台なんかもちらほら見えた。

おっさんらしく、昔話に花を咲かせた。おっさんと言っても、三十代だが。

サガリとの話が一段落し、リース嬢達の様子を見に僕は甲板へと出る。海の風は冷たく、僕???というよりレイの赤毛を微かに揺らす。

海しか見るものがなくなり若干飽きて来ているであろうフィーが、首を傾げていた。

「……船って、こんなに揺れないものなの？」

「いえ、もつと揺れると思いますけど……」

この船は今、全く揺れていない。だから酔わない。
出港当時はそこそこ揺れていたが、港を出てからは全く揺れていない。

引き籠りと温室育ちには、この船の異常さは解らないようだった。
だからこそ、僕は二人にも乗れる機会を与えたのだが。

アイカシア国首都アカシアから出発し、ニルベリア皇国の首都シミヤに到着するには、おおよそ普通の船ならば十日間かかる。けれど、この船の速度なら三日もあれば着くだろう。

マストが風に揺られている。ピンと張られておらず、マストは旗のようにたなびいていた。勿論、船が進む速度で起こった風に。

フィーが何かに気づいたのか、甲板から海を見ながら僕に尋ねて来た。

「ねえレイ、魔力を感じるんだけど、何か知らない？」

「知りませんよ。船の事なら、サガリに聞いてください。尻尾振ってお願いすれば彼なら答えてくれますよ」

悪いなサガリ。僕はもう懲りてるんだ。フィーは知りたい事があれば本当に尻尾振るぞ、多分。

サガリを売って、僕は自分の船室へ逃げる。

船は、波を立てず滑るように海を突き進んでいた。

この船の動力は帆に受ける風でなければ、スクリューでもない。魔石が動力となっている。もっとも、巨大で高価な魔石を使っている訳ではない。

魔石は希少な物だが、それは大きい物だけだ。

砂粒サイズの魔石は全くといい程価値がない。なにせ、地球で砂鉄を集めるように、場所が場所ならそこら中に落ちていている。さらに僕の持っている特殊な石があればそれこそ磁石に吸い寄せられるように簡単に集まる。小さくとも効果があれば砂金のように採取されるかもしれないが、魔術に使えない微弱な魔力しか放出しないので道端に転がっているのだ。

無理にその魔力で魔術を行使しようとすれば、例えば水を生み出す魔術だとして、雀の涙程度の水滴が出来れば良い方だ。だがおそらくは、水蒸気くらいだろうか。それを生み出して、その形状や位置を維持するために魔力はずっと使われ続ける。それでは何の役にも立たない。

尤も、僕としてはそれはそれで加湿器になるんじゃないかと考えているが。

閑話休題。

さらに魔石は鑄造するような事も困難で、砂粒の魔石を集めて一つの小石程の魔石にするのは、普通に買った方が安く上がる。

そのため、砂粒サイズの魔石は精々子供の玩具としてしか扱われず、実は身近な所に転がっている。僕にしてみれば、宝が道端に転がっているような物だった。

幼少期から僕は魔石に興味を持っていた。

なにせ、反永久的に純粋なエネルギーを生み出す物質だ。これを研究すれば、化石燃料を使った地球の二の舞は避けられる。環境問題など、資源をエネルギーに変えるために生まれた問題だ。純粋に

エネルギーを放出してくれる魔石があれば関係ない。

そんな考えがあり、僕は無駄に放置されている砂粒サイズの魔石を使って、子供の頃から研究していた。その研究成果の一部が、この船に使われている。

魔石は魔力を際限なく生み出す物だ。使えば使う程効力が失われる魔宝石と違い、魔石は絶対に一定の魔力を生み出せる。魔力の放出量は魔石の大きさに比例するが、人の手で制御すれば放出量を抑える事も出来る。そのため、サイズの大きな魔石があれば小さな魔石は必要ない、小さなサイズの魔石の価値が下がると言うことになったのだらう。小さくとも魔石は魔石だと言うのに。

純粋なエネルギーというのは、力学的エネルギーのみならず、光エネルギー、熱エネルギーなどと言った要素も含んでいる。

話が逸れた。船の話しよう。

この船には竜骨はない。それどころか、クジラのお腹みたいな曲線を描いてすらもない。船底は桶のように平で、海との接地面積を広く取っている。

そんなこの船の底には、砂粒サイズの魔石がびつりと鑲められている。船を浮かせ、波や水との接触で減速しないようにするためだ。

船底に鑲められた魔石の生み出す魔力は、重力に相反する純粋な上向きの力としてのみ使用している。これにより、船が水面から下に沈まないようになっている。

これでは前に進む力がないので、船のお尻に二つ程見た目は樽、中身はジェットエンジンを組み込ませてもらっている。ジェットエンジンと言っても、ちょっとばかり僕の秘策とも呼べる魔石を使っただけで、ただ単純に進行方向、船首に向かって推進力を生み出しているだけだ。

イメージとしては、風呂に桶を浮かせて、それを手で滑るように

進める感じだ。ただ手で押すと、桶が波を生み出し、そして波にぶつかって減速する。だが、手で進行方向に押し続けければ波は起こらず、起こったとしても波に乗り減速しない。

これらの操作は全て船長のサガリが行なっており、実質この船は彼一人いれば動くと言う物だった。だが、料理の腕が壊滅的、天気を予測するのが苦手、地図も読めないというサガリが一人で船旅など出来るはずもなかった。というか、嫁さんに許してもらえなかったようだ。

バゴン、と扉が開け放たれ、フィーが突入して来た。そして、

「レイ！ やっぱりあんたが作つたんでしょ！」

駆け寄ってびしっと僕に指を突きつけるフィー。犯人はお前だ！ みたいな。見れば、ニヤニヤと笑いながらサガリが逃げて行く所だった。

げっ、サガリの奴、僕を売りやがったな。妻子持ちのくせに。……これは関係ないか。嫁さんに言いつけるぞ！ ……何をだろっ。あの様子を見る限り、フィーに尻尾を振ってもらったようには見えなかった。

「やれやれ、バレてしまいましたか……」

「教えなさい！」

むむっ、随分と高圧的な物言いだな。躰が必要かな？

「そうですね……、では三回回ってワンと言ってくれたら良いですよ？」

「え!？」

女の子に何をやらせようとしているんだか、僕は。そして何を逡巡しているのだ、フィー。

「……うう」

フィーは琥珀色の大きな瞳に薄く涙をためて、僕を上目遣い。ものの言いたげに少し尖らせている薄桃色の唇が妖艶。波風に揺られる短い茶髪を、思わず撫でたくなった。否、愛でたくなった。

くそ、これは確信犯か？ それとも天然か？ どちらにしても、僕にはダメージがでかすぎる。可愛い物好きな僕には、少々厳しい。僕はわざとらしく頭に手を当てる。

「……少し風に当たってきます」

「逃げるの？」

「酔っただけです。………君の瞳に」

「………」

言った瞬間、フィーは完全沈黙。その後、無言で僕を殴り飛ばして逃走して行った。これに懲りたら僕に媚を売るのは止めるんだな。うむ、こういう時の仮想人格は頼りになる。取り返しのつかない事をしている気もするが。

「………」

ちなみに、そんなやり取りをアイリはジト目でずっと見ていた。何も言わず、我関せずと。

純情な生け贄と黒のマモノ 3 (後書き)

船の理論は適当です。

指摘、意見があればどしどしお願いします。

純情な生け贄と黒のマモノ 4

「レイさん！ フィーに何をしたんですか！？」

ボタン！ と再び扉が開け放たれた。これも半ば予想出来ていた事で、僕は優雅に笑みを浮かべて襲撃者、もといリース嬢を出迎えた。

「どうされたんですか、リース嬢。他人の部屋にノックもなしとは、淑女にあるまじき振る舞いですよ？」

「あつ！ …… すいません」

やってしまったと口元に手を当てて、照れたのか俯くリース嬢。早速リース嬢のペースを崩す。さて、どうするかな。

「フィーですか？ 彼女がどうかしましたか？」

「そうですよ！ さっき甲板に戻って来たと思ったら、ぼーっと甲板をうろついているんですよ。レイさん、何かしませんでしたか？」

すっとぼけてみた僕だったが、もはや確信しているように言葉を紡ぐリース嬢。

どうして僕に直結するんだか。……日頃の行いの成果か。

「アイリちゃん、何か知りませんか？」

「……先ほどまで会話されていましたよ。何やら人の羞恥心を煽る事をおっしゃっていました」

「ほら、やっぱレイさんが何かしたのが原因じゃないですか！」

やばい、押され気味だ。そしてアイリ、何を言っているんだ君は。

君は後でお仕置きが必要かな。

「ぼーっと甲板をうろついているだけなのでしょう？ 問題ないのでは？」

「時折変な笑顔を見せるんですよ！？」

あつ、それは結構な問題だ。何もないのに突然笑い出すとか、あまり近くにいてほしくないかも。

「仕方ありませんね。では責任を取ってくるとしましょうか」

「……やっぱりレイさんが何かしたんですね」

部屋にジト目の女の子が一人増えた。

居心地が悪いので、僕は甲板に逃げ出しーもとい、フィーのご機嫌伺いをしに行った。

「フィー、ちよつと良いですか？」

「ひっ！……な、何」

声をかけただけで引かれた。肩を叩こうとした手が所在無さげに宙を彷徨う。あれ？ これって、取りつく島もないと言う奴では？

「あ、あたしに何か用？」

いや、君に用があつて僕に会いに来たんじゃなかったか？ まあ、今は用があるのは僕だけど。

「先ほどの事……少々冗談が過ぎました。まさかフィーがここまで気に病むとは思いませんでした。反省しています」

「ふえっ！？」

ぺこりと頭を下げる僕に、あたふたと慌てるフィー。それを背後からこっそり（本人達はこっそりかもしれないが僕にはバレバレで）伺っているリース嬢とアイリ。告白のシーンでもないのに、何を拳を握りしめているんだか。

だって、

「……あ、っそう。べ、別に！ 別にあなたの言うことなんてこれっぽっちも嬉しくないんだからねっ！ あたしが気に病む？ 何勘違いしてんのよおっさん！」

右ストレートが僕の腹を捕えた。少し痛かった。
少しだけ、痛かった。

「用はそれだけ？ それならさっさとどっか行つて。あなたの顔見るとムカムカする」

「それだけで良いですか？」

「は？ 何言ってるの？ 意味解らない」

「では、それだけです。魔術師殿の貴重なお時間を割いていただき
すいませんでした」

そう言つて僕は踵を返す。うむ、コレで清算完了かな。

「……待つて！」

と、何時ぞやのように掴まれる僕の袖。つんのめる僕。
先ほど謝ったばかり故、僕は怒れない。

「どうかしましたか？」

若干いらいらしながら、しかし笑顔を作って僕は言った。

「……小腹が空いたから、何か作って？」

小首を傾げてえくぼを作って、フィーはそんなことを言った。
僕は笑って答えた。

「嫌です」

どうやら、フィーは天然で僕をたらし込めようとする人間だった。

「……いただきます」

船の食堂。そこで目の前に広がるのは、料理に近い何かだ。間違っても料理とは呼べまい。それに対峙するのは、苦笑いを浮かべているサガリ、胡散臭い笑みを若干引きつらせた僕、女子の料理に一喜一憂したトレジャーホープ号の船員達だ。

「どうぞ、召し上がってください」

「食べてみれば良いじゃない……」

「……どうぞ」

笑顔のリース嬢が鬼畜に見え、ぶっきらぼうのフィーが外道に見え、無愛想なアイリが小悪魔に見えた。

何がどうしてこうなったのか、僕は一から説明せねばなるまい。

即時料理を拒んだ僕は、隠れていたリース嬢にも参戦されて窮地に立たされた。

「レイさん、ここは先ほどのお詫びとしてぜひ！」

とか何とか。

この船には料理人がいるので、僕が作ると言うのは彼に申し訳ないというのと、正直鞆から取り出すならまだしも、自分で作るのは面倒だった。

「嫌ですよ。別にこの旅は依頼ではないですし、僕が料理する必要はないですね。……お金を払って、依頼してくださるのでしたら作りますが」

「仲間じゃないんですか？」

「仲間ならば尚更、当番制ではないですか？」

その時、僕は料理を断るのに必死で、考えていなかった。
役割分担、適材適所。

「じゃあ、私達が作ればレイさんも作ってくれますか？ 当番制なんですよね？」

「いえいえ、この船には料理人の方がおりますから、その必要性はないでしょう」

「旅費を払ってないんです。料理くらい、私達で賄いましょう！」

そうだった。僕は知り合いであるサガリに金を払うなどとは考えず、タダでこの船に乗せてもらっている。燃料費など無く、精々食費が少し増える程度問題ないだろうと考えていたが、知り合いでもなんでもない彼女達に取っては結構心苦しい所があるのかもしれない。

い。

タダより高い物はないというし、さつさと借りを返しておくか。それならば料理くらいならば作るか。

そんな甘い考えで、僕はサガリと料理人に交渉を行ない、料理に關しては僕たちが受け持つようになった。

その結果がこれだよ。

丁度昼食時間と言う事もあり、早速三人が料理を作ってくれた。アイリにも作ってもらったのは、今後の事も考えてだった。そして出来上がったのが見た目だけならマトモな料理が二品、見た目も怪しい料理が一品。

立ち込める匂いや見た目だけで、既に二名程放心状態だ。

「参考までに聞きますが、三人とも、味見はされましたか？」

「そんなはしたない事出来ません」

「あたしの料理は完璧よ」

「……………」

はい、絶望的ですね。

覚悟を決め、僕が先導して箸を進める。ちなみに、マイ箸である。まずリース嬢の料理。

ロールキャベツだ。見た目は良い。後続の一名がとんでもないので、それに比べればどんな料理も見た目は良く感じる。

パクリ、と一口頂き咀嚼する。それを見た船員達が次々と料理に手を出し、そしてー。

「げふっ」

「大丈夫かつ!？」

撃沈した。サガリはコレ幸いと、そんな船員達を生き残ったメンバーと共に連れ出したーもとい、逃げ出した。

開始早々、戦線には僕一人になってしまった訳である。

「リース嬢、今を見られて何か思う所は？　ちなみに僕の感想は、味が薄くよく噛まなければ器官に詰まる、って感じですね」

「……　すいません。私、料理した事が無くて……」

両手で顔を隠して落ち込むリース嬢。誰にでも欠点はあるのだ。しかし……、とんでもない交渉を行なってしまったぞ僕。これからニルベリア皇国に着くまで、ずっと料理は僕らが受け持つと言ってしまったんだ。

やばい、残りの二人が使い物にならないければ、僕がずっと料理をするはめになりそうだ。トレジャーホープ号の船員に頼み込まれて

「では……、次にフィーですか」

「……無理して食べなくてもいいわよ？」

リースの惨状を見て、目を逸らしてそんな事を言うフィー！。

おいおい、思い当たる節があるのか？

「では……、ところで、これは何ですか？」

僕の目の前にあるのは、手のひらサイズで紫色のぶよぶよした物体だ。

おおよそ料理の色じゃないし、触感でもない。どこの工作の時間に作ったんだ、これ。いや、なんかの召還にでも失敗したような物体だ。

「……ゼリー」

驚いた。見たまんまだった。いや、ゼリーならあり得るか。うん、信用は出来ないが、少しばかり安心した。これで目玉焼きとか言い出した日には、僕は天変地異の前触れと取るだろうよ。うん、なんで薄っぺらいかな、これ。そしてチョイスが可笑しくないかな？

「……いただきます」

さすがに箸じゃ食べられないと判断し、スプーンで掬う。掬おうとしたとき、皿の上をスライムのように逃げたが、一応掬えた。一口頂く。うむ、これは……。

「フィー、何か薬品を入れましたね？」

「ええ。固めるために、ちょっと色々」

「ちょっと色々の所が非常に気になりますが、あえて聞かないでおきますよ。ただ、あまり人に食べさせる物ではないですね」

プロテインやら風邪薬やら、薬と名のつくもの全てを含ませたような味だ。苦みや甘みのみならず、独特の薬品臭さがあった。プールの匂い、もとい塩素臭がしないだけましと思う。

「で、アイリのは……ハンバーグですか」

「……まあ」

これが唯一の救いになるか、それとも絶望へたたき落とすものになるか、僕はまだ知らない。ただ、見た目と香りは普通だった。

箸でハンバーグ（暫定）を割ると、透明な肉汁が溢れる。デミグラスソースの匂いも可笑しくはない。

「……いただきます」

一口頂きー、僕は頭を抱えた。食べれるレベルの料理だ。だがハンバーグ（暫定）はハンバーグでも問題ないが、ソースがやばい。

「……アイリ、このソース、何を使いました？」

「……ワイン」

煮詰めてないだろ、それ。アルコールが全然飛んでない。ソースが完成してから、それにワインを付け加えた感じだ。その後、煮詰めていない。

昼日中から酔わせる気か？ 酔わせてどうしようって言うんだよ。

「三人とも、ちょっとここで待っててください」

「えっ……」

「良いから、動かないでここで待っていてください」

僕は三人を置いて食堂から出て、自分の船室に戻り、鞆から紙に包まれたハンバーガーを取り出した。それをバスケットに入れ、トレジャーホープ号の皆に渡して行く。お詫びだ。

食堂に戻り、三人にもそれを渡す。

「これが普通の料理というものです。味をしっかりと覚えておいってくださいね。間違っても！ 今自分で作った料理が普通だと思わないでください」

三人は縮こまって申し訳なさそうにハンバーガーを食し始めた。かぶりついて食べるというのにリース嬢が戸惑いを見せていたが、他の二人が全く気にもしていなかったなので、その後はハムスターが

種を齧るように小口で食べていた。

で、僕は三人の料理を一人で食べ続けた。残すわけにはいかなかった。

ちなみに、三人が食べているのは中華風チキンのハンバーガーだ。厚さが十センチ程で、甘みのある唐揚げと特製のマヨネーズが絡まり絶妙な味を生み出す。触感も、さくさくふんわりのパンと、新鮮なレタスとジューシーな唐揚げの三重奏。

それを見ながら僕は三人の料理をもくもくと食していた。だって、僕以外に誰がこれを食べられると言っただか。

僕がこの料理とも呼べない何かを食せるのは、魔法を使っているからである。

食べた物ならば、どんなものだろうと分解し吸収出来ると言う魔法だ。特に取り立てて説明する事はない。口から入った物ならば、吐き気を催す事も無く分解して吸収出来ると言う魔法だ。手で触れたものも吸収出来れば便利なのだが、それは仕方がない。

「……………」

「……あの、無理に食べなくても」

「の、残してもいいわよ、別に」

「……………」

無言で食してる僕に、三人は申し訳なさそうに顔を俯けた。

が、残すなんてとんでもない。

「……僕が料理を作る際に気をつけている事は、どんな料理にも愛情を入れると言う事です」

リース嬢とフィーの二人がどん引いた。何せ今、おっさんの愛情たっぷりの料理を食べている訳だから。アイリは特に反応もしなかった。

「食べて美味しいと言ってもらいたい、喜んでもらいたいという想いが料理を美味しくするんですよ」

だから味見は大切だ。自分で作ったのだ、苦労した分だけ美味しければその喜びも大きい。誰かに食べてもらって喜んでもらうよりも、まずは自分を喜ばせる事から始めるべきだ。

「……あまり美味しいとは言えませんが、三人も何か想いを込めてこの料理を作ったのでしょうか？ その想いを捨てるような事、僕には出来ませんよ」

ああ恥ずかしい。でも、こうでも言わなければ料理が改善されるようにも思えない。こう言った所で、料理なんて栄養が取れば良いと思っっている人には関係ない話だけどさ。

その後、僕は無言で食べ進め、全て食べ終わると船室に戻って眠りについた。食ってすぐ寝たら太るとか、そんなの関係ない。いくら吸収出来るとはいえ、腹の大きさは変わらない。腹が苦しかった。

それからニルベリア皇国に着くまでの二日間、僕とトレジャーホープ号の料理人による料理教室が開かれ、なんとか三人とも、人に振る舞えるくらいのレベルには達した。まあ、辺りを見ても海しかないし、やることがそれしかなかったのが大きい。

一番先に上達したのはアイリだった。アルコールを使うのを止めさせるだけで十分食べれる料理になったからである。何故アルコールを使ったがったのか、それは解らなかったが。

次に上達したのが、リース嬢。教えれば素直に飲み込み、すぐに成果を見せてくれた。なんか良いお嫁さんになりそうだ。

難産だったのがフィー。彼女は栄養を取れば良いじゃない、と

いう典型的な例で、あまり料理に乗り気ではなかったようだ。それが何か心変わりを見せたのは良かったが、美味しければいいじゃない。栄養が高ければいいじゃない、という等式が何故か成り立っているようで、薬を混ぜたがるという狂気を見せてくれたからである。味と栄養は等式で結べないと解つたので、なんとかあったが。

「あつ、見えました！ あれがニルベリア王国ですね！」

出港から二日と半日、ついにニルベリア王国が見えた。全体的に高い建物のない国で、平屋か二階建ての建物しか存在していない。木造建築が主流であり、僕に言わせれば懐かしい、他の人には田舎臭い雰囲気のある国だ。

首都シミヤの港に降り立ち、別れを告げる。

サガリは商売、リース嬢達は皇居、僕らはちよつと探索（小屋で依頼人と落ち合うとは言えず）だ。

「では、機会があればまた会いましょう」

「……………」

「……ふん」

「えつと……、はい」

上から僕、アイリ、フィー、リース嬢の別れの言葉だった。言葉らしきものを言ったのは僕とリース嬢だけだった。

あれから二日と半日経った今も、フィーは未だに機嫌を直してくれない。悪口を言った訳でもないのに、どうしてこう機嫌が悪いんだろう。いや、あれか？ 僕が何も作らなかったからか？

「フィー、ちよつと良いですか？」

「…………… 今度は何よ」

ぶすつとした声、きつと僕を睨みつけるフィー。僕が何をしようと
言っただ。ちよつとからかっただけじゃないか。

「これをどうぞ」

「……何よコレ」

僕は握りこぶしサイズの包みをフィーに渡す。ジト目で僕を見る
フィー。あれ？ 僕の周りにはそんな目で僕を見る子ばかりじゃな
いか？

「お菓子です。あの時は何も作りませんでしたから、お詫びに」

中身はクッキーだ。ちなみに、この世界でクッキーはそこそこ高
級なお菓子である。

「……………」

無言で口元に笑みを浮かべるフィーを見て、とりあえずこれでい
いかなと判断し、また袖を掴まれる前に別れた。

この後、意外な形で再会をするとは知らずに。

純情な生け贄と黒のマモノ 4（後書き）

ストーリーの進むペースが遅くはないでしょうか？
次回から、少しずつ物語が進展すれば良いな……。

「フイー、なんか機嫌が良くありませんか？」

「そう？ 別にそんな事はないけど？」

皇居に向かいながら、あたし達は話をしていた。

別にあたしは何も変わらない。いつも通りだ。

リースが納得いかない顔をしているけど、あたしは別に機嫌が良くはない。悪くもないだけだ。

「それはそうと、さっきレイさんから何をもらったんですか？」

「これ？ まだ見てないけど……、お菓子って言ってた」

腰につり下げていた袋から、先ほどもらった包みを出して手に乗せる。

「お菓子ですか！？ ……いつ作ったんでしょう。それとも、持ってきていた？」

「……どっちにしても、お菓子なんて似合わない男よね」

そう、だからこの包みの中身も、実は別の物なんじゃないかと疑っている。疑うのは悪いと思ってるけど、言う事する事全てがなんだか胡散臭い。なのに時たま凄く心に響く事を言ったりする。

本当、よく分かんないー変なおっさん。

皇居と言う建物は、四方を壁で囲まれた所にあった。唯一の出入

り口には立派な門があり、ゆつたりとした紺色の服を着て腰に刀を帯びた人達が見張りをしていた。あたしはよく分からないが、刀とはなかなか素晴らしい武器らしく、大陸でも人気があったので知っている。

その人達に身分を証明して、中に案内されると大きな木造建ての平屋が見えた。凄く変わつてると言うか独特だけど、綺麗な建物だ。柱や廊下に使われている木の一本一本が金のように光り輝いている。何か塗料でも塗っているのだろうけど、魔術師のあたしにはそれ以上の事が解る。その木一本一本が何か魔力に似た物を秘めているんだと。それがこの国で使われる『神聖術』の要になる何かかな。

この国には建物に上がるときは靴を脱ぐと言う風習があるみたいで、あたし達はブーツと靴を脱いだ。足に伝わる木の冷たさとか、靴からの解放感とかで結構気に入った。

この国で一番偉い人のいる部屋へと案内されるあたし達。その途中で見た庭園は立派な物だった。中島のある大きな池が広がっていて、その手前には白砂が敷かれている。マツと呼ばれる妙にくねくねした木ともよく合っていた。

そして、その庭が一望出来る部屋に通される。フスマと呼ばれる扉の前で案内人が声を上げた。

「陛下、アイカシア国のリース・フュリアス殿とそのお供のフィオナ・カロリア殿です」

どうやらあたしの本名までも調べられたみたいだ。まあ、この国で一番偉い人に会うのだし、当然と言えば当然か。フィーは愛称だ。

「お通しなさい」

と、予想外の優しい声が聞こえた。そしてフスマを開けると、声と良く合う優しい男性がいた。あたしはもっと傲慢で高圧的な

人を予想していたので、結構驚いている。

「陛下、お初にお目にかかります。アイカシア国將軍、リース・フユリアスと申します」

「……ギルドのフィオナと申します」

リースが挨拶したので、あたしもそれに習って挨拶する。

リースのメンツが掛かっているので、それとなく敬語っぽいことを言ってみる。ギルドの任務として来ていれば敬語なんて使わない。

「遠い所、わざわざありがとう。早速で悪いが、私の頼みを聞いてくれないか？」

「はい。私どもで良ければ、何なりと」

あたしは嫌な事は言うよ？　と思いつながら、リース達の話の適当に聞いていた。

「私の娘が誘拐されそうなんだ。そこで護衛を頼みたい」

「誘拐……ですか？」

また護衛か……。あたしにはあんまり向いている仕事じゃないのにな。あたしはこう、爆発とかを起こして一網打尽にするタイプなんだけど。

「最近、娘の周りで不穏な動きが見える。突然で申し訳ないが、引き受けてくれないか？」

娘？　あたしは正直、この国の事なんてほとんど知らないのも言えない。リースに言われるままに付いて来ただけなんて、尚更言えない。

「娘さん、巫女のアオイ様ですか？　巫女の中でも一番の神聖術の使い手だと伺っておりますが」

リースは知っていたようで、それに男の人は頷く。

「……わかりました。私どもで良ければ、精一杯努めさせていただきます」

リースは特に迷う事無く言ってお辞儀をする。あたしもそれに習う。堅苦しいのは苦手だな。その巫女様ともこんな感じは嫌だ。

「ありがとう。手だれの男達もいるのだが、娘も年頃の女の子、そう言った者達に身边を護衛させるわけにはいなくてね。本当に助かる」

頭を下げる国主に少しの意外性を感じる。けれどそれ以上に、子供思いなんだなと思った。

—————

僕とアイリはニルベリア皇国首都、シミヤを歩いていた。待ち合わせの時刻は夜中であり、少々時間があつたのだ。

この国の住人はほぼ黒髪、更に魔王は公式記録上既に死んでいるので、僕が僕で行動出来る国でもある。

レイの視点に慣れていたので、僕の視点は少々物が変わって見える。建物がこんなに高かったっけとか、人ごみがこんなに大変だったっけとか、……アイリってこんなに近くにいたっけとか。

「アイリ、ちょっと近くないか？」

「……人ごみで離れてしまうと困りますから。私はこの国の事を知りませんので」

そう言って、アイリは僕と腕を組んでいる。

あれ？　なんか違う。僕の知ってるアイリと何かが違う。

いつものアイリは秘書、付かず離れずの位置にいた。だが今のアイリは言うならば恋人、べったりと僕にくっついている。

……本当、よく分からない子だ。

夜中、宿を取ってから僕らは夜の街を歩いていた。

陰陽術と呼ばれるニルベリア皇国古来の魔術によって、街には提灯で明かりが保たれている。陰陽術は魔術というよりはシステムに近い。この国には精霊というか靈魂の概念があり、それらに頼む形で術を行使している。

この街の街灯は、彼らに日の光が弱くなったら灯すように頼んでいる、といった感じだ。こういう便利な使い方があから、科学が発展しないのだ。

科学者視点の考え方を持つ魔術師だが、わざわざ自分の価値の下がる万人が使える力を生み出す訳がない。

ところで、

「アイリ、近くないか？」

「……夜は寒いですから」

僕に寄り添うアイリ。

そうだね、夜は寒いもんね。僕の胸は凄く熱いけどさ。

それでもアイリの肩を抱く僕がいた。

シミヤの街の外れにある掘建て小屋、そこで依頼人と待ち合わせをしていた。小屋は完全に目張りされ、風どころか光も入らないような建物だった。

というか、光を出さない建物だ。

僕は建物に入る前にレイの姿になる。アイリは付かず離れず、秘書の距離となった。うむ、時と場所は弁えているようだ。

「お待ちしておりました。『Gランクの天才』様とお呼びすればよろしいですか？ 私はクロガネと申します」

そう言っ僕を出迎えたのは、初老の武士だった。腰に刀を帯び、和服姿であるからそんな事を言ったが、その物腰は紳士だ。しかし、クロガネとはなんともカッコいい名前だ。以前は名を馳せた武士であろう。

「ええ、あなたが代理人ですね？」

「……お気付きになれましたか」

僕はそう言っ僕から手紙を取り出し、ひらひらさせる。

舐めてもらっちゃ困る。それでも僕は魔王なんだ。見る目はあるよ。

「あなたはどうか信用出来そうですね。では、依頼内容を詳しくお聞かせ願います」

「いえ、私は何も申しません。この手紙を読まれば、全て理解してくださると存じております」

と、クロガネさんは手紙を懐から取り出す。少々気になるが、僕は素直に受け取りその内容に目を通す。

「……っ!？」

手紙の内容は衝撃的なもので、そして、僕が動くに値するものだった。

手紙の内容は長く、そして少なからず個人情報が書かれていたので、簡潔に内容をまとめさせてもらおう。

僕の依頼――それは、『巫女にして御子、アオイの誘拐』だ。

「受けてもらえますか？」

そう尋ねるクロガネさんの目は、断ることなどあり得ない、と言っているようだった。

「……ふふふ」

「……レイ？」

僕は笑わずにはいらなかった。そんな僕を気味悪そうにアイリが伺ってくる。

そうか、騙されていたのは僕の方だったのか。いやいや、ほぼ嘘の僕なのだから、これで相子と言うべきなのか。

「いいですよ。いえ、僕以上の適任などいないでしょう」

僕は口元を歪めながら、クロガネさんの目を見てそう答える。
クロガネさんの目がきらりと光ったように見えた。

「ただし……」

僕はそこで一度言葉をくぎり、言葉を紡ぐ。
魔王の姿となつてから。

「これは『Gランクの天才』としてではなく、『魔王』として受け
させてもらいますよ」

純情な生け贄と黒のマモノ 6

魔法、『魔の法則』には七つの属性がある。

それは魔法が『悪魔の法術』と呼ばれる事から、七つの大罪の名前で分けられている。魔法が限りなく暴力的な力である事が、罪なといってもいいからだろう。

そして、本来は一つしか使えない魔法を、七つ使える僕が魔王なのだ。

属性『傲慢』

これは強制力を持った魔法の属性だ。隷属の首輪に掛かっているのが、これである。逆らうことの出来ない圧倒的な力を操るタイプの魔法もこれに分類される。傲慢な態度を取れる魔法。

属性『嫉妬』

これは人体に変化をもたらす魔法の属性。僕の複写魔法がこれに該当する。肉体の変質、能力の変化など、基本的に無い物ねだりの属性。嫉妬し続けないための魔法。

属性『怠惰』

時空関係进行操作する魔法の属性だ。時間と言っても思考の加速、体感時間の緩急などの使用者の生きる時間のみの変化で、タイムスリップなどは未だ確認されてはない。未来を見る、過去を見るなどの魔法はありそうだが。また、瞬間移動、転移、亜空間操作などもこれに含まれ、僕の鞆がそうだ。時間を有効に使い、怠惰に過ごす魔法。

属性『暴食』

吸収に関係する魔法の属性だ。僕が半ば毒物に近い料理を食べて

無事でいられたのは、これのおかげである。魔術や魔法の吸収が出来るタイプや、記憶や経験、才能などを奪うものもある。生きるためを通り越した暴食の魔法。

属性『色欲』

これは人心を操作する魔法の属性だ。感情、記憶などの人格や心を構成する要素を操作する魔法。『傲慢』の強制力と対比するなら、『色欲』は言うならば協力だ。心を乱し、色欲を煽る魔法。

属性『憤怒』

破壊と消失をもたらす魔法の属性。全属性中、最悪かつ最凶の属性だ。魔法だろうが現実だろうが、それをなかった事に出来る、奇跡を思わせる魔法。そのため使える者の数も少ないが、レイの魔法だ。気に食わない事をぶち壊し、憤怒しないための魔法。

属性『強欲』

これは物体の所有権に効力を及ぼす魔法の属性だ。物質に限らず、生き物にも効力を及ぼす、物の価値が法則に組み込まれた魔法が該当する。欲した者は必ず手に入れる、強欲な者のための魔法。

今回僕が使用するのは、『強欲』の魔法。

奇しくも、かつて僕が言ったお巫山戯は本当になってしまいそう
だ。

「誘拐……ね。今回は騎士としてではなく、怪盗として馳せ参じようか」

「リースさんにフィーさんですね？ 初めまして、アオイと言います。どうぞ自分の部屋のように寛いでください」

アオイは屈託のない笑顔であたし達を出迎えてくれた。

さらさらのセミロングの黒髪、紅白の巫女服。……悔しいかな、胸はあたしより大きい。リースと同じくらいかな。あたしと一歳しか変わらないと言うのに。

「……私、同年代の人とはあまりお喋りする機会がないので、実は少し楽しみにしてました」

「緊張感が足りませんよ？」

「そうよ。……でも、少しくらいなら寛いでも良いと思う」

そんな感じで、畳に腰を下ろして足を伸ばすあたし。そんなあたしに若干呆れたような顔を見せるリースだったけど、肩を竦めてリースも腰を下ろした。

アオイに巫女の仕事、主に怪我人の治療があつて、日が沈んでからの出会いだった。仕事の様子、神聖術を隠れ見たけど、正直よく解らなかった。魔力は確かに感じるが、どうにも魔術とは何か違うように思える。だから神聖なのかもしれないけど。

夜、少しばかり味気ないけど色々な料理の夕食を頂いた後、あたし達はアオイの部屋でお喋りしていた。十六畳の部屋で、三人分の布団とタンス、それに燭台が数本の質素な部屋だ。

「何か誘拐で思い当たる節がある？」

「……ええと、特にありません。基本的に私は誰でも面会出来ますし、誰かに恨まれるような出来事はないかと……。すいません、何もお役に立てる情報が無くて」
「いいですよ、アオイは気にしないでください」

あたしの質問に、アオイは申し訳なさそうにする。リースがちゃんとフォローしてくれるので、あたしはづかづかと話を聞ける。身代金目当ての誘拐は考えづらい。国主の娘を誘拐するのはハイリスクすぎる。警備は厳重、誘拐後もしつこく追われ続ける事になってしまう。金が目当ての誘拐なら、貴族を狙った方が得策。それならアオイ個人に誘拐される理由があるのかと思ったけど、どうなんだろう。少なくとも金目当ての誘拐じゃないと思う。

「じゃあ……、アオイだけが出来る事とか、何かある？」

「……ええと」

「神聖術はどうなんですか？」

あたしの質問に少し首を傾げて考え込むアオイに、リースが助け舟を出した。

神聖術、それはあるかもしれない。

「……確かに、神聖術は巫女の中では私が一番得意ですが、私でなくとも時間がかかれば皆同じくらいには出来ます。私だけが……というのは………ないですね」

動機が全くの不明、か。

相手がアオイを無傷で誘拐したいのか、殺してでも連れ去りたいのかで対策が変わるんだけど、どうしたものかな。
とりあえず侵入者には死を、でいいかな。

「じゃあ、あたしが一応魔術陣書いておく。入って来た奴を消し炭にする」

「フィー……、それって屋敷にまで飛び火しませんよね？」

「それは少しまずいです……」

そう言って魔術陣を橙色の魔術陣を部屋全体に構築するあたし。

リースとアオイが不安げに見つめてくるけど、そんなにあたしは頼りない？

「大丈夫。時間があるから指向性が付けられる」

「戦闘じゃ付けられないんですか!？」

「軽い魔法なら大丈夫。間違っても半焼くらいだし」

「それはちよつと困ります……」

半焼、という言葉にアオイが俯く。

冗談よ。あたしが間違う訳ないじゃない。

「ところで……、これ食べる？」

魔術陣を構築し終えたので、一安心。ちよつとした気晴らしに、あたしはおっさんからもらった包みを出した。

別に、毒味させようって訳じゃないけど、でも一人で食べるのもまずいかなっていうか……。

あたしがポンと置いた包みを開けて、リースが驚いた顔をした。

「クッキー、ですね」

「フィーさん、良いんですか？ 高級菓子ですよ、これ」

「別に。あと、フィーでいいから。あたしは呼び捨てなんだから」

そう言つとアオイは口元に手を当てて驚く。そして、

「はい、フィー」

笑顔でそう呼んでくれた。

……悪くない。

「では、お茶を入れますね。……クッキーに合うか解りませんが」

「いいのよ、どうせおっさんがくれた大したもんじゃないから。…

…毒は入ってないはず。サプライズの何かも入ってないはず。味もいいはず」

「はずばかりですね。……まあ、それに関しては私も何も言えませんが」

「？」

おっさんだから、そんな理由で顔を見合わせて苦笑するあたしとリースに、おっさんの事を知らないアオイが首を傾げた。

毒味はあたしがやる、というつもりであたしがまずクッキーを一枚齧る。

「……っ！？ ……甘い」

瞬間、口の中に広がるバターの濃厚な味。触感は一瞬と、そして口の中で溶けて行く生地。表面に砂糖が付いていて、優しい甘さが口に広がった。

「凄く……美味しいです」

「本当ですね！」

リースとアオイが食べて、頬を抑えた。比喻なんかじゃなく、本当に頬が蕩けそうな美味しさ。

……どうしよう。一人で食べれば良かった。

「これ、どうしたんでしょうか？ 買って来たにしては随分とサクとしてますし、……作ったんでしょうか？」

「あのおっさんが？ 確かに料理には五月蠅かったし、美味しかったけど……」

似合わない、とリースと二人で思った。

「……おっさん？ こんな凄いお菓子を作る人の事ですよな？」

再び首を傾げるアオイ。

そんなアオイにリースがおっさんの事を説明する。

「レイさんって言う、凄い人……というか変な人です」

「胡散臭いのよ、あいつ」

「レイ？ レイって、もしかして、『Gランクの天才』ですか!？」

そう言ったあたし達に、飛ぶようにアオイは反応した。

え？ 知ってるの？

「レイ……、来たんですね」

「アオイ、レイさんの事、知ってるんですか？」

「はい！ 三年前に山賊に攫われた時、助けてもらったので、恩人ですね」

顔を輝かせておっさんのことを語るアオイは、どこことなく誇らしげだった。

「お二人はどうしてレイと知り合ったんですか？」

「リースの護衛で」

「レイ……、ちゃんと頑張ってるみたいですね」

頑張ってる？ あれで？ 人を馬鹿にしたような態度よ？
あたしが知らないおっさんは、もつと酷かったって事？

「……フイー、なんかちよつと悔しそう。焼きもち？」

「はああ！？ な、何言ってるのよリース！ べ、別に悔しいとか、そんなんじゃないかってーって、なんであたしがあんな奴の事を意識しなきゃならないのよー！」

あり得ない。あの胡散臭い奴をあたしがーッ。
自分でも解るくらい、顔が赤くなっていた。

「そういうリースだって、この前護衛された時、家で雇いたいとか言ってたじゃない！」

「あ、あれはそういう意味ではないですよ！ ただ、優秀だったから家で雇おうと……」

「それ！ あたしもそれ！ 気に食わないけど優秀だから、ちよつと気に掛けてるだけ！」

「……お二人とも、意識していらるんですね。レイの事」
「「違うー！」」

思わず声を揃えて断言してしまった。

だってあいっ……、胡散臭いし、おっさんだし。

人を馬鹿にした態度取るし、魔術は教えてくれないし……。

料理とか、魔術とかだけ見ればちよつとはー、本当にちよつとは！ ……いいのかもしれないけど。
でもおっさんはあり得ないわよ！

「そういうアオイだって、レイさんの話をする時、顔が輝いてましたよ！」

「そうよ！ 元と言えば、アオイがそんな事言うからー」

「ええ。だって私の初恋の人ですから」

「「！？」」

腰を抜かしてしまった。

あいつ、本当に女つたらしじゃない！

「あんな奴のどこが良いの！？」

「一途な所です」

「それは絶対違うと思います！」

澄ましているアオイに、リースとあたしで騒ぎ立てる。

それ絶対騙されてるわよ！？

現に今もアイリを連れ歩いているし、ここには昔騙した女の子の責任を取りに来たってー、いや、あれは誤解だったか。

って、あれ？

「リース、そう言えばおっさんがここに来たのってー」

途端、燭台の火が消えた。

純情な生け贄と黒のマモノ 6（後書き）

感想・意見・指摘などを励みに、九月までは毎日更新を頑張りたいと思います。

純情な生け贄と黒のマモノ 7

僕とアイリは黒のローブを身に纏い、正体が分からないようにする。怪盗らしく、白のマントでも付ければ良いのかもしれないが、生憎と持ち合わせがない。それに、目立ちたくないし。

アイリが付いて来てくれるのは正直、迷惑だった。僕一人ならどうと侵入出来るのだが、アイリと一緒にならこそそそを選択せざるを得ない。

アイリの来ているローブは魔法具のようで、自分か相手がフードを捲らない限り、正体が分からなくなる代物だ。僕のは、自分で作ったものだ。勿論、魔法がかかっている。というか、コレ自体が僕の『傲慢』の魔法だったりする。

しかし、日本屋敷の侵入は厄介だ。

庭に蒔かれた白砂、廊下の板が歩けば音を立てる。

仕方がないので、屋根を伝って行く事にしたのだが……。

「忍者かよ……」

「？」

僕の呟きは、屋根の上にもちゃんといった相手の警備の者と、それをささっと伸してしまうアイリに向けてのものだった。

暗殺者の動きが、身体に染み付いているようだった。

屋根から天井裏へと忍び込み、お目当ての部屋を探す。ネズミと間違えられて、下から突つかれる事も無く（というのも、風のマナ足下に引いて微妙に浮いて音をたてないようにしていたからだ）、事前に渡されていた皇居の間取り通りのお目当ての部屋に着いた。

天井裏で耳を澄まし、下の部屋の様子をうかがう。下の部屋が騒

がしくて、どうやら僕らの存在はバレていないようだ。

「あんな奴のどこが良いのよ！」

「……………な所です」

「それは絶対違うと思います！」

一人はよく聞き取れないが、二対一で誰かが罵倒されているようだ。怒鳴っている声は……………リースとフィー？ 微かにしか聞こえなかったが、どうやらターゲットもいるようだ。

リースとフィー、か。

なんという偶然、っていうか、誘拐する事がバレてるじゃないか。どうしてこうなった？ あの手紙の内容からすれば、誰も気付いていないようだっただけれど……………。

また騙されたのか。やれやれ、一筋縄には行かない人だな。

部屋に意識を集中すれば、微かに火のマナが集まっているのを感じる。フィーが魔術陣を書いたのか。厄介な物を。

大きさは部屋全体を……………部屋全体！？ おいおい、護衛対象と侵入者、両方丸焼きにする気かよ。ん？ 指向性が付けられているのか。いや、それにしたって、炎つてのは空気中の酸素を燃烧するんだ。この魔術を発動させると、部屋の物は燃えなくても、部屋の酸素が全て燃烧するぞ。

さすが引きこもりの偏屈魔術師、護衛を解つてないじゃないか。どうして誘拐する僕が、君等の護衛対象の心配をしなくちゃならないんだよ。

……………仕方がない。

僕は複写魔法で一度フィーの姿になる。そして魔術陣にフィーの魔力を使って、指向性の上書きをする。僕とアイリ、それに部屋の空気を追加した。これで炎は大して燃え上がらないはずだ。

演出ご苦労、とても言ってやろつか。
自分の魔力だからか、どうやら気付いていないようだ。
しめしめ。それでは、突入と参りましょうか。

――――

不自然な風が吹いて、蠟燭の火が全部消えた。それと同時に、天井から黒い影が二つ降ってくる。天井はあたしの予想外だった。

魔術陣に何か仕掛けは――大丈夫、魔術陣は消えていない。

馬鹿め。真つ正面？ かどうかは解らないけど、この部屋に足を踏み入れるなんて。消し炭になりなさい！

足が付くのと同時に、部屋に赤い魔術陣が浮かび上がる。すぐに近づかれても大丈夫のように、部屋全体を埋め尽くす炎の魔術にしておいた。部屋の物を燃やさないように指向性を付けてあるし、大丈夫。

「きゃっ!？」

ゴッ、っと床全体から橙色の炎が天井近くまで立ち上った。アオイが驚いて小さな悲鳴を上げる。リースは何も言わず剣を抜いていた。

炎があたし達の身体を舐め回すように燃え上がるが、その熱は微々たる物で、お湯くらいの温度で気持ちいい物だ。侵入者は地獄の業火に焼かれた気分になるんじゃないかな。あたし自身がくらったことはないから解らない。

と、めらめらと燃え上がる炎の中から、声が聞こえて来た。それは断末魔の叫びじゃなかった。

「用があるのは彼女だけなんだ。大人しくしていてくれないか？」
「なっ！？」

侵入者達は平然と立っていた。そのロープを焦がす事も無く、身じろぐ事も無く。

あり得ない！ あたしの魔術陣は確かに作動していたはず。それを受けて平然としているなんて、化け物だ。

「？いや、それこそあり得ない。きつと魔術の隙を突かれたんだ。何か仕掛けがあるに決まってる。」

「何故アオイを攫うのですか？」

「何故？ 頼まれたからだ」

「……優秀なのに仕事も選ばないんですね」

リースが軽蔑を込めた視線を侵入者達に向ける。灯台の明かりが消えよく見えないが、侵入者達は黒のロープに身を包んでいるようだ。見ただけでは性別も何も伺えない。けど、先ほどから話しているのは、それほど身長も高くなく、少年のような声をしていた。きつと、あたし達と同じくらいの年の少年だろう。

「時間がないんだ。手早く済まさせてもらおうよ」

そう少年は言って、動き出そうとする。

リースがアオイを庇うように前に出て剣を構え、そして――。

「ふえ？」

少年は近くのタンスに手を触れた。た、タンス？

意味の分からない行動に、思わず変な声が漏れてしまう。リースも心情は同じようで、目を見開いて口を微かにぽかりと開けていた。

かなり混乱してるようで、その証拠に、

「……そ、それが、彼女、ですか？」

明らかに見当違いな質問をしている。落ち着いてリース、それは絶対に違うから。

事実、少年は笑いを堪えるように肩を振るわせていた。

「まさか。いやーそのまさかだ」

「はーっ！？」

瞬く間だった。いや、そんな時間もなかったと思う。

少年の声が耳に届いた時には、ダンスはアオイになっていた。

「っ！？」

驚いてリースがちらりと振り返り、そしてさらに驚く。

先ほどまでアオイがいた場所には、ダンスがあった。

な、何が起こったの！？　ダンスがアオイに、アオイがダンスに？　幻術？　それとも……いや、そんなのあり得ない。けど、実際に目の前で起こってー！。

「頼んだ」

だが、驚いていられるのもそこまでだった。

少年はアオイをもう一人の侵入者に渡す。アオイは驚きの連続のせいか、思考が追いつかず停止していた。

「逃がさない！」

あたしは杖をもう一人の侵入者に向ける。部屋にはまだ火のマナが残っている。

「我が友を助け、導く希望の光となれ！」

詠唱することで火炎球に指向性と追尾機能を付加する。侵入者は庭に降りた所、隠れる場所もない。やれる！

と、少年がその進路に出て来た。庇う？ 残念、あたしの火炎球はあんたを避けてあっちに行くよ。それにあんたが集めているのは風のマナ？ 集めてる量は凄いし風を操るなんて珍しいけど、どんなに集めたって無意味よ。馬鹿ね、風は火を大きくするわよ。

火炎球は少年にぐんぐん近寄り、急速に向きを変えるーはずだった。

「え？」

けど、不意に少年が伸ばした手で、火炎球は霧散した。

あり得ない！ こうも何度もあたしの魔法が無効化されるなんて！ それにさっきの意味解らない現象、何よあれ！ 何でアオイとタンスが入れ替わるのよ、そんな魔術あり得ない！ でも、さっきのはマナを集めていたから魔術……？

あり得ないはずなのに……、確かにあたしの目の前で起こってる……。

知らず知らずのうちに、あまりの出来事にあたしはへたり込んでしまった。

――――
踏み込んだ瞬間、足下に赤色の魔術陣が浮かび上がる。

指向性を付けているので、さながらアーティストの入場の演出だ。ゴツと炎が天井まで燃え上がった。指向性を付けたと言うのに熱を感じる。優秀な魔術師だよ、フィーは。

長々といれば僕の正体がばれてしまいそうなので、というよりも口を滑らせてしまいそうなので、僕は早々にターゲットを攫う事にする。

僕の使う『強欲』の魔法は、奪い取った物だ。

かつて、各国の要人の頭が岩と挿げ替えられる、と言う殺人が行なわれた。それは当時名を馳せた一人の殺し屋の所業、??魔法だ。実に哀れな殺し屋だったが、その魔法は優秀だった。

”コレ”と”アレ”を交換する魔法。

自分の手が触れているもの”コレ”と、目に見える範囲にあるもの”アレ”を、過程を省略して交換する魔法だ。

今回は、僕の手が触れている”タンス”と、そこにいる”アオイ”を交換した。

この魔法の恐ろしい所は、間にガラスなんかがあっても、見えてさえいれば交換出来ると言う所だ。

驚いているリースとフィーを尻目に、アイリにアオイを渡す。手はず通り、あの小屋まで。

「頼む」

僕の声で場が動き出す。アイリはネコのようにささ々と庭に降りて駆けて行く。リース嬢がタンスがタンスである事を確認している。

そしてフィーが、魔術を構築していた。

「我が友を助け、導く希望の光となれ！」

『我が友』がアオイ、『助け』で被害が及ばないように、『導く』で追尾、『希望の光』が炎を表しているかな。

追尾型、厄介な。

打ち消させてもらう。

僕は風のマナを馬鹿みたいに集める。集める。

風の魔術は難しい。風って言うのは、高い気圧の所から低い気圧の所へ向かう空気の移動だ。相手を切り裂くような風の魔術を使う場合は、相手の周りの空気を急速に奪う必要がある。

けど各マナを集める事でその事象を起こすのが魔術だ。それにのっとって考えた結果、僕の中で風のマナっていうのは低気圧の箱となった。そしてそれを集めて極端な低気圧の元を作って、最終的に投げ飛ばすと同時に箱が崩壊する。するとその場所に低気圧の空間が出来、そこに空気が流れ込むイメージだ。

ようするに、風のマナっていくら集めても空気にはならない。むしろ、空気を排斥した存在、真空にかなり近い物だ。

映画でやっていた。炎を消すのは真空だって。

ただ風のマナを集めた状態というのは、真空を作れる箱を大きくしている状態。それに魔力を注ぐことで箱が壊れて真空状態出来上がり、空気が流れ込む。

僕は風のマナを集め、それを火炎球に投げつける。

火の玉の魔力で箱が壊れ、真空が出来上がる。

そしてー、火の玉が霧散した。

崩れ落ちるフィー。どうやら、完全に予想外の出来事だったようだ。

ごめん、フィーの常識を壊しすぎたかな？

アイリはもう見えなくなったので、僕だけ逃げ切れれば良いのか。

「っー！」

と、剣が僕の方に伸びて来た。

リース嬢の刺突だ。

これは見た事……、ではなくやった事がある。まずいな、これは後ろに避けても刺突が追尾するし、横に避けても突きが横薙ぎに変化する。

じゃあ、前に避けるか。

直前まで剣が直撃するコースで突っ込み、畳をスライディング。ついでにリース嬢の足下を崩そうとするが、それは跳躍で避けられた。

転がるように僕は立ち上がり、燭台を二つ掴んだ。

そして一本ずつ構え二刀流……、ではなく、二本まとめて右手で掴んだ。

「……なんですか、それ」

「答える義理はないね」

「いえ、答えてもらいます。アオイをどこに連れ去ったのかを」

どうやら、アイリの姿を追えなくて僕に攻撃を仕掛けて来たようだ。

逃げ切れそうだな。

「では、手っ取り早く済ませてしましましょう」

僕はそう言つて、あえて真つ向勝負、剣の打ち合いを望む。

聖剣レイリース、それは凄いい切れ味の剣だと考えておいて良い。ついでに、闇夜を照らす良い照明代わりだ。

打ち合えば必ず、細身の剣だがこちらが負ける。豆腐でも斬るよ
うに全て斬られてしまふのだ。だから真つ向勝負なんて愚の骨頂で
ある。

しかし、それは僕が聖剣の効果を知っているからであつて、知ら
ない者からすれば、あんな細身の剣叩き切つてやるぜ！ となるの
である。

燭台を二本一緒に持ち、その重量で自分の剣を折ろうとしていると
判断したからだろつ。馬鹿ね、そんなの無駄ですよーみたいな。

「はあつ！」

僕とリース嬢は一瞬交錯する。リース嬢の斜め下からの切り上げ
と、僕の斜め上からの切り捨て。武器だけが交差し、そしてー！。

「えつ……」

僕は白砂に着地し、無事の武器を見ててほつとした。

リース嬢の武器が先端から真つ二つに折れ、この日何度目になる
だろつ驚きの表情が伺えた。

聖剣レイリースが折れた訳じゃない。

先ほどまで僕が持っていた燭台が、リース嬢の手に収まっていた。

『強欲』の魔法による、“燭台”と“聖剣”の交換が成り立つた
だけだ。

ありがたく聖剣を貸していただきました。

その出来事に、リース嬢もへろへろと力なく座り込む。ショックと言いか、訳が解らないだろう。

アイカシア国は魔法を認めていないからな。信じられないし、信じたくないだろう。

「少々大変でしょうが、言い訳頑張ってください」

僕は聖剣を置いて、アイリの後を追った。

別に聖剣はいらない。僕は僕で魔剣を持つてるから必要ない。否、魔法剣を持っているから、それ以外の武器なんて必要ない。

「すみません……。力及ばず、アオイ様を攫われてしまいました」

「……………わかつている。少し、一人にしてくれないか」

「あの、すぐにも搜索致します」

「ああ……、よろしく頼むよ」

アオイをあゝの侵入者の少年に攫われ、捕まえることすらできなかった私達は、すぐに陛下に知らせました。彼は力のない顔をしています。

けど、どうしてでしょう。

彼の顔は、娘を攫われた悲しみや怒りなんかではなく、もっと複雑な心情を表しているように見えました。

警備の者達は侵入者を許してしまった事で、より一層皇居の警備を固めているようです。そのため、搜索は私達と数人だけとなりました。元より、事を大事にはしたくないようです。

言いたくはありませんが、少し薄情ではありませんか？

「……………フィー、落ち込んでても始まりませんよ」

「……………うん」

フィーは今、すごく落ち込んでいます。自分の使った魔術が悉く、あゝの侵入者の少年に相手にされなかったからです。

そういう私も、訳の解らない術で聖剣を奪われてしまいましたし……………、あゝの少年、次に会った時に借りを返さないと行けませんね。

「リース様、少しよろしいでしょうか？」

と、警備の男性の一人が話しかけてきました。何でしょうか？

「少々侵入者に關しましてお聞きしたい事があります。魔術師殿にご同行を願いたいのですが？」

「フィーと？」

「……あたしは別に構わないけど」

ぶっきらぼうに頂垂れたまま答えるフィー。なんだか心配です。一人にさせると余計落ち込んじゃいそう。

「えっと、今でなければならぬのですか？」

「はい。少々時間がかかるかもしれませんが、リース様はアオイ様の搜索をお願いしたいのですが」

「わかりました。フィー、大丈夫？」

「平気。別に何の攻撃も受けてないし……」

だるそうに手を振るフィーと私は別れ、そしてアオイの搜索を開始しました。

四方を囲む壁をゆうゆうと飛び越え、周囲に人がいないかを伺った後、僕はレイの姿になる。これで怪しい者を見ました、と言われども、少年の僕とおっさんのレイで明らかな違いが生まれる。他でも無い、リース嬢とフィーが僕の弁護人だ。

小屋に向かいながら、僕はこの依頼を思い返す。

依頼内容は、誰一人殺す事無く、アオイを無傷で誘拐する事。依頼人は、皇居にいる一人の女性だった。

小屋に入る前にも人の気配を伺う。気配は感じないので、今度は元の姿に戻った。アオイと会ったのなら、こちらの姿の方が良いだろう。

偽りの騎士なんかよりも、魔王の方が良いだろう。
扉を開け、小屋に入るとー。

『この手紙をあなたが読んでいると言う事は、ニルベリア皇国まで来てくださったのですね。あのような連絡手段を取ったのは、まだあなたとの絆を取っておきたかったから、という私のわがまま、どうか許してください。』

あなたが疑問に思っている点をいくつか説明します。

まず、この国には凶悪な魔物が存在します。それを暴れさせないため、十年に一度、若く魔力の高い女性を生け贄として捧げてきました。それにより、この国の平和は保たれています。

けれどそれは隠蔽されている事で、まず一般人は気付いていません。また、この国の貴族と呼ばれる者達も知りはありません。知っているのは、皇居、もしくは神社と深く関わりのある者のみです。

ですから、あなたが何かこの国にまずい事が起こっているのではと考えられたのは、当たっています。

今年で前回の生け贄から十年が経ちます。

聡明なあなたなら、もうお気づきでしょう。

生け贄は、その年で最も魔力の高い者を選びます。

生け贄に選ばれた者で生きて帰って来た者はいません。皆、魔物

に食われたのだと思います。国を思つて死んで行つた彼女達の遺志を継ぎ、今年の生け贄も一切の私情を挟まず、一番魔力の高い者が選ばれました。

最低な事だとは解っています。

これまで死んで行つた生け贄の少女達の願いを踏みにじる事だと何も知らずのうのと生きている一般市民の皆さんの命を危ぶめる事だと。

苦渋の決断をしたー、父をより一層苦しめる事だと。

だけどー、私は死にたくありません。

あなたに助けてもらった命を、こんな下らないことで使い捨てたくありません。

だから、お願いします。

生け贄の御子をー攫ってください』

小屋に入つた瞬間、どんと衝撃を受けた。一人の命の重さを僕は受け止める。

重いじゃないかよ。人の命は、随分と。

受け止めたその人物は、手紙の差出人にして依頼人、巫女にして御子??。

アオイが僕に抱きついて来た。

整つた顔立ちで日本人形のように可憐だ。肩まで伸びた黒髪と紅

白の巫女服がよく似合う。

上目遣いの彼女に、僕は笑顔で語りかける。

「久しぶり、アオイ。大きくなったし、可愛くなったね」

どこがとは言わないよ。

「お久しぶりです。女性の扱い方を少しは心得たんですね。そして、ありがとうございます」

ニコリと笑うアオイ。

「国を捨てようとする私を助けてくれて、本当にありがとうございます」

「だから僕が助けるんだけどね」

「？」

彼女の自嘲の入った台詞に、僕はニツと笑みを浮かべる。何を言っているのか解らず首を傾げるアオイの黒髪を梳きながら、僕は言葉をつないだ。

「国を捨てるなんて、統治者の娘として最悪な事じゃないか」

「はい」

「それに何だ？ 国のために犠牲になることがくだらない事だって？」

「……はい」

「まるで悪女だな、アオイは」

「………はい」

何を素直に頷いているんだか。一つくらい否定してほしかった。

だが、それが良い。

僕はアオイの頬に手を添えて、真っ直ぐに見つめ合う。
だってそれは。

「魔王の僕に相応しいじゃないか、アオイ」

「はい！」

国のために犠牲になる？ 本当にくだらないな、それ。
魔王の僕からすれば、国なんて個人を守るための道具でしかない
よ。

一人は皆のために、皆は一人のために。

一人だけが頑張るようになったら、そいつはおしまいさ。

あたし……全然役に立たなかった。

二つ名を持って、ちよつといい気になりすぎてた。自慢出来るよ
うなものでもないし。

あたしは、変に頭が固すぎるのよ。そうだ、そうに違いない。

もっと柔軟に頭を働かせれば、きっとあいつなんてコテンパンに
出来るはず！ 無敵なんてこの世には存在しないんだから。どんな
者にも終わりはあるのよ！ ……あれ？ これって結構ぶっそうな
事かな？

そうと決まれば早速、……おっさんにあの変わった魔術を教えて
もらおう。あの水を沸騰させる奴。いつその事、師事してみようか
な。

なんやかんや言って優しいし、修行が終わったたらお菓子をくれる
かも。

よし！ アオイを見つけたら、おっさんをお願いしてみー！。

「フィオナ殿、どうかされましたか？」

「ふえ？ あっ、何でもないわよ」

危ない危ない、思わず握りこぶしを見られてしまう所だった。

「陛下、フィオナ殿をお連れしました」

「入ってくれ」

って、あれ？ 何でアオイの部屋じゃないの？

部屋にもなんかたくさん人がいるし。

「フィオナ殿、急に済まなかったな」

「……いえ、あたしは別に」

「唐突で済まないが、フィオナ殿の魔力はどの程度のものだ？」

「えっと、普通の魔術師三十人分ですけど……」

そついうと、おおっと部屋の人達がざわめく。

え？ 何？

……なんか、嫌な予感がー。

「なっ……」

どずつ、と首元に衝撃が走ったのはその瞬間だった。頭からふつと力が抜けて、考える事も出来なくなる。

あたしの耳に最後に聞こえたのは、

「すまない」

という、この国の主の声だった。

――

ニコリと花が咲いたような満面の笑顔を見せ、僕に身を寄せるア
オイ。……ジト目でアイリが僕を見ていた。ほっといてくれ。

「私は、魔王にお似合いの悪女ですか？」

「うん。僕にぴったりの悪女だな」

けどさ、まだ少し足りないんだ。

せめて何かを貢いでくれよ。

「じゃあ、僕のためにもう少しこの国にいてくれよ。次に会う時に
は、魔王と政略結婚しないか？」

「政略結婚ですか？ いいですね、それでこそ私は『悪女』です」

じゃあ、ちょっと魔物を倒しに行ってくる。

生け贄なんて悪習、ここで潰えさしてやるよ。

家族を引き裂きたくないからね。

純情な生け贄と黒のマモノ 9

魔法使いに取って、戦闘なんて茶番に過ぎない。

先に見せた『強欲』の交換魔法を使えば、目に見えている物と適当な物を交換出来る。

例えば、『相手の頭』と『そこらの岩』を交換。頭でなくとも、目玉、手、足……部位を強制的に交換する事が出来る。そこにいくつかの制約は付くが、ほとんど気にしなくて良いような物だ。それ故にこの魔法で最凶と呼ばれた殺し屋が生まれた。

正直、魔物なんて怖くない。

まして、そいつが潜んでいるのが山の奥、人目につかない場所だと言っただから尚更だ。

思う存分、魔王として力を振るえるじゃないか。

鞆に入ればなしかった魔法剣を使う良い機会かな。でも怪我するのは嫌だし、手っ取り早く頭を適当な物にすぐ替えても良いな。

僕はそんな軽い気持ちで鞆を置いてある宿屋へと向かっていた。

アオイはアイリと一緒にいる。クロガネさんが用意してくれたあの小屋には、人目を避ける結界が張られており、その存在を知る者しか知覚できないらしい。

念のために僕の最高傑作である魔宝石を二人に渡してあるし、後は僕が魔物を倒して、レイとしてアオイを皇居に届ければおしまいだ。

レイの格好は戦わない時向け。スペックは高いが、戦闘には向いていないのだ。眼鏡がないと先が見えないし、激しい運動をすると三日後に筋肉痛になる。

今はレイの姿で宿屋に向かっている。一応だ。僕の背格好が指名手配されていると厄介だからな。

「レイさん！」

と、背後から声がかけられた。この声はリース嬢だ。が、凄く焦っているようだ。何か茶化そうかと思ったが、それは止めておこう。

「どうしました、リース嬢？」

「レイさん！ フィーが！」

生け贄は、若くて魔力の高い女性。

「ーっ！！」

フィーは、偏屈魔術師の二つ名を持つ優秀な魔術師。

フィーは、昨日は皇居にいた。

アオイは御子で巫女、そしてー生け贄。

そして、昨日誘拐された。

誘拐が何故バレていた？

どうして生け贄を攫われて、必死に探そうとしない？

何故クロガネさんはアオイを誘拐する事を良しとした？

国が滅ぶのと一人の少女の存命を、本当に天秤にかけて選んだのか？

「ー冗談じゃないぞー！！」

「レイさん！？」

リース嬢の言葉を最後まで聞かず、僕は走り出した。

装備なんて何も持っていない。鞆すらも取りに戻っている時間はない。
なかった。

あの中に入っている魔法剣も、巨大な、それこそ龍の頭部と同じ
くらいの鉱石、すなわち当初の討伐道具を所持していない。

居ても立つても居られず、僕は聞かされていた場所、『邪龍の溪
谷』へと向かった。

――――

「……ん」

目が覚めた時、あたしは地面にうつ伏せで倒れていた。

寝起きのためか変に身体が麻痺していて、だんだんと冷たい地面
の感覚が解ってくる。

あれ？ 何であたし地面の上で寝ているの？

そう考えて起き上がったが身体に力が入らず、ぺたりと座
り込んでしまった。変だな、何で身体が……。

思い出した！ あたしは、隣に立っていた男に手刀を叩き込まれ
て気を失って……。ぺたぺたと身体をまさぐり、何もおかしな事を
されていないのを確認する。大丈夫、服も身体も持ち物も何もされ
てない。杖も傍らに落ちてるし。

きよろきよろと辺りを見渡せば、どうやら谷にいたようだった。

山が近く、その頂きに雪が残っているのを確認出来る。見れば、
シミヤの街も確認出来る。身体が動くようになれば、歩いて戻れな
い距離じゃない。

とりあえず、身体が動くようになるまで座つてよう。

……少し気になるのが、あたしを挟むように立っている二本の燭
台だ。崖の上に祭壇と思われる台があるのも気になる。何かの儀式

に使うのかな？

そこまで這って、崖の下を覗いてみる。

「ひっ！」

下を覗けば、底が見えない谷が広がっていた。落ちたら間違いなく死ぬ。

と、不意に谷から地響きに似た唸り声が聞こえた。

「なっ、何……？」

次の瞬間、突風が吹き荒れ、燭台の火を消し、あたしを吹き飛ばした。

そして、巨大な影が姿を現した。

「りゅ……龍」

緑色の鱗に覆われた巨大な体躯に、獰猛な目つき。鋭い牙が口から覗き、今にもあたしを喰らってしまおうかと半開きになっている。

「あっ……あ」

身体が……動かない。口も麻痺したように震えてる。

薬や手刀の後遺症が原因じゃない……これは恐怖。本能が理解している。

こいつには絶対に敵わないーと。

あたしが何をしようとも、絶対にこいつには敵わない。最高の威力の魔術を使っただって、リースが立ち向かったって、傷一つ付ける事は出来ないって。

それと同時に、あたしが何故ここにいるのか理解した。

生け贄だ。

あたしは、この化け物の生け贄に捧げられたのだ。

決して誰も敵わない存在。だから、こうして生け贄を差し出す事で、この国の人達は生きながらえているんだ。

これはきつと、アオイを守りきれなかったあたしへの罰なんだ。

……リース、ごめん。きつと悲しい思いさせちゃうよね。

あたしなかが友達になって、ごめん。あたしはずっと研究室に引き籠つてれば良かったんだ。そうすればー。

うつん、そんなの考えられない。リースと出会わなければって考えたけど、それはきつと今よりも辛い。

偏屈魔術師と呼ばれ、他人から避けられて研究室に引き籠るしかなかったあたし。それを外に連れ出してくれたのが、リースだ。

あたしは、好きで一人になる事を選んでない。あたしは、誰かと一緒にいたかった。自分しかない部屋は静かで、凄く寂しかった。

だから、ごめんね。あたしのために、泣いてもらって良いかな？

龍の雄叫びが、再度あたしの身体を震えさせた。そしてそれを発した巨大な龍の口があたしに迫る。

覚悟を決めーうつん、諦め切って、あたしは目を閉じた。

そしてー、あたしの身体がふわりと浮いた。

痛みなんて感じない、一瞬で天国に旅立った。

「間一髪でしたね」

「……………え？」

けど、そのお迎えは、天国には相応しくない胡散臭い声。
恐る恐る目を開けると、優雅な表情のおっさんが、あたしをお姫様だっこしていた。

――――

間一髪だ。
リース嬢を振り切ってからレイの姿から戻り、『邪龍の渓谷』まで全力疾走した。龍に食われそうなフィーの姿が見えてレイの姿には戻れず、抱えて龍から距離を取って始めて、僕はレイの姿に戻った。

色々、間一髪だった。

フィーが目を瞑っていなければ、僕の正体がまたバレる所だった。レイの姿に戻った瞬間、身体から力がぐりと抜け落ちる。やはり、僕は僕であつた方が身体能力は高いようだ。さすがはおっさん。

「フィー、動けますか？」

「……え？ ……な、なんで、あんたがここに？ ひゃっ！？ 何するのよ！」

驚いているフィーのお尻を撫でて、身体の緊張はほぐしてあげる。口元を両手で押さえると言う、可愛らしい反応が返って来た。殴られると思ったのに。

口は動くが、どうやら走ったりは出来なさそうだ。

「は、早く逃げるわよ！」

「フィー、まさかあなた、僕にこのままあなたを抱えてあの龍から

逃げると？ 冗談じゃありませんよ、そんな疲れる事出来ません」

その他にも、ここで生け贄を逃がしてしまったら、この龍が暴れるんじゃないかと言う気がかりもある。シミヤの街と大分近いし、すぐにでも大きな被害が出るだろう。

それが解らないーまあ、多分生け贄の必要性とかを知らないフイーは、もの凄く見当違いな事を言い出した。

「あ、あたしが重いから運べないって言うの！？」

「誰もそんな事は言っていないですよ。……いえ、重たいのは否定しませんが」

「かふっ！！」

声にならない変な悲鳴を上げるフイー。うむ、女性に重い発現はまずかったかな？ 後でフォローしておくか。

僕はフイーを一度地面に下ろして、目線をあわせるためにしゃがむ。

そして、

「目を瞑っていてください」

「え？」

「フイー、良いですか？ 絶対に目を開けてはいけませんよ？」

僕はフイーにそう伝えて、龍と向き合った。今まで茶番に付き合ってくれてありがとう。そして、これからの劇の嚆ませ犬役、お願いします。

緑色の鱗に身を包んだ、全長五十メートルはあろうかという巨体。ワニの頭に蛇の身体、それにトカゲの手足でも付けたような、知性の欠片も芸術性もない化け物だ。

ようトカゲ野郎。

尻尾切って逃げ出すなよ？

僕は『暴食』の魔法を発動させる。

本物のマモノって奴を見せてやるよ。

僕の頬骨が大きく歪んだ。

「目を瞑っていてください」

「え？」

「フイー、良いですか？ 絶対に目を開けてはいけませんよ？」

そう言つて、おっさんが離れて行つた。馬鹿じゃないの、こんな状況で目を閉じてるつて、あたしに死ねつて言つてるの！？

けど、あたしは目を閉じた。きつと、見てはいけない何かがあるのだろう。見てしまえば、もう戻れないような何かがある。

何となく、おっさんが微笑んだような気がした。

何が起こつているのか解らないが、不意に地面が揺れた。何か大きな気配を感じる。これはまるでー、

大きな魔物が歩くような振動？？っ！！

「レイっ！」

レイがやられた、そんな気がして思わず、目を開けてしまった。目を開ければ、そこには？？レイはいなかった。

「えっ……」

絶望感があたしの心を埋めて行つた。

何せ代わりに目の前いたのは、一匹の黒いドラゴンだった。

艶やかな黒い毛が全身を覆つ、建物程の大きさのドラゴン。谷に

いる龍と比べれば小さいけど、それに勝るとも劣らない威圧感を持っている。

「……増えてる！ 冗談じゃないわよ！」

もしかして……レイ。

数が増えたから、あたしを生け贄にして逃げた？

それ酷いじゃない！ ちょっとカッコいいと思ったのに……。

「……きゃっ！」

不意に、ドラゴンがこちらを睨んだ。黒い大きな瞳が、あたしをじっと見つめる。

その瞬間、あたしは飲み込まれた。

ドラゴンの口にーじゃなくて、その雰囲気。どこことなく感じる不思議な心地よさ。きつとそれは？ 安心感、だと思う。

どうしてかは分からないけど、こいつはきつとあたしを助けてくれる。

何故か、そう思った。

ドラゴンが雄叫びを上げ、翼を広げる。一度、羽ばたいたように見えた。次の瞬間には、突風が舞い上がりドラゴンは視界から消えている。

空だ。いつの間にか夜が明けていて、青空が広がっている。そこにはぼつんと小さな黒い点が見えた。黒い点ードラゴンはそこに停滞し、次の瞬間、何か白い光が龍に向かって放たれた。

バシユン！ と熱線でも浴びたような音が聞こえ、龍が呻き、その全身を露にした。

「うわっ……」

大きいと言うよりも、とてつもなく長い。自分の身体で絡まりそうなの位長い。あのドラゴンと比べるとすごく……気持ち悪い。

龍はすると宙を登り、ドラゴンと対峙する。

二匹が雄叫びを上げ、そしてー。

龍が爆発するように、たくさん光を放った。

否、あれはドラゴンの攻撃を一瞬のうちに大量に浴びたのだ。苦しそうに呻く龍の声があたしの耳まで届いてくる。ドラゴンは空を縦横無尽に飛び回り、一点に留まらず攻撃を続けている。

あたしのドラゴンは圧倒的じゃない！

へ？ あたしのじゃないって？ 何でも良いでしょ。

と、龍もただやられているだけじゃなかった。胴体に比べれば短い手でドラゴンを鷲掴みにしようと身体をくねらせー、掴めない。その大きな口でドラゴンに噛み付こうとー、噛み付けない。

ドラゴンは一度羽ばただけで、瞬間移動するように動く。軽い身体を強力な推進力で動かしているみたいに、かくかくとした動きだがもの凄く速い。龍の頭の方にいたかと思えば、尻尾の方にいるのだ。それに比べれば龍の動きはゆったりとしたものだ。身体が長い分だけ、まだそこにいたのか、と感じてしまう。

不意に、龍が天を向いて口を開けた。激しくぶつかる攻撃を無視して、一心不乱に集中しー、驚く程の魔力がそこに集められていた。

「な……何よあれ。あんな魔力……信じられない」

凄く離れているはずなのに、あたしの肌が震える。大量のmanaが龍の口元に集められ、それを馬鹿みたいな魔力で巨大な炎としていた。

山を消し飛ばす威力、それが比喻じゃなくて実現しそうな程の魔

力の量。

間違いじゃなかった。あたしなんかじゃ、あいつには絶対に敵わない。ううん、この世の人間と呼べる生き物であいつに対抗出来る者はいないと思う。

だけどー、人じゃないのなら、あのドラゴンならーあいつを倒せると思った。だからあたしは、

「頑張つてえ!!」

魔術の詠唱でもなく、単純な応援に声を張り上げた。

声が届いたかどうかは解らない。ただ、ドラゴンが攻撃をやめ、龍と対峙した。真っ向勝負を挑むように。

それと同時に、龍はマナを集めるのを止め、圧縮させていく。

龍がドラゴンを睨んだ、ように思えた。距離が離れていて見えやしないのだ。

そして、その圧縮された炎が一筋の光となってー。

ドラゴンに飲み込まれた。

光はドラゴンの口に飲み込まれーそして、そのままだった。何も起こらない。ただ、純粹にー喰われた。

ばかりと、あたしは口を開けていた。それは炎を放った龍も同じだった。

信じられなかった。莫大な量のマナを、飲み込んだのだ。吸収量にも許容量があるでしょ、普通。

そして、間抜けのようにばかりと開けた口に、今度はドラゴンが熱線を放った。先ほど喰らった攻撃を練り込んだような、今までに

ない強力な攻撃。

ドラゴンの放った熱線は飲み込まれる事無く、龍の口を貫通し――龍の身体がぐらつく。そして、次の瞬間には龍の巨体は落下を始めた。

「やった！ 勝ったんだ！ 凄い！」

けど、それもつかの間の喜びだった。
龍があたしの真上に落ちて来ていた。

「きゃあっ――！」

慌てて避けようとして、つまずく。まだ身体が万全じゃない。これは、あの警備に薬でも盛られた？ 冗談じゃないわよ！

視界は既に龍の巨体の影に入り、暗くなっていた。
ぎゅっと目を瞑り、衝撃に身構え……。
突風が吹いた。

「……えっ」

あたしは、空を飛んでいた。ぐいぐいとロープが身体に食い込むが。

ドラゴンがロープをくわえて、あたしを助けてくれた。
後ろを見れば、龍の身体が力なく谷に落ちて行く所だった。所々で谷にぶつかると何の反応も示さない。本当に倒されたのだと解った。

「ありがーって！」

ドラゴンに感謝、したかった。けど、それどころじゃない。

ちよ、ちよつと！ 脱げちゃう！ ロープが脱げちゃう！ 暑いから下は下着なの！

ばたばた暴れるあたしの意志を汲み取ったのか、ドラゴンはロープを離れた。

「……え？ それはないでしょ！？」

谷の真上で。

すぐさま落下するあたしの身体。風が心地――良くない！ 死んじゃう！ この高さから谷に落ちたら死んじゃうって！ 助けてくれた訳じゃなかったの！？

と、恨めしそうに空を見上げると、そこに――ドラゴンの姿はなかった。

薄情者！ 助けるなら最後まで助けなさいよ！

「……へ？」

もの凄く理不尽な事を考え落下しているあたしだったが、ぽふりと柔かな触感を感じ、その落下が止まった。

ドラゴンの背が、あたしを受け止めていた。

ドラゴンの毛は思ったよりも柔らかく、さらさらとしている。魔物のはずなのに、どこか神聖な生き物のように感じてしまう毛並みだ。

落ちないように首元にしがみついても暴れないし、黒い毛は綺麗でいい匂いもする。何だ、良い奴じゃない。よしよし。

……自分でも酷いと思う心変わりだった。

ドラゴンの目を覗くと、何か言いたげにあたしを見ていた。が、何も言わない。言えないのかもしれないけど。

「ふああ……」

と、緊張が解けたからか、急に眠気が襲って来た。

……ああ、やっぱり薬……盛られてたかな。

なんだか凄く……眠たいよ。

そつとドラゴンの目を見ると、やはり何か言いたげな目であたしを見ていた。……何故だか、その目はどこかで見た事があるような気がした。

「……い。ファイー!」

「……うん? ……リース?」

「ファイー! 気がついたんですか!」

目が覚めると、どこかの街道だった。また地面で寝てる。今度は木に寄り掛かってたからまだマシだけど。けど、森の中じゃない。魔物に襲われたらどうするつもりだったんだ、あたし。……あたし?そして、リースに抱きつかれた。

「リース……、ごめん。心配かけさせちゃった?」

「心配しました! ……でも、無事で何よりです」

ニコリと微笑むリースは、天使みたいだ。
つと、そうだ。

「リース、レイを見なかった?」

「レイさんですか？　そう言えば！　レイさん、フィーの話聞いて一目散にこっちに向かったんですよ。会いませんでしたか？」

「……会ったけど」

……ふうん、それは褒めてあげたいかな。

で、奴はどこに行った？　あたしは言いたい事がたくさんあるんだけど。

「おや？　お二人とも、ご無事で何よりです」

と、ぬけぬけと森の中から出てくるレイ。

「レイさん！　フィーを助けに行ったのではなかったんですか？」

「そうよ！　あのときはどこに行ってたのよ！」

「それより二人とも、黒いドラゴンを見ませんでしたか？」

あたし達の詰問をさらりと避けて、レイはそんな事を言った。

黒いドラゴン……、あたしは知ってるわよ？

あんたと違って、あたしを助けてくれたんだから。

「いやあ、フィーを助けに行ったのは良かったんですが、数が増え

てしまっていて。一匹だけならなんとかかなと思うんですが、二

匹はちよつと……」

「で？　アンタはあたしを置いて、とんずらした訳？」

「失敬な。戦略的撤退と言ってほしい」

胸をはってそんな事を言うレイ……ううん、おっさん。

ダメだコイツ、早く何とかしないと。

純情な生け贄と黒のマモノ 10 (後書き)

次で第一章は終わりです。

エピソード

僕はやっぱり魔王だ。

黒いドラゴンへの変身は、三つの属性の魔法で出来上がっている。『嫉妬』でドラゴンの肉体となり、『傲慢』で熱線を放ち、『暴食』で魔力を喰らう。『嫉妬』でドラゴンに変わっただけでは、普通のドラゴンに見合った力しか出せない。間違っても、あの龍よりは低スペックになる。そこで『傲慢』な力、高威力な熱線を使えるようにした。更に『暴食』で相手の攻撃を吸収である。本来なら一つの属性しか使えない魔法を、七つ全て使える僕に死角はなかった。

おまけに、複写魔法で大概の魔法はものになっているし。改めて、僕は化け物だな、と思ったよ。

夜、一人で宿屋に籠っている時、そんな事を思った。

あの子の事だ。

「アイリと……そこにいるのはアオイ!？」

「アオイ! 無事だったの!？」

僕は二人を小屋に案内し、たまたま偶然見つけた小屋でアオイを見つけた事を話した。いや、嘘なんだけどさ。

そして、アイリに保護させて、僕は皇居に向かって途中にリス嬢に会ったのだと。その後、フィーを助けに向かって忘れてしまっていた申し訳ない、と。

おまけに助けに行ったフィーを置き去りにして逃げ出した事になっているのだから、僕の評価は滝の如く落ちた。

アオイに説明されて、ご立腹ながらもフィー達は納得した。そして、誘拐犯は誰だったのか？と首を傾げつつ、意味ありげに僕を見ていたような、見ていなかったような。

ちなみに納得したと言っても、慰謝料を大量にせしめて、なんとか納得したと言つて良い。友達の親、引いては国からお金を奪う事に躊躇はなかった。そこに僕は甚く感服した。けじめ^{いた}って奴だ。

そして、もらったお金で早速大量の買い物に。国の内部でお金を回すようにちゃっかりと仕向けているアオイ。

僕？ 勿論、荷物持ちに連れ回されましたよ。

いやはや、どこの国の女性も面白い物はお好きなようで、久々に『Gランクの天才』として活躍させてもらいました。鞆にしまっただけだが。

フィーとリース嬢から怪しむような視線を受けたのは……、恐らくあれが原因だ。『強欲』の交換魔法。まあ、これは僕が作った物じゃないの一点張りで押し通したが。あれ？ 墓穴掘りまくりじゃない？

そんな女性陣は今、アオイの部屋でパジャマパーティー(?)をしている。お泊まり会と言う奴だ。明日にはこの国を発つので、最後のおしゃべりなのだ。

僕と同じ部屋にアイリが泊まっていると何者かがリークしたようで、僕は虐げられ、アイリはパジャマパーティーに参加する事が決まった。

で、女性陣が恋バナとか、枕投げでもしているであろうこの時間、僕が何をしているのかと言うと……。

覗き……じゃなくて、裁縫だ。

いや、本当仮想人格^{レイ}βには驚かされるよ。何年も使つて来たと言うのに、未だ僕の予想外の事をしでかそうとする。お前、彼女達の覗きをしてバれてみるよ。明日には海のもずくだぞ。藻くずじやなくて、見せられないよ！ で隠されて海に黒い繊維となって浮かん

でるぞ。

いや、本当もう懲りたよ。アイリと同じ部屋というのがバレて。アイリが弁護しないのも悪いが、フィーとリース嬢は僕の事を悪魔だの女性の敵だの散々罵倒してくれたもの。

で、今やっているのは御機嫌取りの人形作りだ。

勿論、それだけじゃない。キーホルダー程度の大きさで、内部に最高傑作の魔石を入れてお守りにしてみた。

にゃんこの人形だ。僕はネコが好きである。

朝日が昇る頃、僕は散歩をしていた。徹夜だった。

いや、この時間から寝ると起きるのは明日の朝になりそうだからと、リース嬢が海を眺めているのを見つけた。

「お早いですね」

「……レイさんこそ、こんな朝早くどうしたんですか？」

僕がそう声をかけると、リース嬢は微笑を浮かべた。

「散歩です。人ごみが嫌いなんですよ。時たま喧騒が溢れる夜と違って、朝はいつも静かですからね。僕はよく早起きするんですよ」

今回は早起きじゃないんだけどね。

夜も好きだが、散歩をするなら早朝が一番良い。

夜に散歩していたら不審者扱いされたとか、そんな経験はないよ。

「……隣、来ませんか？」

不意にリース嬢はそう言った。リース嬢は防波堤に身体を預けて、

朝日が昇るのを眺めていた。綺麗な金髪が輝いていて、もの凄く絵になる。

「僕なんかで良ければ」

僕はそう言っ、リース嬢の横に行く。

これで、誰も絵にしたがらない構図の完成だ。
近づき過ぎず、遠過ぎもしない距離を取る。

「……………」

「……………」

微妙な距離感を保ちながら、僕らは無言で朝日が昇るのを眺めた。
気まずい、というよりも、朝日の美しさに感動している、と言っ
てくれ。

「……私、レイさんのこと誤解していました」

「はい？」

唐突に、リース嬢は語り出した。

恥ずかしいのか、僕の方を見ずに俯きながら。

「アオイから聞きました。レイさん、見かけに寄らずロマンチスト
なんですね？」

「ちよつと待ってください。……何を聞きました？」

「くすつ、教えてほしいですか？」

焦る僕をくすくすと笑うリース嬢。そして、小悪魔チックに微笑
み、その薄桃色の唇に人差し指を添える。

……反則だ。

「……いえ、聞きませんよ。………しかし、なんと云うか、恥ずかしいですね」

やばいよ。

僕がアオイに話した内容って、結構赤裸々な内容なんだよ。特に、僕の前世での話が……。あの頃の話はあまりしたくないんだよね……。

「私は……見直しましたよ？ レイさんの事」

「見直した？ はははっ、冗談でしょう」

焦る僕に調子に乗って顔を近づけて来るリース嬢。

だが残念だな。僕は仮想人格βという逃げ道を持っているんだ。

僕は近寄ってくるリース嬢の頬に手を添えて、微笑んだ。

「惚れ直した、の間違いじゃないですか？」

間違えた。

逃げ道じゃなくて、茨の道だ。

顔を真っ赤にしていたのは、僕とリース嬢、一体どちらだったのか。

「リース嬢、顔が赤いですよ？」

「こ、これは、朝日のせいです！」

……夕日じゃないんだから、その言い訳は苦しいよ。

リース嬢と別れて宿屋に戻ると、宿屋の横にある狭い路地で、フイーが拳動不振な行為をしていた。宿屋の一室を見上げて、首をブンブン振ったかと思えば、ちらりとまたその部屋を見る。それを繰り返していた。

何やってんだ、あの魔術師。新たな魔術の開発？

その冗談はさておいて、しかし別の冗談を吹っかける。

「怪しい奴だ。何をしている！」

「ひゃっ！　ち、違うの！　これは、その、ちょっと待ち合わせをしていて！　そ、その、べ、別に怪しくなんかーって、おっさん！？」

珍しく渋い声を出したので、僕だとバレなかったようだ。

目をパチクリさせるフイーを、にやにやと眺める僕。

正体が分かって、からかわれたのも分かったのか、プクリとほおを膨らませるフイー。

「……何よ、言ってくれば良かったのに」

「おや、待ち合わせとは、僕の事だったんですか？　おかしいですね……、僕にはそんな記憶はないのですが」

「……あっ」

まるでロミオのようだったよ、と言っても伝わらないよな。

思い返すと恥ずかしくなったのか、頬を赤らめ俯くフイー。

さて、からかうのもここら辺にしておこう。

「……いえ、そう言えば最近、僕は物忘れが酷くなっていましたね。フイー、遅れてすいません」

「???!!　わ、分かれば良いのよ！　分かれば！」

僕が頭を下げると、途端に元気になるフィー。先ほどまで、借りて来たネコの様だったのに。首根っこを掴んで持ち歩けそうだった。

「それでフィー、こういった用件ですか？」

「あー、えっと、……そうね。長くなるから、食事と一緒にどう？」

また僕に料理を作れと言うのかな？ そいつはお断りだ。
君、僕の目の下の隈が見えないのかい？

「宿屋の食堂で良ければ」

「……うう、まあ、仕方ないわ」

可哀想に、宿屋のおかみさん。仕方ない呼ばわりだよ。

僕としては、おふくろの味って感じて好きなんだけだな。

それならばと宿屋に入ろうと踵を返しー、僕の袖を掴むフィー。
またですか？ 何ですか？ 引き止められるのはちょっと嬉しいんだけど、転びそうなんだけど。

「……その前にさ、ちょっとしゃがんで」

「はい？ 何ですか、唐突に」

「い・い・か・ら、しゃがんで」

言葉に合わせて指を上下に振り、腰に手を当てて有無を言わせぬ態度のフィー。

僕は首を傾げつつも、素直にしゃがんだ。

フィーが僕の頭を撫でた。

「……フィー、さん？」

「………なんか違うわね」

しばらく撫でた後、ぱつと手を離すフィー。

……あー、もしかしてドラゴンになっていた時の僕と対比？
いやいや、正体はバレてないはず。……多分。絶対とは言い切れないが。

フィーはしゃがんで惚ける僕を追い越して、くるりと一回転、含み笑いを浮かべた。

「ほら、あんたの奢りでしょ！ 早く！」

やれやれ、今日はとんだ厄日だよ。

よっこいしょと、おっさんのように言って、僕は腰を上げた。

フィーとの食事と会談を（侵入者が見せた魔術の原理を説明してほしいという内容だったが、見てないから分かりません、で）済ませた。その後、荷物を取りにフィーが皇居に行き、僕は宿を引き払って港に向かいながら街をぶらついていた。

と、アイリが若い男達に絡まれているのを発見。相手は黒髪のせいか、ちゃらいという印象は受けないが、やっている事は同じだった。

やれやれ、僕の可愛い秘書をナンパしないでほしいな。

「待たせてごめん。すいません、彼女は僕の連れなんです」

僕は胡散臭いおっさんの笑顔を見せて、アイリの肩に手を置く。
おっと、嫌かな？ アイリ、僕がおっさんの姿をしている時は避けるから。

気付いてない振りをしていたけど、この国に来てからは顕著で、

さすがに僕も理解したよ。だから、嫌そうな顔でもするかなが。

「そうです。私にはこの人がいますから」

と、アイリが僕の腕にしがみついて来た。ぎゅっと。そして、胸をこすりつけるようにすり寄ってくる。

あれえ〜？　なんか……違う。

ちっそういう趣味かよ、と男達は侮蔑の表情を向けて僕らから離れて行った。どういう趣味だよ。僕が聞きたいよ。

僕は抱きついて来たアイリをまじまじと見て、

「あ、アイリ？　本当にアイリ？」

「……私はアイリですが、何か？」

疑いの眼差しを向けるしかなかった。

えっとさ、君は僕がおっさんの姿の時はこういうことしなかったよね。多分、君が依存しているのは僕であって、レイではないからあれえ？　女性陣に心変わりが訪れたのか？

女心と秋の空、って奴か。いや、別に悪くはないんだけど。

……むしろ良いんだけど。

いや、やっぱり僕の平穏が侵されるから、良くないかな。

ぎゅっと僕の腕を抱きしめるアイリ。

「あ、えっと……何？」

「……港に行くまでに、離れちゃうと困りますから」

その割にはさ、何で一人でここにいたんだか。絶対方向音痴ではないよな。アオイを誘拐したときも、ちゃんと小屋に戻れたし。

「……ダメですか」

けど、そんな事実には目をつむって、仕方がないな、と僕の声で呟いた。

港に着くと、アオイが待っていた。護衛にクロガネさんが付いている。

そんな僕にも秘書、アイリが……今は控えている。港が見えるようになる曲がり角で、やっとアイリは僕の腕を放してくれた。

「もう……帰られてしまうんですね？」

「うん……じゃなくて、ええ」

丁度リース達もこちらに来てしまったので、僕は慌てて声を変えた。

いや、もう正体をバラすにもバラせ無くなりつつある気がする。ちよっとやりすぎたよな……。薄々感づかれているかもしれないけど。

「そうですか……。もう少し、お話ししたかったです」

「僕も残念ですよ。今度会う時は、じっくり話しましょう」

そう言って笑う僕。

と、アオイにキスされた。

唇を離し、妖艶な笑みを浮かべてアオイは笑う。

「次に会うときは、素敵な言葉を私に下さいね」

そう言っ、意味ありげにアイリを一瞥するアオイ。それを真剣な表情で受け止めるアイリ。

諸悪の根源はアオイだな。

しかし……気恥ずかしいな。国一番の巫女様にキスされるとか。それをリース嬢やフィーに見られているとか。

お返しと言わんばかりに、僕はアオイの耳元に口を近づけて、僕の声でこう言った。

「今度は僕のハートを盗みにおいで。それで相子だ」

ぽつと顔を赤くするアオイ。可愛いな。

そして、僕は最後になっちゃったが、プレゼントを渡す。

「どうぞ。僕の代わりだと思ってください」

そう言っ、徹夜で作った、にゃんこの人形を渡す。

アイリ達にはもう渡してあるので、最後になっちゃったが、一番渡しておきたかったのはアオイだ。しばらく、会えそうにないからその保険に。

「僕が君を守れそうにないからさ」

「やっぱり、優しいんですね。マモルは」

微笑みながら、アオイは僕の名前を呼んだ。

優しい、ねえ。どうかな？

でも僕は、『大事な人を守る』魔王になるつもりだから。父さん達にもらった名前は、大切にして行くよ。

エピローグ（後書き）

ここから先はあとがきです。本編とは関係のない話や、裏話が長々と続きます。

興味のない方、そういう内容が嫌いな方は、どうぞ読み飛ばすなり、ブラウザのバックボタンを押して下さい。

これにて、第一章、『純情な生け贄と黒のマモノ』は終了???ではなく、あと一話だけ付け足しがあります。

区切りが良くなかったので、次話とさせていただきます。

さて、実はこの章、更新を始めたその日から、ストックがありませんでした。よくもまあ、毎日更新出来たなあと思っています。

ひとえに、皆様の評価や感想があったこと、それをランキングとしてみれた事が大きいと思います。

誤字脱字の多いこの作品を読んでくださり、ありがとうございます。

そんな裏話がありこの章の内容も、当初の予定から二転三転としていたりします。そのため、要所要所、変な部分があったり、説明不足になっていたりします。あまり突っ込まず、しかし疑問に思った時には感想を頂ければ、何か返事は返せると思いますので、お気軽

にどうぞ。

さて、次章の事ですが……決まってる。こつしたい、という展開はあるのですが、それを一つの章に出来ていません。

そのため、少し時間が空くかもしれません。ドライアイになりつつあるのもあって、執筆時間が削られてますし……。

ただ、主人公とは別の所での物語は完全に執筆出来ますので、要望があればそちらを書いていこうかと考えております。

以下、その簡単な概要。

『魔王が世界征服に動き出し、魔物の活動が活発なった。

魔王のドラゴンに連れ去られる姫を見た事がある少年は、魔王を倒し、その少女を助け出そうと決意する。

そんな彼を支援した帝国。彼は力をもらい帝都から魔王討伐の旅に出てー最初の魔物、魔王に殺された』

という感じの話です。

話の内容じゃないですね……。

とりあえず、いつかは間章として書く予定ですので、その告知でした。

最後になりますが、感想・指摘など、ありがとうございました。そのために更新しているようなものなので、本当にありがたいです。

これからよろしくお願いします。

エキストラ

「ねえ、アオイはあいつのどこが好きになったの？」

フィーがアオイにそう尋ねたのが、始まりだった。
どうやら、以前もそんな話をしたらしい。

「一途な所……いえ、一途だったところでしょうか」

「だった……って、今は一途じゃないってこと？」

「そうみたいです。何でも、一人の女の子を愛し続けるのは馬鹿
みたいだ、だそうで」

「……何それ。まるで昔、誰か一人を愛し続けたような台詞じゃない。
信じられない」

呆れたような、驚いたような表情をフィーが浮かべている。

……確かに、変化しているときの彼は、凄く胡散臭い。

「……………」

だから私はいつも通り何も言わなかった。

そう言えば、私は結局あの人の事を何も知らない。

依存しているけど、何も知らない。

……何故か分からないが、彼と一緒に居ると心地良い。
だから、離れたくない。

「昔、彼が付き合っていたときの話、聞きましたか？」

「付き合ってた！？ あいつ、誰かと付き合ってた事あるの！？」

「本当ですか！ 聞かせてくださいっ！」

「……………！？」

信じられなかった。

あの人が、昔誰かと付き合っていた？　なのに私があんなに誘惑しても何もしてくれないの？　……私はそんなに魅力がないのかな。フィーはあっけらかんとしていて、リースが妙に食いついていた。

「あつ、幼なじみでしたっけ。でも、彼は恋していたみたいですけど」

「レイさんにもそういう事あったんですね……。意外です」

意外。

私と一緒にいるとき、彼はそう言った感情はあまり見せない。恋慕ではなく、ただ人の温もりが恋しいような、そんな感じだ。

……なんか、少し悔しい。

「彼は凄く好きだったみたいで、その人のためなら死んでも良いと誓えたそうなんです」

「……あのおっさんがねえ」

フィーはさつきから驚きっぱなしだ。

……羨ましい。私も、そこまで誰かに愛されてみたい。奴隷のように扱われて来たから、それは……凄く羨ましい。

「だから彼はその人がどんな事を頼んでも、文句も言わず笑顔でこなしてみせたそうなんです」

「……凄いですね」

「ただ、あまりにも自分の意見を出さないから、その人に言われたらしいです。『あなたは自分の意見がないの？』と」

……もしかして、私もそうなのかな？　いや、そうだったのか。

だから彼は、私に嫌な事は嫌と言えるようになってしまった。あと、好きな事を好きと言えるように、と。

私は……結構わがままな事を言っている。

彼がおっさんの姿をしているときは、なんだか嫌で近づかない。その時間が長いから、彼が本当の姿のときは精一杯甘えている。

……私に依存してほしい。私から離れて行ってほしくない。

「ただ、彼はこう答えたらしいです。『いつか僕の凄い我が儘を聞いてほしいから、今は貸しを作ってるんだ』と」

「凄い我が儘？ ……変な性癖でもあるんでしょうか？」

リースがそんな事を言った。

……え。そつか。そうだったのか。

それなら、確かに彼が私に興味を持たないのも分かる。……言ってくれば応えるのに。

「いくら何でも、それはないでしょ……。それで、おっさんはなんて言ったの？」

「いえ、その我が儘は言えなかったみたいなんですよね。その人が別の人を好きになったから、と。それと、最終的に死別したと」

「……」

きつと、あの人は最後までその人に恋をしていたのだろう。

本当に……羨ましい。

私も、彼にそこまで思われたい。私は彼に依存しているけど、彼はどうなんだろう？ ……離れて行っちゃわないかな？

「ただ、なんと言いたかったのかは、聞いています」

「……へえ、なんて？」

「教えてくれませんか？」

「……………ほしい」

私は、その言葉を言われたい。
だから、どんな言葉か聞いておきたい。
アオイは、興味津々の私達を一瞥して、謳うように言った。

『あなた一人を愛していいですか？』

それは、とてもロマンチックなお願い。

「私は、そこまで情熱的に愛せる心を持ったあの人に、愛されたいんです」

そう言って、アオイは笑った。リースやフィーが口元に手を当てて、頬を赤く染めている。

私は……少しだけ頬が赤かった気がする。

そして、私を見てアオイは言う。

「今は仮面を被って本心を隠してますが、きっとこの想いは、その仮面を通して伝わると思ってます」

………そっか。

彼はどんな姿をしていても、彼なんだ。
なら、私の想いが伝わりやすいように、もっと側にいよう。

やはり、あの人は優しい。

私がいまだあんな姿で近寄られるのが嫌いなことを知っていて、私に触れようとしたとき、少しだけ躊躇した。

でも、私が困っているのも見過ごせないから、そっと私の肩に手を置いてくれた。

私は、この人に愛してほしい。

だから??。

「そうです。私にはこの人がいますから」

そう言っ、私は彼に強く抱きついた。いつものように、この胸の熱さが伝わるように、ぎゅっと抱きしめる。

けど、私が本当に言いたい言葉は、違うかな。

多分、本当に私が言いたいのは??。

私は、この人??マモルがいいんです。

優しい、私の王様。

あなたは私を愛してくれますか？

ブローグ1（前書き）

9/24日、内容を大きく変更致しました。

プロローグ1

思えば、出会いから胡散臭いおっさんだった。

なにせ最初の言葉が、「愛と情熱の戦士です」なのだから、取り立ててその胡散臭さを語る必要はないだろう。

僕は彼のそんな物言いに、何言ってんだこのおっさん、と至極マトモで、面白味もない感想しか抱かなかった。

けれど、レイが孤児を引き取ったり、虐げられる人達に救いの手を差し伸べたりと、旅をしながらそんな事をしているのを見て、少しずつ僕はレイを見直した。

というか、孤児で虐げられる……僕がまんまそれだった。

記録上で僕が死んでから、僕はレイに引き取られてランベルグ帝国以外の国を色々旅をしていた。

魔王だったので六歳の少年を殺しました、と大々的に発表出来るはずも無く、帝国は魔王を倒したとだけ発表した。その結果、僕は普通に顔を出して街を歩いていた。

旅の医者、という名の胡散臭いおっさん??レイ。彼はその日の食事と寝る場所、という簡単な報酬で治療を行なっていた。たまに金持ちの貴族からは馬鹿にならない金を奪い取っていたが、いや、それこそが正当な報酬なのだ。

レイの扱う魔法――それは『憤怒』。

最凶にして最悪の属性。最強でも最良でもない、扱いづらい魔法。それでもレイは、それを使いこなしている――ように見えた。

僕は知らなかったのだ。

『憤怒』属性の魔法は、リスクを伴う事を。

――――
僕とレイは、四大大国には含まれない小国、ウィンドル王国の王様に招待されていた。

一応、招待としておこう。

「……貴殿が『不可能を可能にする』と言う旅人か？」

王、ギルバ・ウィンドルは自分でそう言いながら、疑いの眼差しを僕らに向けていた。大丈夫、僕も仕方がないことだと解かっている。

『不可能を可能にする』というだけでも怪しいと言うのに、王座に腰を据えたギルバの前にいるのは、小汚い黒のマントに身を包んだ赤髪の男と、フードを深く被った少年なのだ。

謁見の間に相応しい真っ赤な絨毯に、黒い汚れが付いているようだった。

そして……。

「滅相もございません。私はそんな小っ恥ずかしい名前、名乗った覚えはありません。何ですか、それ？」

尋ねた相手、レイもきっぱりと否定しているのだから。

その物言いがどこか皮肉めいており、ギルバ王のこめかみに青筋が立った。なんと言うか、その言葉に微塵も畏敬の念が無いのだ。

形だけはやけに美しい片膝立ちが、妙に気に障るのではないだろうか。隣で同じようにしている僕には、頭下げてやるから機嫌良くしろよ、なんて顔に書いてあるのが見えていた。

顔を隠した少年に、不遜な態度の男。

それには脇に立っている王家に忠誠を誓った騎士や、国に仕える大臣達が目つきを鋭くしたが、ギルバ王には見えていないのでレイは全く気にしていない。相手が怒りをあらわにしたら、更に嫌味っぽく反応するんだろうけどさ。

「王様、一つ申してもよろしいですか？」

「……なんだ？」

こめかみに指を押しあて怒りを抑えながら、ギルバ王は一応聞き入れた。

唯一の救いは、レイが敬語を使うと言う点だろう。それがなければ、騎士達は今にも切り掛かりそうだった。

「一体どうしてその、ふ、不可能を可能にするだか何だか知りませんが、そのような輩をお探しになっておられるのですか？ 王都到着と同時に、攫われるようにここに連れてこられた私にも解るように説明していただきたい」

最後は一息、レイが怒っている事は明白だった。

それでも王に対する態度ではないだろう、というのが僕の思いだったが、レイの考えも解らないでも無い。

だが、今のギルバ王には一刻も猶予がなかったようだ。

ウィンドル王国は農業が盛んな国だ。むしろ農業しかない。

その農業大国では最近日差しが強く、水は涸れ作物は萎れ、一種の飢饉じみた現象が起きていた。

だが、ギルバの悩みはそれでは無く、愛する娘の病気だった。

一国の王がそれではまずいだろうと思われるが、しかし彼の娘、ミリア・ウィンドルは民に愛される良き姫だった。人当たりが良く、平民も貴族も分け隔てなく接し、その優しい微笑みは人々を天にも昇らせると言われた程だ。

そんな彼女が病氣になった。皮膚に黒点が大量に現れ、ミリアは寝込んでしまった。さらにそれに合わせたように国は飢饉となったのだ。

国民（ギルバもその一人だが）の間では、ミリアが病氣になったから飢饉となった、ミリアの病氣が治れば飢饉も止まるという噂が囁かれているのだった。王であるギルバが娘のために国中、さらには諸外国の医者達に病氣の治療を依頼したが、誰も治せる者はいなかった。

最後の手段として、藁にも縋る思いでどこからか聞きつけた『不可能を可能にする』人物を探し出したのだ。

その人物は、燃え上がるような紅の髪をしているとだけ語られ、それ以外の容姿は語られていない。

ただし、その話は恐ろしい程ある。

アルテミウス山の頂に住むと言う、天空の支配者たる竜王と互角に渡り合った、不死の魔族であるヴァンパイアを敗北させたなどの戦歴。毒素溢れる鉱山から生きて帰った、蔓延る伝染病を治したという経歴。

それはどれも不可能と詠われた行為。

もしその人物が実在するのなら、それは間違いなく娘も救える、そうギルバは考えた。

そして国中から赤髪の人物を捜し出した。

赤髪はそれほど珍しい訳でもなく、たくさん見つかったが、いずれも該当者はいなかった。

そして、最後に見つかったのが、今日の前にいる男？？レイだったのだ。

「なるほど……、王様も大変ですね。ですが私は、不可能を可能にする？？そんな者ではないので、帰っても良いですか？」

「……やはりそうだったか。済まなかったな」

「いえいえ。子を思う親の気持ちは解らないでも無いですから。頑張ってください」

そう言つてレイは踵を返す。ちよつと驚いたが、僕もそれに続く。扉へと手をかけ、レイは振り返らずに言つた。

「無理矢理連れて来て、見送りも無しですか。……駄目な国ですね。一人の人間で国が一喜一憂してるなんて、ね」

何言つてんだアンタ！？

謁見の間に居た者達全ての額に青筋が浮かび、騎士の一人が慌てて僕らを追つて来た。

謁見の間を出る時、居心地の悪い空気が支配していたのは僕には関係ない。悪いのはレイだ。

レイは城内を勝手に歩き回っていた。正しく言えば、物色していた。そんなレイを僕は、少しばかり困惑した表情で見っていた。

そんなレイに怒鳴りつける騎士が一人。

金髪のポニーテイルで、中性的な顔立ち。胸元に膨らみがあり、女性であることが伺える。

「旅人殿！　いくら何でもあのような振る舞いに物言い、無礼では

ありませんか！」

「はい？ 知りませんよそんな事。私は少々苛立っているんです。私の都合も考えずに連行紛いに連れてこられれば、辛気くさい爺との面接。美人の王妃が出迎えるのならばいざ知らず、野郎と対談して何が面白いというのです？ まして、私はこの国の住人でもない敬意を払う必要など皆無！」

レイは吐き捨てるようにそう言って、あちらこちらと城内を物色する。

……あー、怒ってる。何が原因かは知らないが、怒っている。
対して騎士は律儀にそれに答える。

「……その通りではありますが、我々も必死なのです。飢饉で国内の作物はやられ、他国からの輸入に頼っています。物価が高まり生活が厳しくなり、国民も暗くなっております。ですが、姫様が戻られれば国も活気づくのです。だから、このような無礼を働いてしまいました」

「そうですか。随分と愛されているようですね、ここのお姫様は」

レイは実にどうでもよさそうに相槌を打ち、城の物色を続ける。

城の中庭には澄んだ水をアーチ状に放射する噴水や、彩りの花が咲き乱れる花壇がある。城内は大理石の床、壁には絵画や壺、宝剣などが飾られ、隅々まで掃除がなされている。さすがは一国の王が住む城といった風情であった。

一通り見て回り、レイは小さく呟いた。

「ここに割く人員を地方に派遣すれば良いでしょうに。王って人は、いつでも見ても無駄好きなものですね」

「は？ 何を言っておられるの？ って、旅人殿！ そちらは駄目です！」

レイが階段を登ろうとした所を、騎士はその体を割り込ませる事でなんとか止めた。僕はそんな二人の様子をぼけーっと見ていた。

「なんですか。ここまで見せてくれたのなら、もう全部さらけ出してくれても良いでしょう？ それとも、あなたがしますか？」

「意味が分かりません！ ここから先は、姫様の部屋です。何人足りとも通す事は出来ません！」

「なんですか、行きがけの駄賃に姫様の顔でも拝見しようと思っていたのに！ ここに来た意味がまるでない」

「それならば、これで十分でしょう！」

そう言つて、騎士は壁にかかった絵画を指差した。

それは、一人の少女の絵。

肩程までの輝く金髪に、宝石のような金色の瞳。見る者を虜にしそうな微笑を浮かべた少女、ミリア姫が描かれた絵だった。

「……………」

レイは少し放心したようにその絵を見つめ、素直に踵を返した。あ、これはなんかやるな、と僕は思いながらその後を付いて行く。ほっと息を吐き、騎士はレイを押すようにして城門へと案内した。気付いていないかもしれないが、あんたはかなりの美人だ。ちょっと抵抗して密着してもらって、レイは顔をにやけさせているんだよ。

「良いものを見させていただきました。その点は感謝しましょう。ですが、二度目は私も素直に招待されませんよ」

そう言い捨て、レイは城を後にしたのだった。顔をニヤ付かせた

まま。

ちらりと僕が背後を見ると、見送りに来た騎士がプンスカ怒っているのがよく分かった。

「……レイ、何を考えてるんだ？」

「うふふ、ちよつとしたサプライズですよ。サプライズ。勿論、助手の君にも手伝ってもらいますよ？」

ああ、あの姫様可哀想。きっとトラウマレベルのサプライズを喰らうぞ。

けど、役得役得。あの美少女とお話し出来る訳か。レイが仕出かした後、僕がフォローする。下げて上げる。うん、僕は助手としてはかなり有能じゃないか？

月夜が綺麗な晩だった。

僕らは城壁を跨いで、城のある部屋へと向かっていた。

空中を歩いて、城壁を跨いだのだ。見張りが蟻のように小さい。足がすくむ高さだ。

「良いですか？ マナとは魔力がなければ存在しない物と囚われがちですが、ちゃんとそこに存在します。目に見えない形ですが」

レイは得意そうに空中でそんな事を語っている。

僕らの足下には、一見何もないように見える。空中を歩いているように見えるが、実際は風のマナが足下にあって、それを足場に移動しているだけなのだ。

風のマナは真空の箱。それをたくさん集めて、足場とする。

風のマナを自分たちの足下にだけ展開する。踏み終えたら、次に踏み出す足下に展開する。こうする事で、それほど多くない風のマナで空中を歩く事が出来る。

マナを集めると感知されるのは、微量の魔力が体内から流れ出しているからだ。実際の所、魔術師に感知出来るのは、マナではなく魔術。風のマナを集めたら、集めたうちの少しと魔力が反応して微弱な魔術が出来上がる。それを感知し、マナが集められたと魔術師は知る訳だ。

この空中闊歩は魔力を一切放出せずに行なう。逆に、少しでも魔力が流れ出してしまうと足下で風の魔術が完成し、足場を失ってノーロープバンジーだ。そのため、魔術師にこれは感知されない。

少ない魔力しか持たないレイらしい技術だ。

僕なら、有り余る魔力を運動エネルギーに変換して、一気に飛び越えるのだけど。そんな事をしたら、馬鹿みたいな魔力を感知されてしまうのではないが。

お目当ての部屋、ミリア姫の部屋のベランダにそっと降り立つ。

僕らは覗きでもするように？？実際覗きだが？？気配を消して部屋を覗き込んだ。

少女？？ミリア姫は泣いていた。

天蓋付きのベッド、ふかふかの毛布に包まれて、ミリア姫は枕が濡れるくらい泣いていた。

「……………行きますよ」

「……………」

レイに促され、僕は無言で頷いた。

こういう場面は、何度見ても慣れない物だ。

レイがそっと、まるで何度もこんな事をして来たように、慣れた手つきで音を立てずに戸を開けた。ミリア姫は気付かない。

レイはそろそろと足音を立てずにミリア姫に寄って行く。その歩みは、熟練者の物だった。

「ミリア姫ですか？」

さめざめと泣いているミリア姫の脇に立ち、レイが優しげな声をかけた。

わお、なんだかとても詐欺師っぽい。

顔を上げるミリア姫の顔を見て、レイが笑みを浮かべる。いつもの胡散臭い笑みで無く、優しげな笑み。

「ですね。あの絵と一緒にです。その綺麗な金色の髪に瞳。間違いない」

「……誰？ どうやってここに」

ミリア姫がそう思うのも当然だろう。

この部屋の左右上下の部屋にベランダは無く、この部屋は地上百メートルの高さにある。さらに魔術無効の結界が張られ、何人足りとも侵入する事とは出来ないはずだった。

マナを集めるだけでは、魔術ではないのだ。

「おや……、これはなかなか酷いですね。御愁傷様」

レイはミリア姫の質問には答えず、ミリア姫の病に侵された顔見て口元を歪めた。

黒い点々が顔中、否、体中に溢れている。病気に詳しくない僕でも、これはあまり良くない類いの病気だと分かった。

そんなレイの態度に、けれどミリア姫は自虐の言葉を吐いた。

「そうよ。とても見られた顔で無いでしょう。何？ 哀れみにでも

来たの？」

「……治る見込みは無いのですか？」

「治るわけないわ。どんな治療魔術を用いても治らなかったのよ。帰って。私に構わないで」

不貞腐れるようにミリア姫は枕に顔を埋めた。子供っぽい仕草が可愛いな、とか僕は場違いにも思っていた。

侵入者を咎めるでも無く、自虐の言葉を吐く少女。もはや自分と言う可能性を完全に見切った様子。自分が犯される、などという被害妄想を出来ないくらいに。

対して、レイは嘲笑うように口元を歪めていた。

「いいですね！ 最高です！ 実に不愉快極まり無い！ もの凄く苛つきます！」

急に声を荒げるレイの様子を見ようと顔を上げるミリア姫。

部屋の内部を風のマナの膜で覆っているので、外には音が漏れづらい。

「???ッ!」

と、レイは荒々しくベッドに乗り上げ、ミリア姫の頭を鷲掴みにした。驚くミリア姫の顔を枕へと強く押し付け、抵抗するミリア姫を強い力で押し付ける。

「これで声が漏れる心配はありませんね。安心して身体を預けてください」

妙に甘ったるい声。王族の彼女なら知っているかもしれない。情欲に溺れた男の声だ。

今のこの状況で安心出来る奴はいないだろうよ。
まあ、見慣れた僕としては安心に近い何かを持っているけど。

「レイっ！？ 何を??」

けれど僕は、あえて慌てた振りをする。
まるで、これが予定外の出来事のように。
それがミリア姫の恐怖心を煽る。

「これは私のただの八つ当たりです。無理矢理城に招待されて、少々気が立っているんです。その憂さ晴らしを、原因であるあなたでさせてもらいますよ」

レイはミリア姫の頭を鷲掴みにした手とは反対の手を掲げる。
ミリア姫からは見えないだろうが、その手は赤々と燃える炎を灯している。

だが、ミリア姫には狂気とも取れる笑みを浮かべたレイの顔が微かに見えていた。というか、レイはあえて顔を近づけている。病に掛かって尚美しい顔が恐怖に飲み込まれている。

レイは笑みを顔に張り付け、その手をミリア姫へと近づけ、そして??。

「???ッ!」

ミリア姫の体を瞬く間に炎が包み込んだ。
じわじわと、肉の焦げる匂いがした。

「……あ、れ？」

「気付いた？」

「ッ!？」

目が覚めて、聞き慣れない僕の声にピクリと反応し起き上がるミリア姫。知らない男がそばにいるというのに、ピクリとしか反応しない。

レイのときもそうだったが、どうにも反応がよろしくないお姫様だ。貞操観念が薄い気がする。

あれから一時間程度しか経っておらず、夜空を星と月の光が彩っており、それが部屋を照らしていた。

「私は……あの男に……っ」

「落ち着いて鏡を見て。それで全てが分かるから」

思い出してみるみる顔を青くするミリア姫。どうやら、かなり怖かったようだ。僕だって怖いよ、三十代のおっさんに頭鷲掴みにされてベッドに押し倒されるとか。おまけに変な笑みを浮かべてさ。演技にしても、治療しに来たんだからもうちょっと穏便に出来なかったのか？

鏡を見せようとすると、途端、嫌そうな顔をして顔を背けるミリア姫。

それもそうか。自分の顔が見るのが、顔が見られるのが嫌になるくらい、黒い点は気持ち悪く、彼女の顔を醜くしていたのだから。

「失礼します」

と、僕は鏡を起いて彼女の手を取った。

白い手袋に隠された小さな手。隠された肌。その手袋を外し、その手を???肌を露にする。

「綺麗な手だ。それに、綺麗な肌だ。何を恐れる必要がある？ 君はこんなにも綺麗なのに」

「あつ……」

ミリア姫の口から、驚嘆と困惑の声が漏れた。

黒い点など無く、そこにはまっさらな白い肌があった。

「えっ……あつ、え？」

「ごめんな。気が立っていたのは本当なんだ。だから、ちょっと荒っぽい治療になっちゃった」

何がつて、やり方が。もっと穏便に済ませようよ。

「先ほどの……神聖術、ですか？ 彼は、一体何者なんですか？」

首を振って少し考えた後、僕は答えた。

「魔法だよ。僕らは……魔法使い。奇跡の押し売りをしている者さ」

言えなかった。言えるはずもなかった。

『愛と情熱の戦士』だとか。

足が付いてしまいそうなのでウィンドル王国を出国して、僕らは街道を歩いていった。その足取りは、まさに追っ手を撒こうとする犯罪者の物だった。

「……相変わらず、アクドイ」

「何を言ってるんですか、マモル君。これは正当な報酬です」

ミリア姫の病魔を焼き殺し、その正当な報酬だと抜かして部屋を漁った男が一人。その旨を一応伝えるべく部屋に残った僕。

僕がそれを伝えるのにどれだけ苦労したと思ってるんだ！

「お姫様の服なんて、そうそう手に入る物じゃないですよ？ 不治の病を治した報酬にはピッタリじゃないですか！」

変態だ。変態がここにいる。

「大丈夫です。新品を頂きましたから。……きらきら光るたくさんの宝石もおまけで」

一瞬見直しかけたけど、やっぱり……アンタはどうしようもないダメ人間だよ！！

プロローグ2（前書き）

9/25日、大幅に変更。

プロローグ2

私には許嫁がいる。

幼い頃に一度しか会った事がないが、カッコいいと言うよりは可愛らしいと言う顔立ちだったのを覚えている。

気さくで、すごく美味しそうに私の作ったお菓子を食べてくれた。その頃の私が作っていたのは、泥団子だと言うのに。

そればかりが強く印象に残っている、私の許嫁。

この人となら、恋は出来なくても一緒に生きるくらいは出来るかな？

そう、幼い頃に私は思った。

けど、あれから十年以上経ち、全てが変わった今なら言える。

「やあクロナ！ 僕のことを覚えてる？」

揺れている。

体中の脂肪が、歩きたびにぶるぶると震える。ふさりとした金髪に、柔らかな笑顔を浮かべて、彼は私に話しかけて来た。雪だるまみたいな体躯で。

……うん、間違いない。ガイ・ノーランド。ノーランド王国の王子。

彼が……私の許嫁だ。

私は、

こんな太った方とは結婚したくありません！

とは言えず、

「お久しぶりです、王子。お元気でしたか？」

愛想笑いを浮かべて挨拶をした。

私は昔から表情を取り繕うのが得意だ。今、内心ではかなり引きつった笑みを浮かべているが、それを表には出していない。
はずなのに。

「……うん、そうだよ。ごめん」

と、明らかに落胆する王子。もの凄く申し訳なさそうに俯いた。
え……、噓。私の表情は完璧な笑顔のはずなのに。
どうして……そんな悲しそうな顔をするの？

「王子、どこか具合が悪いのですか？」

「大丈夫。……クロナは優しいね。……こんな僕にも」

しよぼん、とする王子。

ぎゃー！ バレてる！ 絶対にバレてる！？

私がとんでもない失礼な事を考えたのが、バレちゃってる！
でも、だって！

いくら何でも、私より二回りも太ってるんだもの！ ちょっと無理です！

……でも、分かっているはずだ。

「何をおっしゃいますか。反乱軍に追われる私を受け入れてくれた王子の方が、十分に優しいですよ」

私は、もはや彼と対等な立場にない。

民主主義を掲げた軍部の一部が反乱を起こし、城は陥落し、父様と母様は殺された。なんとか私は逃げ延びたが、私を担ぎ上げて再び王政にしようとしている貴族達があり、反乱軍が私を殺そうと狙

っている。

今は、古くから付き合いのある、信頼出来る貴族の元に身を寄せ
ている状態。だが、いつ反乱軍に襲われても可笑しくない状況だ。
そんな私を受け入れようとする彼を……、私が拒めるはずがない
のだ。

勿論、断ろうと手紙を何度も送った。だが、彼は一切の躊躇も無
く来てしまった。その頃の私は、まだ彼がこんなに太っているとは
知らなかったので、それこそ白馬の王子様が現れたような気分で、
意気揚々としていた。

そして現在、少し後悔している。もっと真摯に断れば良かった……
と。こちらには、断る材料はいくらでもあったのだから。

……はあ。私は最低な女だ。

助けてくれる王子を、見て呉れだけで否定しようとしているのだ
から。

だって、

「ごめんなさい。……助けに来たのがこんな僕でごめんなさい」

彼は、地に頭を付けて、泣きながら私に謝罪していた。

……違う。

謝るのは……本当は私のはずだ。

厄介事をそちらの国に持ち込もうとしている、私のはずだ。

あなたを見て呉れだけで否定しようとした、私のはずだ。

……だから。

そんな真剣な表情で、謝らないで。

「謝らないでください。私は凄く感謝しています。こんな状態でも、
私を迎えに来てくれたんですから」

他に嫁の当てが居ないのかしら？

危険を冒してまで、私と結婚しようだなんて。

「ですが、本当に大丈夫なのですか？ 私が行く事によって、ノーランド王国に多大な迷惑が……」

「大丈夫です！」

と、王子は胸を張る。それを聞いて、少し安心？？、

「絶縁致しましたので！」

出来ないわよ！

何が大丈夫なの！？

――――

「ごめんなさい」

僕が最初に思った言葉。

ノーランド王国は、四大国にも数えられない、酪農と漁業しか取り柄のない国だ。そんな弱小国の王子である僕。

そんな僕が四大国の一国、マクシアのクロナ王女と許嫁。

前世で、一学生として生を終えた僕には、勿体無い話だった。

僕はお世辞にもかっこ良くないし、強くもない。国も貧乏だし、国土の大半が一年中雪に覆われている。

何か訳ありなんだろう、そう考えていたのだが、出会った瞬間、それは間違いだと僕は気付いた。

柔らかな緑色の髪に、じっと僕を見つめる翡翠のような双眸。ふわふわのドレスに身を包んだ、可愛い女の子。

僕は思った。

どんな理由があろうとも……彼女は僕よりも良い男に選ばれるべきだろ、と。

彼女は神様に選ばれたような子だ、絶対に幸せになるべきだ、僕何かと結婚すべきではないと僕は思った。

僕は身の程を弁えている。

僕では、彼女を幸せにする事は出来ない??そう思った。幸せにします、だから娘さんを僕に下さい、なんて言える訳がない。

僕には彼女を守るだけの力がない。略奪や皆殺しなどが珍しくもない世の中、力が全ての世界。それなのに、このご時世で彼女を幸せになど出来るものか。

彼女も、僕よりも素敵な人を見つけるに違いない。いつか僕はこの婚約を破棄されるだろう。僕は変な虫を寄せ付けないための口実に過ぎないだろう。

よし、ならば僕は、精一杯その役を演じようではないか。

この子を守る??それが僕の役目だ。

僕に出来る事なんて限られているが、それでも本気を出せばどうにかなるだろう。いつか彼女が恋をして幸せになるまで、僕は彼女を守るう。

そして僕は、ぶくぶくに太った。

「はぁ……はぁ……」

「クロナ、頑張つて。もう少しで森に着く。そうしたら、少し休もう」

「は、はい……」

夜の帳が下りようとしていた。私達は反乱軍に追われ、道無き道を走っている。

王子が来てすぐだ。反乱軍が私の居場所を突き止めたのは。

王子が付けられたのかと私は思ったが、どうやら屋敷の内部に情報を漏らした人物が居たようだ。王子は馬車ではなく、船と徒歩でここまで来たと言う。目立つのはその体格くらいだが、彼がここまですで肥えた事は一族の秘密らしく、知っている者はいないと言う。事実、私も会うまで知らなかった。

知っていれば、私は否が応でも彼を拒んだのに……。歩くたびに揺れ動く、そのぼつちやりとしたその体格は、私の好みではない。

……はあ、私はやっぱり最低だ。

彼を拒むのは、自分が彼と結婚したくないからなのだから。彼がこの事件に巻き込まれない事を望んで、拒もうとは思わないのだ。

「クロナ、大丈夫？　僕がおぶろうか？」

「えっ！？　いえ、大丈夫。あと少しなんですよ？」

溜息が漏れた？　おかしいな、私は体面を取り繕うのは得意なはずなのに。

その暑苦しい身体に触れたくない、という一心で私は疲れ切った足を動かす。

そういえば、彼は随分と体力がある。

彼は私は何人も入りそうな大きな背嚢を背負っていて、私の荷物もそれに入れさせてもらっているのだ。

無駄に太っている訳じゃないのね……。

なんとか森の中まで無事に逃げられ、私達は休憩する事にした。
あまりのんびりとはしてられないが、休憩無しでこの森を抜けるのは難しいようだ。

「はい、これ食べなよ」

「ありがとう……あつ」

王子が背負っていた大きな背囊から、水筒と紙に包まれた小石程度の物をくれる。包みの中身は……バター飴だ。

ノーランド産の乳製品は世界で一番良質。王子と許嫁になって良かった事は、ノーランドから格安でそれと取引出来た事だ。バター飴も本来なら金貨程度の価値があるのに、毎月送られて来ていた。バター飴を口を含むと、口の中に広がる甘みに思わず頬が緩んだ。そんな私を見て、王子が頬を緩ませていた。

「……な、なんですか？」

「あつ、ごめん。何でもないよ」

そう言って目をそらす王子は、少し嬉しそうだった。

「……あの、どうして来てくれたんですか？」

「来ちゃダメだった？」

「そうじゃないけど……」

来なければ私は死んでいた。けれど、どうにも素直に喜べなかった。

と、茂みが揺れ動くような音が聞こえた。

「行こう」

「……はい」

私達はすぐにその場を離れた。

差し出された彼の手を??私は掴まなかった。

だんだんと足音が接近して来ていた。

それに伴って、私達の歩みも速くなる。

けど、私の足は限界に近かった。

「きゃっ!?!」

「クロナ!」

足がもつれて、転びそうになる。

と、それを支えてくれる彼の手。

その手は、温かった。

「居たぞ!」

「?!?!」

はっと声のした方向に顔を向けると、反乱軍のマークがある鎧を着た男が居た。

王子は一瞬で背囊を男にぶつけ、私の手を取って走り出した。

「ご、ごめんなさい。私が声を上げたから……」

「良いから! 走って!」

私達は森の中をがむしゃらに走る。

彼の巨体とは思えぬ俊敏な動きに、私は着いて行くのがやっとだった。

「きゃっ！」

と、不意に彼の動きが止まって、必死で追っていた私は彼の背にぶつかった。

柔らかい……。

「どうし??」

「ここまでです、姫様」

私が彼の背中から前を覗くと、十数人の追っ手が、私達を囲んでいた。

男達は皆そろってにやついた笑みを浮かべ、こちらを見ていた。

王子が私を庇うように立ってくれているけど、その背は震えている。

「手間かけさせやがって、この野郎」

荒々しい歩みで一人の男がこちらに寄って来て、突如王子を蹴り飛ばした。

「ぐあっ！」

蹴り飛ばされ、地面を転がる王子。

私は、恐怖で動けなかった。鞘から剣を引き抜く男。ぎらりと、鋭い刃が光っていた。

「さあ姫様、ご家族の元へ旅立ってください」

振り下ろされる剣。間近に迫る刃が、どうしようもなく怖かった。視界の隅で、王子が起き上がりこちらに来ようとするのが見える。

けど、間に合いそうもない。

だけど。私は駆け込んでくる王子に向かって手を伸ばす。最後の希望を掴むように。

そして私は、再会して初めて彼の名を口に出して叫んだ。

「ガイイイイ！！」

ふっと、彼が笑みを浮かべたような気がした。

瞬間、ガイの身体が消えた。

気付けば、私の身体が宙に浮いていた。暖かなぬくもりと柔らかな感触に包まれて。

それは、まるで魔法のようで。

私を抱えるのは……。

「クロナに手を出すな。……殺すぞ」

ガイがキッと男達を睨みつけていた。

その気迫に一瞬気圧される男達。私も、少しだけ震えてしまった。

「ごめんねクロナ、怖い思いさせちゃって」

そんな私に気付いて、ガイは優しく微笑み、私を下ろした。

だから……怖い思いをさせちゃったのは私でしょ？

私に関わらなきゃ、ガイはこんな怖い目に遭わなかったのよ？

手が震えてるし、すごい汗。強がっているのはバレバレ。

「餓鬼が調子に乗ってんじゃねーぞ！ 怪しい術使いやがって！」

と、先ほどの男が剣を振り上げこちらに向かって来る。

素早い動作で剣を振り上げ、そして??。

男は横に派手に吹っ飛ばされ、激しく木に激突した。

男が先ほどまで立っていた位置には、ガイが蹴りをしたような姿で立っていた。

それはまるで、瞬間移動でもしたかのよう。

ガイは足を下ろし、静かな声で残りの男達を睨む。

「クロナに手を出すな。容赦はしないぞ？」

どうしてか、私には彼が本当の王子様に思えてしまった。
今は王子様じゃないのに。

――

「大丈夫。君ならやれる」

師匠は、僕にそう言って旅立って行った。

僕には、クロナを守るような力はなかった。

クロナが亡命して来て、匿って幸せに出来るだけの国力はない。

クロナが悪漢に襲われて、助け出せる強さもない。

だから僕は、クロナとの結婚を最初からダメだと思っていた。

それでも、僕は力が欲しかった。彼女を守るための。

でも、父親は剣を教えてくれない。格闘技ならなんとか習ったが、それも齧った程度だ。こんなんじやとでもクロナを守れはしない。

だから僕は、魔術を習った。

魔術師だが魔術師じゃない？？魔法使いの弟子になった。

「こ、こいつ！魔法使いか！？」

男が僕の魔術を見て、そう叫んだ。

僕の身体は一瞬で何十メートルと移動する。男達の剣が貫くのは、僕の残像だ。

確かに、こうまで圧倒的な力だ。魔法に見えるかもしれないな。だけど。

「魔法使い？……だったら良かったのにな」

魔法使い。皆は彼らを嫌うが、僕は彼らに憧れている。

魔法は、奇跡そのものだ。どんな逆境いようと、それを一瞬で覆せる力。僕は……そんな力が欲しかった。

手に入らなかったから、僕は太ったのだ。

魔法は条件さえ満たせば、それ以外に支払う物は何もない。

だが、魔術は違う。

「構う事はない！姫様さえ死ねば問題は？？ぐはっ！！」

クロナを殺す、そんな意味の言葉を叫ぼうとした男を、僕は軽々と蹴り飛ばした。身体の節々に痛みが生じるが、そんな副作用は些細なもの。

「……なんだアイツ。気持ち悪い」

と、男の一人が呟いた。

僕は苦笑いせざるを得ない。

「はあ……はあ……」

身体から溢れ出す異常な湯気。だらだらと滴り落ちる大量の汗。醜態だ。例え一国の王子で無くても、こんな醜態は衆目に曝したくない。

だからこそ、僕以外にこんな魔術を使う奴はいないはずだ。

魔術は、エネルギーを効率よく使用する技術だと、僕は教わった。魔力は、魂が生み出すエネルギーと言われている。それはマナと反応して、元のエネルギー量を超えるのだと。

少ないエネルギーを莫大なエネルギーに変える、それが一般的な魔術だ。

僕は魔力を少ししか持っていない。いや、ほとんどないと言っても良い。だから、僕は魔術師になることも無理だと言われた。マナと反応させるだけの魔力を放出出来ないのだと。

だが、僕は諦めなかった。

魂が生み出していないエネルギーの元でも、魔術の考え方は使えるのではないのか？ マナと反応しない、ただのエネルギーを効率よく使用する事も、魔術の考え方を使えば出来るのではないか？

脂肪をたくさん付けておいて、そのエネルギーを効率よく使用すれば、僕でも人間離れした力を使えるのではないか？

それが、僕の魔術。

脂肪をそのままエネルギーに変換する魔術。

太らなければならぬ、しかし肉体が強靱でもなければ耐えられない魔術。使用時には、おびただ夥しい量の汗をかき、匂いも尋常じゃない。世界で最も醜い魔術だと、僕は自負している。

だが、僕は構わない。僕が嫌われようと、彼女が幸せになるのなら問題ない。関係ないと言っても良い。事実、関係ないだろう。僕には、これしかなかった。彼女を守るための絶対的な力が、これしか思いつかなかったのだ。

「はあああああっ！！」

脂肪を運動エネルギーに、その速度と体重を拳に寄せ、重たい一撃を男達に喰らわせる。

僕の脂肪がどの程度持つか分からないが、長期戦は不利だ。爆発的な移動で、足腰にがたが来ている。既に風船みたいな体格から、若干しぼんでしまった。

大半の男達は僕の醜惡な姿に恐れ戦き、距離を取っている。だが、僕らを囲むと言うそれだけは忘れていない。

と、一人の甲冑を着た男が前に出てくる。

「狼狽えるな！ 奴は丸腰、しよせん素手だ。恐るるにたら？？ぎやっ！！？」

僕は一瞬で男に近づくと、脂肪を運動エネルギーではなく電気エネルギーに変換して、甲冑に触れた。びかりと甲冑が青い火花を発生し、じゅつと臓物が焦げる匂いが鼻についた。

素手？ そんな関係ない。

今、僕の身体は生きる魔術だ。熱も電気も音も、エネルギーが起す事象であれば、この身体で具現化出来る。

だが、僕がやるべきなのは、クロナを逃がす事だ。あいつ等を倒す事じゃない。

思わぬ伏兵に狼狽する男達。

と、自分から攻撃に移らない僕を見て、リーダー格の男が命令した。

「落ち着け。盾持ちで包囲しろ。奴の弱点が分かった」

まずい。

盾を貫こうと、肉を切れなければ相手を無力化出来ない。

残った脂肪を運動エネルギーにして、クロナを抱えて逃げるか？

僕の移動速度ならば、すぐにでもこの場を離脱出来る。

僕はコイツ等を皆殺しにしたいわけじゃない。

……そうしよう。

僕が足に力を込め、移動しようとした瞬間。

不意に、身体の動きが止まった。

「が、ガイ……」

クロナの驚いたような声に、僕は自分の異変に気付いた。

副作用の湯気が消え、身体が痩せてしまっていた。雪だるまみたいな身体から、一般的な体躯にだ。

早い。予想以上に脂肪の消費が早過ぎる。

筋肉が残っており、ガリガリとまでは行かないが、明らかに変異した僕の身体を見て、リーダー格の男が感嘆の声を漏らした。

「貴殿は素晴らしい男だ。彼女を守るため、そのような醜悪な肉体であつたのか……、ガイ殿」

「えっ……」

クロナが、驚いたような顔で僕を見つめた。

おかしいな、一体なんでバレたかな。

って、そうか。今の僕は絶縁されたとはいえ、ノーランド王国の王子様の身体に戻ったんだもん。太る前の僕は、ちゃんと人前に

出ていたから知っているのだろう。

「そうだよ。だれが好き好んでこんな体形を維持すると思ってる？
分かってるなら、助けてよ。僕は太ることしか、力を得られな
かったんだ。クロナを守るには……」

「それは無理な相談であろう」

諦めるな。考える。

僕は、何としてでもクロナを助けるんだ。

僕は残った少ない脂肪を運動エネルギーに変換し、

「???ぎゃっ!!」

盾に激突した。ぐわんと、鉄が響く。

まずい、バレたか。

「その動き、かなり速いが直線的にしか出来ないな？」

そうなのだ。

僕に出来るのは、速さの爆発的増加。移動中に方向性は変えられない。移動中にもう一度魔術を発動させる事が出来れば話は別だが、僕はそんな思考の加速なんか出来やしないのだ。

ぐらぐらする頭でも、リーダー格の男がクロナに近寄って行くのが分かった。

クロナは足がすくんでいるようで、動けないのも見えた。

でも僕は、動けない。

既に痛みで体中の感覚は無くなっている。体脂肪率二十七パーセントの身体に、大した筋肉なんて付いていない。身体を動かすのも魔術を使っていたガタが来た。

「が、ガイ……」

僕の耳に確かに届く、クロナの震えた声。
その恐怖に染まった声を、僕は聞きたくなかった。
クロナには、幸せになつてほしかった。
頭が痛い、体中が痛い。脂肪もない。

希望も無いんですか？

「クロナアアアア!!」

「ガイイイイイ!!」

足りなかった。

あれだけ太つたのに、まだ足りなかった。

やっぱり、僕では無理だったのか？ 身の程知らずだったのか？

伸ばした手は、クロナには届かなかった。

「安心しろ。君もすぐ姫様の元へ連れて行ってやる」

男が剣を振り下ろした。

ぞぶり、と。

深々と肉に突き刺さる音が僕の耳に届く。

けど、血は一滴も落ちなかった。

「さすがは私の弟子、上出来ですよ。後は私に任せなさい」

凜とした声が、その場に響いた。
それは、聞き覚えのある声だった。

「えっ……？」

彼は、少しの間だけ僕の師匠だった人。
銀縁眼鏡に、詐欺師のような人の良さそうな笑顔。
一人のおっさんが、クロナを庇って剣で刺されていた。

「貴様……何者だ！」

リーダー格の男の問いに答えは無く、代わりにゆらりと、どこまでも赤い炎が視界を埋め尽くした。

男は慌てて一歩引くが、それに意味はない。

「ぐうつ！？」 が、あ、ああ??」

剣が発火し、その形状を一瞬にして失った。その炎が男をも飲み込み、炎の塊が生じる。

そして、消し炭も残さず、文字通り跡形も無く消滅した。

「酷いですね……、彼女が何か殺されるような事をしましたか？
理不尽ですね……、ああ、憎らしい」

おっさんの独り言が、酷く不気味に辺りに響いた。

「う、うわあああああ！！」

追っ手の中の一人が、その声を上げて走り出した。
それが引き金となって、追っ手は蜘蛛の子を散らすように逃げ出す。

だが、

「逃がしませんよ？ まさかあなた達、自分たちが今までやって来た事が、許されると思いなんですか？ 民主主義が何ですか？
人を殺せる大義名分だと思ってるんですか？」

逃げる男達が、おっさんの睨みを受けた瞬間炎上して行く。
圧倒的。

全てをぶち壊すような力。

？？魔法。

「何者？ そんなの決まってるじゃないですか」

人が炎の塊へ、炎の塊が無へと変わって行く、地獄とも形容し難い光景が広がっていた。だが、それは僕らを助けるため。
だって、おっさん、レイは??。

「ガイっ！！」

「く、クロナ!?」

クロナが僕に抱きついて来た。
宝石のような瞳に目一杯涙を溜め、ぷるぷると震える腕で僕をしつかりと抱きしめてくる。

「く、クロ、ナ……? どう、したの? ……あつ、僕ちよつと臭いから、離れた方が??んっ」

身体中のエネルギーをフル動員していた僕は、満足に口も動かさなかった。そんな僕の頑張りを、クロナは最後まで言わせてくれなかった。

僕の唇に、クロナの唇が押し当てられた。

名残惜しむように静かに離れて行く、クロナの柔らかな唇が動いた。

「……ありがとう」

そして、彼女は僕に??十何年かぶりに、心からの笑顔を見せてくれた。

僕は、急に身体から力が抜けて??ぶっ倒れた。

「……君には、もっと、相応しい男がいるよ。だから……、僕なんかと、キスしちゃ、ダメ……だ」

そんな僕の讒言（ざんげん）という名の本音に、クロナは言葉を返した。
その声は、震えていた。

「私じゃなきゃ嫌なんです。……あなたと一緒に居るのが」

そっか……。と僕は笑みを浮かべたかったけど、もう体中の細胞が悲鳴を上げていて、それどころじゃなかった。

そんな僕らを見て、レイは笑みを浮かべて言った。

「私は???愛と情熱の戦士ですよ」

プロローグ 3

「君のその魔法は、人の存在理由を奪うんです」

おっさん、レイが??死んだ。

その死に様は、すごく呆気ない物だった。

ノーランドの王子とマクシアの王女を助け。

ウィンドルのお姫様の病気を治し。

魔王を助けた一人の男の死としては、あまりにも似つかわしくない物だった。

「兄の敵! 死ね!」

不意に、ナイフを持って突っ込んで来る少女。

どうしようかと僕がレイの顔を伺うと、彼は不気味なくらい優しい笑みを浮かべていた。

そして。

「あのドレス、僕の弟子の結婚祝いに上げてください」

そう言って、僕に笑顔を見せて。

レイの心臓に、深々とナイフが突き刺さった。

「じふっ……」

口から、胸から……彼がいつもこんな時に出していた炎のように、勢いよく血が零れ出した。ふらふらと、レイを刺した少女は後ずさりし、そして逃げ出した。レイも膝をつき、そして地に伏せる。じわじわと赤い血が、大地に染み渡って行く。

僕は、呆気にとられて何も出来なかった。

……何だよ？

アンタ、いつも『理不尽だ』って、何でも消滅させてただろ？

痛みも、傷も。……なんで、消さないんだよ。

アンタの魔法は、『憤怒』。

『理不尽をそれ以上の理不尽で消す』……そんな魔法じゃないかよ。

僕がどんな顔をしていたのかは、分からない。

ただ、レイが僕に笑って言った。

「……敵討ちは……理不尽じゃないでしょう？ 愛の成せる業ですよ」

事切れたレイは何も語らない。

だから僕は、仮想人格に問うた。

何故、死にたかったのか。

死んでから初めて、僕はレイの事を何も解っていなかったんだと知った。

非情の収集家と憤りの？ 1

「本当ですか!？」

復讐の下準備は、いよいよ大詰めと言った所だった。

復讐する事で戦争が起こるかもしれない。それを危惧して長々と策を練って、色々と作って来た訳だが、その完成報告が僕の元に届いた。

「嘘を言っても仕方がないだろう。本当さ。彼女の方も大丈夫みたいだ」

「ああ、二人に任せて良かった。あれは僕の奇策の中の奇策だから」
「奇策と言うか、あれは一種のロマンだろう？」

くすりと笑みを浮かべるのは、切れ長の目を持つ一人の青年。
紺色の髪は、まるで深い海の様。地球で言うスーツのような服に身を包んでおり、レイが詐欺師なら、彼は新人社員だろうか。

精悍な顔立ちで、所謂イケメンだ。だが残念な事に、少々危険思考の持ち主である。バトルジャンキー、強者を見れば戦いたくてウズウズするタイプの人間なのだ。強いものだから達が悪い。魔術師にして魔法使い、さらに達人クラスの格闘家。

そして、僕やレイと同じ前世??地球の記憶持ち。

青年、ヒビキという男は、そういう人間だ。

「……それより、彼女は一体誰だ？」

「ああ……、やっぱり気になるよな」

と、ヒビキが指差す彼女に、僕は苦笑いを浮かべる。

レイの姿ではなく、元の僕に戻ったのが悪かったのかな。

「……………」

無言で僕にしがみついているアイリが居た。

少し気になるのが、ヒビキから隠れるように、僕の後ろに隠れている事だ。

「アイリって言うんだ。えっと……、秘書みたいな役割かな」
「……………」

僕が喋って、アイリは無言だった。
更に、ヒビキは酷く訝しげに言う。

「アイリ……ね。ふうん。『氷霜のアイリ』を秘書扱いとは、さすがは魔王だ」
「???ッ」

びっくり、と背後でアイリが震えるのが分かった。
それよりも、『氷霜のアイリ』などという二つ名に僕はフリーズしていた。

「あゝ、何それ？」
「やっぱり知らなかったか。『Gランクの天才』様は、二つ名に興味がないからな」

その通りである。

実際、『Gランクの天才』などという二つ名は、彼に教えてもらって初めて知ったのだから。あのときの恥ずかしさは語ろうにも語れない。アイリも、今きつとももの凄く恥ずかしいんだろう。恥ずかしい二つ名がバレてしまって。

……そんな訳ないが。

「若干十二歳にしてBランクに上り詰めた天才さ。現在はAランクだったかな。まるで君と真逆の存在だ。もつとも、一年程前から消息を断っていたけどね。何をしていたんだ？」

「……あなたには関係のない話です」

「関係ない……ね。良いけどさ」

むつとした表情でアイリが一步前に出て、ヒビキと視線を交わす。二人がどこか険悪なムードを醸し出している中、僕はぼんやりと考えをまとめていた。

要するに……、僕は途方もない勘違いをしていたようだ。

アイリの強さは、隷属の首輪で強制的に作り上げられた物ではなく、元々の力だったと言う話で。あの事件の黒幕が、アイリとランクを雇うのに精一杯だったというのは、Aランクの冒険者を暗殺者に仕立て上げたのだから当然であった訳だ。

依存しなきゃ生きれないってのはよく分らないが、とにかく暗殺者として育てられたのが僕の勝手な妄想であって良かった。

十二歳でBランクにまで上り詰めた理由は、もっと暗いのかもしれないが。

というか、そんな有名人を迷惑と思った僕は……。

「まあいい。それはそうと、一つ情報を上げよう」

しばしアイリと睨み合っていたヒビキは、意味深に小さく笑みを浮かべた。

「ランベルグ帝国に、コレクターと呼ばれる魔法使いがいる。国の辺境に済んでいる魔法使いなんだが、彼の噂はそれは酷い物だね」

コレクター、その単語にアイリが再び震える。
ヒビキはちらりと一度アイリを見やり、話を続ける。

「骨董品や魔法具、武器や防具など多岐にわたって収集しているんだが、その一つにー」
「???人間の採集」

と、ヒビキが全てを語る前に、アイリが口を開いた。
アイリの身体が小刻みに震えていた。
全てを語らずも、全てが伝わって来る。
言葉にしくちゃ伝わらないと言っても、言葉にしくなくても伝わる物もあるのだ。

恐怖。

今のアイリの中で渦巻いている感情は、それ一つだろう。身体がぶるぶると震え、顔が青い。

そんなアイリを、僕は見ていらなかった。

「アイリは下がって。この話は僕とヒビキだけで?」

「いえ。私も無関係ではないので、一緒にします」

「へえ、本当に秘書みたいだね。??それじゃあ、話を続けるよ?」

僕とアイリのそんな様子に茶々を入れ、ヒビキが話を進める。

「コレクターはランベルグ帝国の上層部と繋がりを持っているようで、その収集品を売っている。その中で、たまたま手元に来た物があるんだが、これを見てほしい」

そう言って、自分の着ているスーツを指差すヒビキ。
え?

「これなんだが、どう思う?」
「……………」

ヒビキさん。

そういう証拠品、着ちゃダメでしょ。

いや、彼が言いたいのはそういう事ではないのだろうけど。

「……………」

「…………」。手の込んだ作りの服です。縫い目が統一されていて、とても人間業には思えません」

何も言わない僕に変わって、アイリがコメントしてくれた。さすがは僕の秘書。

というよりも、この空気に耐えられなかったのではないだろうか。

「だろうね。君ならそういう表現だろう」

「まさか……………」

ヒビキの言い方で、僕はピンと来た。

「地球のスーツそのもの?」

「正解」

「…………チキユウ?」

僕ら二人は事態を飲み込めたが、アイリは事の重大さに気付いていない。

気付いた僕は、鞆から以前アイリから没収した拳銃を取り出す。

それはまぎれも無く、あまりにも完成された実銃。

ヒビキはその銃を見て、確信を持って答えを導き出した。

「コレクターは、地球の物をこちらの世界に召還する――そんな魔法を操る」

非情の収集家と憤りの？ 2（前書き）

9/25日、二章を変更致しましたので、プロローグ1からお読み下さい。

また、序章のプロローグも同日、変更をしております。

非情の収集家と憤りの？ 2

ランベルグ帝国。

世界で唯一、魔法を行使する国。その使用は暗部のみだが、いつ魔法が表に出て来ても可笑しくはない。だが、今の所そういう話はないようだ。

ランベルグ帝国は善くも悪くも、実力主義。

こと実力という観点においては、魔法はあまり役に立たないと囚われているようで、今はまだ魔術の発展に力を注いでいる。そのためだろう。

「ふえ？ な、何でレイがここにいるの？」

「……たまたま寄っただけなんです、何で顔を輝かせてるんですか？」

「っ！？ そ、そんな訳ないでしょー！！」

僕はコレクターの情報収集のために訪れた首都で、フィーと再会した。

というよりも、僕が用事があつてフィーの元を訪れたのだが……。

「ちょうど良かった！ ちょっと手伝いなさい！」

何故か、フィーに用事があつた。

首都の外れにある、白い半球の建物。それがフィーの家兼研究所だ。天井がガラス張り、夜に星空が眺める代わりに暴風雨の時は怖い造り。

僕としては、戦争が起きるかもしれないからランベルグ帝国以外に、リースの居るアイカシア国にでも移住してくれないかな、と遠回しに言うつもりだったのだが……。

「成果発表？」

「そう。魔術師は税金を免除される代わりに、年に一度研究成果を発表しないとダメなの。それでー」

「わかりました、留守番ですね」

「そうそうーって、そうじゃないわよ！……それも頼めるなら頼みたいけど」

留守番を断り、出かけている間に泥棒にでも入って、治安悪いしこれを機にアイカシア国にでも移り住んだらどう？ と提案しても良いが……。

止めた。僕の用件は放置しよう。

スパイ、というよりは監視者が欲しい所だから丁度良い。

ここはフィーに自由にしていてもらおう。

「留守番の件は、掃除を条件に受け付けますよ」

「うつ……、やっぱりちよつと汚い？」

外見はペンキ塗り立てと言う訳ではないのだが、真っ白で綺麗な建物だが、この建物、内部はフィーの言い方をすればちよつと汚い。丁寧と言えば少々、悪く言えばもの凄く散らかっている。

足の踏み場が無い？？というのを許容範囲としても、これは許容範囲外。

どうみても壊れた魔術具？？魔術の理論を用いた機械？？が山のようになり上げられている。うかつに足を踏み入れよう物なら、その部品が足に刺さったりしそうだ。山に手をつけば崩れそう、ならまだしも、魔術具が勝手に動き出しそうで恐ろしい。

ゴミ屋敷ならぬ、危険物廃棄屋敷のようだ。

「これがちよつと……ですか。フィーはお嫁さんをもらうのに苦労しそうですね」

「私がもらうのはお婿さんじゃ！」

顔を真っ赤にして火でも吐きそうな勢いで怒鳴るフィーだが、ひよつとするとひよつとするかもしれないと本人も思っているようであううつなどと呻いている。

「だって……その、もったいないじゃない」

その精神は評価しよう。

ただな？　こうやって放置しておく方がもったいないだろ。使うなら使う、使えないなら分解して廃棄しよう。フィーの作り掛けか、廃棄されていた物かは知らないが、このままじゃ僕が戦争を吹っかける前にここは危ない。

「何、悪いようにはしませんよ。解体して使える部品は取っておきますから。それとも、僕が直しておきましょうか？」

「直すって……そんな事も出来るの？」

僕はへこへこ頭を下げた。

なんとなく……うかつにフィーの前で胸を張りたくないのだ。

「すいません、こんなおっさんでも優秀な物ですから」

「そ、そうね。凄いわね！『Gランクの天才』は何でも出来るのね！」

やばい、なんか怒っている。

話を逸らそう。

「まあ、魔術具の不調を訴える方は結構多いですから。魔術師の数も少ないですし、結構やるんですよ。魔術師は基本的に引き籠りますし」

魔術具とは、魔術機関（刻印とか魔術陣）を内部に搭載した機械。そこら辺のManaを取り込んで魔術を発動し、日常生活を快適にする――地球で言う所の電化製品に似た物だ。ただし、魔力は自分で供給しなければならぬので、魔術師専用の魔術簡略化アイテムといった感じだろう。魔術師が優遇される訳である。

ちなみに、魔法具は魔力が無くても使用可能である。更に言うなら、魔石があれば魔術具も誰にでも使える。ただし、開発する魔術師が自らの地位を落としたくないので、そんなものは作られていない。独占だね。

「で、本題は何ですか？ 聞くだけ聞きますよ」

「じ、実はね？ 成果報告のアイディアが欲しいな」って

「お断りします」

踵を返す僕の袖を引っ張るフィー。相変わらず、君は僕の袖が大好きだね。もう慣れたよ。つんのめるのに。

「ちよつと薄情じゃない！？」 『フィーの頼みなら仕方ありませんね、一肌脱ぎましょう』……とはいかない訳？」

「むしろフィーが一肌と言わず、全部脱いでくださいよ。それでしたら僕は満足です。お願い通リー帰ります」

「帰るの！？ 手伝ってくれないの？」

何故か顔を赤らめながら服に手をかけたフィーを見て、急遽言葉

を変える。何だろう、僕は後少しでとんでもない過ちを犯す所だったような気がする。

「フィーの成果でしょう？　僕が提供すれば、僕の成果じゃないですか」

「それはそうだけど……」

うつ、と微かに目に涙を溜めるフィー。

切羽詰まってるな、などと他人事の僕。事実、フィーは暴拳に出た。

「……泣くわよ？」

「泣いたって教えませんよ」

内心、泣かれたらどうしようかと焦っているが、それを表情に出さない。

プライドがあるから、泣かないと思うけど。

「……じゃあ泣く」

「どうぞご自由に。僕には関係ありませんから」

そう言い切った僕をフィーは上目遣いで睨んで、少し俯いて考えるようにする。

そして、羞恥心でぷるぷると肩を振るわせ、それに伴って顔を真っ赤にして、涙目で僕を一目見て。

上目遣いでフィーは、

「……に、にゃー」

鳴いた。

ごふっ。

フィー……。それは反則つてものだよ……。

いつもは警戒心びんびんなのに、自分の興味の対象には全てを曝け出す所とか、凄く子猫っぽいと思ってたよ！ 小柄で丸い顔とか、子猫みたいで可愛いとか思ってたさ！ だからって、それは反則だ！

……やばい、なんかフィーの頭にぼんやりとネコ耳が見えて来た。やばい、やばすぎる。もの凄く似合ってる！ 超可愛い！

???！ いや、何言ってるんだ。やばいのは僕の頭じゃないかよ。

という思考が、瞬きの間になされたのはここだけの話である。

僕は完全敗北した。悔しいので、フィーの頭を撫で回す。髪をくしゃくしゃにしてやった。

「???んっ」

なのに……、なんで照れくさそうに頬を染めてるんだよ！ 何で嬉しそうなんだよ！ 嫌がれよ！ 僕の精神が死ぬからこれ以上はやめて！

ネコの耳が見えた時点で、僕の精神は死んでいたんじゃないだろうか？

非情の収集家と憤りの？ 2（後書き）

この28話を28日にやりたいがために、ちょっとだけ更新日時を調整していたりして。

非情の収集家と憤りの？ 3

「成果……ですか」

「何でも良いの！ 何かない？」

なんとか部屋の中にスペースを作り、講義と洒落込んでみる。
尻尾でもパタパタ振り出しそうな勢いで、身を乗り出して尋ねてくるフィー。

実際、僕がやっている魔術は、一般的な魔術とは大きく異なる。
その内一つでも見せれば、高評価は得られるのではないだろうか。
問題は……あまり影響力のないやつが良いと言う事だ。そうなる
と、簡単な別次元の魔術が良いだろう。

考え方を根本的に変えなければならぬ、という新たな問題も生まれるが、何を教えるにしても関門と言うのはある。そこでダメなら、また別なのを考えれば良い。

最悪、フィーが解雇されても僕は何も困らない。

「……ちょっと、何か変な事考えなかった？」

「いえいえ、僕に任せてくれれば、万事上手く行きますよ」

「……なんでだろう。あんたの言葉、その後ろに『僕に取って』って付きそう」

「ザッツライト」

「ふえ？」

こういう時、英語は便利だ。単語の意味がわからないから、相手に伝わらない。

ただ、僕の態度で伝わってしまう事もあるが。

「では、早速講義に入りましょうか」

「お願い！　あたしが頼むなんてそうそうないんだから、光栄に思
いなさい！」

「そうですね。『いつかあんたを仰天させるような魔術を見せてあ
げるんだから！』なんて言ってましたもんね」

ぎゃーと羞恥心と怒りが入り交じった叫びを上げて、僕の記憶消
去しかねぬ勢いで殴り掛かってくるフィー。その細く白い腕を受け
止め、くるりと身体をターン、フィーのローブの襟口を掴み持ち上
げる。

ああ、背が高いつて良いな。首根っこを捕まれてぶらぶらしてい
るフィーを見ながら、いつかは我が身、などと思ってしまう僕の本
当の身長は、そこまで低くないーはず。

「うつつ……」

「はははっ、まあ、楽しみにしていますから、その内にも見せて
ください。時間がないのでしょうか？」

僕はへこたれるフィーを床に下ろし、早速講義を始める。

「まず、フィーはマナをどういう物だと考えていますか？」

「魔力にだけ反応する魔術の元、でしょ？」

「はい、まずはその考え方から変えてください」

ほえ？　とばかりと口を開けるフィー。

無視して、僕は続ける。この後何度も似たような展開になりそう
なので、いちいち反応をしたりはしない。

「マナとは、確かに魔力にしか反応しません。ですが、確かに存在
しています。例えば、水のマナ」

そう言って僕は水のマナを集める。水は酸素と水素から成る、これはこの世界でも変わらない事だ。従って、水のマナとは酸素と水素の集合体、と僕は踏んでいる。

が、それは実は間違いでもあったりする。

意識を集中し、水のマナを集める。ただし、空中闊歩の要領で魔力は放出しない。

「今、僕が水のマナを集めたのを、フィーは分かりますか？」

「うっん。……え？ 集めてるの？」

魔術師が感知出来るのは、魔術だけ。

マナが存在するものであれば、それを感知出来ないのはおかしい、というのが世間一般の魔術師の考え。

だが、

「マナと言うのは、実は感知出来ません。フィーが水のマナを集めていると感知出来るのは、微弱な水の魔術が発動しているからです」

そう言っ、僕は少しだけ魔力を放出する。

途端、フィーの顔色が変わった。

それもそうだろう。僕が集めた水のマナの量は、おおそ以前に作った水球を作れるくらいだ。

「えっ！？ こんなにマナを集めてたの！？」

「僕はさっきまで、完全に魔力を抑えていました。そのため、微弱な魔術は発動せず、集めたマナをフィーは感知出来なかったんです」

そう言っ、水のマナを散らす僕。水場でもないから、集めるのは結構大変だと思ったが、どうして簡単に集まるんだろう。怖いよ、この研究所。

「というように、他者が操るマナを感知する事は出来ません。それは置いておいて、水は何で出来ているか、フィーは知っていますか？」

「へ？ 水は水でしょ？ 水蒸気が集まって、水に成るんじゃないの？」

むう、間違いではないんだよな。むしろ、そっちの方が効率はいいかもしれない。既に水として存在している分だけ。

「では、その水蒸気は何で出来ているか知っていますか？」

「……えっと。……知らない」

まあそうだろう。最小が水蒸気だと思っていれば、それより小さい物があるとは思わないよな。

「では、フィー。僕と同じように水球を作れますか？」

「そんなの朝飯前よ！」

そう言つて、フィーは僕よりも早く水球を作り出した。

まあ、そうだろうな。偏屈魔術師つて二つ名は、他の魔術師の嫉妬から来ているらしいから。

「フィーは水蒸気を水のマナとして集めていますよね？ 僕はその水蒸気を構成する物をマナとして集めます。どちらも共に、ちゃんと水球が出来ます」

「……要するに、マナは術者によってその形を変えるってこと？」

僕はニツと笑みを浮かべ頷いた。

マナは術者のイメージによってその形を変える。最終的に水にな

る、魔力にしか反応しない要素が、水のマナと呼ばれるのだ。

物質や現象をより深い層まで理解しておく事が、魔術の幅を広げると言っても過言じゃない。

確かに呼び寄せているものは同じなのに、使用者によって異なる物質となる存在。

それって、その存在自体が意志をもっているようじゃないか？

「そのため、マナは精霊ではないかと僕は考えています」

「せ、精霊って……」

だって、実際そうじゃないか？ 自分の意思に基づいて集まったり散ったりするエネルギーの元だ。生物かなんかだと思った方が話が早い。

そっちの方が融通が利くし。

「まあ、マナに意思があるうが無かるうが関係ありませんけどね。余談ですよ」

「え？ ……十分これで成果になるわよ？」

「なりませんよ。証明の仕様が無いでしょう？ まさか、フィーは僕が何ヶ月も掛かって出来るようになった魔力の制御を、数日でマスターするつもりですか？」

魔力を一切出さずにマナを集めることが出来れば、色々と便利な点が多い。

魔術師同士の対決において、その勝敗を決めるのは魔術の発動までの時間、そして属性だ。炎に風の魔術がタブーとされるように、魔術の戦いは読みが勝敗を分ける。

相手と自分の力量を正確に把握し、いかなる魔術でも自分が先に攻撃できると踏んだ方から魔術を構築。相手は集められたマナを感じ知して、それを打ち消す、もしくは飲み込む属性の魔術を構築する。

そこからは時間との勝負。いかに相手より早く魔術を構築するかだ。魔力を抑えると言うのは、この戦い方においては禁じ手に近い技術だ。自分の方が魔術の発動速度が速ければ、相手に対抗策を練られる前に攻撃が可能になる。というより、受身の相手の不意を付ける。魔術師同士の戦いが代わるような技術だ。

だから、あまり公には出来ない技術なのだ。

だが、

「あたしを誰だと思ってんのよ！」

フィーは無い胸を張って宣言した。

やばい、フラグが立った。

これはどうにかしないと、確実にフィーはこれを成果発表する気だ。

「そうですか？ 僕としては、もっといいのがあるんですが、それでも別に構いませんよ。けどまあ……地味ですよね」

「あうつ……」

成果発表は、貴族様に見せるらしい。

それは、どれだけ内容が凄くても地味なら評価は低い。

「……続きをお願いします」

「はい、解かりました。ではマナについて、僕なりの解釈を説明していきますか」

項垂れるフィーを視界の片隅において、僕は講義を続ける。

「まず、水のマナは水蒸気ではなく、気体を想像しています。水を蒸発ではなく、分解した時に生み出される気体ですね。それは解かりますか？」

「……し、知らない」

僕は微量の水のマナー―酸素と水素を集めて、さらに火のマナも集める。

「さて、今右手に少しばかり水のマナを集めています。ただ、一切魔力を放出していないので、感知できないでしょう。しかし、左手に集めた火のマナは感知できますよね？」

「え、ええ……。右手と左手で二つのマナを扱うなんて……。あんなってかなり器用なのね」

生憎と技しか取り得が無いもので、と僕は揶揄して火の魔術を發動。

「さて、フィー。右手に少しの水のマナ、左手に火の魔術を發動できますか？ 魔力制御は要りませんが、出来るだけ水のマナは集めるだけにしてください」

「……わかんないけど、やってみるわ」

フィーはキツと目を開き、両手を見つめる。

一瞬で左手に炎が出来上がり……対して右手には、微かに水のマナがあることが感知できた。やはり、魔力制御は無理だったようだ。というか、魔力制御されるとマナが集まっているか他人には確かめ様がないから困る。

「では、右手と左手、火の魔術と水のマナを合わせてください」

「へっ！？ そんなことしたら、火が弱くなっちゃうわよ？」

「まあ、やってみてください」

「……水と火の相性が悪いのは常識よ」

訝しむ表情を浮かべるフィーだが、素直に左手に右手を近づけ、ジュツと音を立て火が微かに弱まった。

「水蒸気をイメージしていると、そうなるでしょうね。では、僕のを見ていてください」

右手には微かな、それこそ雀の涙にも満たない量の水のマナー・酸素と水素、左手には火。水のマナが大量だと、凄く危険だ。小学校の理科の実験でやったことがあるのではないだろうか？

「水を構成する気体には、物を燃焼させるものと、燃焼することで炎を上げるものです」

電気分解した水素と酸素の混合物に、マッチを近づける実験。
左手に右手を近づけた瞬間、ボンッと淡青色の炎が燃え上がり、ひやりと手が湿った。

一瞬の爆発で、火の魔術は消滅。

これが僕の秘策。

もし、例の水球レベルで水のマナを集め、それを火の魔術と反応させると、爆発系の魔術の完成だ。魔術に指向性が付けられるため、自分を中心に何メートルものクレータを生み出すような爆発を生み出しても、中心から外に向かつての爆発であれば無傷でいられるのだ。爆発で吹っ飛んだ瓦礫とかに指向性は付けられないので注意。

「と言う感じで、同じマナでも想像力を働かせれば、魔術の幅が広がるわけです。はっきり言って、魔術の可能性は無限大。フィーの成果を発表してください」

呆然としているフィー。その反応なら何か思いつけば貴族相手でも高評価を得られるかな。

危ないから、水のマナについては教えない。

その後、寝泊りする空間すらない研究所の掃除を僕が開始。

掃除手伝いとして、宿で休んでいた（ヒビキといざこざがあり負傷した）アイリを呼び、掃除の合間を縫ってフィーに野次を飛ばしたり、おちよくったりして時間を過ごした。

「アイリ、良いですか？ 風のマナというのはー」

「……なるほど。理に叶っていますね」

「うつつ……、それをあたしに教えてくれても良いじゃない」

歩ける場所が無い研究所内で、しかたなく、そりやもう面倒だけどしかたなく、あまり人前で見せるべき技術じゃないんだけどしょうがなく、風のマナを集めて宙を歩く僕——を恨めしそうに睨むフィー。それを眺めながら、黙々と掃除を続けるアイリ。

うん、優秀な部下だ。

火のマナ。

魔力にのみ反応する可燃性の気体。これを燃焼させることで、火の魔術が発動する。燃料みたいなもの。

風のマナ

結合する真空の箱。これをたくさん集めて大きな真空の箱を作り、その箱を魔力で破壊して風を生み出す。集めると、真空の箱により若干空気が押されて風が起こってしまう。

地のマナ

意思に基づいて変わる未知の元素。炭素でもナトリウム、なんなら金でもいい。常温で気化しない元素。物質とするのに馬鹿みに魔力を消費する。また、魔力がなくなると存在を維持できず、消滅する。

非情の収集家と憤りの？ 4

この世界は素晴らしい。

魔術、獣人、エルフ？？そして、魔法。

どれもこれも、地球にはなかったものだ。

皆、その価値に気付いていない。この世界がどれほど素晴らしいのか、その価値に気付いていない。

だが、あえて私はそれを語るまい。

すべて、私のものだ。誰にも渡さない。独り占めだ。

地球の技術も捨てがたいが、魔術や魔法に比べればあんなもの必要ない。どうにもこの世界の人間には珍しく映るようだがな。

私の魔法は、『強欲』属性の召喚魔法。

『一、紙に書かれている名称のものを目前に召喚することが出来る。』

二、生物は不可能である。

三、名称が総称であった場合、召喚されるものはランダムとなる。

四、所有権のある物は不可能である』

この法則さえ守れば、何でも召喚、もとい手に入れることができる。

生物を召喚できないため、どこぞの召喚士よろしく、魔獣を使って戦うことは出来ない。例え可能であったとしても、召喚した魔物に喰われてしまう気がするので、それは別にいい。

ただ、所有権。これが厄介だ。これさえなければ、名のある宝具をすべて手に入れることが出来ると言うのに。

まあ、それでも故人の物であり、誰の手にも渡っていないのであ

れば、私は手に入れることが出来るが。おかげで、国宝として飾られている類の宝具は色々と手に入ったし、昔話に出てくるような忘れられた伝説級の武器も私の手の内にある。わざわざ隠された洞窟まで取りに行く必要などなく、紙に書けばそれで手に入るのだ。

世の探索者諸君には申し訳ないことをしたと思っている。何せ、私は自宅で紙とペン一本でその成果を奪っているのだから。

私は全てが欲しい。私には、それを手に入れるだけの力もある。

私は魔術が使えない。私はこの魔法しか使えない。私は化物じみたステータスもない。

だから、私は欲する。

私の代わりに、それらを受け持つ人間が。

さて、今日は魔術師の研究発表。何か良い人材は要るかな？

「よし、準備万端。行つて来るから、留守番宜しく」

「……心配ですね。僕もついて行きましょうか？ あっ、別に保護者としてではないですよ？」

「うっさい馬鹿！」

かあつと顔を怒りで真っ赤に染め、フィーは地響きでも立てるような勢いで出て行つた。

ちなみに研究成果は、風のマナで火の魔術が消せるという発見だった。……まあ、許容範囲。それは以前僕が見せなかったか？ まあ、証明できるのだから良いか。

「……さっきのはまずいですよ」

デリカシーが無い僕をジト目でたしなめるアイリ。
したくてしている訳じゃないんだけどさ。

「うん、さすがに僕もまずいと思った。……けど、最悪の予防線くらいは張っておきたいんだ」

「何かあるんですか？」

「……何となく、嫌な予感がしてるんだよ。ヒビキから話を聞いたときから」

「……」

まあ、大丈夫なはずだ。フィーは優秀だし、お守りも渡してあるし。

そして、フィーは帰ってこなかった。

やはり、この世界は素晴らしい。

けれど、どうにもこの世界の住人はそれに気付けていないようだ。
私は今、ランベルグ帝国首都にある、ギリア城で魔術師達の研究
成果を見させてもらっている。だが、平凡だ。

平凡な魔術、それこそ科学の延長線上にも満たないものばかりだ。
プラズマに驚きの声をあげる他の貴族にうんざりしながら、その成
果発表を見ていた。その程度のものなら、私が召喚した現代の機器
で代用できる。マナという未知の元素を用いておきながら、その特

性をまるで生かせていない。

スカウトモノクル

魔法具、『スカウトモノクル 霊視の片眼鏡』を通して見ているが、あまり優秀な人材もない。魔力を数値化し、魔術や魔法使い、魔法具の詳細を見せてくれる魔法具。名称どおり、スカウトの役にしか立たない物だが、そこそ便利だ。

今回も収穫なしか、と視線を泳がせた時だった。

不意に、異様なものが視界を過ぎった。

「これは……」

モノクルの視界を埋め尽くさんばかりの文字の羅列。魔法の詳細だろうが、なんだこの量は！？ 詳細の量が多すぎて、魔法具本体が見えない。この量、一つの魔法じゃない。複数の魔法が掛けられた魔法具かつ！？

複数の魔法……魔法使いの合作！？

私はモノクルを外し、肉眼でその魔法具と、それを持つ人物を見た。

研究成果は高評価を得られた。

何せ、相手が火の魔術を使っているときに、風の魔術を使用するのはタブーとされていたのだ。それを覆す、魔術師の戦いを揺るがす大きな成果。高評価は確信していた。

前に会ったあの黒尽くめには感謝せねばなるまい。何せ、最初にこれをやったのは奴なのだから。あたしはそれを真似ただけ。……あと、あの失礼なおっさんにも。

研究資金も貰えたし、さっさと帰ろうかな。そんであのおっさん

を殴り倒そう。どうにも、
貴族って言うのは好きになれないのよね。一緒にいてストレスが溜まる。

よし、じゃあ帰っておっさんを殴ってストレス発散しよう。

「フィオナ君と言ったね。素晴らしい発表だったよ」

「えっと、ありがとう……ございます」

と、何故かおっさんを髭髯させる笑みを浮かべた男が話し掛けてきた。年齢はずっと若いのに、どうしてだろう。

「ああ、別に私は貴族じゃないからね。砕けた話し方で良いよ」

「あっそう。なら、そうさせてもらっわ」

一瞬で砕けるあたしの物言いに苦笑を浮かべる男。あれ？ もしかしてさっきのは冗談で、貴族？ まあ、本人がああ言ってるから別にいいか。

「風の魔術ではなく、風のマナか。素晴らしい発見だよ」

「ええ。風が吹くことで火は大きくなるのが当たり前だけど、風のマナは風じゃないって気付けたから」

男はうんうんと、まるでそれを既に知っていたかのように頷く。
何こいつ、なんか……嫌だ。

「ところで、君の腰についてるその人形はどうしたんだ？」

「ふえ？ こ、これ？」

と、唐突に男はローブの腰の辺りに付けている人形を指差した。
これは、おっさんーレイにもらった猫の人形。お守りって言う

てたっけ。

「知り合いにもらった物よ。手作りって言ってた」

「て、手作りですか？」

手作りと言われ、目を丸くする男。驚くのも無理は無い。何せこの人形、縫い目が恐ろしいほど綺麗なのだ。伊達に『Gランクの天才』とは呼ばれてないな、と思ったものだ。

「そ、そうですか。ちなみに、それを作った人の名前は？」

「名前？ 『Gランクの天才』って呼ばれてる、レイっておっさんよ？」

レイの名前を出した瞬間、急に男の表情が変わった。

それは、驚愕と言うよりも、恐怖に近いもの。

「レ、レイ！？ や、奴か！？ いや、ありえない、そんな馬鹿な

……」

「何？ あんた、あのおっさんと知り合いなの？」

「知り合い？ ええ、知っていますよ。知っていますとも。君も彼を知っているようですが、私もですよ。あの糞むかつく野郎のことなら何でもね」

その時だ。

男の笑みに、ぞわぞわと背筋を虫が張うような感覚を覚えたのは。その笑みは、一言で言えば、邪悪。

逃げ出したい衝動に駆られたあたしに、男は言った。

「フィオナ君、少しお時間よろしいですか？　っと、そう言えば名乗っていませんでしたね。私の名前は、ルミナス・レイフォード。ランベルグ帝国、十貴族の一人です」
「ッ？？！！」

あたしは貴族が嫌いだ。　と言うよりも、強制させられるのが嫌いだ。

だけど、あたしは貴族に逆らえない。だって、養って貰ってる側だから。

非情の収集家と憤りの？ 5

コレクター、ルミナス・レイフォード。ランベルグ帝国十貴族の一人。

レイフォード家は十貴族の中で最も権力が低く、財産も少ない家柄だ。能ある鷹は爪を隠す、とも言つ。峠にある屋敷もそれほど広くなく、両親は病気で療養中。今、レイフォード家には彼とその召使いしか居ないと言う。

ただ、周辺住民によると彼の屋敷で働いているであろう、多くの人を見かけるとの情報。まるで一国の王であるかのような、召使いの数だとか。

そして、行つたきり帰つてこない人がいる。

そんなアイリの調査情報を聞きながら、僕は考えた。

人間収集、ね。

舐めやがって。

フィーからの手紙に書かれていた、『ちよつと行つてくる。あんた知り合い？　なんかネコの人形にご執心』。

どう考えても、フィーの意志で行つたんじゃないだろう。

そして、僕を挑発しているような話じゃないか。

あのお守りは僕の最高傑作、はつきり言つて魔術は愚か、『憤怒』属性の魔法でなければ突破出来ない代物だ。お守りと言う効果を最大限生かす、鉄壁に近い魔法具。コレクターの魔法は、どう考えても『強欲』、もしくは人間操作の『傲慢』か『色欲』だろう。一応、フィーの安全は保証出来る。

どういう訳か、あれがそういう魔法具だとバレて、コレクターに目をつけられたようだが。いやはや、それはどうしようもない。

「私も行きます」

身支度もとい襲撃準備をしていると、そつとアイリが寄り添って来た。

いつぞや見た黒のローブを身に纏い、その目にはうつすらと怒りと憎しみに似た感情が見えた。

そう言えば、アイリは……。

「彼は、私がどうかしたいんです」

齒を強く噛み締める音が聞こえた。

アイリがここまで露骨に感情を表す事は珍しい。それほどまでにルミナスに対して怒りを抱いていると言う事が。何をされたのかは聞かない。聞きたくもない。ただ。

僕はアイリに睡眠薬をもっていた。

ルミナスの屋敷に向かう最中、ふらふらとしたアイリを抱きかかえ、掃除して住めるようになった研究所に寝かせた。

「あつ……、薬……盛りましたね？」

「……ごめん。巻き込みたくないんだ」

本音を言えば、迷惑なんだよ。いや、見せたくないってのか。

「約束……です。ちゃんと、戻って来て……くださいよ？」

「ああ、約束する」

こてんと寝てしまったアイリをしばらく見やり、寝顔可愛いな、と思わず撫でてしまってから僕は研究所を出た。

その時、僕の顔に張り付いていた表情は??笑み。

僕はさ、こういう愚かしい行為に対しては、死にたくなる程後悔させるのが、礼儀だと思ってるんだ。

コレクター、お前の話はアイリの情報以外にもたつぷりと聞かせてもらっている。

例えば、アイカシア国の前身であるマクシアの宝剣を我が物にしようとして、内乱を起こさせたとか。結果、それが原因でマクシアは滅び、アイカシア国には帝国との負の部分の関係と言うしこりが残った。

例えば、緑豊かな国、ウィンドル王国の地下に埋まる巨大な魔石を奪ったとか。魔石が強力な紫外線から守っていたことで豊かであった国土は、草木は生気を失い泉は涸れた。ウィンドル王国はあやうく滅亡する所だった。そして、ミリア姫は皮膚ガンになった。僕が新たな同様な魔石を置かなければ、ウィンドル王国は人が住めぬ地域なっただろう。

魔法は、そういう使い方をするための物じゃない。

お前の魔法は、ただの『罪』だ。

丁度良い。

これで切って落とそうじゃないか。

僕の復讐の火蓋を。

非情の収集家と憤りの？ 6

「ちっ、さすがは奴が作ったと言っただけはあるな。だが……」

ネコの人形？ あれはそんな物じゃない。

とんでもない化け物だった。

まさか、魔法は愚か魔術、更には物理現象に対してまで効力を及ぼす魔法具とは、恐れ入ったよ。正直、私もコレがなければ、藪をつついて蛇を出すどころか、八岐大蛇でもだすところだった。いや、実際少しばかり出してしまったが。

しかし……コレは確かに複数の魔法が掛かった魔法具だが、どうなっている？

あまりにも、使用者に都合が良すぎる魔法だ。一切のデメリットが記述されていない。欠点がまるで存在しない魔法が、いくつも積み重なって出来ているようだ。

持ち主に対するありとあらゆる攻撃を代替わりにし、その攻撃を動力として動く魔法人形。ネコの形は飾りで、攻撃を受けた瞬間にはもうその形は残っていないかった。

魔法具とは、魔法使いが自分の魔法を道具に込めた物だ。そのため、魔法具は大抵若干の劣化、もとい弱点を付けるのが常識だ。誰でも使える道具にしてしまっ、そうすると魔法使いとしての存在価値が下がる訳だ。

だが、この人形にはそれが見られない。

奴らしい。実に奴らしい魔法具だ。

だが、奴じゃない。

やった。本当にやって良かった。

不意に、地響きと何かが崩れる音がした。

「ルミナス様、門が……その……」

「どうした？ 怒らないし、嘘だとも言わない。言ってみろ」
「壊されました」

奴が来たか。

ああ、笑みが消せない。これから、これを作った奴を私の手駒に出来るのだ。他の人材などもはや要らない。

最高のおもてなしをさせてもらおうじゃないか。

私がこれまでに集めた魔法具と、優秀な人材で。

雷鳴が響き、殴りつけるような雨が降る夜だった。

ランベルグ帝国首都、その端も端、切り立った崖の上にレイフォードの屋敷はある。

四方を高い壁に囲われた屋敷で、正面以外のその壁の向こうには落下空間しかなく、その下の海は天気も相俟って常闇のようだ。

僕は正々堂々真つ正面から、厚さ五十センチの門を蹴破って屋敷に入った。もの凄い地響きが起こり、良い呼び鈴代わりになっただろう。

別に僕の馬鹿力ではない。『傲慢』の魔法だ。

召使いと思われる、悪趣味なずたずたのエプロンドレスを着た少女が僕の前に現れた。その目に生氣は無く、ただ身体が勝手に動いているようだった。

胸くそ悪い。

少女が人間とは思えない動きで、一瞬で僕の目の前に移動する。それを僕は見て、何もしなかった。少女の手には、あまりにも似合わない巨大な斧。

少女はそれを振り上げ——何もしなかった。

否、何も出来なかったのだが。

見れば少女の身体は、身体を動かそうとする見えない力と、身体を動かすまいとする見えない二つの力の狭間にあるのか、ぷるぷると震えている。

身体を強制的に動かす『傲慢』属性の魔法具、隷属の首輪が少女の細い首に付けられていた。

コレクター。どうやら、こういう魔法具も取り揃えているようだ。となると、その無骨な斧も魔法具か魔術具か。

まあ、当たらなければどうという事はない。

対して、少女を動かすまいとする力も、僕の『傲慢』属性の魔法。

『一つ、視認出来る物に質量と力を働かせる事が出来る。

一つ、形を自在に変える事が出来る。

一つ、影が接触しなければこの魔法は使えない。

一つ、対象が生物であった場合、その影が表現しうる範囲内でのみ形を変える事が出来る』

端的に言えば、影を一つの生物として扱える魔法だろうか。

そのため、『影の呪縛』とかレイは呼んでいた。

一度でも影が接触すれば、対象が物であれば完全に僕の思い通りになる。対象が生物であった場合、僕の思い通りに動くマリオネットとなる。影が表現しうる範囲内というのは、背骨が皮膚を突き破ったり、腕の形を変異させる事は出来ないという事だ。

この条件の考え方としては、一回転した時に影として映る範囲。日の射し方によって、操れる範囲が変わってしまう訳だ。曇りの日はほぼ無意味。日中でも基本的に表情、足の指の動き、内蔵器官の

動きなんかは操れない。逆に夜中は、星の巨大な影に入るため、表面的な部分は全て操る事が出来る。

これが魔王だ。

伊達に『傲慢』の象徴である、王を名乗ってはいないんだよ。

といつても、同じ『傲慢』の魔法が打ち消し合って、少女は何も動かせないが。

その首輪をとつても良いのだが、そうしている時間が惜しい。

少々、雨の中で寒いと思うがそこで待っていてほしい。

見れば、そろそろとたくさんの似たような格好の召使いが出てくるじゃないか。

いくら夜中でも、ちゃんと自分の影と相手の影を接触させなければ魔法は発動しない。影と影がくっついていいるから、夜中は全てを手中に置ける——という風には行かないのだ。

この数を相手にするのは面倒だなと、そんなどうでも良い事を考えていた僕に、先頭にいた男が何かを投げた。

「……ッ」

僕はそれを拾い上げ、笑みを引きつらせる。

オーケー。どうやらお前は僕を本気にさせたみたいだな。

やってくれるじゃないか、ルミナス・レイフオード。

拾い上げたそれは、ズタズタに裂けた——にゃんこの人形だった。

浮かべた笑みが消えないから、頬に手を使ってその笑みを隠す。そうこうしている間に近寄ってくる増援をちらりと見据え、僕は誰に言うわけでも無く呟く。

「ここからは、『魔王』じゃない」

姿を隠していた黒衣のマント——影に質量と力を与えて作り出した『傲慢』のマントを取り払う。

マントは消し炭のように黒の粒子となって宙に消え——代わりに炎が舞い上がった。

それは狂気の炎。愛憎の？。激情の業火。

一人のおっさんが——名付けたその魔法の名は、

『憤怒』

身体が炎にでもなったように、存在が希薄になったように揺らめいた。

灯台の光のように、夜の闇の中でたった一点だけ光る僕の身体。

眼鏡の位置を直す手から炎が溢れ、手が炎であるかのように火の粉が飛ぶ。

暴風によって僕の形が揺らぐが、叩き付けるような雨は蒸気となる事も無く消滅して行く。

この炎は——全てを打ち消し焼き尽くす。

理不尽を極めた、最悪の魔法。

驚愕を表しながら、恐怖を感じながら引けない召使^{コマ}い。そこには、死への恐怖がありありと見て取れた。

ざっと見た限り、若い人間が多い。眉目秀丽、八方美人。コレクターの我が儘に寄って奪われた人生が、あまりにも多すぎる。

彼らには愛した人が居ただろうし、愛してくれた人も多かっただろう。

だが今の彼らに見えるのは、疲労と恐怖に歪んだ悲しげな表情だ。幸せを語った魔王には――憤怒の情しか湧かない情景。魔王では、彼らを救う事は出来ないような気がした。だから、僕は名乗る。

おっさんが貫いた生き様を。

「『愛と情熱の戦士』だ」

憎悪の炎が、屋敷の庭を埋め尽くした。

非情の収集家と憤りの？ 7

炎に反応できたのは何十人といった召使いの内たったの三人、されど三人いた。

他の召使いがその魔法具、もしくは魔術具、名のある武器もろとも炎に飲まれる中、超人的な反応で跳躍し、そのまま僕へと襲い掛かってくる。双子の剣士、弓使いだ。

やはり、と無感情に襲い掛かってくる彼らを見る僕。僕はアイリとヒビキの情報で彼らを知っていた。

バトルジャンキー、ヒビキの情報によると、『リミットメンション限りなく魔法に近い魔術』と勝手に呼んでいた冒険者、もしくは魔法具が行方不明となっていると言う。

そして、今僕に襲い掛かってきている人物達がそうだった。

全く見分けがつかない、金髪ポニーテールの双子の剣士。ただ睨んでいるように見えて、物言いたげな視線で僕を見据えている。そこにあるのは、一種の希望か。はたまた憎悪か。

『暴風のリン』、『雷電のラン』。

魔力量に限界が見えない、思うが俣に風と雷を操る双子の姉妹。その実力は折り紙付き、ランベルグ帝国が攻め滅ぼそうとした小国を、たった二人で防いだという伝説の持ち主。

その手に握られているのは、『疾風のレイピア』と『雷剣ジゴデイル』。共に、風や雷そのものが武器となったような魔法具。

刺突が渦を巻き暴風となり、斬撃がジグザグの軌跡を描く雷撃となつて僕を襲う。

避けることは可能、だった。
だったのだ。

だが、動かそうとした体にずしりと重みが増し、耐え切れず膝を着く。

「やってくれるね……」

見上げれば、男が僕を無感動に見下ろしていた。

グレーの髪に、鋭い目つき。四十代であろう。堅いイメージが湧くカッコいいおじさんだ。レイのようにおっさんとは呼べない風格の漂う人物。

『重圧のグライス』。

こちらにも、重力を思うがままに扱う弓使い。重力で相手を押さえつけ、ピンポイントにその頭を射抜く??暗殺者。動かない的ならば絶対に外さない、命中率百パーセントの凄腕。

彼の手にあるのは、『白銀の霊弓』。ホーミング機能付きのレーザー光線と勘違いするような矢を放つ、こちらも魔法具。

グライスが何の予備動作も無しに僕に重力をかけ、そしてその弓から矢を放った。一瞬で矢は光線となり、僕を消し飛ばさんばかりに飛来する。

全く、リミットマジックとは、よく言ったものだと思は感心した。これは確かに『限りなく魔法に近い魔術』だ。

逆らうのが馬鹿らしくなるほどの力、属性で言えば『傲慢』だろ

う。

すごいや、すごいな、すごいって。

三つの攻撃が僕を直撃し、轟音が響き渡った。

地面が爆発したかのように吹き飛ぶ。その衝撃で大きく地面が揺れるが、それが収まるのと同時に三人は地に降り立った。

雨風が強いので、すぐに土煙は収まり??で?

「こんなモノで本物の魔法を??この『憤怒』を止めよう?。」

「「??がつ!??」」

ゆらりと。

警戒しながら僕に止めを刺しに来た双子の頭を鷲掴みにする。

僕は無事だった。

「違うんですよ。決定的に違う」

僕の呟きに、二人の顔に明確な愕然とした表情になり、恐怖が浮かんだのと。

僕の体を二本の魔剣が貫いたのは、同時。

僕は笑って、二人は笑えなかった。

二つの剣は、確かに僕の心臓と内臓器官を貫いている。

だが残念ながら、僕には痛覚つてもんが無い。正確に言えば、『急情』の魔法で痛覚の体感時間をゼロにしている。

そして、『憤怒』は事象、概念などありとあらゆるものを消滅させることが出来る。

僕が刺された??その事実すらも消滅していく。

「二人仲良くおいきなさい」

轟！ と炎が二人を飲み込み、僕は二人から手を離れた。

悲鳴は上がらなかった。

どさりと力なく地に落ちた二人に一瞥もくれず、残ったグライスに視線を向ける。

グライ스가弓使いらしく、距離おいて狙撃しようとは後ずさり??、

「っ!??」

??炎上した。

残念。『憤怒』の発動範囲は僕の視界だ。

僕に見える範囲にある全て、その消失権が僕にあるんだよ。
炎に飲まれて倒れていくグライスには目をやらず、悪の根城に見える屋敷へと視線をやる。

「はははははっ!!」

凄く気分がいい。こんなに笑えたのは久しぶりだ。

ああ……、この高揚感が消えぬうちに、さっさと君を消しに行く
としよう。

ふと見上げた空は、荒れた天気 of 夜らしく、どこまでも暗く黒い
ものだった。

ただそれだけのことなのに、何故か笑えてしまう。仕方なくその
笑みを手で隠して、僕は屋敷へと向かった。

「ああ……間違いない。あの炎、あのやり方??まさしくあの男だ」
魔法使い。

奴こそが、最強の魔法使いだろう。魔法の中の魔法を使う男。

『風塵のリン』、『雷電のラン』の双子は、彼女達の両親に呪いの
宝具を渡して、それを解呪する約束をしてなんとか手駒にした。

涙ながらに私に縋りついて来た時には、顔がにやけるのを抑えるのに苦労したものだ。

『重圧のグライス』は、私が暗殺を依頼するという形で手に入れた男だ。隷属の首輪を付けようにも隙が無く、仕方なく、一度しか効果を発揮しない代わりに時間を十秒だけ止める魔法具、『砂の消える砂時計』を使った。

どちらも手間隙がかかった優秀な人材だが、所詮は魔術師か。魔法使いには勝てなかった。

だが。

「はははははっ――！」

笑える。笑えるぞ。

奴はどうしようも無かった。弱みを握ろうにも、奴には過去の情報がるで見つからなかった。弱みを作ろうにも、決まって奴は最高のタイミングで現れて見せた。

だから仕方なく、殺すことに決めた。

それが、どうした？

奴よりずっと扱いやすそうな、奴の継承者がいたじゃないか。

人質に釣られて出てきた時点で、もはや笑いが止まらない。
こちらには、コレもあるしな。

非情の収集家と憤りの？ 8

人は、なんとなくが多い。

その一つに、なんとなく汚れた物があれば綺麗にしたいくなる。それと反対に、なんとなく真つ白な物を汚したくなる。

それを成し遂げた時、人は爽快感、達成感を得る。そして同時に、虚無感も。

この『憤炎』は、それを煮詰めて濃くしたような魔法だ。

今僕は、もの凄く死にたかった。

成し遂げた事に対して、虚無感を感じている。

なにやっつてんだろ、馬鹿みたいじゃないか、と。

完全に熱が冷めていた。

それでも、下火となろうとも、コレクターに対する復讐の炎は燃えていたが。

屋敷の内部は電気の照明で照らされており、きめの細かい絨毯や濁りのないガラスから、地球から持ち込んだ物で改築したのだと解かった。だからと言って、靴を脱いで上がるつもりは無い。

外の盛大な歓迎とは裏腹に、屋敷の内部は不気味なほど静まり返っていた。

「悪趣味な……」

屋敷の一番奥に、いかにもな巨大な扉があった。僕は呟きながら、

その扉を開ける。

そこはダンスホールに近い広間だった。半球状の部屋で一面が窓ガラス。照明が無く、外の荒れた天気 of せい でかなり暗いが、見えないほどではなかった。

「フィーっ!!」

入ってすぐ、フィーが倒れているのが見えた。駆け寄ってその頬をぺちぺちと叩く。柔らかい。

「んっ……」

と、すぐにフィーの瞼が動き、ゆっくりと開いた。
そして、

「……眠い」

またすぐ閉じた。

……。いや、無事なら良いんだけど。なんていうか、拍子抜けだ。

薬でも盛られたのか？

「何、ここまで歩かせてしまいましてね。疲れているだけでしょう」

と、僕の疑問に答える聞きなれぬ男の声がした。

どうしてだか、こいつの声は耳にこびり付く。粘り着くような、嫌な声だ。

僕はその男を知っている。振り向けば、モノクルを掛けた青年が冷笑を浮かべていた。丁度いいタイミングで稲光が部屋を照らす。

「ルミナス・レイフォード……」

「おや、私の事はご存知でしたか。『愛と情熱の戦士』さん。いいえ」

そこでルミナスは一拍空け、

「魔王、マモル君」

ハンドガンを僕に向け、勝ち誇った顔でルミナスは言った。

バイオハザードなんか出てくるハンドガン。クリティカルは出やすいのだろうか。

閑話休題。

しかし、なんでバレたかな？ 一応、僕の正体は隠していたつもりなだけだ。

あつ、複数の魔法を使った時点でバレたか。魔法使いは、一つの魔法しか使えない。魔王を除いて。

「いかなる魔法使いといえど、頭を打ち抜かれては死にますよね？ 勿論、魔王でも」

「そうですね……。魔法と言うのは、根本的に使用者の解釈ですが、例外無く思考して発動する物ですからね」

銃で頭を撃たれば、考える暇も無く絶命する。

肉体的能力の低い僕ら魔法使いに取っては、銃ってのはかなり相性が悪い。それこそ、狙撃銃なんかは。けどさ。

「アンタが何と言おうと、お断りだ。僕は、アンタみたいな奴が大嫌いなんだよ」

人の事を駒としか見なせない、それじゃただの王様だろ。
僕は魔王なんでね、その考え方少し違うんだ。

「例えばアンタ、魔法も魔術も使えぬただの人間は殺していい、なんて思ってるんだろ？ 更に言えば、魔法使いこそがこの世界を統べる者だ、なんてさ」

「……意外ですね。まさか、魔法使いは人間のために尽くすべきだと？」

「まさか。それも一つの生きる道だとは思っけどさ。最終的には自分のためさ。後味が悪くならないように、この人生を楽しめるように、幸せになれるように使っただけ。偶々、それが他人のためになっているだけだ」

でも。

「他人じゃなくて、仲間のためなら使っかもな！」

僕が声を荒げた瞬間、足下に銃弾が撃ち込まれた。
けど、僕はひるまない。

「撃ってみるよ、コレクター。お前の大事な收藏品なんだろ、僕は？」

「まさか、そう言えば私が撃たないとでも？ 死体のあなたでも十分活用出来るんですよ？ 『操り人形の針』って魔法具は、死体を操れるんですよ？」

「死体？ おいおい、まさかその虚仮威^{いつぱい}しの銃で僕を殺せるとでも思ってるのか？」

僕はルミナスをせせら笑い、断言する。

「魔王を舐めるなよ？」

「???つ!!」

瞬間、ルミナスは引き金を引いた。

僕の頭が吹っ飛ばされたように変形した。

それはまるで、炎が風に吹かれたようなもので、
すぐに元の形へと戻る。

「???で? 頭を吹っ飛ばしたから僕は死んだか？」

「ッ!？」

驚くルミナスに、僕は冷笑を浮かべた。

馬鹿だな、確かにレイなら死んだろうさ。

だが、僕は魔王だ。

僕の『怠惰』の魔法は、体感時間の操作。
未来と現在??その狭間に干渉する魔法。

起こる事象、起こっている現象??それらについて、僕は思考する時間が与えられる。

僕は便宜上、この魔法を『語り部』なんて呼んでいる。

起こっている現象に付いて解説し、時には起こる事象を預言できる。身体が痛みを感じていようと、それを冷静に分析出来る魔法。体感時間を増やせば、それだけ考える時間も増える。

なんなら、銃弾がどのような軌道を描いて僕の頭を吹き飛ばしたか、語ってもいいんだ。

魔王はただの魔法使いじゃないんだよ。

七つの属性全てを使えるから、魔王なんだ。

「魔法が『七つの大罪』でジャンル分けされているのは、この暴力的な魔法が罪に他ならないからだって知ってるよな？」

僕は、『憤怒』を発動させる。

理不尽をこれ以上無く理不尽に叩き潰せる魔法。

「分かりました……。こ、交渉しましょう!!」

と。

ルミナスは、策が効かないと知るや否や、土下座して見せた。その手のひら返しは、呆れるを通り越して驚嘆に値するよ。

「わ、私の魔法は召喚魔法。紙に物の名前を書けば、それを手元に召喚できます。地球の記憶がある君なら、これがどれほど価値があるかわかるでしょう!？」

ルミナスは必死に、活路を見出そうと舌を動かす。

このままでは僕に殺されると、必死に生き残る道を探している。

「復讐でしょう!？ 知ってますよ、君が住んでいた村から追い出され、帝国に殺されそうになったのは！ それなら現代兵器を使えばいい！ 戦車でも潜水艦でも、戦闘機でもクラスター爆弾でも！ 私が紙に書けば召喚できる！ なんなら人工衛星だって、その発射施設だってそくだ！」

紙一枚でそれらが手に入ることが、どれほど貴重かなどと語る必要は無い。

ぜひとも欲しい魔法だ。

「どうです！ あなたなら解かるでしょう、私の魔法がどれほど便利か！ 逆らいません、尽くしますから！ どうか！ 命だけはっ
！！」

地にひれ伏すルミナスに対して、僕は曖昧な笑みを浮かべるしかなかった。

「仕方が無いな……」

僕の復讐は、相手が死ぬほど後悔させることだ。
こんな、生きたがっている人間を、僕はこの場で裁くことは出来ない。

僕の呟きに、ルミナスの顔に光が差した。

ああくそ、僕って奴はなんて？？、

「お前さ、凄く勘違いしている」

？？酷いんだろう。

がしりと、僕はルミナスの顔を鷲掴みにした。

え？ と今にも言い出しそうな感じに、ばかりとルミナスの口が開いている。

「お前はまるで、自分の魔法が唯一無二、お前でなければ使えないようなことを言ってるけど、それは大間違いなんだよ」

かつて、レイが僕に言ったことがある。

それは、一体どんなシーンだったか。

……そうだ、山賊の一人を捕まえていて、そのアジトの場所を吐かせたかったんだ。

山賊は中々口を割らなくて、人質に危険があるから僕らは早く知りたくて??。

山賊は口を割ってしまえば、自分が生かされてる意味を失うことを知っていたから、死にたくないから何も喋らなくて。ただ口が悪くて。

それで僕は??。

「アンタ要らないよ」

その山賊を殺したんだ。
だって。

「召喚魔法、使えばお前は必要ないだろ?」

ドッペルゲンガーって知ってる?

最大の嫌味を込めて。

僕はコレクター、ルミナス・レイフォードの顔でそう言った。

アジトの場所、知っていれば生かしておく必要無いだろう？
そう言っつて、僕は山賊を殺した。

僕の複写魔法は、その記憶から能力、全てをコピーする。
人格すらもコピーする。

その人でしか知り得ない情報を言う事も、その人ならばこつする
であろう行為も、全て僕がやってみせよう。

だからレイは、そんな僕に言っつた。

『君の魔法は、人の存在理由を奪うんですよ』

僕は言っつた。

「さよなら、コレクター。君の存在理由は??無い」
「????!」

そして、全てが動いた。

非情の収集家と憤りの？ 9

「なっ」

一瞬だった。

僕は、熱くなりすぎていたのだ。
だから、直前まで背後に誰かが忍び寄って来たのに気付かなかった。

何かが、僕の腰の辺りに接触したのを感じた。
そう知覚するのと。

僕がルミナスを燃やしたのは同時。

「「???があっ!?!」」

全身を焼けるような痛みが走った。あまりの激痛に、ルミナスを掴んでいた手が離れる。ルミナスも燃える身体で暴れ回っているが、僕はそれどころじゃない。

体中で炎が踊り狂っているような感覚。足がまともに体を支えられず、ふるふると震えている。

「いつ!!!!!!」

鋭い痛みが下腹部を襲ってきた。『怠惰』の魔法で痛覚の体感時間はずゼロ、僕が痛みを感じる事などあるはずがないというのに。

だが確かに、腰の辺りに鋭い痛みが走っていた。

意識が??霞んで行く。

あまりの痛みに、それこそ、この世界に生まれて初めての激痛に、僕の意識は飛んで行きそうだった。だが、今ここで意識を失うのはまずい。

痛みで足取りが覚束無い。視界がぼけて見える。集中が続かない。そんな意識の中、なんとか僕が視界に捕えたのは??。

「まじ、か……よ」

腹に突き刺さったナイフ。

そして。

突き刺された僕は、レイではなく??愛と情熱の戦士でもなく??魔王の僕だった。

魔法が解けていた。

更に。

「え……あつ、……う、そ」

手を血みどろにしたフィーが、ナイフから手を離した。
フィー。

助けに来た少女。

信じていた者に裏切られたような、自分のやった行為が信じられないような、困惑と絶望に染まった顔。

そして、僕は見た。

そのフードの口から覗くのは、金色の首輪。

隷属の首輪を。

「あ……がぁ……」

あまりの痛みに足が支えを求めて勝手に動き出す。
ふらふらと後ずさり、僕は窓になんとか支えてもらって立っていた。

僕がふらついて歩いた道には、目を背けなくなるような赤い道。そして終着点である窓にも大量の血痕が付着した。刺された場所、未だフィーが呆然と立っている場所には血溜まり。

そして、一人高笑いしている男が居た。

「はははははっ！！ やっぱり、君も『愛と情熱の戦士』らしいね！ 丁度良い死に方だろ！？」

コレクター、ルミナス・レイフォードだ。その身を取り巻く炎は消えていない。

炎に身を焼かれながら、ルミナスは声高々に言う。

魔法の炎は、現実の炎と違いじわじわとその存在を奪って行くのだ。

奴に与えられた猶予、と言っても良い。

「『模写のナイフ』、刺した相手の魔法をコピーするナイフだ。それは、あのレイを殺したナイフだ！」

焼けるような痛みは、複写魔法が解けたのは？ 『憤怒』。

レイの魔法か。

「そのナイフはお前に刺さった！ ならそのナイフは今、お前の魔法を模写している！ それさえ手に入れば、私は？ 『魔王』だ！」

はははははっ！！ とルミナスは笑う。

狂気、としか言いようのない笑い声だ。

自分が死にかけていると言うのに、奴には目先の強大な力しか見えていないのだ。

痛みで朦朧とする意識の中、それでも僕にはやるべきことがあった。

大丈夫、僕が発動していた魔法は全て消滅したが、もう一度発動出来る。魔法自体が消滅させられた訳じゃない。

けど……足がふらついて満足に立つてもいられない。

魔法は思考して発動するもの、集中が続かない。

この出血量、痛みをゼロにしたところで状況は変わらないだろう。怪我を無くした所で、失った血は戻っては来ないだろう。

??なら。

「っ!! させるか!」

なんとか右手に灯した『憤怒』に反応し、ルミナスが駆け寄ってくる。

炎の塊が、僕へと突っ込んでくる。

結局、僕には人の存在を速攻で否定するような憎悪を抱けなかったのか、ルミナスの炎は速度が遅い。レイのように、一瞬で人間を消滅させるような炎を、僕は使えなかったのか。

だが、ルミナスが死ぬのは目に見えている。だから。

僕は最後の力を振り絞り、『憤怒』を発動した。

「?????!?!?!」

炎上したのは、フィーだった。

突如燃え上がった自分の身体に、驚く事も忘れてフィーは転げ回った。

「どこを狙っている！」

突っ込んでくるルミナスを見て、これで良いのだと、思いつきり後ろへ倒れ込んだ。

ガシャリ、と背後のガラスが砕け散る。

ガラスに支えられていた僕の身体は、その穴から落ちて行く。
暗く闇のような海に、落ちて行く。

魔王には実に丁度良い場所じゃないかよ。闇の中なんてさ。

٧٠

「ナイフを渡せええええええ！」

ルミナスが落っこちて来た。

いや、お前は？？どこまで『強欲』なんだよ。

背中**に**強い衝撃が走り、身体を突くように冷たい海水が包み込んだ。細かい泡が僕を包み、海水が傷口に染み渡り、痛みに悲鳴を上げた。

げようとして、ゴポリと口から泡と共に血が溢れた。

暗い。上か下かも分からぬ夜の海中は、真っ暗で何も見えやしない。

後を追って来たルミナスも、フィーヤルミナスの召使い達がいる屋敷も見えない。

もう、何も見えない。

エピローグ

淒く眠くて、声もよく聞こえなかった。

ほんの少しだけ、いつもと違うあいつの声がした。

声の質が違ふんじゃなくて、口調とかそれに含まれる感情が違ふ。
あたしが聞いた事のない声だった。

聞いちゃダメだ、そう本能的に思える声だった。

多分、声はちゃんとあたしの耳に届いていたけれど、あたしの本能がそれを認識しまいとじていたんだと思う。

なんか知らないけど迎えに来てくれた、それが嬉しくてすぐにでも駆け寄りたかった。

けど、今近づいたら、もう何も元には戻らないような、そんな予感がしていた。

だからあたしは、そのまま寝ていようと思ったのに。

身体が、勝手に動き出していた。

あたしが近づいて行くのに、レイは気付かない。

あたしが近づくのに、ナイフを持っているのに、レイは気付かない。

逃げてと叫びたいのに、口も動かない。

取り返しのつかない事になると、何でかあたしは思っていた。

呼吸も足取りも、あたしの身体でないように、暗殺者のように動く。全てを制御されたような感覚が、気持ち悪かった。いつの間にか首に掛けられた金色の首輪が、どうしてか淒く気味悪かった。

唯一正常に機能している耳も、レイの声を拾えない。

代わりに、あたしが聞いたのは。

『こいつを刺せ！』

という、ルミナスと名乗った男の命令だった。

人を刺したのは、初めてだった。

ナイフがレイの身体を貫いた瞬間、一瞬だけ炎が燃え広がり、レイの身体を飲み込んだ。

「え……あつ、……う、そ」

現れたのは、小柄な黒髪の少年だった。

あたしと対して年も変わらない、妙に幼く見える少年。十人が十人、男らしいと言うよりは可愛らしいと言いそうな細く整った顔立ち。今はその顔に苦悶が刻まれていたが。

目が合った。

飲み込まれそうなほど深く黒い瞳だ。見つめていれば、その暗闇に取り込まれてしまうと錯覚を覚えるほどに。

けれど今は、少年の表情に目が行った。痛み。

確かに、少年の顔は苦痛で酷く歪んでいる。

だけど、そうじゃない。

それは肉体的な痛みじゃなくて、心の部分での痛みを受けたような、そんな風に見えた。

少年はふらふらと支えを求めて歩き出して、窓に寄りかかる。

あたしはもう、少年を見ていなかった。

あたしが今まで見ていたのは、一体なんだったの？

あいつは、レイに化けていた？ 一体いつから？ あたしと最初に会ったときから、レイと言う人間は上辺でしかなかった？ あたしを助けに来てくれたレイは、あいつの変装？

それに？？あたしはあいつとどこかで会ったような気がする。解からなくなる。

視界で、炎の塊が動いた。

あたしはただ呆然とそれを眺めていた。どうしようとも思えなかった。

思考が停止していた。

「????!?」

不意に、炎があたしを包み込んだ。

じわじわと何かが消えていく感覚があたしを飲み込んでいる。

これは???他人に迷惑を掛けつづけたあたしへの天罰なのだろうか。

胸が苦しかった。大切なものを失ったような、胸にぽかりと穴があいたような痛み。

何にしてもあたしは、どうしてだか解からないけど、あいつが？レイが一体なんなのか解からないけど、助けに来た人を刺してしまったのだ。

裏切ったのだ。

天罰なのだろう。だからこんなに苦しいのだ。

けど。

それにしてはなんだか、とっても心地いい温かさだった。

ぺしぺしと、頬を叩かれた。

「ん……あれ？」

「あつ、気が付いた？ リン！ この人も無事よ！」

「やつぱり。これで全員無事みたいね」

その感触に目を開けると、双子がいた。

金髪をポニーテイルにした凛々しい顔の？？けど服が残念な？？そ
っくりさん。

あれ？ あたしは……生きてるの？

気が付けば、金の首輪は消滅していた。

それどころか、身を清めたようなスツとした感覚がある。

ごめん。

「……んっ」

あの人の声が聞こえた気がして、私は目を覚ました。
見慣れぬ天井に、温もりのない部屋。

そうだ、私は何故か寝てしまつて、マモルはルミナスの屋敷に…

…。

「……マモル？」

起き上がつて、よく片付いた研究所を探すけど、マモルの姿はない。連れ戻しに行った、フィーの姿もない。

ほんの少しだけ、不安になる。彼もまた、私のようにあの男に捕まつたのかと。

けど大丈夫。約束した。

戻つてくると、離さないと、彼は言ってくれた。

だから大丈夫、きっと戻ってくる。

それに、彼は私なんかよりもずっと凄い。

浄化と消滅を操る、『愛と情熱の戦士』だと苦笑いで語っていたのだ。

大丈夫、私は待っていればいい。それで、彼は帰ってくるはずだ。

けれど、いくら待っても、彼は帰ってこなかった。

エピローグ（後書き）

これで第二章が終了です。

今回は、勇者の物語。

このタイミングでやった方が良いと思い、変更させていただきました。ご迷惑をおかけしました。

プロローグ

「父様、誰ですかこの目つきの悪い男は！」

「うむ……、お前の世話役にだな。雇った」

「巫山戯ないでください！ 私に護衛など必要ありません！」

「……………」

俺は頭を抱えなくなっていた。

一体、何がどうしてこうなったのだろう。

俺の目の前では、親子ゲンカが繰り広げられている。

一人は、俺が尊敬の念すら感じる一人の偉大な男。

威厳に満ちた顔つきで、黒髪がシンボル。最近発覚したのは、娘に強く出られない事か。

もう一人は、その男が溺愛している娘。

プラチナブロンドをツインテールにした、十四歳くらいの美少女だ。今はその顔を怒りで真っ赤に染めている。

本当、なんだ。

天才と呼ばれ、人類最強の名を手に入れた俺が。

『勇者』の俺が。

「嫌です！ それに何も、こんな無愛想な人じゃなくても良いじゃないですか」

「む？ さては……エリス、お前……」

「な、何ですか父様」

なんだって。

「こやつが怖いのか？」

「そ、そんな訳ないじゃないですか！？ な、何をおっしやってるんですかお父様！！ 怖い訳がないでしょう！ 私は――」

『魔王の娘』の執事に雇われているんだろう。

人生は面白い。

『勇者』として、一匹の化け物として、『魔王』を倒すはずだったと言っのに。

どこをどう間違ったら、倒すべき相手の最愛の娘の世話役に抜擢されるんだか。

悪の勇者と親愛の魔王 1

「あつ……」

「ユート！ 一体いくつの食器を壊せば気が済むのよ！」

「……済まない。何ぶん、慣れない事でな」

「その口の聞き方も！ あなたは私の従者なのよ！」

はあ、と思わず溜息をついてしまい、また説教された。

仕方がないだろ、俺はこれまで家事と言うものをやった事がないのだから。

ティーカップの破片を拾い集め、魔術で元の形へと戻す。

さつさと紅茶を注ぎなさい、と急かす足を組んだエリス、『魔王の娘』。

はいはい、とティーカップに覚束無い手つきで紅茶を注ぐ俺、『

勇者』。

「本当、世話の焼ける人ね」

「悪いな。どうにも慣れない」

「あなたが私の世話役なんだけどね……」

今度はエリスが、はあ……と溜息をつく番だった。

「おい、溜息を吐くと幸せが逃げるぞ」

「誰の所為よ！」

今にも火を噴きそうな勢いで怒るエリス。

俺は悪くない。悪いのは、不適材不適所をした魔王だ。

「そう怒ってないで笑え。笑っていれば、逃がした幸せも戻ってく

る」

「……そう言うあなたは、全然笑わないじゃない」

「お前な……。これが笑える状況かよ」

「？」

おっと、そう言えばエリスは知らないんだっただか。

俺が『勇者』である事と、『勇者』と『魔王』の契約を。

「良いんだよ。俺は幸せになる気はないからな」

「やめて。それじゃあ、あなたに四六時中付いて回られる私も、あなたの不幸に巻き込まれるじゃない」

「俺に幸せになれと？」

「いいえ。さっさとどっかに行けと」

そいつは無理な相談だな、と俺は茶菓子を摘みながら言った。

「少なくとも、お前が俺に勝てるようになるまではな」

「……むっ」

「もつとも？ 人類最強の俺にお前が勝てる日が来るとは思えないがな」

紅茶をぶっかけられた。

—————

俺は天才であり、人類最強の称号を得た勇者だが、私利私欲のためには戦っていた。

俺は強くなりたかった。

幼い頃、一目惚れした少女をドラゴンに攫われてから、俺はひたすら強くなるためだけに生きて来た。攫われた少女の事は、今でも鮮明に思い出せる。事実、俺は彼女のために戦っていた。

腰まであるプラチナブロードが神秘的に輝き、真っ白い肌はまるで雪のようで、触れてしまえば溶けてしまいそうだった。深紅の瞳が宝石のように美しく、俺の幼い恋心を燃え上がらせたのも良く覚えている。

それよりも何よりも、彼女の声を聞くと癒されたのが一番だろう。当時、既に戦いに明け暮れていた俺に、彼女の鈴のような声は癒し以外の何ものでもなかった。実際、彼女に会うためには、かなり強い魔物を倒さなければ辿り着けないような辺境の地だったし、彼女の元に辿り着く時には虫の息に近かった。

そんな俺に、彼女はいつも優しい言葉をかけてくれた。俺はただそれが嬉しかった。彼女の声を聞けば、また明日も会いたいという気になって、無事に村まで戻れたし、怪我だって不思議とすぐ治ったと思う。

そんな彼女と出会って一ヶ月、彼女はドラゴンに連れ去られた。

他でも無い、俺の目の前で。

当時の俺はまだ十歳にも満たない子供。魔物の中で最凶と呼ばれるドラゴンに挑むのは無謀だった。それでも彼女を守るために俺は剣を握ったのだが、あろう事か彼女に庇われて助かったのだ。

その時、彼女の言った言葉を俺はまだ覚えている。

「待っています」

だから俺は答えた。

「また会いに行くから」

それが、俺達の約束だった。

俺は自分の無力が憎かった。

守ろうと思っていた彼女に守られ、すごく悔しかった。

俺に力があれば、明日も同じように会えたと言っのに。俺に力がないばかりに、いままでみたいな日はもう戻ってこないのだ。

だが、俺は諦めなかった。彼女を攫ったドラゴンが魔王の飼っているものだと言った俺は、魔王を倒すべく、ランベルグ帝国が開発を進めている人類最強??『勇者』になることを決意した。

そして十六歳の誕生日、俺は『勇者』になった。

その時俺は、何も知らなかった。

大々的に俺の存在はアピールされ、魔物に怯える時代は終わりだと皇帝は声高々に宣言した。

たくさん期待と裏腹に、たった一人の少女と再び会うためだけに勇者として旅立った俺が最初に出会った魔物は。

「貴様が勇者か？　なんだ、まだ若造ではないか」

漆黒の鎧に身を包み、巨大な禍禍しい長剣を担いだ一人の黒髪の男。

その身から溢れ出ている闇のようなオーラが、全てを語っていた。

「魔王っ！！」

終わりが?? 始まりにいた。

「来い、勇者。貴様の虚言妄想、人間どものうざったらしい希望、打ち砕いてくれるわ!」

「アンタを倒して、俺は??」

そして?? 俺の旅は、始まることなく、終わりを告げた。

「人間にしては、なかなかだったぞ小僧」

ひゅーひゅーと、声にならない音が口から漏れる。俺は空を仰ぎ見ていた。

体の半分が、消し飛んでいた。

魔王の頬に掠り傷、魔王の片腕はぶらぶらと力なく揺れていた。

……何が、なかなかだ。

魔術の一つも使わずに、何が! 結局俺は、力不足かよ……。

「終いだ」

そして俺は?? 魔王に殺された。

「死んでしまったかユートよ。だが、ここまでの全てが予定通りだ。これから、お前の旅が始まる」

俺は目覚めた。

目覚めてそうそう、俺は『勇者』の真相を知らされた。

魔王に対抗するために生み出された、最終兵器『勇者』。

皇帝に魂という手綱を握られた、一匹の化物。

その束縛は、魔王を倒すまで解き放たれることは無い。

クローンと呼ばれる全く同じ肉体に、死後も魂を定着させられる。死んだら生き返る、不死身の化物。

俺はその時、初めて後悔した。

こんな化け物に？？彼女はいつものように優しい声をかけてくれるのか？

悪の勇者と親愛の魔王 2

『魔王』

この世の全ての魔物の頂点に君臨し、それを統べる者。
そして??世界征服を企む者。

現在、この世界は魔物によって人類滅亡の危機に絶たされている。
その魔物を統べる魔王を倒せば、世界に平和が訪れる。
そのためここ数年、世界各国で腕利きの者を勇者とし、魔王討伐
の任を与えてきた。

そして、このランベルグ帝国が何十年の歳月をかけて生み出した
最高傑作が、俺だ。

百年に一度と呼ばれる天才。

そして??不老不死。

ランベルグ帝国はこの世界で唯一、魔法の存在を認め、表沙汰に
はしていないが使用している国だ。

この勇者システムも、ベースは魔法だ。

くそ忌々しい、おぞましいシステム。

「小僧……、何故生きている?」

「……アンタは知らなくて良い事だ」

俺は剣を構え、濁り切った瞳で魔王を睨みつける。
俺が化け物になって、全ては変わった。

失ってきた物は大きい。

初めての死後、俺には仲間がいた。

魔術師と戦士、それに弓使いの四人パーティーを組んだ。

そして二度目の死は、その仲間を守ってだった。

巨大な獣に噛み付かれそうだった弓使いを庇って、俺は喰われた。気が狂いそうな異臭、奪われて行く四肢の感覚、溶けて行く皮膚、圧迫される頭。

数々の激痛を伴い、俺は二度目の死を迎えた。

三度目の死は、仲間に殺された。

「どうせあんた、死んでも生き返るんでしょ？ 一度死んで、新しい身体にした方が、完璧に治って良いでしょ？」

「うっせえんだよ！ 正義の味方気取ってんじゃねえよ、この化け物が！」

そういった彼らは、俺を半殺しにした所で魔物に襲われて死んだ。

勇者は、一体なんなのだろう。

皇帝は、俺がもたらす武勇と報酬を求めているだけだ。
じゃあ、他の奴らは？

助けた奴隷は、情欲に溺れていた。
助けた貴族は、俺が去ったその後、市民に圧制を強いた。
助けた市民は、俺がただ魔王を倒すのを待っているだけだ。

助けた亜人は、美味そうに人を食っていた。

助けた魔術師は、俺の強さに嫉妬した。

助けた戦士は、悪行に手を染めて俺の邪魔をした。

俺が自分を化け物にしてまで守っている人間は、凄く醜い。

そういう俺は、人間に戻るために戦っているのだから、笑えない。

……人間って生き物は、勝手なもんだ。

何をどうして来たのかも曖昧のまま、いつの間にか俺は魔王の城へと辿り着いていた。そこに仲間の姿など無く、あるのはただ魔物の血に染まった一人の化物の姿だけだ。

殺して殺されて、殺す事でしか何も守れやしない化け物が一匹。

俺は魔王の城の正門を通り、真正面から突き進む。

静かな城だった。これから最終局面を迎える、その嵐の前の静けさ。

俺は自分の目的を思い出す。

攫われた、一人の少女の事を。

人間に戻りたいのは、魔王を倒したいのは、全てこのためだ。

本当に攫われたのかも分からない。まだ生きているのかも分からない。助け出したとして、彼女が俺を今まで通りに接してくれるかも分からない。

けれど、それでも構わない。一目で良いから、会いたいのだ。

ガガン、と大きな音を立てて謁見の間の扉が倒れた。俺の足蹴りで、扉が壊れた。

「何だ!？」

玉座と呼べる豪勢な椅子に腰掛けていたおっさんが立ち上がるのが見えた。

聞き覚えのある声だ。見覚えのある姿だ。

俺を最初に殺してくれた奴だ。

やっと、見つけた。

俺は口元をゆがめ、肩に担いだ長剣をそいつに向ける。

「さあ魔王、俺のために死んでくれ」

いつになるか分からないが、待っていてくれ。

俺は、君に会いに行く。

例え、化け物と誹られようとも。

俺は、俺のために君に会いに行こう。

――――

という決意を抱いたはずだったのだが、

「……あら？ ユート、あなた随分と慣れて来たのね」

「まあな。俺は天才だから、一度した過ちは繰り返さない」

「その口調は変わらないのね……」

「俺はお前に敬意を払う気はないし、そうされても困るだろう？」

「ええ……まあ」

何で紅茶を入れるのに特化してるんだか。

と、美味しそうに俺の入れた紅茶を飲む魔王の娘、エリスを見な

がらそう思っていた。

俺が毒を入れるとか、人質に取るとか考えないのか？ あ親馬
鹿魔王は。

「はあ……」

「ユート！ あなたまた溜息をつきましたね！ その癖、いい加減に止めてください！」

「すまない。気をつけるよ」

「分かれば良いんですよ。それより、今日もこの後鍛錬に付き合ってくださいね？」

はあ……。

なんでこの女は、こんなにも血気盛んなんだろう。

悪の勇者と親愛の魔王 3

「小僧。貴様は面白い奴だな。濁り淀んだ目の中に一筋の光が見える。何が貴様を狂わせない？」

「アンタに攫われた女の子を助けるためなんだよ！」

「攫った？ 儂が？ それは何かの勘違いだな」

「そうかよ！ だからと言って、俺がアンタを殺さなくていい理由にはならないんだがな！」

「……………分からず屋め」

殺されるアンタにしてみれば、そうだよな。

魔王を倒した所で、この世界に平和など訪れやしない。

魔王は、魔物の頂点に君臨こそすれ、それを統べる者ではなかった。

魔物が人を襲うのは、生きるため。それを一体どうやって止めろと言う？ 儂なら、勝手に健康を維持して繁殖してくれる人間、その生活区を脅かすようなことはせず、出て来た人間をこっそり喰らう事を進めるぞ。

そう言った魔王の言葉に、俺は言い返せなかった。

それよりも、勇者なんてシステムが、よりおぞましく思えて来た。

これはもしかすると、皇帝だかなんだかの不老不死の実験なんじゃないのか？

そう思えて、魔王を倒してこのシステムを潰さなければならぬと思えていた。

それに、魔王を倒す契約で魂を縛られている以上、俺が人間に戻るためには、魔王を倒さなければならぬのは、変わりなかった。

魔王が彼女の事を知らないと言ったが、俺にその真偽を確かめる術は無い。

俺はただ、魔王に取って彼女が数えられもしない命だった、なんて結末を望まないだけだ。

そうであつたなら、尚更俺は魔王を倒すために尽力するだけだが。

――――

死んだ。

これで何度目の死だろうか。

俺は魔王に何度と無く殺されている。数えるのを諦めたくらいだが、すべては無駄ではない。

戦うたびに、俺は魔王に手傷を負わせている。

最初の戦いで、俺は魔王の腕に傷を負わせた。それは完治には程遠く、そこに隙が生まれている。二度目の戦いでは、頬に鋭い切り傷をつけた。その後、魔術で木っ端微塵に吹っ飛ばされたが。三度目、俺は腹を剣で貫かれながらも、同士討ち覚悟の一突きで魔王の胸に浅い傷をつけた。

その頃からか、魔王に確実な焦りと困惑が見えたのは。

魔王に腹を剣で深々と刺された俺は、だが笑みを浮かべていた。

「何故、貴様は生きている!？」

「あんたが知る必要は??無い!」

そう言つて、俺は体内の魔力を暴走させた。

魔力は、力だ。俺は、自分の体を構成する目に見えない力をすべて外向き、魔王に向けて使用した。

結果、俺の体は崩壊した。

代わりに、魔王と言えど無視することが出来ない、莫大な量の魔力が魔王に向けて放たれた。

――――

「前回の貴様の攻撃の所為で、城が揺れたではないか！」

「まじか。揺れただけかよ」

「魔王の城を舐めるな！」

「俺を舐めてるからだ」

台詞的には俺の優勢に思えるだろうが、実のところ俺は両腕が無かった。膝をつき息も絶え絶えだ。対して、魔王は全身から血を滴らせていた。

俺は腕の生えていたところからぼたぼたと溢れ出す血液に魔力を注ぎ、その形を自在に操る。

「????!」

「化物みたいなアンタには、俺みたいな化物とのダンスがお似合いなんだよ！」

溢れ出る血流は、腕の生え際へと循環する。馬鹿にならない魔力の緻密なコントロール、そして強靭な精神力を有さなければ、血流ブレードなど扱えはしない。

自在に動く血の刃を従え、俺は魔王と乱舞を繰り広げた。

死んだ。

目覚めたのは、もう見慣れた帝都にある教会だ。

転移の魔法具（市場ではかなり高価だが、帝国の魔法使いが作っているので無料で手に入る）を使うと、一度行っただけの在る場所には数秒で行けるので、魔王の城にはすぐに向かえる。だが、その前に前回の反省をしよう。

どうやらいくら循環させていたとはいえ、血を失いすぎていたようだ。前回の死因は出血多量だな。戦っていたときの記憶が大分無い。だが、あの血流ブレードはかなり使えた。が、あれは前回限りだろう。

俺は新しい体に慣れるために節々を動かしながら、次の戦略を考えていた。

二刀流。

魔王の攻撃を片手で受け止められるようになった俺は、二本の長剣を駆使して魔王を攻めていた。

発想は、前回の血流ブレード。あの時は、剣と腕の代わりに生やした、二本の血流の刃で戦った。そのときに、二刀流の動きはなんとなく把握した。

魔王の剣がぶつかるとその狭間に、闘気で足腰と受け止める剣を持った腕を強化する。俺は人間としては化物みたいな魔力を有しているが、それは魔王に比べれば微々たる物だ。こうやって節約して使っていないと、長期戦になったときに対応できない。動きの要所要所で身体強化を行なう。

今回は、魔王が劣勢だ。

前回の戦いから三日。まだ体調が万全ではないようだ。
その顔には、苦悶が見える。

「どうした魔王？　いつもの切れが無いな！」

「うるさい！　貴様には関係ないことだ！　いや、すべて貴様のせいだ！」

ん？　こうやって言い返されるのも初めてだ。

戦うことで相手の心情を読めると言うが、生憎俺には魔王の心は読めない。

だから、言葉にして尋ねる。

「何だ？　言ってみろよ。アンタが死んだ後、俺が責任もってやるから」

「ほざけ！　？？ツ！？」

不意に、魔王はその動きを止めた。そして、何事か考える様に顎を撫でる。

俺はその不可解な動作に一度距離を取り、様子を見？？。

「そうか！　その手があったか！」

「ツ！？」

魔王が目に見えるほどの魔力を集めたした。

しまった。いつも俺は魔術を使わせぬように、接近戦を仕掛けていたのだった。

俺に、魔術の耐性はあまり無い。

何せ、死んで復活すればいいだけの話だからだ。……なあ、魔術師。

「試させてもらっぞ！　勇者！」

「何が？？」

「貴様が何をしようと甦るのかを！」

瞬間、俺の意識は飛んだ。

――――

死んだ、ようだった。

「……くそ」

二刀流でいい感じに攻められていただけに、この敗北は痛い。魔王に何の手傷も負わせることが出来なかった。

まあ、二刀流は十分に使えるという収穫があったし、良しとしよう。

俺は新しい体に不具合が無いのを確認すると、すぐさま装備を整え、魔王の城へと発った。

前回の死から、一日だった。

「来たな、勇者よ」

「……今回は、あまり驚かないんだな」

前回、殺されて三日で来た時は大慌てしていた。転移の魔法具を使用すれば、どこからでも魔王の謁見の間まで徒歩五分だ。

だが、今回の魔王は少し違っていた。

攻撃が面白いように決まる。

今回は一太刀しか持ってこなかったが、その攻撃が次々と決まっ

ていく。魔王の動きに切れが無い。

「どうした魔王！ 昨日より酷いぞ！」

「……勇者よ、何故貴様は僕を殺そうとする？」

不意に、魔王がそう尋ねて来た。

唐突に。

だから俺は、何度も自分に言い聞かせて来ていた解答を、思わず口にしてしまった。

「アンタを殺さなきゃ、俺は人間に戻れないんだよ！」

「何だと？」

驚く魔王を気に留めず、俺は剣を振るう。

化け物から？？人間に戻るため。

「……………」

魔王は、何かを考えるように俺を見つめていた。

…… 何かがおかしい。前回の最後から、何かが変だ。

そう思っていたというのに、俺は調子に乗った。

魔王が不意に剣を投げ出した。

それをチャンスと捕え、俺は剣を構え魔王に突撃する。魔王も、素手で俺に向かってきた。

交錯、そして??。

魔王の手を、俺の剣が貫いた。

「がっ!？」

だが溢れたその声は、魔王に剣を突き立てた、俺のものだった。腕一本と武器を投げ捨てての特攻。

俺はそれを、魔王の最後の悪あがきだと思った。だが、違ったのだ。

それは、一発逆転の一撃。

「小僧！　これで、全て終わりだ！」

ぎしぎしと掴まれた頭が悲鳴をあげる。

その激しい痛みに、思考がままならない。だが、剣は掴んだままだった。

がむしゃらに剣を振り回している俺は、もはやどうでも良かった。

何を言ってるんだ、魔王。俺は何度でも甦るし、何度でも繰り返す。アンタが死ぬまで、何度でもだ。

……何度も、繰り返さなきゃならないんだ。

これからも、いつまでも……あんたが死ぬまで。

そして、俺は意識を失った。

ああ……、また繰り返すのか。

魔王を倒すまで永遠に続く魂の呪縛。

これは、あと何年続くのだろう。

俺以上に強く、こんな糞みたいなシステムを許容する奴は存在し
まい。

だから必然的に、俺は何度でも甦らせられる。

さあ、また始めるか。育てる必要ない体がそこにあるんだ。

そう思つて、俺は目を開けた。

だがそれは、俺の勘違いであつた。

「!？」

目覚めたのは、見慣れた教会ではなかつた。

見慣れぬ場所、王族でも使つていそうな寝室。

今までのふかふかが全て嘘に思えてくるほどに柔らかなベッドで、俺は寝ていた。豪勢というよりは風情があると言つべき、木目が綺麗なタンス。足元に広がるのは、暖かなクリーム色の絨毯。

なんだ？ 俺は、王族に招待でもされたのか？ 意識を失つた後、無意識に魔王を、倒したのか？

起き上がり、かすかな頭痛を感じつつも、俺は窓辺へと向かう。

曇り一つ無く、外の世界を綺麗に透す窓ガラス。

そこから見えたのは??、曇り一つ無い青空。眼下に広がるのはエメラルドグリーンに輝く海。

そこから広がる景色は、絶景だつた。

俺が何度死んでも守りたかつた世界が??そこには広がっていた。

「気付いたか、勇者」

何度死んでも倒さなければならぬ男が、背後から現れたが。

悪の勇者と親愛の魔王 4

「……何が目的なんだ、魔王」

「勇者よ、貴様は言っておったな。儂が死んだ後の責任を持つ、と」

俺は今、魔王と並んで魔王の城の中を歩いている。
なんだって、こんなことになっちまったんだか。

「……ちつ。そんなこと言っただな」

「……覚えてないとは言わないのだな」

「当たり前だろ。俺は勇者だぞ？」

勇者だから嘘はつかない??そんな訳が無い。

ただ単純に俺は、何度も戦ううちにアンタを、ただの敵とは思えなくなっていたただけだ。

守りたかった人間よりも、アンタの方が気が合ったただけだ。

「それより何だ、俺に殺される覚悟が出来たのか？」

「違うわ! ……貴様、少々図に乗ってはおらぬか？」

「まあな。アンタが俺を殺さずにこうして魔法を掛けたって事は、俺を殺す気は無いんだろ? なら、俺がどう振るう舞おうがアンタは俺を殺せない。精々、いつも通りにさせてくれ」

「これでいつも通りとは……つくづく呆れた男だな、おぬしは」

魔王は、俺に魔法を掛けた。

魔術ではなく、魔法を。

俺は今??死ぬことが出来ない。

正確には、超回復という魔法を喰らっていて、死ぬような傷も一瞬で治ってしまう。

これは、どんな切り傷も立ち所に治すという、恐ろしい魔法だ。副作用に、掛けた人物の言いなりになるという、恐ろしい魔法だ。いや、副作用がメインだろ、絶対。

倒すべき相手の言いなりとか、屈辱だ。

……だが。

「……正直、俺は飼われるのに慣れてしまっているのかもな」

「何か言ったか？」

「いや、何も。で、なんだよ？ 俺に頼みたいことってのは？」

魔王は、俺に殺されても良いと言った。

俺に掛けられた呪いとも言わすべき魔法は、さしもの魔王でも解除できなかった。

だから、解きたければ殺してよい。

そう、魔王は言ってくれた。

……頼みを聞いてくれたら、という条件付で。

俺は、世界のために戦っちゃいない。

自分のために、戦っているんだ。

だから、別にこれでもいいかな、と俺は思った。

悪い、もう少し、待っててくれないか？

胸くそ悪いんだよ。ただ皇帝の言いなりになって、何の意味も無く魔王を殺してしまうのは。

じゃあ教えてくれ、魔王。その頼みって奴を??。

魔王は、神妙な顔をしてこう言った。

「……引き籠った娘を、部屋から出してくれぬか？」

「何で俺が！？ 親のアンタがやれよ！」

「断る！ 儂は死にとう無い！」

どんな気性の荒い娘だよ……。この親にして、この子ありって奴か？

「貴様……、今、とんでもなく失礼なことを考えんかったか？ 違うぞ！ 娘は儂とは似ておらぬからな！」

「自分に似るのは嫌だったのか……」

「当たり前だ！ 儂の妻は偉い美人でな……」

親バカの話は聞き流し、俺は娘が引き籠っている部屋へと向かっていた。魔王が娘の自慢話をしながら、先導している。

魔王の城は掃除が行き届いており、廊下の隅にも誇り一つ落ちていない。良い執事やメイドでもいるのだろうか。

「ここだ。頼んだぞ、勇者よ」

魔王が指差した先には、ミスリルの扉が。

……この城は、思った以上に金がかかっている。

「案内はした。では、儂はこれで失礼する」

「……良いのかよ？ 俺はアンタの娘を人質に取るかもしれないぞ？」

「何を言う。貴様は勇者なのだろう？」

「……喰えない爺だ」

明らかに逃げ腰の魔王を手で追っ払い、俺は扉を見据えた。

……一体、娘とやらはどれほど強いのか。

コンコン、とまずはノックしてみ??。

「うつさい馬鹿！ ノックすんな！」

耳にキンキンと声が響いた。

扉と壁越しにしては、やけに大きな声だ。何らかの魔術で声を通してらるらしい。

しかし……、年頃の女の子が部屋に入る時、ノックをするな、か。魔王よ、一体どんな育て方をしたんだ。

話を聞く限り、美人らしいが??。

実力行使と行きますか。

俺は剣??ではなく、魔王からもらったミスリル刀を構える。本当、金が惜しみなく使われている。魔王が統治する国が存在しないから、金は余っているのかもしれない。いや、そうすると収入はどこから? 魔物を倒して金を稼ぐことも出来ないし、税金と言うのも無い。まさか、自給自足? どうでもいいか。

この武器の性能は斬ることにある。じゃあ、邪魔な扉を取っ払いますか。

俺は刀を居合い抜き、扉を一閃。

「……は?」

瞬間、刀が粉々に砕けた。

手に握られた柄だけが虚しく残っている。刃が木っ端微塵だ。

「ばーか！ いくら父様が扉を攻撃しても、絶対に壊れないわよ！」

どうやら、何らかの魔術か魔法で扉を硬くしているらしい。
そして、俺を父親、魔王だと勘違いしているようだ。

――

「……という訳だった。で、父親のアンタはこの後どうしていた？」
「……やはり駄目だったか」

頂垂れる魔王に、最初に会った頃の威厳はまるで無い。
まるで無いのに……、俺はこちらの方が好きだった。
皮肉なことに、俺が守りたかったのは、こういった家族の馴れ合
いだったのだから。

家族のいない俺が、望んだ物。
……何故だろう。守りたかった人間には、こういった家族の温か
みが無く、倒すべき魔王にこういった面があるのは。

「……………」

「どうした、勇者よ？ 浮かない顔をしておるな」
「……どうもしない。で、アンタはいつもこの後どうしていた？」
「昼に食事を届けた」

駄目だこいつ、完全に娘を甘やかしている。
……いや、別に引き籠もっても良いのなら構わないが。
俺としては、一刻も早くあの子に会いたい。

「……魔王、一つ相談があるが、いいか？」
「なんだ？ 儂を今この場で殺すことは不可能だと先に言っておく
ぞ」

俺は狂戦士じゃないんだが……。

――――

俺は今、魔王の城の屋根にいる。

そこから見下ろした景色は、あまりにも綺麗過ぎてなんともいえなかった。

魔王の城なんて、赤紫の毒々しい海と生物の欠片も無い山々に囲まれ、どす黒い雲に覆われた場所にあると思っていたが、それは大きな間違いだったようだ。

だが実際は、その逆だった。綺麗に晴れ渡る空、輝く海、木々の生い茂った山々。

この城の場所が、世界で一番美しいのではないだろうか。

そんな場所だからこそ、魔王は城を建てたのではないだろうか。

そう思う、今日この頃。

敵の城で何を寛いでいるんだか。

まして、敵の願いを叶えようとしているのだから。

俺は屋根から飛び降り、

「きゃっ!？」

魔王の娘の部屋のガラスを割って侵入した。その際、何か悲鳴が聞こえたが気にしない。

そして、部屋の中を見渡して??。

「???ッ」

腰を抜かしている少女を見つけた。
少女は、俺を一目見て。

「と、父様あああ！」

扉からすごい勢いで逃げ出していった。
ぼたぼたと血が滴り落ちた。

……おっと、頭を切っちゃってた。

――――

「だいたいユート！ あなたは何であんな入り方をするのよ！」

「お前が引き籠っていたからだろ？」

「私は部屋から出たでしょ？　なんで世話役なんかになってるのよ！」

「帝国には帰れないからな。人探しの宿屋にちょうど良かっただけだ」

「魔王の城を宿屋代わりって……あなたって何者？」

俺はしばしその解答を考え、そして苦笑を浮かべた。

「愚か者……だな」

悪の勇者と親愛の魔王 4（後書き）

今までのストーリーで気になる点がありましたら、この章で解決しようと思います。

何かあれば、感想をよろしく願います。

悪の勇者と親愛の魔王 5

私は人間が嫌いだ。

母様を殺した人間が嫌いだ。父様を殺しにくる人間が嫌いだ。

最近、父様を殺しにしょっちゅう人間が来る。でも父様は何故か喜んで、その人間を迎え入れていた。まるで母様の後を追いたいように。

死地へ飛び込むような父様を振り向かせたくて、私は引き籠もった。

効果は絶大だった。

どちらかと言うと外で遊ぶのが好きな私が引き籠もったのは、父様にとってはまさかの出来事だったらしい。

毎日部屋から出てくれと泣き叫ぶ父様は、とても魔王には思えなかった。

ただ、ノックは凄く五月蠅かったけど。

「エリス……どうしても出てこないというのなら、儂とて策を練るぞ」

「ふん」

ある日、唐突に父様がそんなことを言った。

そう言いながら、ちゃんと扉の前にご飯を置いていく父様は何がしたいんだろう。

それからしばらくして、ノックがした。

ノックでノイローゼになりかけていた私は、思わず叫んでしまった。

「うつさい馬鹿！ ノックすんな！」

それで静まったかと思うと、父様にしては珍しく扉に攻撃をしてきた。

私の魔術で強化された扉は、びくともしない。

「ばーか！　いくら父様が扉を攻撃しても、絶対に壊れないわよ！」

今思うと、ここで扉を素直に開けておけばよかった。

父様の言う策も対したこと無いわね、なんて思っていた私は、痛い目を見た。

突然だった。

突然、窓ガラスが割れ、男が部屋に入ってきた。

知らない男だった。雰囲気が妙に暗く……恐かった。

そして、父様に負けず劣らずの威圧感。

殺される、と思った。

それが、私とユートの出会いだった。

- - - - -

私は人間が嫌いだ。けど、人間のユートを嫌ってはいない。嫌っていないだけで、好きとはいえなかったけど。

父様は殺しにいられていると言うのに、人間と仲良くしろとよく言っていた。

だから、その父様が雇ったという人間、ユートに少しでも興味があったただけだ。

ユートは、最初は何にもできなかった。

紅茶を入れるのも、皿を机に置くのだって下手で、しょっちゅう皿を割っていた。その癖、何故か威張っている。確かに、ストレス発散に私が殴りに行っても、一度も殴れたことは無かったけど。

一日、二日と経つと、ユートは何でも完璧にこなすようになっていた。

「俺は天才だからな」

なんて言っているが、本当の天才なら一度目で完璧にこなすだろう。

ユートはどちらかと言うと、失敗を繰り返さないような、天才的努力家なのじゃないかと私は思った。

「じゃあ、出かけてくる。俺がいないからって、寂しがるなよ？」
「誰が寂しがるもんですか！」

ユートはいつも私を子ども扱いする。凄くむかつく。

けど、怒った私を撫でてくれるユートは……なんでもない。

ユートは一週間に一回、どこかに出かけていく。

人探しをしていると聞いていたが、どんな人なのかは知らない。ちょっとだけ、気になったけど。

鏡に映る自分の姿は、うん、文句無しに可愛い。

自分で言うのはあれだけど、私はかなり美人だ。腰まである銀髪はさらさらで、体型も出るところは出ていて、引っ込むところは引っ込んでいる。母様にどんどん近づいているみたいで、父様がよく

可愛いと言ってくれるんだから、間違いない。

でも、私はこの城から出たことが無いから、本当に自分が美人なのかよくわからない。外の世界を知っているユートにとっては、私なんて可愛くないのかな。

「???」

誰かが城に入ってきた気配がした。

父様は今、ユートに頼まれて魔物たちに話をしに言っている。何でも人間達は、魔物を率いて世界征服を企んでいるのが魔王、という印象をもっているみたいだ。

何で、そんな面倒なことを企むと言うのだろう。父様の器では間違いない、統治できて村一つじゃないかな。

ユートも出かけちゃっているし、私しか出られるのはいないのか。仕方なく、私はその気配の方に近づいていった。

「あなた達、誰よ？」

城の中を勝手に歩き回っている奴らがいた。

四人組で、全員が妙に光沢のある装備を身に付けている。

あつ、父様、結界張るの忘れていったな。

「あん？　なんだこの女」

「あなた達、ここが魔王の城だと知って??」

「おい、聞いたか!?　ここやっぱり魔王の城じゃねーか!」

むっ、途中で割り込まれた。

というか、一体なんなのこいつら。父様から言われているから、一応話はするけど。

妙に殺気立っていて、中には私に変な視線を向けてくる奴もいて、

なんか嫌だ。

「あん、てことはテメエ……魔王の娘か」
「???ッ」

背筋が震えた。

男の視線が、すごく気持ち悪い。これが人間？ やだ。こんな奴らと仲良くなんて??。

「おい、何やってるんだ」

と、廊下に良く通る声が響いた。
私は、その声の主を知っている。

「ユ??」

「あん？ て、テメエは、ランベルグの勇者じゃねーか!？」

ユートを呼ぼうとした私は、その言葉に口を閉じた。
勇者？

ユートが、魔王を、父様を殺しに来た??勇者？

「丁度良かった！ こいつ、魔王の娘だぜ!？ こいつ人質にして、魔王をぶっ殺そうぜ!」

「???ッ」

ユートは、そんな事しない。
そう思えるのに、私は怯えたように後ずさりしていた。
そして、ユートは言った。

「ああ、殺すか」

「?????」

声にならなかった。

一瞬で、ユートが私の前に現れる。その動きは、まるで見えなかった。

ああ、ユートはこんなに強かったんだ。

それを知ると同時に、何故か、安心してしまった自分がいた。

それはきつと。

「お前らをな」

「え……」

ユートが私を抱きしめてくれたから。

男達は、声をあげる暇すらなかった。

一閃。

ユートが右手を振ると同時に、何かが倒れる音がした。

ユートに抱きしめられていて、私には何があったのか見えない。

それは、私には見えないようにユートが抱きしめていたのだと、私はわかった。

すぐにユートが離れ、私の目を見て謝ってきた。

「悪いな、エリス。騙すような形になって」

「……」

「本当ごめん」

「……………」

真剣なユートの顔は、凄くかつこよかった。
頬が熱くなる。胸が苦しい。

「絨毯、汚しちゃった」

「そっち!？」

やっぱりさっきの無し！

冗談だ、とユートはポンポンと私の肩を叩いた。
そして、笑って言った。

「それより、何泣きそうな顔してるんだ？ 俺がお前を殺すとか思ったのか？」

「……うん」

あまりにも軽い質問に、思わず頷いてしまう私。
それを笑い飛ばすユート。

「安心しろ。俺は魔王と約束してるんだ。だから、殺さない」

その約束の内容を聞かない限り、安心はできないと思うんだけど。
だけど、それは私が言っても変わらないことだと思う。
だから、私はあえて何も言わない。

「ほら、せつかくの美人が台無しだ。笑え」

「……ばか」

……どうしよう。

これはきつと、間違っている。駄目なんだ。
私は、ユートが好きになってしまった。
でも、駄目だ。

魔王の娘と勇者だからじゃない。

私は、知……知っている。知……知っているから、駄目だし、辛い。

ユートが探している人が、やっとわかった。

ユートと一緒にいたい。けど、それは駄目だ。

気付いて欲しくない。気付いたら、そうになったら、私は……。

どうしたら良いのか、私はわからない。

悪の勇者と親愛の魔王 6

あれから早いもので、二年の月日が流れた。

未だに俺は魔王の城に住ませてもらっている。

各地の魔物が暴れることがなくなっただけか、休みに帝都に戻る俺に、さっさと魔王を倒せ、などという者はいなかった。むしろ、少ないにしろ存在している暴れる魔物を倒してくれという、魔王そっちのけの依頼があるくらいだった。

その依頼のため、時には魔王の城を長期空けたりもしたが、結局俺はエリスの世話係として魔王の城に滞在していた。

いつ頃からだったか、突然エリスが妙に俺に引く付くようになって、やきもちを焼いた親馬鹿魔王と派手な戦いをしているが、おおむね問題ない。俺にかけた魔法の所為で、一方的に傷つく魔王は、どこか悔しげだった。

だが、未だに俺は彼女の情報を手に入れていない。

「???」

と、物思いにふけていた俺に、後ろから抱き付いてくる者が。

「ユート！ 今日のご飯はなあに？」

「エリス……お前、最近幼児化してないか？」

「べつに」。それはユートの躰がなっていないんでしょ？」

何でもいいが、背中から離れてくれ。あと、頬擦りするのも。

二年の月日が経ち、エリスは大きく成長した。二年前は俺の胸くらいの背の高さだったが、今では俺より少し低いくらいで大分大きくなった。

それで抱きつかれるのだから、溜まったもんじゃない。胸が当たってる。

「お仕置き、する？」

「……………」

ニコニコと笑うエリス。その笑みは、心底楽しそうだった。最近、エリスが小悪魔に見えてきた。ああ、魔王の娘だったか。

「勇者あああ！！」

そんな俺たちを見て、魔王がくれたのも、もはや日常だった。

その日常の終わりは唐突だった。

「ところで勇者よ、貴様、いつになったら我が娘の引き籠りを治してくれるのだ？」

「……は？」

夕食後、魔王に残された俺は、その言葉で固まった。引き籠り？

何か、変な胸騒ぎがした。

「お、おい、魔王。エリスはお前の娘じゃないのか？」
「何を言っておる勇者。エリスは僕の娘だ。次女だ」

何かが、繋がった気がした。

「重症なのは長女、アリスのほうだ。ある日突然、城の東の塔に引き籠ってな。それっきり出て来ないのだ」

「待て、魔王。お前はエリスの部屋に俺を案内しただろ？」

俺は魔王の城に住みながら、ほとんど城を見てはいない。城の掃除は魔王がやっているのだから。俺が来る前は、ほとんど魔王が家事をやっていたという。そんな家政婦まがいの魔王に俺は詰問する。もしも。

もしも俺の予想が正しければ……。

「うむ、それは少々説明不足と言うものであったか。何、話は簡単だ。『姉様に会いたければこの私を倒してからにしろ』とな、エリスが言うもんだから」

「魔王！！」

俺は渾身の力で魔王を殴りつけた。それはただの予感に過ぎなかった。ただ、その事実はまだ、盲点だった。

「ユート！？ どうし？？父様！？」

吹っ飛ばされた音で食堂に戻って来たエリスは、ぐったりと頷垂れる魔王を見て駆け寄っていく。俺はそれを視界にとどめながら、城の東にあるという塔へと向かった。

「ユート！ そっちは駄目！」

後ろから魔王を見捨てたエリスの声が聞こえてくるが、俺はそれを無視して走る。

二年だ。

俺が魔王に雇われてから今日で二年、俺は大陸中を探し回った。妙に鮮明な記憶から再現した絵を使って、行く先々で探して回った。

だが、誰も知らないと言った。

こんなに美しければ、どこかの王族なんじゃないかとも言われ、勇者の権力を使って各国の姫や王妃にも会ってきた。それでも、見つからなかった。

塔の最上階まで上り詰めた俺が見たのは、魔法陣が刻まれた扉だった。

彼女が攫われたのは、魔王が飼っているというドラゴンだった。ただ。

俺は何を忘れていた。

「はあ……はあ……、ユート……どうしちゃったの？」

「エリス。この扉は？」

息も絶え絶えなエリスに、俺は尋ねる。

時間が惜しかった。

失った時間を取り戻そうとするかのように、俺は急ぐ。

「……それは」

エリスが、凄く悲しそうな??辛そうな顔をし、俯く。けれど、それも一瞬。顔を上げ、エリスは扉に近づいた。

「……これは、アリス姉様の部屋」

どこか愛しそうに扉を触れるエリス。
魔法陣が淡い光を放っていた。

「十年位前かな。姉さまは、この部屋に籠った。待つの、って言うてね。対象者以外には開けられない魔法をかけたこの部屋に」

そう言つて、エリスは俺を見た。

「ユートが探していたのは……姉様？」

解からない。

何せ俺は、彼女の名前すらも知らなかったのだから。
仮に、エリスの姉、アリスが俺の言う彼女だったとして、彼女は俺に気付くのか？

そもそも、あれから十数年の歳月が流れ、俺も彼女も変わった。
記憶だけを頼りに、一体どう再会するつもりだったのだ、俺は。

だが、俺は何も迷うことは無かった。

「俺には解かる。絶対、そうだ」

「顔も見えてないのに？」

不思議そうに尋ねるエリスに、俺は笑った。

「これは理屈じゃないんだ」

そう言つた俺を、エリスは呆れたように？？気のせいかな羨ましそ

うに?? 微笑んだ。

「開けてみて。姉様はあの日から眠ってる。あなたが姉様の待ち人なら、この扉は開くから」

そう言つて、エリスは塔を降りて行つた。
氣を利かせてくれたのだろう。

扉に触れた瞬間、身体を熱いものが駆け巡つた。
それと同時に、扉の魔法陣が淡い桃色の光を帯び、砕け散る。
砕け散つた魔法の欠片は、花びらのようで……俺は思わずその花の名を口にした。

「……サクラ？」

それは、彼女と出会つた場所でいつも花を咲かせていた。
本来ならば春にしか咲かない花であるのに、その場所ではいつも咲いていた。

それはまるで、俺達の再会を祝うようだ。

扉を開け、俺はその部屋の中に入った。

ベッドが一つしかない、簡素な部屋だった。そのベッドを、月明かりが照らしている。ベッドには、一人の少女が静かに眠っていた。十数年眠っていたというのに、その身体は俺と対して変わらない。

「ア、リス……？」

俺は少女の名を呼んだ。

アリスと呼ばれた少女は、俺の言葉にピクリと動き、そして目を開けた。

「???」

胸が痛んだ。張り裂けて死んでしまいそうなくらい、苦しくなった。

だがそれは、悲しみじゃない。喜びだ。

月夜に輝くプラチナブロンド。

何ものにも汚されていない純白の肌。

そして???俺を見据える紅の瞳。

自然と、目から涙が溢れ出た。

間違いなく、彼女だ。

もう会えないんじゃないか、死んでしまったのではないかと、何度も思った。

弄ばれたんじゃないかと、仲間に裏切られて思った事もある。

だがそれでも、俺は諦めずにいれた。

それが何故なのか、今なら分かる。

純朴な双眸が俺を見つめていた。

まるで、俺を覚えていないかのようだ。だが、それでもいい。なんだっていい。再会出来たのだから。

俺は、自分の事を伝えようと思った。

ここで伝えなければ、きっと伝えられなくなると思ったから。

「……馬鹿な話だよな。名前も知らない相手と、再会の約束だけで別れるなんて。だからやはり、俺は『勇者』なんだろう。とてつもない愚か者って意味だ」

「……………」

身体を起こしたアリスが、俺を黙ってじっと眺めていた。

それはまるで、俺を見定めているような、はたまた、見極めているような。

「だけど俺は、あのときから、今日この瞬間まで、その約束を違えるつもりは無かった」

飲み込まれそうな、染め上げられそうなアリスの紅の瞳をじっと見つめ、俺は語る。

「例え君が何であろうとも、姿形が変わっていようとも、君が俺を忘れていようとも、俺は??」

恥ずかしい。

とても恥ずかしい言葉だ。だが、俺にはこの言葉以外に、俺の気持ち伝える言葉が思いつかなかった。

大事な話だ。だから俺は、アリスの目をしっかりと見て、その言葉の口にした。

「何度だって、俺はアリスに恋をするんだ」

対して、アリスは。

「私も……あなたが何であろうと、あなたが変わっていようとも、

あなたが私を忘れていようと、私は？？」

俺を恋い焦がれさせた笑顔を見せて、俺を癒してくれた優しい声で言った。

「何度だって、ユートに一目惚れします」

結局。

あの扉の魔法陣は、ある魔法に反応していたのだろう。

恋という魔法に。

悪の勇者と親愛の魔王 7

起きたアリスに、魔王は泣きついた。

それが一番アンタらしいぞ、魔王。もはや魔王としての威厳は微塵も無いが。

これで、俺と魔王の約束は果たされた。

俺はアンタの娘の引き籠りを直した。だから、俺がこの城に居る理由は無くなったのだ。

約束通りならアンタを殺しても良いだろうが、それは、俺がアンタを殺したかったらの話だ。

俺は二人から背を向け、部屋を出る。

魔王を殺すのは、止めだ。

そんな事をして、一体誰が幸せになれるだろう。

アリスと再会出来た。それだけで、俺がここまでやってきた意味はあった。

それじゃあ、この親愛なる魔王家族のために、俺は帝国に喧嘩を売ろう。

と、思っていたのだが。

「勇者よ。アリスに無理をさせたくはない。執事として、支えてやってはくれないか？」

魔王が泣きついて来たので、それも無理であった。

自分の居場所が取られた、と言う恨みがましい目つき（涙付き）。対してアリスは、懇願するように上目遣い。

俺に、断るような余地はなかった。

エリス同様気を利かせたのか、魔王はそそくさと部屋を出て行った。もしかすると、枕を涙で濡らしに行ったのかもしれないが。せめて起こすくらいはしてあげるよ、と思いながら、俺はアリスの手を取り、アリスが立つのを手伝った。

「大丈夫か、アリス？ 十年も眠っていたんだろ？」
「大丈夫です。……ユートが支えてくれますよね？」

にこりと微笑んだアリスに、逆に俺がぶっ倒れそうだった。

塔から出て、城を歩き回っている途中、アリスは言った。

「ユートは辛くありませんか？ 病弱な私なんかと……」

確かに、アリスの肌は恐ろしく白い。だがそれよりも、辛そうにするアリスの顔を俺は見たくなかった。それに、病弱が何だというのだ。

「俺は、こうしてアリスと手を繋ぐことができて、幸せだ」

俺はアリスの白く冷たい手をぎゅっと握り、気恥ずかしさから目を逸らして言った。

告白で、もう俺のライフはゼロだ。
と、不意にアリスが立ち止まる。
なんだろうと振り返ると、

「目を見て言ってください」

と、酷いことを言い出した。

正直、ガラでもない告白なんかして、俺の心臓はいつ壊れてもおかしくは無かった。手を繋いでいる今も、音が聞こえるんじゃないかというくらい激しく鼓動している。

ただ、そう言ったアリスも頬を赤く染めているのが少し可愛らしく。

つい、もっと赤くしてやろうなどと思ってしまった。

「俺はアリスと再会できただけで幸せだ。こうやって手を繋いでいる今も、夢みたいだ。……夢の中でなら、好きなことしてもいいか？」

「えっ！？ え、えっと、その、そういうのは順序というのが……」

ポツと顔を真っ赤に染めてあたふたするアリスに、俺は悶え死にそうだった。

けれど、冗談だと俺が言う前に、

「ユートが望むのなら……、いつでも……良い、ですよ？」

羞恥心と恋慕の情で火照った顔で見つめられ？？俺はぶっ倒れた。

目を覚ますと、エリスの部屋に居た。

どうやら、倒れたのは比喻でもなく本当だったようだ。

「アリス姉様、身体は大丈夫？」

「ええ。心配してくれてありがとう、エリス」

アリスとエリスが仲良さげに話をしていた。
優しく撫でるアリスに、照れくさそうに微笑むエリス。

「あつ。ユート、大丈夫ですか？」

と、俺が目覚めたのに気付き、駆け寄ってくるアリス。どうやら、身体はもう動けるくらいにはなったようだ。

「ああ、悪いな。……ちょっと貧血気味で。だが、大丈夫だ」

勿論嘘だ。そのためか、どうにも心配そうに見つめてくるアリス。
言えない。

悩殺されました、などと言えるはずも無い。

そこに思わぬ助け舟が??、

「当たり前でしょ。ユートは私の王子様だもの」

「それはエリスが勝手に言ってる事でしょ？ ユートはどうなんですか？ 誰の王子様が良いですか？」

「あつ、ずるい！ 自分が有利だからって」

「ずるくありません！ 私が寝ている間、ユートと一緒にいたんですよ？」

??入ってこなかった。これではむしろ海賊船だ。

火花を散らす二人に、先ほどの仲良さげな雰囲気は無い。

俺が起きた途端、仲が悪くなったこの姉妹に、ただならぬ恐怖を感じていた。これは、俺がいるとまずいのではないかと。

そしてそれは、ただの勘違いではなかった。

エリスの部屋から出て、城の中庭へと俺達は移動した。
逃げ出すように。エリスの目が、どうにも怖かった。

中庭は、なんとなく俺達が出会った場所を思い出させる、自然溢れる所だった。

「お父様は心配し過ぎなんです。私が病弱だからって、幽閉されるも同然だったんですよ。だから私は、ちょっと外に出かけたんです。そこで??」

「俺と出会った?」

ええ、とアリスは笑みを見せた。そして、不意に指と指を絡めてくる。

俗にいう、恋人つなぎと言う奴だ。

混乱する俺。笑みを深めるアリス。

「あ、アリス?」

「良いじゃないですか。……相思相愛、ですよ?」

どうしてこの姉妹は、俺が困るようなことを言ったりしてくれるんだろうか。俺の独占欲とか、情欲とかを煽るような事ばかりしてくる。実に悪魔的だ。

ああ、魔王の娘だもんな。

残念な事に俺は、例え弄ばれているのだとしても、この生涯を捧げても良いと思えていた。

「ユート、今失礼な事考えませんでしたか?」

「え? いや、別に……」

俺の返事が気になるのか、アリスは話し出した。

「ユート、知っていますか？ 魔族は人間よりも長寿なんです」
「ああ、それは知ってる」

魔王は約千五百年生きているんだっただがアリスは十八で、俺と同じ。

……嫌な予感がして来た。

「魔族の恋は、一度火が付くともう止まらないんです。逆に、全火がつかない人も居ますけど、それでも長寿ですから、そのうち燃え上がるような恋をします」

その話を今する必要はあるのだろうか？

もう少し、時間をあけてからでも良いのでは？

俺に落ち着く時間を下さい。

「お母様は、凄く遅かったです。お父様もそこそ遅かったですよ。うか。それで私達姉妹と、お父様達とは年が離れている訳です」

なるほど。それは分かった。

ただ、なんか誘導尋問に似た雰囲気を感じているのは、どうしてだろう。

心無しか、アリスが俺の腕にぴたりとくっついているような気が。

「でも、恋をする年齢と言うのは、人間と同じなんです。そして長寿だから、諦めないんですよ」

ああ、言いたい事がなんとなく分かった。
そして理解した。

俺は、それを言われたら、本当に死んでしまいそうだという事が。

けれどアリスは、もう止まらない。
魔族の恋は、一度火が付くと止まらない。

繋いでいた手を離し、ぱつと俺の前に躍り出て、にこりと微笑む。
その笑みは、これまでの笑みとはひと味違う、魔性の笑みのよう。
そして、アリスは言った。

「私、ユートを取られたくないんです」
「???」

唇に、柔らかいものが触れた
今まで感じた事の無い、甘美な快感に、ただ驚く事しか出来なかった。

キスされた。

「んっ……。これで、ユートは私のもの、ですね」

と、小悪魔チックに笑うアリスは、やはり魔王の娘だった。

もう……ダメだ。

父さん、母さん、俺はどうやらとんでもない人に恋をしてしまったようです。

「私が眠っていた十年間分、濃厚な時間を過ごしましょう?」

それは、なんという悪魔の誘惑だ?

悪の勇者と親愛の魔王 8

俺の朝は早い。

まず、魔王一家と俺の分の朝食を作らなければならない。

広さの合った食堂に、少しばかり広めのキッチン。魔王の奥さんが料理好きだったためらしく、かなり丁寧に使われている。

その後、魔王を除くアリスとエリスを起こしに行くのだが（魔王は娘に起こされたい）、実は最近、だんだんとアリスの起きる時間が早くなっているのに、俺は危険を感じていた。

これ以上！ これ以上何か刺激を与えられると、俺はもう戻って来れない気がするのだ。最終防衛ラインがこの朝だと俺は踏んでいる。事実、起きてからはずっとアリスはべったりなのだから。

朝起きたらベッドに潜り込んでいた？？なんて展開、正直俺は耐えられそうにないのだ。

多分アリスの事だから、実に魅力的な言葉で俺を誘惑してくるだろう。

正直、この朝に起こしに行くのだって勘弁願いたいのだ。

前にも言った通り、俺は一緒に居るだけで幸せなのだから。

小さめにノックして、アリスの部屋に入った。塔の簡素な部屋から移動して、お姫様に相応しい豪華な部屋となっている。

枕に顔を埋めて、寒さに縮こまっているアリス。

どうしてだろう、寒いから一緒に寝ましよう、とアリスが言い出す日が近い気がする。

寒いなら仕方ない、という答えを用意しておこう。

「アリス、朝だぞ」

「ふぁ……ユート……おはようの??んっ」

キスされた。

自分からするのか、という疑問は捨て置き、俺は部屋のカーテンを開ける。

「ユート、温かいです」

そんな俺の背中に抱きつくアリス。

十分、お前も温かい。ああ、離れてほしくないな。

そうやって、一日が始まって行くのだった。

アリスが目覚めて、よりいっそう魔王との争いが激しくなると思われたが、実際は真逆、魔王は嬉しそうにアリスと俺が戯れるのを見ていた。そこにアリスが混じって、最終的に俺が押し倒されるのも、黙ってみていた。

それに気付いたのは、魔王と別れる最後の日の前日だったが。

アリスとエリスが寝静まった夜中、俺は魔王と晩酌をしていた。二人とも、寝るのはかなり早い。

「もしも貴様が勇者でなかったら、俺は??」

「……なんだ？」

「世界征服ならぬ、世界滅亡を企んだかもしれん」

呪い。

魔王の身体を蝕むのは、百年程前に戦った人間が残した呪い。

魔王の妻はその呪いで殺された。

本当、よくアンタは復讐しなかったものだ。

大半の魔法はその呪いによって奪われ、俺と戦ってから二年の間に魔王は、『超回復』の魔法すらも使えなくなった。魔力も全盛期の百分の一、それでも俺と同じくらいだが、アリスやエリスには負けているそうだ。

その呪いは死後、血縁者に飛び火する。

アリスとエリスに。

それを避ける方法は、一つだけあった。

それは、誰かに殺されたときだけ、その呪いは解呪されるというのだ。

「まるで儂に、娘の健康が欲しくば殺されろ、とでも言いたげだ」

「……アンタには最悪な条件だな」

「……うむ。だが、家族を人質に取ったことで、儂の逆鱗に触れるとは思わぬのだろうか？ たかだか魔力と魔法を奪われた程度で、この儂を止められるとでも思ったのだろうか」

「全くだ」

事実、人類最強の俺でさえも、弱っていた魔王を倒す事は出来なかったと言っのに。

「……貴様といった時間、楽しかったぞ勇者」

「アンタとは、もっと長い付き合いになると思っていた」

「孫の顔、見てみたかった」

「……アンタらしい」

だから保護者面して見てたのか。

俺と魔王は、静かに杯を交わした。

「娘達には、話すなよ？」

「アンタがもう寿命だって事をか？」

それは真実であつたはずなのに、魔王は首を振った。

「妻に会いに行く事だ」

翌日の朝食後、俺は謁見の間（誰も謁見になど来ないが、間取りが似ているためそう呼んでいる部屋）へ魔王に呼び出された。ついに来たか、と到着早々、

「なっ！？」

「ユート！？」「父様！？」

魔王に吹っ飛ばされた。アリスとエリスが、俺と魔王を交互に見る。

「立て勇者よ。儂を殺すのではなかったか？」

「約束……忘れてなかったんだな」

壁に強く叩き付けられ、体が軋む。だが、『超回復』の魔法が俺の傷を治す。

少し唐突過ぎやしないか？

その俺の足元に、魔王が剣を投げて寄越した。

起き上がった俺は剣を構え、躊躇することなく魔王に向かう。

「ユート!？」

「それで良い! 勇者よ!」

魔王に向かう俺に、エリスが驚きの声を上げるが、俺の動きは止まらない。

空中で交錯し、着地と同時に俺は膝を付き、魔王は吐血した。

「……魔王」

「ふっ」

言うなよ、と言わんばかりに唇に指を当てる魔王。

口からは少くない量の血が零れていた。

俺の剣は、まだアンタに届いちゃいないのに。

限界、なのか。

「やるではないか、勇者よ。久々の戦い、血が滾るわ!」

いつぞや見た、巨大な剣を出現させ、それを構える魔王。命を燃やし尽くさんばかりに、オーラを出す。

それは、蝋燭の火が消える前の最後の炎のようで。とても、悲しくなった。

「魔王!!」

「勇者!!」

俺達は激しくぶつかり合い、最後の戦いを演じた。

魔王は言った。

俺も男だから、見栄を晴らせてくれ、と。

馬鹿だな、と俺は思ったが、その気持ちはよく分かった。

何時間戦ったのだろう。

もう何日も戦ったような気になるほど体力を消耗した。

だが、『超回復』の掛かっている俺には、傷一つなかった。

魔王は、地に膝をつき、全身で呼吸を整えていた。もう、腕も上がりそうになかった。

もう、最後にしよう。

奥さんに、よろしく伝えてくれ。

あなたの娘と出会えて、俺は幸せになれた。ありがとう、と。

俺は剣を振り上げ、魔王に言った。

「じゃあな、魔王」

アンタの下手な芝居、娘達にはバレバレだったぞ。

魔王はふっと笑みをこぼし、俺にだけ聞こえるように言った。

「頼んだぞ、勇者」

初めて。

俺は魔王が笑ったのを見た。

剣を振り下ろすと同時に、俺の身体を縛っていた何かが碎けるような音がした。

『勇者システム』が、終わりを告げたのだ。

間違いなく、魔王は死んだのだ。

「ユート……」

アリスとエリスが俺に駆け寄って来た。おいおい、そこは魔王に抱きつくだろ？

そう言おうとして、喉の辺りが苦しい事に気がつく。

頬を流れるのは、血でも汗でもなく、涙だった。

魔王。

この世の全ての魔物の頂点に君臨し、それを統べる者。そして？？娘達に取っては、最高の父親だった。

その日、俺達はずっと三人で泣いていた。

悪の勇者と親愛の魔王 9

皇帝に魔王を倒した報告をしに、俺は一度帝都に戻った。

その後、祝勝会を開こうとする皇帝に、『探さないでください』と家出少年宜しく置手紙、俺はアリスと共に田舎へと移り住んだ。

エリスは魔王の城に残った。

「花嫁修業よ」

「エリス、それは一体誰のために？」

「……」

なんてにこやかに話している二人だったが、雰囲気だけは戦場だった。

こういうとき、俺がどちらか片方につくと巻き込まれて大変な目に合うので、俺は無言でいる。口は災いの元だ。

住まいは、田舎の村の外れに自分達で作った家だ。

小屋というには少々大きく、ちょっとした屋敷にも見える。魔王の娘と勇者の住まいとしては、少々豪勢さが足りないが。

新居に住まいを移して初めての夜、食後にアリスは俺にしなだれかかってきた。

「やっと……二人きりになれましたね」

「そうか？ 結構二人で過ごした時間は長かったと思うが」

そうじゃないの、解かってるでしょ？

そう言っ、アリスは俺の首に手を回す。柔らかな感触が押し付

けられた。

「ユートは、変なところでガードが固いんですもの。お父様がいるの、気にしてましたか？」

アリスは妖艶な笑みを見せて、俺を誘惑する。
違うな、全然違う。間違っているぞアリス。

「私は、そんなに魅力がありませんか？」

そう言ったのが、最後だった。

「んんっ！　っ……ひう」

俺はアリスの耳を甘噛みする。魔王の城にいた時に発見した、アリスの弱点だ。

ピクピクと体を震わせ感じているアリスに、悪魔の囁きのように語り掛ける。

俺はさ、狼なんだよ。凄く我慢してた。

それを抑えていたのが無くなったって、アリスは解かってるか？

「言ったよな、アリス。いつでも良い……って」

「ふぁ……、は、はい」

「その前に、俺の好きなようにしていいって聞いたの、覚えてる？」

「??ツ!!」

俺に弱点の耳に吐息を吹きかけられ、アリスは俺にしがみついてきた。

必死で何かに耐えているような表情のアリスは新鮮で、俺の情欲

を煽る。

「俺の好きにさせてもらっようよ、アリス。俺無しじゃ生きられないよ
うになっても、後悔するなよ?」

対してアリスは。

「目一杯愛してください」

と、俺の唇を奪っていった。

あれから一年、俺たちに息子ができた。

「ねえユート、この子の名前、決めた?」

「ああ。アリスは?」

「ええ、私も」

どちらがふさわしいか勝負、というのは変だが、俺たちはそれぞれ生まれてくる子の名前を考えていた。

「俺は勇者だからな。その息子には、やはり世界を守るような?
?強い男に育って欲しい。だから?」

「私は魔王の娘だから。この子には、お父様のように家族を??愛
する人を守る人になって欲しい。だから?」

そこで俺たちは顔を見合わせる。

奇しくも、考えていたことは同じようだ。
それならば。

「なあアリス。これでもし俺とアリスが考えていた名前が同じだったら、それって??」

「?? 運命みたい、でしょ?」

そして俺たちは答え合わせをした。

俺達の息子の名前は??、

「「マモル」」

マモルは大きな病気にかかることもなく、健やかに成長していった。

たった一つ、前世の記憶があるという問題を抱えていることを除いて。

俺たちは殆ど気にはしていなかったが、どうやらマモルは深く悩んでいたようだ。

マモルが魔王だと解り、それで打ち明けられたが、何も変わりはいなかった。

なにせ、前世の記憶があると言う割には、マモルはあまりにも泣き虫だったのだ。

可愛い。

打ち明けられてからマモルは、勉強というよりは、研究に近いことをしていた。近所の子供とよく小さな魔石を集めていたが、あれで実験をしているとは思わなかった。

よくアリスと魔術の話をしていたが、大人と子供とは思えない白熱した論争になっていた。

それも、長くは続かなかったが。

「……良い奴だな、あいつは。俺にはできねーよ、他人のために泣いて笑って喜ぶなんて」

「だろ？ 俺の自慢の息子だ」

「で、そいつが魔王で、殺さなきゃならないってさ、嫌な世界だ」

マモルが連れて来たレオという少年は、大人びた少年だった。

そして??、

「どうやら本当に勇者のようだな」

俺がそう言っていると、レオはきょとんとした顔をする。それは幼い少年の表情で、やはりまだ六歳なのだと改めて思った。

「……ああ。だから、あいつの父親のアンタに話をしに来た」

年齢に見合わない沈んだ顔で、レオは語りだした。

「帝国に魔王がこの村にいるのは、もうバレてる。そして、先代魔王と違ってまだ子供だって事もあって、勇者以外でも殺せると踏んでいる。魔王を殺せるのなら、三千人の兵士を投入する気だろう。

……だから、逃げてくれ」

「どういうことだ？」

尋ねると、レオは真剣な顔つきで俺見てきた。
本当に、六歳とは思えない。

「俺はあいつを殺したくない。だから、俺が残って兵士を倒す」

何を言い出すかと思えば、なんてくだらないことを。

やはりこいつはガキだ。

「お前は、俺達を誰だと思っている？」

「はあ？」

突然そんなことを言った俺に、レオは怪訝そうな目を向けてきた。
どうやら知らないようだ。

「先代魔王を殺したのは、俺だぞ？」

「はあ！？ 何、ってことは、先代勇者かつ！？」

俺は頷き、アリスが魔王の娘であることも打ち明けた。

「……残念だ。俺の代で勇者システムは無くなったと思っていたんだがな。それが、まだ六歳の少年に使われるとは思ってもいなかった。すまない」

「そっか、そうだったのか……」

レオはその真実に呆然としていたが、すぐに表情を引き締め俺に尋ねてきた。

「先代は、魔王を殺したんですね？」

「敬語は止めてくれ。今更過ぎる」

俺は一度そういつて、一拍間をあけて話をした。

魔王は決して悪役などではなく、二人の娘の父親であったということ。

俺が殺さなくて済むように、なんとか根回しをしたこと。

だが魔王が呪われていて、殺されなければならなかったこと。

俺を勇者システムから解放するために、魔王が殺されに来たことを。

話を聞いて、レオは言った。

「先代は、魔王を殺したくなかった。けど、殺さなきゃならなかった、ってことか？」

頷く俺に、それなら、とレオは言う。

「じゃあ、俺が魔王を助けられたら、俺は先代よりすげえ勇者って訳だな？」

レオは、六歳の少年に見合った笑みを浮かべた。

「いいから行け！」

俺は平然と、俺を貫いた剣を引き抜き、その剣で兵の足を切り裂いた。

後ろは振り向かない。

俺の後輩が、上手くやってくれているだろう。

「なっ……」

驚く兵士達など構わず、傷口が音を立てて回復していく。

数秒後、俺は傷一つ無い姿になっていた。

見れば、アリスも同様に傷が治っている。アリスの魔法だ。

「聞けランベルグの兵ども！俺の名はユート！魔王を倒し、世界を平和に導いた勇者だ！そして、何千何万回と死地から甦った男だ！死地へ赴く覚悟がある者は出て来い！」

俺の名を聞き、兵士達がざっと音を立てて後ずさりした。その間に、俺はアリスと話す。

「悪いなアリス、変なところに付き合わせちまって」

「良いんですよ。夫婦ですから。それに……ユートとマモル無しじや、私は生きられませんから」

俺たちはしばし見詰め合い、くすりと笑った。

さあて、それじゃあ自慢の息子が生き残ることを祈って、暴れま
すか。

解かっていた。

『勇者システム』に、大きな欠陥があったことは。
クローンが、完全でないのだ。

確率は低かったものの、五感に欠陥などがあった。

味覚や嗅覚はそこまで支障は無かったものの、触覚や視覚は魔王
討伐に支障をきたすから、生まれてすぐに死んで、体を取り替えた
ものだ。

俺はそれを、生まれた時点での欠陥だと思っていたが、最近にな
って気付いた。

これは、時間と共に露になるだけなのだ。

一年前から、味覚がなくなっていた。

半年前から、臭いがわからなくなっていた。

一ヶ月前から、目が見えにくくなっていた。

一週間前から、左手が思うように動かなくなっていた。

こんなに長時間同じ体を使ったことは無かった。だから、気付か

なかったのだ。

解かっていた。

アリスが何の意味もなく、ただ塔に引き籠もっていたわけではないことは。

病弱だったのだ、アリスは。

呪いで弱った魔王の子供。それが運悪く引き継がれたのだ。

既に限られた命だった。だから、俺に再会するまで、塔に引き籠もっていた。

限られた命を、俺と一緒に生きる時間により長く当てるため、塔で眠っていた。

あとどれほど持つのか、俺にもアリスにもわからない。

ただ、母親の呪いの大半を引き継いでいるアリスは???もう長くない。

あれから何時間経っただろう。

だが、兵士達の数は減らない。魔王を倒すため、帝国は最大戦力を投入したと言うことか。

魔力も残り少なく、息も絶え絶えだった。

「アリス……、一言いいか？」

「何、ユート？」

追い詰められた俺たちは、残された魔力を拡散させる。

以前俺がやった、魔力の暴発。死体を残したくはなかった。

ここまでだ。

俺は最期に笑った。

「俺はアリスに出会えて、再会して、一緒に暮らして、全てが最高に幸せだった」

アリスも一緒に笑った。

「私もユートに出会ってから、ユートを待っている間も、ずっと幸せでした。ありがとう」

最期に笑えるなんて、なんて最高の人生だっただろう。

唯一の心残りは、マモルのことだが、あの勇者なら、任せられる。きっと大丈夫だろう。

辺りを埋め尽くした魔力は、とても温かいものだった。

エピソード

目が覚めると、見慣れぬ天井だった。

「ここは……？」

起き上がろうとすると、お腹に違和感が。痛みこそ無いが、何かが溢れるような感覚。

ああ、そう言えば僕は刺されたんだっけ。

それよりも、ここはどこだろう。

病室を思わせる白い部屋だ。広くもないが、圧迫感も無い適度な広さの部屋。部屋には窓が一つと、純白のベッドに小さな机しかない。

窓から外を見ると……真っ青な空間が広がっていた。その光景に、僕はやっとここがどこだか気が付いた。

「マ、モル……？」

と、扉が開き、女性の声がした。聞き覚えのある声だった。

「お久しぶりです、エリス……姐さん」

僕がそういつのと同時に、その女性は僕に飛び掛ってきた。

「マモルっ！ すっごい心配したんだから……！」

母さんと同じ真紅の瞳に、プラチナブロンドをツインテールにした、見た目二十歳程度の美人。

ほお擦りをしてくるエリス姐さんは、僕の伯母に当たる人だ。

どうでもいいが、僕を小動物よろしく可愛がるのを止めて欲しい。今もほお擦りしながら僕の頭を撫でまわしている。

抱きつかれたりするのは嬉しいが、男としてちょっと不満があるのだ。

「え、エリス姐さん……お腹の傷が開いちゃう」

「それよ！ 一体誰なのよ！ 私のマモルに傷を付けてくれちゃった人は！」

「大丈夫だよ、痛みは無いから」

だいたい、これは僕の不手際、自業自得なのだ。

つと、そう言えば。

「ところで、どうしてエリス姐さんがここに？」

「ここはヒビキの管轄だ。エリス姐さんには、もつと大事な場所を頼んでいたはずだ。」

「マモルが刺されたって報告があつて、飛んできたのよ」

「つてことは、僕を見つけたのはヒビキ？」

「そうね……あのいけ好かない男ね」

いけない、エリス姐さんはヒビキの事が嫌いだったな。よし、じゃあヒビキに話を聞きにいこう。

と、僕が起き上がるとエリス姐さんが引きとめてきた。

「ちよつとマモル！ 安静にしてなきゃ駄目でしょ！？」

「大丈夫だよ。それより、僕に刺さってたナイフは？」

あれは存在してはいけないものだ。魔王の力なんて、僕一人で十分だ。

無視されてむすつとするエリス姐さん。可愛い。

いや、僕は伯母さん相手に何を言ってるんだ。

「ナイフって、これ？」

そう言ってエリス姐さんが見せてくれたのは、溶解して炎のような形になった鉄の塊だった。

「多分、魔王の能力に耐えられなかったのね。完全に使い物にならなくなってるわ」

良かった。魔王の力を持つ魔法具なんて、この世に存在してはいけない。

それを残すことは、大罪に等しいだろう。

ところで、とエリス姐さんが僕に白い目を向けてきた。

「マモル……『憤怒』を使ったわね」

エリス姐さんは怒っていた。鋭い目つきで、僕を睨んでいる。

「マモル。あなた、覚えてる？」

「……」

つつつと傷口を撫でて、エリス姐さんは言う。

僕は何も言わない。

何を覚えているって聞いているんだ？

「あなたが刺された日、何があつたか覚えてる？」

「ええ。助けに……行きましたよ」

「誰を？」

うるさいな、わかってるよそんな事。

あんなでたらめな魔法が、なんのリスクも無いわけじゃないって事は。

「誰でもいいじゃないですか」

僕はエリス姐さんの指をどけ、何かを言う前に『憤怒』でその傷を一無かつた『……』ことにした。

ふとエリス姐さんの顔を見れば、難しい顔で僕を見ていた。

「マモル。その魔法は、もう二度と使っちゃ駄目よ」

「できればそうしたいですね」

「できればじゃない。絶対に、使っちゃ駄目」

きつと睨むエリス姐さんが、何を言いたいのかやっとな僕はわかった。

姐さんは、寂しがつているのだ。

僕までもが、姐さんの下から消えてなくなるのを。

「安心して、エリス姐さん」

僕はそつとエリス姐さんを抱きしめる。

もう、僕等二人しかいないんだから。

「父さんの言葉じゃないけどさ」

そう最初に言って、僕は囁いた。

「例えば記憶を失っても、僕の初恋がエリス姐さんなのは変わらないから」

ぼつと顔を真っ赤にするエリス姐さんに、僕は更なる追い討ちをかける。

「僕らは、二人しかいない家族だよ？ 記憶のつながりが無くたって、血のつながりがあるんだ。エリス姐さんは一人じゃないんだ」

これでしばらくエリス姐さんは再起不能、僕の行動にケチはつけまい。

そう思っていたが、ここで誤算が。

「そうよね。家族だものね。じゃあ、？？んっ」

そう言って、エリス姐さんはキスしてきた。

「いつてらっしゃいのキス。マモルには、まだ早かったかしら？」
「??????ッ」

どうやら、エリス姐さんのほうが一枚上手のようだ。

『憤炎』

『一つ、使用者にとって理不尽である結果を生み出す事象を消滅させられる。』

一つ、ありとあらゆる魔法、物理現象に対して優先権がある。

一つ、この魔法を使用した対象を、使用者の記憶から完全に消滅させる。』

エピローグ（後書き）

これにて、第三章『悪の勇者と親愛の魔王』は終了です。

少々早い話ですが、第二部からは三人称になります。

作品のタイトルを第二部として新たに出すか、このまま続けようか考えていますが、どちらのほうがよろしいでしょうか？

よろしければ、ご意見を頂けると嬉しいです。

では第四部、『復讐と暴力の挑戦者』で。

ブローグ

「貴様は一体どんな悲鳴を聞かせてくれる？」

私は今にも笑い出しそうなのを堪えて、目の前で無様に這い蹲う男に囁いた。

男にだけ聞こえる声で。

「て、め……え」

「降参しないのか？」

「誰がするかよ、そんなこと！ てめえに勝てば、俺は世界最強だ！」

大言壮語する男だが、実体は両膝は地に付き、左手では左目を抑えている。先ほど私が決ったその目の出血を抑えようとしているのだ。もうその目が見ることはないだろう。

傲岸不遜な態度の男だった。戦いの前に馴れ馴れしく私に話し掛けてきて、あろう事か肩に手を添えてきた。そのとき切り殺したい衝動に駆られたが、こうして武闘大会という名目の元で切り殺すために我慢した。

その甲斐が在った。

やけに自尊心の高い男で、目を決ったと言うのに降参しない。髑り甲斐のある男だ。

降参を促すようなことは言ったが、勿論、降参を表す動作はさせるつもりはない。手を上げようとすればその手を切り落とすし、声を上げようとすれば喉を潰す。

私は男が嫌いだ。

男はいつも、粘りつくような気持ちの悪い視線を向けてくる。路地裏に押し込まれ襲われた経験もあるが、そのときの男が浮かべていた顔は、思い出すだけで気持ち悪い。

そんな男達を合法的に甚振れる、だから私はこの武闘大会に参加した。優勝すれば、世界最強という称号も貰え、それがあれば私にそんな目を向ける者だっていなくなるはずだ。

そうすれば……。

「どうした？ 貴様、勇者なのであろう？ こんな所で這いつくばっていいいいのか？ まあ、魔王のいない世界に勇者など、無用の長物に過ぎないだろうがな」
「うるせーぞ！」

男が剣を突き出してきた。

そこそこ早い、私には止まっているように見えていた。
しょぼい。

あまりにもぬるいので、活を入れるように男の右足に剣を突き刺した。

「ぎゃああああ！？」

男の五月蠅い悲鳴が？？心地良い。

剣をぐつと男の右足に押し込むと、悲鳴の音程が上がる。

ああ、いい。もつともつと鳴け。

ぐりぐりと剣をねじ込みながら、私は男に侮蔑の言葉を投げかける。

「みつともない。無様に悲鳴などあげて、それでも勇者か？ それ

とも、勇者とはこの程度なのか？」

そんな私に、男は言った。

「この変態がつー！」

心外だ。

女性を襲う貴様ら男が変態でなく、全ての女性に代わって天罰を下している私に変態だと？ ふざけるな！

思わず、私は男の足を切り落としてしまった。

それにより、決勝戦は男の戦闘不能が確定し、私の優勝が決まってしまった。

まあいい。まだ一人、エキシビジョンマッチとして、現世界最強と呼ばれる男がいるのだ。そいつを鳴かせて楽しむとしよう。

ふむ。

どうやら私は、他人をいじめるのが好きなようだ。

――――

「おい兄ちゃん、大丈夫か？ ふらふらしてるが」

「んあ？ あ、ああ。大丈夫だ、問題ないぜ」

どうやら、転寝していたようだ。

全く、武闘大会予選を前に俺は何をしているんだか。
同じ大会参加者に起こしてもらうとは。

「体調不良なら棄権したほうがいいぜ？ 兄ちゃんも知ってるだろ？ 前回大会の決勝戦、棄権しないばかりに冒険者生命を絶たれた『勇者』の話を」

「おいおい、その話を知らない奴がいるとすれば、そいつはとんでもない田舎物だぜ」

前回大会、ね。

ランベルグ帝国武闘大会の前回大会にあたる、第二十三回の決勝戦の事件だ。

片方はランベルグ帝国の抱える勇者。もう片方は、同じくランベルグ帝国の貴族が推薦した一人の騎士。どちらも圧倒的な強さで決勝戦に上り詰めた強者だった。優勝者を当てる賭けでは、見事に五分五分に分かれ、決勝は大接戦が予想された。

だが、蓋を開けてみれば、勇者は騎士に一本も攻撃することなく敗北した。それどころか、降参をしなかったために左眼と右足を奪われ、冒険者生命を絶たれたといわれている。

というのは、勇者はその後行方不明。生死もわかっていないのだ。

「とか言って、あんたは一人でもライバルが減ればいいと思ってるんだろ？」

「ははっ、バレちまったか。だがお前、気をつけろよ？ 間違っても決勝には行くなよ？」

「おいおい、男なんだから優勝目指して当たり前だろうが。何言ってるんだ？」

と、俺が言うと、ふざけるな、とでもいいそうな剣幕で食いつい

てきた。

「決勝にまで行ってみろ！ そこからはな、どちらが先に降参できるかの勝負だ！ 間違つて優勝してみろ、優勝者としてのプライドがなくなるまで、あの女に勝たれるぞ！？」

「……………だな」

というのも、その前回大会のエキシビジョンマッチ。

当時の世界最強の称号を持っていた男は、勇者のように重傷を負うことは無かったが、心が折れ、廃人となった。観衆の前で血にひれ伏し、素っ裸にさせられた挙句、靴をなめさせられたという話だ。

と、大会の開催が宣言されたのか、闘技場で大歓声が起こる。

「そうだおっさん。一ついいこと教えといてやるよ」

「おう。待ってたぜその言葉。兄ちゃん、只者じゃないだろ？」

俺の言葉におっさんは笑みを浮かべる。

まあ、間違いなく俺は只者ではない。俺はおっさんが馬鹿なんじゃないかと思っていた。

フードを目深に被り、ロングコートで身をしっかりと包んだ俺に話し掛けるなんて、あんた馬鹿としか思えねーぞ。度胸があるとは言えねーな。

「さっさと降りて、俺に全財産掛けてみるよ。びっくりする事になるぜ」

そう言つて、俺は闘技場へと向かった。

「アホか。誰がお前なんか賭けるか…………」

と、後ろで聞こえたのは無視しよう。救われない奴だ。解っている。今の所、俺に掛けている奴が誰もいない事は。

大会に参加するのには、実力さえあれば良い。名前は偽名で良いのだ。

勿論、大会で何位に入賞したかによって知名度が上がるため、そんな馬鹿な事をする奴は今まで居なかっただろうが。

予選と言う事で適度なざわめきを持った観衆を背に、俺は闘技場の舞台へと上がる。

懐かしいが、別に心地良いものではない。

予選は十人による乱戦が三回、あのおっさんは次かその次に参加するのだろうか。

今のうちに俺に掛けておけば、人生変わらと思う。

舞台上上がると、全員が俺の事を見て来た。

武闘大会だと言うのに、剣を杖のようにして歩く俺だ。怪訝な目を向けるのも仕方が無い事か。

十人中一人がトーナメントに進める形式で、戦闘不能もしくは場外で失格だ。

試合は、じつに詰まらない物だった。

試合開始と共に他の九人が俺に突っ込んでくる。俺はそれを読んでいて、ちよつと高めに跳躍し、そいつらを押し出したのだ。

司会は、若い女性だった。確か名前は、ノエルとか言ったかな。というように、実は彼女に会った事がある。

そういう言い方をすると、どうにも素っ気ない感じがするのだが、俺が自慢する事でもあるまい。けれど、ここらでちょっと演出に協力してもらおう。

「ええっと、お名前をよろしいでしょうか？」

「おいおい、俺のこと忘れたのか？ 司会者さんよ？」

とことこ近づいて来たノエルにそう言って、俺は彼女の顎を撫でる。

セクハラで訴えられそうだが、生憎、俺には日常茶飯事なので今更だろう。

ぽっと顔を真っ赤にするノエルに、

「あつ、あなた様はっ！？」

俺はフードを取り、その顔を露にした。

瞬間、どよめきが巻き起こった。

その波紋が特等席に座ったあの女にまで広がるのを、俺は嬉しそうに見ていた。

「失礼しました！ 勝者、ランベルグ帝国が誇る勇者！ レオ選手です！」

司会の言葉に大歓声が起こり、それに後を押され、俺は剣をつきながら舞台から降りた。

さあて、世界最強、カノン・リリエンス。
首を洗って待ってやがれ。

プロローグ（後書き）

感想・評価・意見などを頂けると嬉しいです。

復讐と暴力の挑戦者 1

ランベルグ帝国武闘大会、それは世界で唯一魔法を認めた国が行なう、なんでもありの世界最強決定戦だ。表向きは。

なぜならば、チートに近い魔法使い達はほぼ参加していないのだ。それで最強を名乗るなど、井の中の蛙大海を知らずだ。

実際、かつて世界最凶と呼ばれた魔法使い、『不可能を可能にする男』、『生首の挿げ替え暗殺者』などは参加しておらず、していた場合、他の全てを圧倒して嘲笑い、勝負にすらならなかっただろう。

要するに、この武闘大会は井の中の蛙達の大会なのだ。

去年までは。

――――

貴族どもの会話が、うざったく耳にこびり付く。

前回大会の優勝者と言う事で、見晴らしの良い特等席に招待されたが、貴族どもとの会話はたまらない。何より、私をみる視線が。それでも、一般の観客と席を同じにする気はないが。

私はただ、この武闘大会を見に來ただけだと言うのに、なぜ貴族どもの相手をせねばならないんだ。

「リリエンス殿はご存知ですか？ あなたを推薦なさったレイフオード卿が行方不明になったのは？」

「……ええ。屋敷が火災で全焼した、と報告を受けております。生死は不明、でしたか」

どうでもいい。

ルミナス・レイフォードが消えた？ だからどうした。

あの男が私に何を与えた？ 金か？ 地位か？ 住む家か？

どれも違う。あいつは、ただ私に情報を与えていただけだ。

私は、ただあいつの言いなりになっていただけだ。

大会で優勝し、やっと奴から解放されたのだ。今更、蒸し返すように奴の話をしないでほしい。

「彼はきつと生きています、私は信じています。……試合が始まりますよ」

恐らく死んでいると思っているが、唐突に話を変えるのはまずいので、生きている事にして話を変えた。信頼しているのですな、なとど馬鹿なことを言っているが、無視して舞台の方を見る。

そこでは、予選と言えど一瞬で決着がついていた。

フードとロングコートで全身を隠した、変な男だった。

そして、衝撃が走って来た。

「勝者、ランベルグ帝国が誇る勇者！ レオ選手です！」

その男は、私が一年前に冒険者としての生涯を奪った男だった。

その権力を使ってか、男はすぐに私の元へ来た。

私のそばで貴族どもが震え上がっている。それほどまでに、今の勇者は敵意を剥き出しだった。

「丁度一年振りだ。久し振りだな、カノン・リリエンス」
「……………レオ」

帝国が誇る魔王の最終兵器、レオ。

尖った黒髪に、切れ長の鋭い瞳。彼が微笑めば、どんな女でも墜ちると言われる美男子だ。私は別にどうも思わない。無関心だ。

十数年前、見事魔王を討伐し、神出鬼没の英雄なんかをやっている??否、やっていた男だ。

一年前、私に敗北するまでは。

「一年だ」

レオはその整った顔で、私を睨みつける。世の女性ならば、そんな顔をされれば自殺ものだろう。私は別にどうも思わなかったが、黒の眼帯が、彼の左目を隠している。右手に鞘に入れた剣を杖のように持っており、右足は義足かなにかだと解った。

「あれから一年、俺はお前への復讐だけを考えて生きて来た」

レオはそう言って、眼帯を外した。

そこから見たのは??。

うえっと、後ろの貴族が言うのが聞こえた。私も、これはあまり見ていたいものではなかった。

「お前に俺の痛みが解るか? てめえが抉った俺の目は、まったく治らなかつたぞ。てめえが奪った俺の足は、戻っては来ねーぞ」

眼帯を付け直し、レオは憤る。

「こんなんじゃ人前にも出れやしねー。本当、感謝してるぜ、カノン・リリエンス。俺に強くなる機会をくれた」

レオは踵を返し、最後にこう付け加えた。

「復讐だ。選んどけ。左目を抉られ右足引きちぎるか、素っ裸にして靴の裏舐めさせられるかをな」

純粹に、恐怖を感じた。

勇者と呼ばれた男が、どうしてここまで怒るのか解らないが??
面白い。

その復讐、受けて立とうじゃないか。

私は、思わず笑みをこぼしてしまった。
それを周りの貴族が不気味がるのは、頂けなかった。

コツコツと音をたて、俺は闘技場内を歩いていた。
再びフードで顔を隠しているので、行き違った奴に声を掛けられる事はない。通り過ぎた後、振り返って俺を勇者じゃないかと思う奴らは何人も居たが、足早に去って話しかけられるのを避けていた。
というのも。

フードの下に隠された俺の顔に浮かぶのは??狂気に歪んだ笑み。
隠せない。

あれから、俺の笑みは隠し様も無かった。

ずっと復讐の機会を狙っていた？

嘘だ。

一年間、お前への復讐だけを考えて人里離れた所で修行していた？

嘘だ！

左目を抉られ、右足を奪われた俺の痛みが解るか？

痛みなんか感じてねーよ！

復讐なんざ、そういえばそんな事もあったな、ついでにやつとか、程度だ。

左目抉って、右足切り取る？ 素っ裸にして靴の裏舐めさせる？ そんなもん、別にどうでもいい。やらなくてもいいし、やってもいい。

今は、勇者として、それで収めといてやるよ。

なのに何だよ何ですか？ あの恐怖と狂気に染まった表情は？

いいぜ、カノン・リリエンス。

お前は最高の変態だ。お望み通り、しっかり叩きのめしてやる。

復讐と暴力の挑戦者 2

この大会には、ダークホースが二人程いるようだ。

一人は俺。

それもそのはず、復讐は絶望的と言われた程の重傷を負った人間だ。

今も尚、左目は日の光を見る事は出来ず、右足は義足で動きが鈍くなっている。エキシビジョンマッチでのカノン・リリエンスとの再戦を見たがる者は多いが、だからといってこのハンを抱えて決戦まで勝ち残れるかというと、どうにも無理だと思っている者が大半のようだ。

もう一人は、俺と同じく黒ずくめで名前を隠した人物。

名前を隠し、正体も隠したその人物は予選、宙を駆けると言う離れ業を披露してみせた。それで一躍注目の的、俺と並んで評価の対象だ。

小柄でもないし、大柄でもない普通の体形。これといって特徴の無い体つき。顔は見えない。

武器も持っているようには見え、予選では全員を突き落として勝利した。

なんというか、俺と似たり寄ったりな奴だ。

黒ずくめが二人、実力未知のまま参加したが、オッズを見る限り、手堅く優勝候補に掛ける者が大半のようだ。

例えば、戦姫リース・フュリアス。ギルドAランクのシュイがそれに当たる。他にも、『アッシュ限りなく魔法に近い魔術』使いが何名かいるが、互角の戦いだろう。

ざつと見た感じ、有名どころばかりで魔法使いは参加していないようだ。

それなら、俺の敵はいないな。

「???と」

「うわっ、ごめんなさい!」

オッズの書いてある掲示板を見つめていると、一人の少女が俺にぶつかって来た。

小柄な少女で、魔術師特有のローブを羽織っている。

倒れた俺を見て、少女は驚いたような顔をした後、慌てて謝って来た。

「うわっ、足悪いの!? ごめん! 急いでて」

「悪い、俺も前を見てなかった。俺は大丈夫だから、さっさと行きな。急いでるんだろ」

「あっ、じゃあ……。ごめんなさい!」

ぺこぺこと謝って、ばたばたと走って行く慌ただしい少女を見送り、俺は剣を拾って、宿屋へと歩き出した。

「勇者様! お久しぶりです!」

「んあ?」

宿を取り、大会本番である明日に備えて宿の食堂で夕食を取っていると、その声を掛けられた。

見れば、あの時の試合の司会者……ノエルと言う少女だった。金髪をショートにした、下街の娘さんという雰囲気少女だ。

にここにこと笑顔を浮かべ、俺と席を同じにするノエル。

「おいおい、武闘大会の司会者様が一人の選手にだけ肩入れしたま
ずいだろ？ 一人で食いな」

「問題ないですよー。私は司会者、審判じゃありませんから」

そうなのだ。

声を張り上げ場を盛り上げる？？それが司会者。審判は舞台の四
つ角に立って不正が行われないうちに見ている、凄く地味な役割だ。そ
のわりに、かなりの実力者と聞いているが。

例えば、開始の合図の前に魔術が発動してないか調べたり、出
場者が殺さないようにするのだ。やはり、そこその実力が伴って
いなければなるまい。

「一年ぶりなのに、素っ気ない」

「んだよ。なんなら、熱い接吻交わしてやろうか？」

瞬間、ノエルはぼつと顔を真っ赤にした。

冗談だ、と俺はステークを頬張る。すぐに冷めるノエル。その瞳
は冷酷だ。

ノエルと出会ったのは、丁度一年前の武闘大会のときだ。

野党に攫われたノエルを、偶々助けたのが始まりだ。腕試しに野
党を捕まえに行ったのが、なんだかそうなってしまったのだ。それ
なのに、ノエルはどうにも俺を白馬の王子様だかなんだかだと思っ
ているようなのだ。

「勇者様、言っていない冗談と、言っちゃダメな冗談があるのをご存
知ですか？」

「んにゃ、知らんね。そういうからにはノエルさん、あなたは知っ

ているのですな？　ぜひともご教授願いたい」

巫山戯た調子で語る俺に、よろしいなど言って、胸を張るノエル。

「先ほどの冗談は、言っちゃダメな冗談です。乙女心を弄ぶ、酷い冗談です」

「なるほど。肝に銘じておくよ」

俺にはいまいち解らん理屈だ。だってそれ、冗談じゃなく本気でキスしろって意味だろ？

俺がどうにもいまいちな顔をしているのに気付いたノエルは、悪戯を思いついた子供のような笑みを浮かべた。

「では、ゲームをしましょう。今から私が冗談を言いますから、それがどちらか当ててください」

「オーケー。俺は一度の過ちを繰り返さない男だ。どんと来い」

その言葉を待ってました、と言わんばかりにノエルは笑みを浮かべた。

そして、俺の首に手を回して言う。

「勇者様。一年ぶりに女の味を召し上がってはいかがですか？」

「わかった。ちよっくら夜の街を歩いてくる」

後ろで慌てているノエルを後に、俺は食堂を出た。

解っちまうよ。それが冗談じゃない事ぐらい。

ノエルが俺に惚れている事くらい、解ってる。解ってるから、おちよくって楽しんでる。

いやはや、乙女心を弄ぶ酷い男だ。

――

「……フィー、だけですか？」

あたしが研究所に帰り扉を開けると、掃除をしていたアイリがぱつとこちらを見た。

そして、驚きと困惑の表情を浮かべ、あたしに聞いてくる。
それではつきりした。

「アイリは……知ってたの？ レイの……正体を」
「……………」

ピクリ、とアイリが反応した。
それで十分だった。

無言で俯くアイリに寄って行き、問い詰めるように尋ねる。

「いつから知ってたの？」
「……最初に会ったときから」

その時あたしは、どうしてだろう。何故かほっとしてしまった。
それはきつと、あたしがレイと過ごした時間が、嘘じゃなかったからだ。

「アオイを攫ったのも、レイなのね？」
「……そんな感じです」
「どうして？ どうしてアイツは……あたし達には黙ってて、アイリには教えてたの？」

「……知られたくなかったからでしょう」

それは、あたし達は信用出来ないってこと？
違う……と思うけど。

「フィーは、知らないんですか？」

「……何が？」

「レイの……正体を」

どういう事？ レイの正体……あの少年の事？

「あいつがどうしたって言うのよ」

「……それなら良かった。彼は、それを知られるのが嫌でしたから」

「アイリ！？ どこ行くのよ？」

「……彼を探しに」

でもアイツは、海に落ちて……

あの高さじゃ、もう……

「……ランベルグ帝国武闘大会」

「え？」

アイリはこちらをチラリと振り返りながら言う。

「彼が最近気に掛けていました。……彼が現れるなら、そこだと思います」

「でも、それって、あたし達に声をかけるよりもそっちを選ぶって
いうの！？」

「彼なら……そうすると思います」

なんて薄情な。

……いや、あいつを刺したあたしが言える台詞じゃないわね。

どうしよう。今、アイリに言った方が良いの？

でも、言つてどうするの？ 許してほしい？ 誰に？ アイリにはないでしょ？

「……フイー、あなたは少し勘違いをしていますよ？」

「な、何がよ？」

アイリは笑みも無く、無表情に近い顔つきで言った。

「……私達を信用しているから、彼はそういう行動に出るのだと、私はそう思っています」

そうだけ言つて、アイリは出て行ってしまった。

残されたあたしは、どうすればいいのか、解らなかった。

……のに、どうしてか、言われるがままに闘技場へと来てしまつていた。

とりあえず、リースにも教えておきたかった。

あたしは謝りたかった。

あいつが生きているのなら、いや、きっと生きているから、謝りたかった。

刺してしまった事を許してほしいからじゃない。それは、あたし自身がいつまでも悩み、罪の意識に苛まれれば良い。

あたしが謝りたいのは??。

あたしを信用しているのなら、どうして教えてくれなかったのか。
そのことで、一発ぶん殴りたいからだ。

復讐と暴力の挑戦者 3

闘技場の歴史を感じさせるタイルに剣をつきたて、それに体重を預ける。

剣に寄りかかった俺は、第一回戦の対戦相手にその無礼を謝った。

「別に舐めている訳じゃねーんだ。気を悪くすんなよ、シュイ」

「構わないさ。……あんたの話は聞いているぞ、勇者レオ。悪いが、殺す気で行かせてもらっ」

武闘大会第一回戦にて、早くも優勝候補の一人と対戦だ。

というか、俺ともう一人の黒ずくめ以外、全員が優勝候補に等しかったが。

シュイ。

十代という若さでAランクに上り詰めた天才剣士。

身の丈ほどある大剣を軽々と振り回し、こと剣士同士の対決においては無敗を誇る凄腕だ。ちなみに、奴と対決して生き残った剣士はいない。故に、その強さもどこか神秘性を帯びている。

まあ、俺にはそのタネはわかつているのだが。

そういう所、フェアじゃないのかもしれないが、情報戦での勝利だと考えておこう。

「ルールは予選同様、審判が失格とみなす行為をした、場外に出された、戦闘不能と判断されたので、敗北となります。よろしいですね？」

昨日のはっちゃけた雰囲気を消し、ノエルは淡々としていた。
一応、公私は分けられているようだ。

「試合、開始です！」

試合開始の合図と共に、シユイが踏み込んできた。どうやら、俺の得意の戦法を封じる気のようなのだ。

俺の得意な戦法？

不意打ち上等、先制で必殺の一撃をかますことだ。

様子見だとか、弱らせるとかそんな回りくどいことはしない。

初撃から、完璧な全力攻撃だ。

力と速さ任せの、暴力的な一撃。

別に一回の戦闘で一度しか使えないとか、そんな制約があるわけでもない。ただ、戦いが長引けば長引くほど、体力が落ちて疲労が増して、その威力が落ちてしまうからそんなことをしていたのだ。それを封じるには、同様に全力でぶつかってくることだ。シユイはそれをやってきた。

どうやら、相手も俺を研究しているようだ。

でもさ……。

それって、俺が怪我をする前の話だろ？

「??? なっ!？」

俺は剣を杖代わりにしたまま、その攻撃を受け止めた。

膨大な魔力で。

「おおっと!？ こ、これは凄いですレオ選手！ 先代魔王にも劣らない、桁外れの魔力！ それだけで、シユイ選手の攻撃を受け止

めました！」

ノエルがちゃんと司会の仕事をしているのにびっくりだ。そんなどうでもいい事を考えている俺を、視認できるほどの魔力が包んでいる。

シユイは先ほどから、必死に剣を振るってそれを削り取っていた。俺？ 剣を杖代わりに棒立ちさ。

「さ、さすがは勇者だな」

「どうしたシユイ、剣士相手には無敗なんだろう？」

俺は剣に凭れ掛かって、必死に剣を振るシユイを見ていた。こりゃ結構際どいな、と冷や汗を掻きながら。

足を奪われ、その教訓を生かして以前の俺とはまるで違う戦闘方法を取っている。

「どうした勇者！ ……まさか、動けないのか？」

「？？ツ」

ご名答。

俺には、この魔力のバリアを維持したまま移動する術が無い。そもそも、逃げ切れない俺には移動する意味など無い。

だが、動かないのは策を弄しているからに過ぎない。

問題は……それが間に合うかという点だ。

シユイの剣が、俺の魔力のバリアを遂に消し飛ばした。

勝利を確信し、シユイが剣を振りかぶる。

だが、俺の術が完成するのも同時だった。

杖代わりにしていた剣で、俺はシユイの剣を迎え撃つ。

瞬間、振り下ろされたシュイの剣が粉々に砕け散った。

「???」

だが、それはすべて計算どおり。

これこそが、シュイが対剣士で無敗の理由。そして、誰一人生き残れなかった術だ。

砕け散った大剣は無数の刃、魔力によって操作される小さなナイフとなる。

シュイの大剣は、無数の刃を魔力で固めて作られた物だ。その刃は柄に埋められた魔石から出る魔力は空气中を伝播し、刃に魔力を供給する。そのため、砕け散った後も自在に動く。

刃と刃の間を魔力が接着しており、見た目からは想像できないほどに軽い。

剣士の対決では、少なからず剣と剣が触れ合う瞬間が生まれる。というより、シュイはそれを起こす。そこでこの剣は、インパクトの瞬間に砕け散り、相手を切り刻む。大剣であるがゆえに相手の剣はこちらに届かず、一方的に相手を切り裂く剣術だ。

これこそが、シュイが対剣士で無敗の理由。そして、誰一人生き残れなかった術だ。

だが。

「なっ!？」

驚きの声を上げるシュイ。

それって確かに、一本の剣じゃどうしようもないが。

全ての刃を防げるようなでかい盾があれば、いとも簡単に防げる。

俺の目の前に、大量の砂が盾となって出現した。

砂は刃を絡めとり、柄からの魔力供給ラインを遮断する。

俺が馬鹿みたいに魔力を放出してただバリアを創っていたと？

時間稼ぎ？ 非効率的過ぎるだろう。

「くそつ、まだだ！」

砕け散ったままの大剣を投げ捨て、懷に忍ばせていた小刀を取り出し、一撃必殺のつきを繰り出そうとするシュイ。

「馬鹿。もうチェックメイトだ」

シュイが力強く踏み切り俺に突進しようとした瞬間、シュイの体勢が崩れた。

シュイの足元のタイルが砂地獄と変わっていた。

俺が動けなかったのは、剣を通して舞台下の土を砂に分解し、集めていたからだ。

もはやこの舞台のタイルの下は、すべて俺の魔力で操作された砂だ。

「武器に頼りすぎたな、シュイ」

「完敗……だな」

正直、その剣術のタネが解かってなかったら、俺は瀕死、お前は失格だぜ？

まったく、二度目

「勝者！ 勇者レオ！」

砂を土に構成し直し、大歓声に背中を押されるように、俺は舞台から降りた。

復讐と暴力の挑戦者 4

「正直、私はこの大会の結果なんてどうでも良かったんですが……、ちよつと負けられない事情が出来ました。ですので、手加減はしませんよ?」

「はん。舐められたもんだな、この俺様も」

アイクと名乗る青年が、私の対戦相手です。

本当のところ、戦うことに興味があまり無い私が、この大会に推薦枠で参加するのは心苦しい。

戦姫などと呼ばれているけれど、私は戦うのがあまり好きではない。だから断ろうと思っていたのだけど、国の上層部が勝手に推薦していて手遅れでした。

仕方がないので、みつともなくない程度には戦おうかな、と思っていたけど。

今回は勝たせてもらいます。

フィーが教えてくれた真実は衝撃的でしたが（色々なんて言えばいいのかよくわからない場面が多いのですけど）、私は別にどうとも思ってます。

だって、最初から私達が関わってきたレイという人間は、その少年だったのでしょうか?

それなら、別に問題ありません。むしろ、同じくらいの年頃で良かったと??なんでもないです。何が良かったとか、気にしないでください。

フィーの話が本当なら、レイさん（と呼んでもいいのが微妙ですが、それしか知らないのでレイさん）は、確かに生きていそうです。

その炎の力があれば、刺し傷くらいはなんのその、けろつとした顔で出てきそう。

ただ、レイさんが何の連絡もくれないのが、少し気になります。見捨てられたのか、忘れているのか、あえない事情があるのか、私にはわかりません。

ですが、この大会に来るというのなら、丁度良い機会です。自分の實力を見せ、レイさんに認めてもらいましょう。ほっとけない存在だと、認識させます。

そうすればきっと、今までよりも良い関係を築けるような???で、私はそんな関係を築きたいの？

「しかし、あんた綺麗だな。伊達に戦姫なんて呼ばれちゃいないな」
「はい？ あ、そうですね」

聞いてなかったので、適当に相槌を打っておきます。

ここは武闘大会、舞踏会ではないでしょう？ それなら、言葉を交わすよりも武器を交わしましょう。

と、よく見るとアイク選手は手ぶらでしたが。

試合開始の合図と共に、アイク選手が地面に手を付きました。

何か嫌な予感がしました。手加減はしないと宣言した以上、最初から全力で行きます。

聖剣で強化された足で、大きく跳躍。

「魔術師、ですか」

「……っち」

跳躍した私が見たのは、人一人分ほどの大きさの無数の棘。

それが、アイク選手のいる場所を除いて、舞台上にびっしりと生

えていました。

あのまま攻撃していたら、串刺しでしょう。

「まだまだ！」

宙にいる私には届かない棘が、不意に伸びました。さらに、棘から棘が出てきます。

土のmanaを使った魔術、ですね。

それは、まるで鋭利な木が一瞬にして生長したかのような攻撃。それが意味するのは。

足場が無い、ということ。

恐らく、棘の一つに着地したところで、その着地面からも棘が生えるでしょう。

足をついたが最期、次々と棘が私を貫こうとするはず。

あっけなく、私は窮地に経たされていた。

けど、駄目ですね。

「私が戦姫と呼ばれる理由を知っていますか」

落下しながら、私は微笑んだ。

まさか、この聖剣だけが私の力だと思ってはいませんか？

「なっ！！！！？」

それを見たときの、アイク選手の顔は見ものでした。

私に触れた瞬間、棘が粉々に？？土のmanaへと変わりました。

私を貫こうと伸ばされてくる棘はすべて、マナへと還元されます。魔力を魔術が崩壊するように流し込む、簡単に言えばそんな技術です。

これが、私が戦姫と呼ばれる理由。

魔術がマナへと還元される時、一瞬だけ見せる光の輝き。それが、美しいそうです。

聖剣で行く手ふさぐ棘を切り、呆然としたアイク選手の前に降り立ちます。

そして、ピタリと剣を頼に近づけます。じわっと肉が焦げる音が。

「降参だ……」

何が起こったのかまるで理解していないような顔をしていたアイク選手でしたが、やっと正気に戻ったのか、諦めたように苦笑し、潔く両手を上げました。

「勝者！ リース選手です！」

周りの歓声は一切気にせず、私は舞台から降りた。

「あれ？」

試合を終えてフィーを探して歩いていると、通路の影から黒フィドが見えました。

今大会注目度ナンバーワン、ツーを争う二人の黒ずくめ。

一人が勇者レオ、もう一人はいまだ正体不明。

そう言えば、レイさんも誘拐事件のとき、あんな格好をしていた

ような……。

まさか!?

どうやら、誰かと話をしているようでした。

「……どうしてお前がここに!」

「保護者のつもり?? 冗談だ、そんな怒らないでくれ。ただ大会に参加しただけだ。ほら、もう一回戦は勝っている。君と当たるとしたら決勝だろう? 君に迷惑はかけない」

「……ならいい。ただ、目立つから話し掛けるな」
「お互い様じゃないか?」

黒フードと話しているのは、私の前の試合で戦った、キョウという選手でしょうか。

黒色のピシツとした、異国風の服に身を包んだ青年です。

二人は、知り合いなのでしょう。

ただ、あまり良い雰囲気ではないですが。

どうしてか、黒フードの声は聞き取りにくいです。

と、黒フードの方がいなくなっていました。

黒フード、いえ、レイさん?? かもしれない人。

どうやら、別ブロックにいるみたいです。少し見てきましょう。

復讐と暴力の挑戦者 5

今大会ダークホース、勇者レオと黒フード。

その黒フードの試合が、もうすぐ始まるうとしていた。

「フイー、見つけました」

「遅いわよ、リース。もうすぐ始まるわ」

「えっと……うん」

何か言いたそうだったけど、リースは何も言わずに観客席に着いた。

それにしても……この大会の出場者はみんなレベルが高い。

勇者は言わずもがな、シユイだってそうだ。持っていたあの剣、恐らく馬鹿にならない量の魔力を使っている。ある程度の魔力が無ければ、あれは剣として機能しないはず。

リースの対戦相手だったアイクというのも、生成の難しい土のマナを自在に扱っていたし、リースだって凄かった。

まあ、単純な凄さで言えば勇者がダントツだろうけど。

突き刺した剣から舞台の下の土に魔力を送って砂に変えて、それがバレないように大量の魔力を放出していた。カモフラージュのやり方が凄く?? 無駄。

あれだけの魔力、もっと効率よく使えば、あんなに追いつめられる事は無かったと思う。

凄いんだか凄くないんだか、磨けば光る原石のよう。

と、試合開始の合図がされた。

黒フードの対戦相手は、『無限剣のダン』と呼ばれる男。

ダンが指を鳴らすと、黒フードを取り囲むように何百本ものナイ

フが現れた。

「シユイとアイクを足した感じね……。腕も、かなり良い」

「あれは……私でも厳しいですね。シユイ君と当たっていたら、厳しかったでしょうから。……で、えっと」

「……舐めてるのかしら」

あたし達がダンを凄腕と言っているにもかかわらず、黒フードは

構える事もせず、ただ、立っていた。

「えっと、あれは舐めてるの？ あの状態からでも大丈夫だって言ってるの？ それとも恐怖で動けないの？ 何なの？」

「フィー、落ち着いてください。たぶん、あれがあの人との戦い方なんですよ」

いや、だって、腕は下がってるしフードは被ったままだし、あれで戦えるの？

状況だって解ってるようには見えないわよ。

何故か対戦している黒フードよりも、熱くなっているあたしだった。

と、再びダンが指を鳴らし、ナイフが一斉に黒フードに向かって行った。

恐らく、致命傷は避けるのだろうけど、それでもあんなのをまともに受ければ、身体がずたずたにされるけど。

「嘘っ!？」

「えっ!？」

盛大な金属音が鳴り響いた。

あれだけの攻撃全てが、黒フードの目前で撃ち落とされていた。

そして、何故かダンが倒れた。

「……コールを」

「し、勝者! 匿名希望選手!」

足早に去って行く黒フードを追いかけるように、司会者の声が木霊した。

その呼び方はなんか変。

というか。

「……リース、今、何が起こったか解った?」

「いえ。フィーは?」

「あたしも全然。……あの意味不明さ、もしかして」
「かも、しませんよね?」

アイツはいつも意味不明かつ、凄かった。

それに似た現象が、今日の前で起こっていた。

黒フードの正体は……レイ?

――

黒フードか。ふうん、面白い奴だな。

大会予選で見せた空中闊歩を見たかったが、相手の戦法上それが見れなかったのは残念だ。しかし大体解った。

恐ろしく優秀だと言う事が。

生半可な実力者では間違いなく勝てない。魔術師だろうが一流の剣士だろうが、無理だろう。

それこそ、俺のように馬鹿みたいな魔力でゴリ押せる奴でなければ。

針のような魔力を放出し、ナイフの力と相殺させていた。戦姫のように構成している魔術を破壊して無効化するのではなく、魔術はそのままに、物理的な部分のみを無効化している。

魔力の使い方が恐ろしい程に上手い。まったく無駄が無い。

保有する魔力の量はそんなに多くなさそうだから、これはそれを補った技術か。俺並に魔力が多かったら、どうしようもない化物になっっているだろう。

面白い奴だ、と俺は闘技場を後にした。

「勇者様、無茶をしましたね」

「んあ？ 別に大丈夫だぞ」

宿にて爆食していると、まるで当然だと言わんばかりにノエルが席について来た。

無茶？ なにそれ、美味しいお茶？

「とぼけないで下さい。……あの大量の魔力消費、あれが無茶でなくて何だと言っんですか？」

「……………」

……っち。

そう言えば、ノエルには俺の秘密を話していたんだっただか。いや、話さざるを得ない状況だった、と言っておこつ。好き好んで話した内容ではない。

何せ、勇者の力の秘密なのだから。

言い淀んでいる俺を見て、ノエルは笑みを浮かべる。

「そ・れ・と・も、私とまぐわうためですか？」

「黙れ痴女」

くそ、ノエルの奴、秘密を話してからはいつもこんな調子だ。隙があれば、すぐに俺と行為に及ぼうとしてくる。

「違うんですか？ それなら、私に疑いがかからないように、圧勝してくれましたか？」

「んなアホな。あれしか良い手が思いつかなかったんだよ」

シユイの攻撃を剣で受け止めることは出来ない。そして、シユイは相手に剣で受け止めさせるような戦い方をする。

あの剣の攻撃を防ぐには、自分の身体程ある大きさの盾でもないと、無傷にとはいかない。

「でも、あなたならあの馬鹿みたいに放出していた魔力そのものを、盾のように扱えたんじゃないですか？」

「……動きたくなかったんだよ」

そう言って、俺は義足を叩く。

鉄を叩いたような小気味の良い音がした。

「義足……って、嘘でしょ？」

「……お前、俺の事は何でもお見通しかよ」

「そうですね。良い彼女になりますよ？ 既成事実、作りませんか？ そうしたら、心配いらなくなりますもの」

「……………」

俺はロマンチスト。そういうのは時と場所と状況、そして何より愛を大切にしているんだっつーの。

だから。

俺はノエルに近づき、そっと頭を抱え込む。そして、ノエルにか聞こえない声で囁いた。

「ノエル。……愛しても良いか？」

きゅつと胸元が捕まれた。そして、こつんと頭が押し当てられた。見下ろせば、頬を上気させ、瞳を潤わせたノエルの顔があった。

「やっと……言ってくれましたね」

そう言って、にこりと笑みを浮かべ、ノエルは言った。

「愛してください」

俺の身体は、魔法でコーティングされた特別性だ。

そのコーティングする魔法の一つに、魔力の増加を促す魔法がある。

ある条件を満たせば、魔力が回復したり、限界を上げると言ったものだ。

その条件というのが……『欲』を満たす事。

食事や睡眠で、俺の魔力は回復する。それは、『食欲』、『睡眠欲』を満たすからだ。

そして、魔力の限界を上昇させるのは……。

後は、言わなくても良いか。

ただ一つ言うのなら、これを打ち明けたが故に、ノエルは積極的になった。

ノエルの素肌から体温を感じる。
温かい。

「一応言っておきますけど、私は、あなた以外とはこんな事するつもりはありませんよ?」

「俺はそうじゃないけどな」

くすりと微笑むノエルに、俺は意地悪く言っただけだ。
けれど、ノエルの笑みは消えない。

「構いませんよ。英雄色を好む、なんて言いますから。それに、今あなたと一緒に居るのは、私ですもの」

「……ダメな女だな、ノエルは」

「はい。……でも、ダメにしたのは、あなたですよ?」

「……………」

やばい、何にも反論が言えない。
仕方が無い。

「ノエル、お前はきつと後悔するぞ。他の男なら一生付き合ってもらえるのに、俺は無理だからな」

「いいんですよ。だって、私があなたを見ていたいんですから。そ

れだけで十分幸せなのに、あなたの方からも私を愛してくれるなんて……それ、なんて、言えばいいんでしょうか？」

俺はぎゅっとノエルを抱きしめた。

「どうだ？　今、幸せか？」

「ええ。でも……心配です。明日の戦いが厳しいから、なんでしょう？」

本当、お見通しだな。

確かに、明日の対戦相手が今の魔力の上限では勝てないのもあるけど、残念だな。

「違うぞ？　ノエルが、あまりも魅力的だったからだ」

顔を真っ赤にして抱きついてくるノエルを、俺は優しく撫でた。

復讐と暴力の挑戦者 6

「いや、まさかお前がここにいるとは思わなかったぜ？ キョウ？
いや、ヒビキさんよ」

「戦うのは久々なんだ。武闘大会なんて僕のためにあるようなものだとは思わないか？ 今まで参加できなかった分、思いっきりやらせてもらうよ」

「手加減無し、ってことかよ」

「して勝てるとは思っちゃいないよ」

「勝つ気かよ……」

空気が震える程の闘気を出して、キョウは笑みを浮かべた。

蒼い髪にスーツ、バトルジャンキー、強者を追い求める男？？ヒビキ・キョウ。

試合開始の合図と共に、キョウは大規模魔術を展開させた。

対抗し、俺も大規模魔術を展開させた。

観客席のざわめきが酷い。まあ、そりゃそうだ。

大規模魔術。

それは魔術陣を複数個展開し、更にそれを巨大な魔術陣で囲み、一つの魔術陣として使う魔術。そうする事によって通常では考えようも無い、途方も無い威力の魔術を可能とする。普通、一人では不可能。

まあ、俺達は普通じゃないから。

キョウの作り出した魔術陣の色は蒼色。水のマナを使った魔法だ。対して、俺が作り出した魔術陣は黄色だ。

キョウの魔術発動と同時に、結界内部に滝のように水が降り注い

で来た。恐らく、五秒と掛からずに結界内部を水で埋め尽くすだろう。

だがそれに触発されたように、俺の魔術が発動する。

瞬間、目を瞑らずにはいられない程の光量が闘技場を埋め尽くした。

観客席から悲鳴が聞こえるが、俺は構わず次の魔術の展開に掛かる。

複数の魔術を同時に扱う、大規模魔術に比べればなんて事は無い行為。

足下に複雑なのを一つ、手に小さなものを一つ。

「電気分解……か」

キョウが目をやられたのか、わずかに目を開けながら、水が振って来ていた空を見つめた。

そこには、滝のような水はもう存在していない。

「ああ。まあ、消滅じゃないから、有効活用させてもらっぞ！」

「！！！」

俺が構築した魔術陣のうち一つは、防御用。

十秒程、魔術陣内を絶対的強度で隔離する魔術。これも結構魔力を喰うが、昨日増加させたから問題ない。

そして、もう一つ俺が展開している魔術は。

「生憎、俺はお前と戦いを楽しむ気はない」

「ッ！！！」

炎の魔術だからだ。

今、大量の水を電気分解したため、酸素と水素がこの結界内にあ
る。

そんなところで炎を使えば、どうなるかは解るだろう。

「さらばだ、歴史ある闘技場よ」

俺が防御用の魔術を発動させてすぐ、大爆発が起こった。
周りの大地が音をたてて削れて行くのは、なかなか壮観だった。
残念なのが、足下以外爆煙で何も見えないと言っ事か。

十秒後、苦しい程の熱気と

と。

「ふふふっ、やっぱり君と戦うのは面白いな」

ゆらゆらと、煙と熱で霞む視界の奥に、蒼い髪の男が立っていた。
無傷で。

「勝者！ 勇者レオ！」

だが、結界の外でノエルが叫んだ。

驚いた顔をしているキョウだが、すぐに思い出したようだ。

「……場外は失格だったね」

場外も何も、足場は俺の魔術陣が展開していた場所だけ。
後はクレーターになっている。

「やはり、衆目を気にせずに戦う方が楽しいね」

「お前のための武闘大会じゃないのかよ。前言撤回がはえーぞ」

「場外とか、本当の戦いではないからね。……奥の手も使えないし」

大会のルールが無かったら、俺は死んでいたかもしれない。

俺は闘技場に感謝しつつ、舞台を元に戻すために尽力した。

――――

「カノン殿！ 貴殿は、本当に彼の者に勝利出来るのだろうか！？」

あんな男達を敵に回したくはないぞ！」

「御心配なく。魔術ごときで、私を殺す事は出来ません」

「ならいいのだが……」

貴賓席にて、試合を見ていた貴族達が慌てていた。

ただ単純に感心出来ないと言うのは、何か疾しい事があると言う事か。それを悪びれるのは評価出来るが。

確かに、あのキョウという男も、レオも強い。

だが、私とは強さの次元が違うのだ。

どれほど強い魔術であろうと、私には関係ない。

……ただ。

「……また、一步も動かなかったか」

剣を付いて歩くレオの姿は、何かが変だった。

復讐と暴力の挑戦者 7

「戦姫様と戦うとか、ちょっとやりづらいな」

個人的に、かなり戦いづらい。

今までの戦い、ずっと魔術に頼って来たから、尚更だ。

「そうですか？ 私は、勇者様と戦えて光栄です、と言った感じがすが」

「感じですか……」

「感じですね」

「やれやれ、勇者様とは戦えません！ とか言って降参してくんねーかな。」

あつ、そう言えばオツズ的に俺は舐められた存在だったか。

「あゝ、日頃の行いが悪いんかねー」

「日頃の行いって……、神出鬼没の英雄ですよね？」

「人徳が欲しい。もうちつと崇拜してもらいたい」

本当、おかしいな。

英雄なんてやってるのに、何故パスが使えないんだろうか。もう勇者なんだから、問答無用で決勝に進めさせてほしい。俺は突き刺した剣に寄り掛かり、試合開始の合図を待った。

「準決勝！ 試合開始！」

ノエルの合図と共に、リースがこちらに向かって来た。

俺は一步も動かず、それを迎え撃つ。

いや、魔術がダメでスピードじゃ勝てないなら、もう打つ手は一つでしょ。

「はあっ!!」

リースの刺突に俺は攻撃を合わせた。
刺突対刺突。
だが。

「なっ!!」

リースは剣で。
俺は鞘だった。

聖剣が俺の持った鞘に納まった瞬間、間髪入れず俺は鞘を、巨大魚を釣り上げるかのように、勢い良く上に上げた。ぶおっと風が舞う勢いだ。

ただのレイピアなら折れていても可笑しくないが、聖剣だ。折れはしないだろう。

聖剣が宙を舞い、俺は地面に刺してあつた剣をリースに突きつけた。

「悪いな。力づくで勝たせてもらった」

「勝者、勇者レオ!」

タイミングよく、聖剣が舞台に刺さつた。

うん、俺のオッズが低い訳だ。全部、ギリギリの勝利じゃねーか。まあ、エキシビジョンまで秘策を取っておきたいから、仕方がね。

「か。」

俺は剣を鞘に戻し、それを杖代わりにして舞台から降りた。

もう一つの準決勝、黒フードの試合を見よう。

—————

「リース、手加減したの？」

「え？　そういう訳じゃないですけど？」

観客席に行くと、フィーが首を傾げてました。

まあ、ちょっとあっさりし過ぎと言えば、そうですね。

それは……。

「……見てみたかった、というのがありますね。ダークホース同士の戦いを」

「なるほどね」

舞台では、そのもう一人にダークホース、黒フードさんが戦っていました。

対戦相手の槍使いの攻撃を避け、大きな跳躍をみせ、そして？？。

「っ！？」

「凄い！！」

黒フードさんは宙に立った。結界内かそうじゃないか、ぎりぎりの辺りに立っています。

まるでそこに足場があるとも言わんばかりに、平然と。

一秒に三十回の突きが出来ると言う対戦相手も、あまりの高さに攻撃が出来ていません。

と。

また、対戦相手が不意に倒れました。

けれど今度は、何かに斬られたように血しぶきを上げて。

「勝者！ 匿名希望選手！」

そのコールと共に、医療班が駆け寄ってきます。

黒フードさんはすと舞台上に降り、そのまま引っ込んでしまいました。

「……やっぱり」

「どうしました、フィー？」

フィーが目を輝かせていました。

探していた玩具が見つかったような、満面の笑みを浮かべて。

「アイツよ！ やっぱり、アイツがレイよ！」

「ちょ、お、落ち着いてフィー」

がくがく肩を揺さぶられても、困ります。

「あたし、あれ見た事あるもの。研究所に来た時、見せてもらった
！」

「えっ！？ そうなんですか！？」

そうと決まれば。

「で、どうします?」

「うっ……」

私達に連絡をくれなかったレイさん。
それは、何か理由があるからでは?

復讐と暴力の挑戦者 8

「魔王を倒し、神出鬼没の英雄となりました。そんな彼も、去年の決勝、その冒険者生命を絶たれたかに思われました。しかし、昔年の恨みを晴らすべく復活を遂げてます！ 勇者レオ選手です！」

地響きのような歓声に、俺は一応手を振ってみる。
サービスくらいはしておこう。

……そういえば、去年もこんなことしたけな。
あん時は、まだ色々見えてたっけ。

「対するは、正体不明、しかしその実力は折り紙付き。空中を舞い、未知の攻撃で敵を倒して来た？？匿名希望選手です！」

歓声を背に浴び、黒フードが舞台へと現れた。
顔を伺えはしないが、まるで喜んじやいない。むしろ、鬱陶しそうだった。

「キャラが被ってたから、予定より早く俺が正体ばらさなきゃダメになっただろうが。どうしてくれる！」
「……………」

会話のキャッチボールをする気はないようだ。
いいぜ、じゃあ拳で語り合おう。

試合開始の合図と共に、黒フードは宙を駆け上った。

そして、微動だにせず俺を見下ろしてくる。

「ああと！ 匿名希望選手！ 早くも勝負を決めに掛かっています！ 準決勝で見た、視認不可能な攻撃を繰り出そうとしているのでしょうか！？」

やけにハイテンションのノエルに、俺は苦笑を浮かべる。

まあ、これが終わったら、アレをするという約束だけにか。

……勘違いであってほしい。

「……………」
「……………」

俺と黒フードは共に微動だにしない。

観客には睨み合いが続いている、ように見えるだろう。

だが、違うのだ。

俺は今、もの凄い攻撃を受け、それを無効化している。

「……………」

「どうした？ お得意の魔術が効かなくて驚いてるか？」

倒れない、切り刻まれない俺を見て、黒フードがわずかに焦りを見せたのを見逃さず、俺は挑発した。お前の魔術は見切ってるぜ？

「一つ教えてやろう。俺の勇者としての能力の一つに、どんな環境でも動けるって奴がある」

自分の能力でもないのに、俺は自慢げに語る。

「魔王のような強大な敵と対峙した時、恐怖で動けなくなる事がある。それは別に恥じる事じゃない。生物として当然だ。だがな、勇者だけはそれじゃダメなんだよ」

剣を担ぎ上げ、俺は笑みを浮かべる。

「勇者つてのはとんでもない愚か者だ。恐怖も何も感じはしない。毒の沼地だろうが、灼熱の溶岩だろうが、突っ込まなきゃダメなときは突っ込まなきゃならないからな。俺の言いたい事、解るよな？」

ちらりと黒フードを伺うが、その表情は読めない。

ただ、いい加減もうこの魔術が効かない事は解ったのだろう。

「俺の周りだけを真空にしたり、極寒にするそのセンスはすげーよ。だがな、俺にそれは効かない」

本来なら呼吸が出来ない程に寒い空間なのだ。俺はかけられた魔法により何ともないが、生身の人間ならぶっ倒れているだろう。溶岩だろうが、毒の沼だろうが、それこそ宇宙空間だろうが、俺は活動出来るようにされているのだ。

それを理解したのか、黒フードはふわりと舞台に降りてきた。俺は剣を構えてみせる。珍しく、勇者らしく剣を構えた。

「勇者つてのは、守るために戦ってたんだ。どんな状況でも、最後まで立ってなくちゃ行けないんだ」

要するに化け物だが、文句でもあるか？

皮肉気に笑ってみせる俺に、黒フードは大きな動揺を見せた。

「やっと……見つけた」

何を？

一瞬そんな疑問が浮かんだが、俺は気付いた。

「???ッ!」

そういう事か。

やれやれ、俺は随分と人に好かれるようだ。

だが、戦いは止まらない。いや、止められないのだ。

俺には俺の目的があつて、この大会に参加しているのだ。優勝しなければならぬ理由があるのだ。

「これで終いにしようぜ?」

俺は剣を構え、黒フードを誘う。黒フードも、武器も持っていないのにそれに乗って来た。

決着は既に付いてた。

お互いがお互いの正体を知って、それでももうおしまいだった。本当なら、戦う必要だつて無かつただろう。

ただ、ここが武闘大会だから、こういう決着の付け方となつてしまった。

謝りたいが、謝らないぞ。

交錯したそのとき、どちらとも知れず、その言葉は呟かれた。それは、俺達二人にしか聞こえなかつただろう。

「マモル」

どさりと倒れる黒フード。起き上がる気はないようだ。というか、俺が昏倒させたんだが。

「しょ、勝者! 勇者レオ!」

ノエルが宣言し、会場は大歓声に包まれた。
救護班と思われる人達が駆け寄ってくるが、俺はそれを制する。

「これは俺の知り合いなんだ。俺が責任を持って治療する」

そう言っ、倒れた黒フードを抱え上げ、俺は舞台から降りた。

黒フードの存在が、俺の計画を左右する事は無い。

俺はすべき事をするだけだ。

しっかりと治療させてもらおう。明日、全てが終わるまでは眠ってもらうように。

「やっとだ。長かった。だが、舞台は整った……」

けけけっ、と悪魔のような笑い声を上げそうになりながら、俺は闘技場を後にした。

復讐を、始めよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8607v/>

例えば仮の魔王様

2011年10月29日14時56分発行